
目次

はじめに	2
第1章 研究仮説の形成	3
第1節 戦後の音楽科教育誕生と音楽科の目標成立	4
第2節 学習指導要領 音楽科（小学校）の移り変わり	5
第3節 仮説の形成	7
第2章 調査	8
第1節 調査の目的	9
第2節 調査方法	9
第3章 分析	14
第1節 分析方法	15
第2節 調査結果	16
2-1 F検定	16
2-2 t検定	18
2-3 項目毎にみる各グループの特徴	20
(1) 平均の差の表をもとに	20
(2) 選択肢集計の割合表をもとに	32
(3) 回答者数に対する割合の表をもとに	38
第4章 考察	40
第1節 各項目別グラフからの考察	41
(1) 平均の差のグラフをもとに	41
(2) 各項目別・グループ別の割合によるグラフをもとに	52
第2節 まとめ	62
(1) グループ毎の年代による差異	62
(2) 「教育音楽」からの考察	64
おわりに	71
参考文献および資料	73

はじめに

私たち教師は子ども達に、音楽を楽しむこと・音楽の良さを感じることに、音楽する力をのばすことなど、より豊かな音楽的成長を願って指導にあたってきた。それはまさに音楽科の教科としての目標であり子ども達の間形成に繋がるものとして意義を確信して行ってきた。実際、昭和22年の学習指導要領（試案）が出され、新しい音楽科の目標が掲げられて以来50年あまり、今日まで音楽教育に関わってきた多くの人々の努力と研鑽により大きく発展してきた。個々に受けている音楽教育での成果は別としても学校音楽教育で身についた様々な音楽的な能力や音楽を愛好する心情の育成は、日本中の全ての学校教育の中で保証されており一定レベルに到達できたことは誇れる現状であると考えます。

しかし、現在の教育情勢の中で学校音楽と社会の音楽との隔たり、家庭環境や音楽経験による個人差拡大への対応、価値観の拡大による表現科構想や創造的音楽学習・多文化音楽への方向性の模索など様々な課題を抱えているのも現実である。そしてさらに、目前に控えている新学習指導要領の完全実施に向けて「総合的な学習の時間」との関連の中で「合科的・総合的」な学習内容も検討され、音楽の授業時間の削減も発表された。

今、このように複雑な背景に取り囲まれる教育情勢の中でこれからの音楽科教育はどうあるべきなのか。

本研究では、過去に行われてきた音楽科教育の足跡をたどることをスタートラインとし、行われてきた音楽科教育がどのような内容であったのか、またその教育効果はどうであったのかをその年代の音楽科教育を受けた人々の現在の様子から分析することにより、これからの音楽科教育のありかたを探り出していきたいと考える。

第1章 研究仮説の形成

第 1 節 戦後の音楽科教育誕生と音楽科の目標成立

昭和 20 年 8 月、終戦直後の日本は、連合国軍の占領下のもとで教育理念・教育制度・教育行政など教育をとりまくあらゆる面での大改革に向けて動き出した。

9 月 15 日には新日本建設の教育方針により、平和を目指す新しい教育のスタートが宣言された。「修身」「国史」「地理」の教科は停止され、教科書では「軍国主義」や「超国家思想」に関わる部分を墨で塗るなどして新しい教育が始まった。

翌昭和 21 年 5 月新教育指針(文部省)が発行配布された。平和主義教育を進めるための教師の手引き書的性格をもつものであったが、そこには「芸術の本質は広い意味での美であり、そして美は統一と調和の上に成り立つ。」とされ音楽は秩序と共同とによって結びつき、平和生活を営むことと同じ原理であると記されている。つまり芸能文化を「美」と捉え、「美」が「統一と調和」から成り立つという観点から、「美」を本質とする芸能文化は平和国家の建設に役立つものとなると述べられている。このことは従来の手段化された音楽科教育から決別して音楽の新しい教育的意義を明記したものと考えられる。更に教育基本法・学校教育法の公布(昭和 22 年 3 月 31 日)により戦後の新しい教育が確立され、新学習指導要領(試案)のもとに戦後の教育が出発した。

以下は昭和 22 年試案として発刊された「学習指導要領・音楽編第一章 音楽教育の目標」の冒頭である。

「一 音楽美の理解・感得を行い、これによって高い美的情操と豊かな人間性を養う

(中略)

音楽教育は情操教育であるという原則は今も昔も少しも変わってはいない。しかし、その意味の取り方は従来必ずしも正しい方向にあったとはいえない。音楽教育が情操教育であるという意味は、目標の一に掲げたように音楽美の理解感得によって高い美的情操と豊かな人間性を養うことである。従来の考え方の中には音楽教育を情操教育の手段として取り扱う傾きがはなはだ強かった。(中略) 芸術を手段とする考え方は、芸術の本質を解しないものである。そこで音楽教育が情操教育であるという意味は、音楽教育即情操教育ということで、音楽の理解・感得が直ちに美的情操の養成となる。(後略)」

上記の目標は明治時代に始まった唱歌教育から国民学校時代の芸能科音楽まで長期間行われてきた「徳育の涵養」や「国民的情操の醇化」のための手段化された学校音楽教育に対する反省を

込め、新しい音楽教育の目標の方向性を明確にしたものであった。目標の意味するところは、上記目標の解説の最後に記されているが「音楽教育即情操教育ということで、音楽の理解・感得が直ちに美的情操の養成となる。」と考え、芸術教育の原点を振り返る大きな改革であったといえる。

第2節 学習指導要領 音楽科（小学校）の移り変わり

昭和22年・26年に試案として発刊された学習指導要領は、昭和33年からは文部省告示として法的拘束力をもつようになり、43年・52年・平成元年と改訂され、現在に至っている。

昭和22年学習指導要領 音楽編（試案）

新しい目標のもとで、音楽科の学習領域を歌唱、器楽、創作、鑑賞とし、表現力・鑑賞力とともに知識や技術の習得、読譜や理解力の育成もねらいとして書かれ、目標、学習内容、指導方法、指導資料等について細かく記載され、戦前の歌唱中心の音楽科から大きく変化したが実際は、音楽室のステレオやレコード等の教育設備や児童の使用する楽器の不足等が深刻な問題であった。しかし新分野である器楽指導については昭和23年「合奏の本」が文部省から刊行されたこともあり、急速に取り組みが広がっていった。また、この時代の指導方法の特徴の一つとして唱法が、国民学校時代の「イロハ音名唱法」から、ドレミによる「階名唱法」を用いることとなったことがあげられる。

昭和26年小学校学習指導要領 音楽編（試案）

本指導要領での特徴は創造的表現とリズム反応にある。従来の創作との違いは形式的な作曲を学習するのではなく作曲や創造的表現をする場合の基盤となる表現意欲の高揚や音楽性の開発・自己表現全体を通じた創造性の育成等をすべての音楽活動の中で身につけることをねらいとしている。また新しい学習内容である「リズム反応」はリズム感やリズム表現を重要視し、早い時期に身につけさせるのが有効であるという考えから設けられた。このころから、リズム楽器を中心とした器楽合奏も盛んになっていったが、これらの活動は音楽科の時間のみでなく、広く家庭や地域に浸透し、日常生活で生かされなければならないことが強調されているのも特徴といえる。

昭和33年小学校学習指導要領（音楽）

前回までの指導要領による音楽科教育が新教育運動の流れの中で行われてきた反省と、国民生

活の向上を図り独立国家として国際社会に位置づくための高等教育水準を目指し、基礎的事項をふまえて系統的に指導する方向が強く打ち出された改訂であった。それに伴い、学習領域も整理され、表現（歌唱・器楽・創作）・鑑賞となった。器楽の面では、ハーモニカや樹脂製リコーダーの改良と大量生産が進み個人持ちでの楽器指導が行われるようになったこと、全国の学校で共通に愛好できる曲をもつ意味で共通教材が導入されたこともこの改訂の特徴である。また、このころから合唱・合奏コンクールが盛んになるとともに授業での表現指導や鑑賞指導が発展し、児童の演奏水準が急速に高まっていった。

昭和43年小学校学習指導要領（音楽）

高度成長を遂げる中で国民生活は豊かになり教育への関心も高まるとともにより効率の高い教育が要求されるようになった。この改訂では系統性を大切にしながら、基礎的、基本的な内容を精選し指導の徹底を図る方向性を示した。

目標は総括目標として「音楽性を培い、情操を高めるとともに、豊かな創造性を養う。」とされ「美的情操」は「情操」と表現をかえ、人間の全情操をも含んだものとなった。この総括目標に続き4つの具体目標が掲げられているが2つ目に「音楽的感覚の発達を図るとともに、聴取、読譜、記譜の能力を育て、楽譜についての理解を深める。」を掲げて、基礎的な内容を各領域の中で定着させようと考えられた。このため、学習領域は歌唱・器楽・鑑賞・創作・基礎の5領域となった。

しかし反面このことは学習内容の過密化、高度化を引き起こすこととともに、子ども達が生活面で触れるマスコミからの娯楽的で刺激のある音楽の楽しみ方との落差も生じ、学校音楽に対しての愛好は低くなっていった。

昭和52年小学校学習指導要領（音楽）

前回の5領域は各学習内容がもれなく系統的に行える利点をもつと考えられる反面、音楽を一つにまとめようとする統合性には欠ける危険性も生まれた。またこの改訂の方針であるゆとりのあるカリキュラム編成のため、学習内容の見直しと精選が積極的に行われた。

音楽科の目標としては小学校から高校まで通して「音楽愛好の心情」に重点を置き、効果的な指導が行われるよう領域を整理、統合しているのが特徴である。

平成元年小学校学習指導要領（音楽）

新しい目標の文言からは「音楽性」が「音楽性の基礎」に、「音楽を愛好する心情」が「音楽

を愛好する心情と音楽に対する感性」に変更されたことが読みとれるが、このことは「基礎」「心情」「感性」が相乗的に関連し、高めあいながら「豊かな情操」を養う方向へ向かうよう位置づけられている。更に改訂の基本方針として重要な点は個性的創造的な学習の活性化である。これにともない、学習内容の「A 表現」の(4)「音楽をつくって表現できるようにする。」が各研究発表会等において注目され、創造的音楽学習は現在まで急速な広がりを見せている。

第3節 仮説の形成

以上、学習指導要領の変遷を大きな流れの中で特徴的に捉えてきたが、戦後の音楽科教育が始まって現在まで50年を経過し、家庭ではラジオ番組で、学校ではオルガンの伴奏に合わせて歌う活動を中心に音楽を楽しんでいた時代から、家庭でのオーディオ機器の充実や学校での音楽教育機器等が整備され豊かで恵まれた教育環境の時代となり、子ども達を取り巻く音楽環境は大きく変化した。その間音楽科教育の実践も様々に変容を重ねてきたことがわかったが、それぞれの時代に取り組みされて来た音楽科教育は一体どんな結果をもたらしてきたのであろうか。実践者の一人として音楽科教育の意義を確かめるべく次の仮説を設定した。

「成人後の音楽的行動は学齢期の音楽科教育の結果を反映している。」

21世紀に向けての新しい教育が模索される中で、音楽科についても多くの批判と新しい構想に関する情報がとびかい、音楽科は岐路に立っているとも言われている。

今までの音楽科教育で受け継がねばならないことはどのようなことなのだろうか。また、改めるべき点は何処なのかを上記仮説の検証を通して探っていきたいと考える。

第2章 調査

第1節 調査の目的

社会的背景及び歴史的な背景のもとに学習指導要領が編纂され改訂を加えられて現在に至っているがそれぞれの学習指導要領の目標にそって行われた音楽科教育によってどのような力が身につく、そのことが現在の生活において音楽とどのように関わっているかを、各年代毎に見られる特徴を比較することにより分析する。さらにそれらの分析結果をもとに音楽科教育を進める上で重点とすることは何なのか、望ましい音楽科教育の姿はどうあるべきなのか、について考察を行う。

尚、この各年代毎の分類については学習各指導要領による教育を受けたと考えられる年齢層毎に分類した。

第2節 調査方法

【質問項目の作成】

音楽の基礎的な能力に関する質問・小学校時代の音楽科の授業内容及びその印象に関する質問・音楽科教育に対する意識に関する質問・日常生活と音楽に関する質問とで構成し5段階で解答する形式で行った。

質問項目は以下の46項目である。

- 1 音程がおかしいと人からよく言われる。
- 2 歌詞のないメロディーを聴いてすぐ覚えるのは苦手である。
- 3 合唱で、他のパートにつられてしまう。
- 4 リコーダー（ハーモニカ）は苦手で音階（ドレミファソラシド）も吹けない。
- 5 リコーダー（ハーモニカ）で曲（春の小川程度）を吹くことはできない。
- 6 テレビやラジオ・喫茶店などから学習したことのある鑑賞曲が流れていても学習した曲であることが分からない。
- 7 作曲家とその作品名を5人分は言えない。
- 8 楽器の種類や音色についてほとんど知らない。
- 9 替え歌や即興的な歌は不得意である。
- 10 階名（ドレミ）と音名（ハニホ）の区別ができない。
- 11 音符や記号の名前はほとんど知らない。

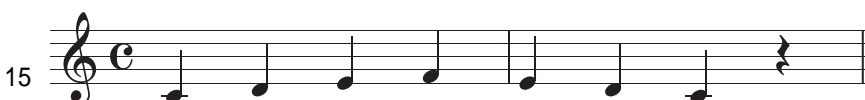
12



上の楽譜を見て階名（ドレミ）が分からない。

13 上の楽譜を見てどんなメロディーが浮かんでこない。

14 上の楽譜を見てどんなリズムが分からない。



（蛙の歌）の続きを楽譜には書けない。

16 メロディーの音と伴奏の和音が合っていないかも知れない。

17 長調と短調のちがいが分からない。

18 「ふるさと」や「もみじ」などの曲は、小学校の時に誰もが学習した曲であるが、はじめのメロディーを聴いても続きのメロディーが浮かんでこない。

19 学芸会や音楽発表会等の行事における音楽経験は印象に残っていない。

20 心地よい音楽が聞こえくると指先で拍子をとったりして聞き入ることがある。

21 海や野山などの自然にふれたときや季節を感じたときなど学校で学習した「海」や「茶摘み」「富士山」「スキー」などを思い出し、なつかしい気持ちになる。

22 小学校の音楽の授業は楽しかった。

23 音楽の良さや活動する楽しさを味わいながら授業がすすめられた。

24 教師が次々に指示を与え、言われた通りに活動することが多い音楽授業だった。

25 小学校の音楽の学習は心を豊かにするために大切であると思う。

26 小学校での授業時間は図工や音楽を減らして算数や国語等を多くする方が良いと思う。

27 学級や学年などの音楽活動を通して、みんなで合唱したり合奏したりしたことで協力することの楽しさと大切さを学んだ。

28 担任や音楽の教師から影響を受けて音楽が好きになったといえる。

29 子供や家族に音楽を楽しむ人になってほしいと思っている。

30 日常生活の中ではほとんど音楽にふれる時間はない。

1・2と答えられた方はその内容の中で上位二つに をつけて下さい。

歌 楽器 レコード鑑賞 コンピュータミュージック その他

31 自分も今後何らかの音楽をしたいと考えている。

4・5と答えられた方はその内容の中で上位二つに をつけて下さい。

歌 楽器 レコード鑑賞 コンピュータミュージック その他

32 学校時代、クラブ活動や合唱団などの音楽活動をされていた方におたずねします。

そのときの活動は音楽を理解したり愛好したりするきっかけとなった。

33 何気ないときに、ふと口ずさんでいる曲はどんなものですか。上位二つに をつけて下さい。

ポップス クラシック 演歌 童謡 唱歌 ロック 民謡 その他

- 34 現在、合唱団やコーラスグループ・バンドや市民楽団などで音楽活動をしている。
4・5 と答えられた方はその内容を書いて下さい。
- 35 どんな音楽が好きですか。上位二つに をつけて下さい。
ポップス クラシック 演歌 童謡 唱歌 ロック 民謡 その他
- 36 もっとできるようになりたいと思うのはどんなことですか。上位二つに をつけて下さい。
歌 楽器 レコード鑑賞 コンピュータミュージック その他
- 37 小学校の時学習した曲目(学芸会や音楽発表会などで演奏した曲も含む)の中で心に残る曲目を書けるだけ書いて下さい。
- 38 小学校の時学習した曲の中でメロディーを思い出せるのは何曲くらいありますか。
まるで思い出せない 3曲位 6曲位 10曲位 それ以上
- 39 どんな方法で音楽を聴いていますか。上位二つに をつけて下さい。
レコード・CD カセットテープ・MD テレビ ラジオ 演奏会 その他
- 40 昨年1年間でどんなコンサートに何回位行きましたか。
回数() 内容()
- 41 小学校の音楽の授業でどんな活動をしましたか。すべてに をつけて下さい。
歌唱 器楽 鑑賞 ふしづくり 音符や記号 その他
- 42 もっと多く活動をしたかったものはどれですか。上位二つに をつけて下さい。
歌唱 器楽 鑑賞 ふしづくり 音符や記号 その他
- 43 小学校の音楽の授業で体験した楽器すべてに やその名前を記入して下さい。
ハーモニカ 鍵盤ハーモニカ オルガン アコーデオン リコーダー
木琴類 打楽器() その他()
- 44 楽しかった音楽の授業内容はどれですか。上位二つに をつけて下さい
歌唱 器楽 鑑賞 ふしづくり 音符や記号 その他
- 45 楽しかった理由の中で上位二つに をつけて下さい。
良い音楽に出会って楽しかった 活動そのものが楽しかった 友達と一緒にできるのが楽しかった
- 46 適切な指導を受けられなかったのはどんなことですか。上位二つに をつけて下さい。
歌い方 楽器演奏の仕方 音楽の聴き方 楽譜の読み方
その他()

前記46項目の分類は次表の通りである。

種類分け	質問番号（調査内容）	
音楽に関する基礎的能力について	1（音程） 6・7（鑑賞曲） 9（即興演奏） 11（音符・記号の理解） 13（読譜・旋律認知） 15（記譜） 17（長調・短調の理解） 20（聞こえた音楽への反応） 38（記憶している既習曲数）	2（旋律記憶） 3（和声感） 4・5（器楽奏） 8（楽器の知識） 10（音名・階名） 12（読譜・八長調階名） 14（読譜・リズム） 16（不協和音識別） 18（既習曲記憶） 37（印象に残る曲目）
経験した音楽科の授業や部活動などについて	19（音楽経験の印象） 22（授業の楽しさ） 24（児童の活動を大切にされた授業） 27（音楽活動からの学び） 32（音楽愛好のきっかけ） 42（経験希望学習領域） 44（楽しかった授業内容） 46（指導の適切さ）	21（既習曲への想い） 23（楽しさや良さのわかる授業） 28（教師からの影響） 41（経験した学習領域） 43（体験楽器） 45（楽しかった理由）
音楽科教育に対する意識について	25（音楽科の重要性） 29（子どもへの希望）	26（授業時数）
現在の日常生活での音楽経験について	30（生活の中での音楽愛好） 33（普段口ずさむ音楽） 35（音楽の好み） 39（音楽の聴取方法）	31（音楽愛好の意志） 34（現在の音楽活動実態） 36（上達したい内容） 40（演奏会回数・内容）

質問項目作成の留意点として、昭和22年度から平成元年度までの指導要領の学習内容が偏りなく含まれるよう配慮した上、KJ法を採用し上記4つのカテゴリーに整理、分類して質問内容を構成した。

質問1から19及び24・26・30・46については、より実態に即した解答が得られるよう否定的な表現を用いた。また、被験者が調査の目的を意識せずに行えるよう質問の配列を不規則にした。

【調査の対象】

戦後の音楽教育を経験した成人と言う意味から17歳から60歳までの一般の男女に協力を依頼した。なるべく多くの年齢層の回答が得られること、また、音楽に対する経験の有無に対し幅広い解答が得られることを考慮し、以下の被験者の協力を得て調査を行った。

京都市少年合唱団保護者	110名
株式会社サンデリックフーズ従業員	277名
京都市立音羽小学校保護者	311名
その他兵庫教育大学大学院生の知人	161名
計	859名

【実施期日】

京都市少年合唱団保護者

1998年7月22日(水)～7月31日(金)

株式会社サンデリックフーズ従業員

1998年7月27日(月)～8月24日(月)

京都市立音羽小学校保護者

1998年9月3日(木)～9月11日(金)

兵庫教育大学大学院生関係

1998年7月22日(水)～8月31日(月)

【手続き】

個人に対して、現在の実態を調査する内容であるため、個々に配布し自由に記述した後、回収する方法をとった。解答方法については別紙に例題を提示し題意を捉え易いよう配慮した。解答の記入は各質問項目の横の5段階(5、大変あてはまる 4、ほぼあてはまる 3、どちらでもない 2、あまりあてはまらない 1、全くあてはまらない)の中から適した番号に を記入する形式で行った。

第3章 分析

第 1 節 分析方法

有効解答数 8 5 9 を以下のように分類した

- A グループ 昭和 22 年度学習指導要領による音楽教育を受けたグループ
昭和 13 年～ 18 年生まれ 現在 55 歳～ 60 歳
- B グループ 昭和 26 年度学習指導要領による音楽教育を受けたグループ
昭和 19 年～ 22 年生まれ 現在 51 歳～ 54 歳
- C グループ 昭和 33 年度学習指導要領による音楽教育を受けたグループ
昭和 23 年～ 29 年生まれ 現在 44 歳～ 50 歳
- D グループ 昭和 43 年度学習指導要領による音楽教育を受けたグループ
昭和 30 年～ 39 年生まれ 現在 34 歳～ 43 歳
- E グループ 昭和 52 年度学習指導要領による音楽教育を受けたグループ
昭和 40 年～ 48 年生まれ 現在 25 歳～ 33 歳
- F グループ 平成元年度学習指導要領による音楽教育を受けたグループ
昭和 49 年～ 56 年生まれ 現在 17 歳～ 24 歳

(各音楽教育は全て小学校での音楽科教育を対象として分類した。)

各グループ人数

A グループ	4 0 名
B グループ	3 6 名
C グループ	1 8 5 名
D グループ	3 4 1 名
E グループ	1 2 1 名
F グループ	1 3 6 名
計	8 5 9 名

学校教育以外の音楽教育（音楽教室・部活動など）の経験をもたない者

A グループ	2 9 名
B グループ	2 6 名
C グループ	1 2 5 名
D グループ	1 7 3 名
E グループ	7 1 名

Fグループ	78名
計	502名

上記人数の内訳

学校教育以外の音楽教育（音楽教室・部活動など）の経験をもつ者

Aグループ	11名
Bグループ	10名
Cグループ	60名
Dグループ	168名
Eグループ	50名
Fグループ	58名
計	357名

上記で分類した各グループ間のF検定をかけて解答値の分散の様子を調べた。

次にF検定によりグループ間の分散に有意差が見られた各グループ間については、「分散が等しくない」と仮定した2標本によるt検定」を、有意差が見られなかった各グループ間については「分散が等しい」と仮定したt検定」を行い、各グループ間の平均の比較による有意差を求めた。以上の検定及びその分析については、音楽科教育における実態を調査する目的であるため授業以外の音楽教育の経験を持たない者のデータを中心に進めた。

今回の分析では、Macintosh PowerBook 5300csを使用しMicrosoftExcel Ver.5.0により、すべての演算を行った。

第2節 調査結果

2-1 F検定

t検定を行う前の手順として各グループ間の質問項目における解答の分散状況が等質であるかどうかを調べる必要がある。そこで、まず最初に各グループ間の分散を比較するためのF検定を行った。

結果は次の通りであった。

F 検定一覧表

表 1

質問	A	B	C	D	E	F
質問 1 音程			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 2 旋律記憶			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 3 和声感			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 4 器楽演奏(音階)			N.S.	N.S.	**	*
質問 5 器楽演奏(小曲)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 6 器楽曲判別			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 7 器楽曲の知識			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 8 楽器の知識			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 9 即興的演奏(替え歌など)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 10 階名・音名の理解			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 11 音符・記号の理解			N.S.	N.S.	**	N.S.
質問 12 読譜(八長調階名)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 13 読譜(旋律認知)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 14 読譜(リズム)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 15 記譜			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 16 不協和音識別			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 17 長調・短調の理解			N.S.	N.S.	**	N.S.
質問 18 既習曲記憶			**	*	**	N.S.
質問 19 音楽経験の印象			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 20 聞こえた音楽への反応			**	N.S.	N.S.	N.S.
質問 21 既習曲に対する想い			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 22 音楽科授業の楽しさ			N.S.	N.S.	*	N.S.
質問 23 音楽の良さや楽しさのわかる授業			N.S.	N.S.	**	N.S.
質問 24 児童の活動を大切にした授業			N.S.	N.S.	N.S.	*
質問 25 音楽科の重要性			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 26 音楽科の授業時数確保			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 27 音楽活動からの学び(協力)			*	N.S.	N.S.	N.S.
質問 28 教師からの影響			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 29 子どもへの希望(音楽性の育成)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 30 生活の中での音楽愛好			N.S.	N.S.	*	N.S.
質問 31 音楽愛好の意志			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 32 記憶している既習曲数			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

N.S. は有意差なしを意味する。

* は 10% 水準で有意傾向が見られたことを意味する。

** は 5% 水準で有意差が見られたことを意味する。

有意差が見られたグループの扱いについては、次の t 検定の中で取り上げているのでここでは、N.S. の結果が現れた調査項目及びグループについて考えたい。

調査項目 5・6・8・9・12～16・19・21・25・26・28・29・38 番については、全てのグループ間における F 検定の結果に有意差が見られなかった。また 3・7・10・20・22・24・27・31 番では 15 のグループ間の中で 1 つのグループ間以外は有意差が見られなかった。このことはそれぞれの調査項目における解答の分散が殆ど等しい分布を示しているということであり、それぞれのグループ間の解答が等質であると見なすことができる。

2-2 t 検定

上記の「表1 F 検定一覧表」の結果から F 検定の結果が N.S. のグループ間においては「分散が等しいと仮定した 2 標本による t 検定」、また、有意差が見られたグループ間においては「分散が等しくないと仮定した 2 標本による t 検定」とに選別して t 検定を行い、2 つのグループ間の平均の差に有意差が見られるかどうかについて調査を行った。

以下は各 t 検定別のグループ分けである。

【分散が等しくないと仮定した 2 標本による t 検定】

- ・質問 1 B E グループ B F グループ C E グループ D E グループ
- ・質問 2 C E グループ D E グループ
- ・質問 3 C D グループ
- ・質問 4 A D グループ A E グループ C D グループ
- ・質問 7 C D グループ
- ・質問 10 D E グループ
- ・質問 11 A E グループ C E グループ D E グループ
- ・質問 17 A E グループ C E グループ D E グループ
- ・質問 18 A C グループ A D グループ A E グループ B C グループ
B D グループ B E グループ
- ・質問 20 A B グループ
- ・質問 22 A E グループ
- ・質問 23 A E グループ C E グループ

- ・質問 24 B E グループ
- ・質問 27 A B グループ
- ・質問 30 A D グループ A E グループ
- ・質問 31 D E グループ

上記以外のグループ間の平均の値の比較については「等分散を仮定した2標本によるt検定」を用いて検定を行った。

表2はその一覧表である。

t 検定一覧表

表 2

質問	A	B	C	D	E	F
質問 1 音程			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 2 旋律記憶			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 3 和声感			N.S.	***	N.S.	**
質問 4 器楽演奏(音階)			N.S.	N.S.	*	N.S.
質問 5 器楽演奏(小曲)			N.S.	**	N.S.	N.S.
質問 6 鑑賞曲判別			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 7 鑑賞曲の知識			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 8 楽器の知識			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 9 即興的演奏(替え歌など)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 10 階名・音名の理解			N.S.	N.S.	**	N.S.
質問 11 音符・記号の理解			N.S.	N.S.	**	**
質問 12 読譜(八長調階名)			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 13 読譜(旋律認知)			N.S.	N.S.	**	***
質問 14 読譜(リズム)			N.S.	N.S.	**	***
質問 15 記譜			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 16 不協和音識別			N.S.	N.S.	N.S.	**
質問 17 長調・短調の理解			**	N.S.	N.S.	**
質問 18 既習曲記憶			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 19 音楽経験の印象			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
質問 20 聞こえた音楽への反応			**	**	***	N.S.
質問 21 既習曲に対する想い			**	***	***	***
質問 22 音楽科授業の楽しさ			N.S.	***	N.S.	N.S.
質問 23 音楽の良さや楽しさのわかる授業			N.S.	**	N.S.	N.S.
質問 24 児童の活動を大切にした授業			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.

2.5 音楽科の重要性

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
B			N.S.	*	**	**
C				N.S.	***	**
D					N.S.	N.S.
E						N.S.

質問 2.6 音楽科の授業時数確保

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	*	**	N.S.	N.S.
B			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
C				N.S.	**	N.S.
D					***	N.S.
E						N.S.

質問 2.7 音楽活動からの学び(協力)

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
B			*	N.S.	N.S.	N.S.
C				N.S.	N.S.	N.S.
D					N.S.	N.S.
E						N.S.

質問 2.8 教師からの影響

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	N.S.	**	N.S.	N.S.
B			N.S.	*	N.S.	N.S.
C				N.S.	N.S.	N.S.
D					N.S.	N.S.
E						N.S.

2.9 子どもへの希望(音楽性の育成)

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
B			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
C				N.S.	*	***
D					**	***
E						N.S.

質問 3.0 生活の中での音楽愛好

	A	B	C	D	E	F
A		*	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
B			*	***	***	***
C				**	**	N.S.
D					N.S.	N.S.
E						N.S.

質問 3.1 音楽愛好の意志

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
B			N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
C				N.S.	N.S.	*
D					N.S.	**
E						N.S.

質問 3.8 記憶している既習曲数

	A	B	C	D	E	F
A		N.S.	N.S.	N.S.	N.S.	**
B			N.S.	N.S.	N.S.	**
C				N.S.	N.S.	**
D					N.S.	**
E						**

N.S. は有意差なしを意味する。

* は 10% 水準で有意傾向が見られたことを意味する。

** は 5% 水準で有意差が見られたことを意味する。

*** は 1% 水準で有意差が見られたことを意味する。

上記の「表2 t検定一覧表」をもとに各質問項目毎に平均の値を中心にまとめ、有意傾向のある項目および有意差の見られた項目とその内容について分析をした。

全ての平均の値からも様々な内容が読みとれると思いがちであるが平均の比較においては信頼性の面から考えて t 検定により有意傾向・有意差が見られたもののみ分析を加えることとし、項目別平均値表(P 21 表 3 他)の後ろに各グループ間の比較からそれぞれのグループの特徴を記載した。

尚、各項目の平均の値については調査用紙の 5 段階をそのまま採用したが、否定形で作成した質問項目 1 ~ 1 9 ・ 2 4 ・ 2 6 ・ 3 0 については肯定的な題意に置き換え、回答で得た 1 ~ 5 の数値も 1 5、2 4、4 2、5 1 と置き換えることにより、各項目とも 1 < 5 で数値の大きい方がより高度であることを意味するように調整した。

例 1、音程がおかしいと人からよく言われる。

解答例 5 大変あてはまる = 音程がおかしい 1 に置き換える

1 全くあてはまらない = 正しい音程で歌える 5 に置き換える

2-3 項目毎にみる各グループの特徴

(1) 平均の差の表をもとに (1 ~ 3 1 番 ・ 3 8 番)

1～10番までのグループ毎の特徴

表3

		1 音程	2 旋律記憶	3 和声感	4 器楽演奏 (音階)	5 器楽演奏 (小曲)
A	平均	3.62	2.86	3.41	3.62	3.62
	分析			C E Fより高い	Dより低い	
B	平均	3.62	2.77	2.89	3.69	3.12
	分析					Dより低い
C	平均	3.30	2.58	2.74	3.79	3.52
	分析	Eより低い	Dより低い	Aより低い	Dより低い	
D	平均	3.51	2.93	2.76	4.15	3.75
	分析		Cより高い		A C Fより高い	B E Fより高い
E	平均	3.68	3.17	2.85	4.04	3.35
	分析	C Fより高い		Aより低い		Dより低い
F	平均	3.31	2.99	2.64	3.87	3.15
	分析	Eより低い		Aより低い	Dより低い	Dより低い

		6 鑑賞曲判別	7 鑑賞曲の知識	8 楽器の知識	9 即興的演奏 (替え歌など)	10 音名階名の 理解
A	平均	3.93	3.03	3.38	2.76	3.21
	分析		Fより高い	Fより高い		Eより高い
B	平均	3.96	2.85	3.27	2.81	2.96
	分析			Fより高い		
C	平均	3.88	3.05	3.26	2.66	2.89
	分析	Fより高い	E Fより高い	Fより高い	Dより低い	
D	平均	4.05	2.80	3.23	2.98	2.93
	分析	Fより高い	Fより高い	Fより高い	Cより高い	
E	平均	3.97	2.69	3.20	2.83	2.69
	分析	Fより高い	Cより低い	Fより高い		Aより低い
F	平均	3.59	2.42	2.71	2.76	2.77
	分析	C D Eより低い	A C Dより低い	A B C D Eより低い		

【Aグループの特徴】

- ・和声感に関して値が高く、これはC E Fとの比較においてAグループが優れているといえる。
- ・器楽演奏（音階）についてはDとの比較において低いといえる。

- ・鑑賞曲や楽器に関する知識が高く F との比較において優れているといえる。
- ・音名・階名の区別については他のグループは3以下であるのに対し 3.207 となっており特に E との比較において有意差が見られ、E よりも高いといえる。

和声感：A > C E F
 器楽演奏（音階）：A < D
 鑑賞曲や楽器に関する知識：A > F
 音名・階名の区別：A > E

【Bグループの特徴】

- ・質問項目10までの中では大きな特徴は見あたらないが器楽演奏(小曲)においてはDよりも低い結果となっており、楽器の知識はFよりも高いといえる。

器楽演奏（小曲）：B < D
 楽器の知識：B > F

【Cグループの特徴】

- ・音程についてはEより低く旋律記憶・器楽演奏（音階）・即興演奏についてはDより、また和声感についてはAより低いことがわかる。
- ・鑑賞曲を聴いて判別する事や楽器の知識に関してはFよりも高く鑑賞曲の知識はE Fよりも豊富であるといえる。

音程：C < E
 旋律記憶・器楽演奏（音階）・即興演奏：C < D
 和声感：C < A
 鑑賞曲判別・楽器の知識：C > F
 鑑賞曲の知識：C > E F

【Dグループ】

- ・旋律記憶・即興演奏についてはCより高く、鑑賞曲判別・鑑賞曲や楽器の知識についてはFよりも優れており、また器楽演奏(音階)は4.15の値を示しこの年代の人々がかなりの定着度を

持っていることがわかるが、グループ間での比較をみるとA C FよりDグループのほうがリコーダー(ハーモニカ)の音階では優位にあると考えられる。同様に小曲を演奏することについてもB E Fよりも高い値が見られた。このことから器楽演奏においてはDグループが一番優れていると考えられる。

- ・ Dグループの特徴としては10問までの結果で見ると全体的に高い位置にあるといえる。

旋律記憶・即興演奏：D > C
鑑賞曲判別・鑑賞曲や楽器の知識：D > F
器楽演奏(音階)：D > A C F
小曲を演奏：D > B E F

【Eグループの特徴】

- ・ 音程についてはC Fよりも高く、器楽演奏(小曲)はDより、和声感・音名階名の区別についてはAよりも劣っていると考えられる。
- ・ 鑑賞曲判別・楽器の知識についてはFよりも高いことがわかる。
- ・ 鑑賞曲の知識の面では、FとともにCよりも低い結果が出ている。

音程：E > C F
器楽演奏(小曲)：E < D
和声感・音名階名の区別：E < A
鑑賞曲判別・楽器の知識 E > F
鑑賞曲の知識：E < C

【Fグループの特徴】

- ・ 音程はEよりも、和声感はAよりも、器楽演奏についてはDとの比較において劣っているといえる。
- ・ 鑑賞曲判別ではC D E、鑑賞曲の知識ではA C D、楽器の知識においてはA ~ Eのどのグループよりも低いといえる。このことは3項目共通でC Dよりも低いことがわかる。

音程：F < E
和声感：F < A

器楽演奏：F < D
 鑑賞曲判別：F < C D E
 鑑賞曲の知識：F < A C D
 楽器の知識：F < A B C D E

11～20番までのグループ毎の特徴

表 4

		11 音符記号の理解	12 読譜 (八長調階名)	13 読譜 (旋律認知)	14 読譜 (リズム)	15 記譜
A	平均	3.14	4.03	3.41	3.55	2.90
	分析				Fより高い	
B	平均	3.31	4.16	3.69	3.46	2.35
	分析	E Fより高い		Fより高い		C Dより低い
C	平均	3.20	4.18	3.50	3.62	2.94
	分析	E Fより高い		Fより高い	Fより高い	B Fより高い
D	平均	3.18	4.35	3.80	3.81	3.01
	分析	E Fより高い	Fより高い	E Fより高い	E Fより高い	B E Fより高い
E	平均	2.85	4.17	3.39	3.32	2.62
	分析	B C Dより低い		Dより低い	Dより低い	Dより低い
F	平均	2.72	3.94	2.94	2.94	2.55
	分析	B C Dより低い	Dより低い	B C Dより低い	A C Dより低い	C Dより低い

		16 不協和音識別	17 長調短調の理解	18 既習曲記憶	19 音楽経験の印象	20 聞こえた音楽への反応
A	平均	3.17	3.24	3.72	3.45	3.03
	分析	B Fより高い	B Eより高い			B C Dより低い
B	平均	2.46	2.46	3.73	3.23	3.81
	分析	A C D Eより低い	Aより低い			A E Fより高い
C	平均	2.94	2.90	4.14	3.10	3.65
	分析	B Fより高く Dより低い	Eより高い	E Fより高い	Dより低い	A E Fより高い
D	平均	3.34	2.87	4.13	3.42	3.69
	分析	B C Fより高い	E Fより高い	E Fより高い	Cより高い	A E Fより高い
E	平均	3.03	2.44	3.76	3.27	3.25
	分析	B Fより高い	A C Dより低い	C Dより低く Fより高い		B C Dより低い
F	平均	2.52	2.27	3.30	3.26	3.22
	分析	A C D Eより低い	Dより低い	C D Eより低い		B C Dより低い

【Aグループの特徴】

- ・読譜（リズム）についてはFより高い。
- ・不協和音識別はB Fより、長調短調の理解はB Eより高く、聞こえた音楽への反応はB C Dより低い。

読譜（リズム）：A > F
不協和音識別：A > B F
長調短調の理解：A > B E
聞こえた音楽への反応：A < B C D

【Bグループの特徴】

- ・音符記号の理解についてはE Fより、読譜（旋律認知）についてはFより高い。
- ・記譜についてはC Dより低い。
- ・不協和音識別はA C D Eより、長調短調の理解はAより低く、聞こえた音楽への反応はA E Fより高い。

音符記号の理解：B > E F
読譜（旋律認知）：B > F
記譜：B < C D
不協和音識別：B < A C D E
長調短調の理解：B < A
聞こえた音楽への反応：B > A E F

【Cグループの特徴】

- ・音符記号の理解についてはE Fより高く、読譜（旋律認知）（リズム）についてはFより、記譜についてはB Fより高い。
- ・不協和音識別はB Fより高く、Dより低い。長調短調の理解はEより、既習曲記憶はE Fより、聞こえた音楽への反応はA E Fより高い。
- ・音楽経験の印象についてはDより低い。

音符記号の理解：C > E F
 読譜（旋律認知）（リズム）：C > F
 記譜：C > B F
 不協和音識別：C > B F C < D
 長調短調の理解：C > E
 既習曲記憶：C > E F
 聞こえた音楽への反応：C > A E F
 音楽経験の印象：C < D

【Dグループの特徴】

- ・ 音符記号の理解・読譜（旋律認知）（リズム）についてはE Fより高く、読譜（八長調階名）についてはFより、記譜についてはB E Fより高い。
- ・ 不協和音識別はB C Fより、長調短調の理解・既習曲記憶はE Fより高い。
- ・ 音楽経験の印象についてはCより高く、聞こえた音楽への反応はA E Fより高い。

音符記号の理解・読譜（旋律認知）（リズム）：D > E F
 読譜（八長調階名）：D > F
 記譜：D > B E F
 不協和音識別：D > B C F
 長調短調の理解・既習曲記憶：D > E F
 音楽経験の印象：D > C
 聞こえた音楽への反応：D > A E F

【Eグループの特徴】

- ・ 音符記号の理解についてはB C Dより、読譜（旋律認知）（リズム）・記譜はDより低い。
- ・ 不協和音識別はB Fより高く、長調短調の理解はA C Dより低い。
- ・ 既習曲記憶はC Dより低くFより高い。また聞こえた音楽への反応はB C Dより低い。

音符記号の理解：E < B C D
読譜（旋律認知）（リズム）・記譜：E < D
不協和音識別：E > B F
長調短調の理解：E < A C D
既習曲記憶：F < E < C D
聞こえた音楽への反応：E < B C D

【Fグループの特徴】

- ・音符記号の理解・読譜（旋律認知）についてはB C Dより低く、読譜（八長調階名）についてはDより、読譜（リズム）についてはA C Dより、記譜についてはC Dより低い。
- ・不協和音識別はA C D Eより、長調短調の理解はDより、既習曲記憶はC D Eより、聞こえた音楽への反応はB C Dより低い。

音符記号の理解・読譜（旋律認知）：F < B C D
読譜（八長調階名）・長調短調の理解：F < D
読譜（リズム）：F < A C D
記譜：F < C D
不協和音識別：F < A C D E
既習曲記憶：F < C D E
聞こえた音楽への反応：F < B C D

21～31・38番のグループ毎の特徴
（次のページへ）

表5

		21 既習曲への 想い	22 音楽科授業の 楽しさ	23 音楽の良さや楽 しさのわかる授業	24 児童の活動を 大切にした授業	25 音楽科の 重要性
A	平均	4.21	3.14	2.76	2.59	4.17
	分析	CDEFより高い				
B	平均	4.31	3.54	3.27	2.65	4.42
	分析	CDEFより高い	Dより高い	Dより高い		DEFより高い
C	平均	3.40	3.19	2.99	2.71	4.19
	分析	ABより低くE Fより高い	Dより高い	Dより高い		EFより高い
D	平均	3.41	2.90	2.69	2.56	4.01
	分析	ABより低くE Fより高い	BCEFより低い	BCEより低い		Bより低い
E	平均	2.96	3.23	2.99	2.51	3.73
	分析	ABCDより低い	Dより高い	Dより高い		BCより低い
F	平均	2.77	3.19	2.89	2.71	3.86
	分析	ABCDより低い	Dより高い			BCより低い

		26 音楽科の 授業時数確保	27 音楽科授業 からの学び(協 力)	28 教師からの 影響	29 子どもへの 希望(音楽性の 育成)	30 生活の中で の音楽愛好	31 音楽愛好の 意志	38 記憶してい る既習曲数
A	平均	3.62	3.38	2.90	4.03	3.59	3.00	2.97
	分析	CDより低い		Dより高い		Bより高い		Fより高い
B	平均	3.81	3.77	2.85	4.08	3.04	3.08	2.96
	分析		Cより高い	Dより高い		ACDEFより 低い		Fより高い
C	平均	3.99	3.40	2.70	4.25	3.50	3.01	2.98
	分析	A Eより高い	Bより低い	Dより高い	E Fより高い	DEより低く Bより高い	Fより高い	Fより高い
D	平均	4.11	3.46	2.46	4.25	3.78	3.05	3.18
	分析	A Eより高い		ABCより低い	E Fより高い	BCより高い	Fより高い	Fより高い
E	平均	3.65	3.38	2.56	3.94	3.85	2.86	2.92
	分析	CDより低い			CDより低い	BCより高い		Fより高い
F	平均	3.95	3.40	2.69	3.87	3.76	2.67	2.42
	分析				CDより低い	Bより高い	CDより低い	ABCDEより低 い

【Aグループの特徴】

- ・既習曲への想いはC D E Fより高く、音楽科の授業時間確保の意識はC Dより低い。
- ・教師からの影響はDより、生活の中での音楽の愛好はBより高い。
- ・記憶している既習曲数の平均の数値はFより高い。

既習曲への想い：A > C D E F

音楽科の授業時間確保の意識：A < C D

教師からの影響 A > D

生活の中での音楽の愛好：A > B

記憶している既習曲数：A > F

【Bグループの特徴】

- ・既習曲への想いはC D E Fより高く、音楽科授業の楽しさ・音楽の良さや楽しさのわかる授業・教師からの影響についてはDより高い。
- ・音楽科の重要性はD E F、音楽科授業からの学びはCより高く、生活の中での音楽の愛好はA C D E Fより低い。
- ・記憶している既習曲数の平均の数値はFより高い。

既習曲への想い：B > C D E F

音楽科授業の楽しさ：B > D

音楽の良さや楽しさのわかる授業：B > D

教師からの影響：B > D

音楽科の重要性：B > D E F

音楽科授業からの学び：B > C

生活の中での音楽の愛好：B < A C D E F

記憶している既習曲数：B > F

【Cグループの特徴】

- ・既習曲への想いはA Bより低く、E Fより高い。
- ・音楽科授業の楽しさ・音楽の良さや楽しさのわかる授業・教師からの影響についてはDより高い。
- ・音楽科の重要性はE F、音楽科の授業時数確保はA Eより高い。
- ・音楽科授業からの学びはBより低く、生活の中での音楽の愛好はD Eより低く、Bより高い。
- ・子どもへの希望はE Fより高い。
- ・音楽を今後愛好しようとする意志はFより高い。
- ・記憶している既習曲数の平均の数値はFより高い。

既習曲：A B > C > E F
音楽科授業の楽しさ：C > D
音楽の良さや楽しさのわかる授業：C > D
教師からの影響：C > D
音楽科の重要性：C > E F
音楽科の授業時数確保：C > A E
音楽科授業からの学び：C < B
生活の中での音楽の愛好：B < C < D E
子どもへの希望：B > E F
音楽を今後愛好しようとする意志：B > F
記憶している既習曲数：B > F

【Dグループの特徴】

- ・既習曲への想いはA Bより低くE Fより高い。
- ・音楽科授業の楽しさはB C E F、音楽の良さや楽しさのわかる授業はB C Eより、音楽科の重要性はBより、教師からの影響についてはA B Cより低い。
- ・音楽科の授業時数確保はA Eより、子どもへの希望はE F、生活の中での音楽の愛好はB Cより高い。
- ・音楽を今後愛好しようとする意志はFより高い。
- ・記憶している既習曲数の平均の数値はFより高い。

既習曲への想い：E F < D < A B
音楽科授業の楽しさ：D < B C E F
音楽の良さや楽しさのわかる授業：D < B C E
音楽科の重要性：D < B
教師からの影響：D < A B C
音楽科の授業時数確保：D > A E
子どもへの希望：D > E F
生活の中での音楽の愛好：D > B C
音楽を今後愛好しようとする意志：D > F
記憶している既習曲数：D > F

【Eグループの特徴】

- ・既習曲への想いはA B C Dより、音楽科の重要性はB Cより低い。
- ・音楽科授業の楽しさ・音楽の良さや楽しさのわかる授業はDより、生活の中での音楽の愛好はB Cより高い。
- ・音楽科の授業時数確保・子どもへの希望はC Dより低い。
- ・記憶している既習曲数の平均の数値はFより高い。

既習曲への想い：E < A B C D
音楽科の重要性は：E < B C
音楽科授業の楽しさ：E > D
音楽の良さや楽しさのわかる授業：E > D
生活の中での音楽の愛好：E > B C
音楽科の授業時数確保：E < C D
子どもへの希望：E < C D
記憶している既習曲数：E > F

【Fグループの特徴】

- ・既習曲への想いはA B C Dより、音楽科の重要性はB Cより、子どもへの希望はC Dより低い。
- ・音楽科授業の楽しさはDより、生活の中での音楽の愛好はBより高い。
- ・音楽を今後愛好しようとする意志はC Dより低い。
- ・記憶している既習曲数の平均の数値はA B C D Eより低い。

既習曲への想い：F < A B C D
 音楽科の重要性：F < B C
 子どもへの希望：F < C D
 音楽科授業の楽しさ：F > D
 生活の中での音楽の愛好：F > B
 音楽を今後愛好しようとする意志：F < C D
 記憶している既習曲数：F < A B C D E

(2) 選択肢集計の割合表をもとに

(30・31・33・35・36・39・42・44～46番)

次の調査項目については3～7個の選択肢から選び出された二つの該当する内容を、グループ毎に以下の表に集計し、「各グループ内の比の比較」を行うためカイ自乗検定により有意差を確認した。以下に表6、その実測値の集計表とグループ全体の選択項目を100%としたときの割合の表及び表7、カイ自乗検定の結果を掲載した。

表6

30番	実測数(人)						
	A	B	C	D	E	F	計
歌	9	9	46	71	37	41	213
楽器	4	1	12	18	8	4	47
鑑賞	4	4	38	84	37	38	205
DTM	0	1	1	5	1	7	15
その他(演奏会・レビ)	1	1	4	5	2	1	14
計	18	16	101	183	85	91	494

30番 現在行っている音楽活動内容	割合(%)					
	A	B	C	D	E	F
歌	50	56.3	45.5	38.8	43.5	45.1
楽器	22.2	6.3	11.9	9.8	9.4	4.4
鑑賞	22.2	25.0	37.6	45.9	43.5	41.8
DTM	0	6.3	1	2.7	1.2	7.7
その他(演奏会・レビ)	5.6	6.3	4	2.7	2.4	1.1
計	100	100	100	100	100	100

31番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
歌	3	6	23	29	5	7	73
楽器	6	1	35	34	7	11	94
鑑賞	2	3	17	25	7	2	56
DTM	0	1	4	9	1	1	16
計	11	11	79	97	20	21	239

31番 今後経験したい音楽活動内容 (%)

	A	B	C	D	E	F
歌	27.3	54.5	29.1	29.9	25	33.3
楽器	54.5	9.1	44.3	35.1	35	52.4
鑑賞	18.2	27.3	21.5	25.8	35	9.5
DTM	0	9.1	5.1	9.3	5	4.8
計	100	100	100	100	100	100

33番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
ポップス	2	6	60	138	56	68	330
クラシック	0	0	11	11	3	5	30
演歌	11	22	55	46	7	4	145
童謡	13	11	39	34	20	7	124
唱歌	9	6	27	21	3	1	67
ロック	0	1	6	24	21	45	97
民謡	6	1	7	2	2	0	18
その他	2	1	12	6	2	2	25
計	43	48	217	282	114	132	836

33番 普段口ずさむ音楽 (%)

	A	B	C	D	E	F
ポップス	4.7	12.5	27.6	48.9	49.1	51.5
クラシック	0	0	5.1	3.9	2.6	3.8
演歌	25.6	45.8	25.3	16.3	6.1	3
童謡	30.2	22.9	18	12.1	17.5	5.3
唱歌	20.9	12.5	12.4	7.4	2.6	0.8
ロック	0	2.1	2.8	8.5	18.4	34.1
民謡	14.0	2.1	3.2	0.7	1.8	0
その他	4.7	2.1	5.5	2.1	1.8	1.5
計	100	100	100	100	100	100

35番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
ポップス	4	7	68	133	57	66	335
クラシック	3	4	27	29	7	6	76
演歌	15	14	58	37	9	3	136
童謡	8	5	23	20	13	2	71
唱歌	10	4	17	13	3	0	47
ロック	0	1	8	41	27	54	131
民謡	8	0	8	2	3	0	21
その他		2	5	6	3	3	19
計	48	37	214	281	122	134	836

35番 好きな音楽の種類 (%)

	A	B	C	D	E	F
ポップス	8.3	18.9	31.8	47.3	46.7	49.3
クラシック	6.3	10.8	12.6	10.3	5.7	4.5
演歌	31.3	37.8	27.1	13.2	7.4	2.2
童謡	16.7	13.5	10.7	7.1	10.7	1.5
唱歌	20.8	10.8	7.9	4.6	2.5	0
ロック	0	2.7	3.7	14.6	22.1	40.3
民謡	16.7	0	3.7	0.7	2.5	0
その他	0	5.4	2.3	2.1	2.5	2.2
計	100	100	100	100	100	100

36番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
歌	13	13	71	102	40	55	294
楽器	9	10	77	102	36	34	268
鑑賞	7	5	28	30	21	17	108
DTM	1	2	10	18	6	20	57
その他	0	0	1	2	0	0	3
計	30	30	187	254	103	126	730

36番 できるようになりたい音楽活動内容 (%)

	A	B	C	D	E	F
歌	43.3	43.3	38	40.2	38.8	43.7
楽器	30	33.3	41.2	40.2	35.0	27.0
鑑賞	23.3	16.7	15	11.8	20.4	13.5
DTM	3.3	6.7	5.3	7.1	5.8	15.9
その他	0	0	0.5	0.8	0	0
計	100	100	100	100	100	100

39番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
CD類	11	6	54	113	52	63	299
カセット類	11	9	39	73	30	48	210
テレビ	16	18	56	82	29	28	229
ラジオ	12	13	55	55	24	15	174
演奏会	2	0	10	3	0	2	17
その他	1	0	1	0	0	0	2
計	53	46	215	326	135	156	931

39番 音楽の聴取方法 (%)

	A	B	C	D	E	F
CD類	20.8	13	25.1	34.7	38.5	40.4
カセット類	20.8	19.6	18.1	22.4	22.2	30.8
テレビ	30.2	39.1	26	25.2	21.5	17.9
ラジオ	22.6	28.3	25.6	16.9	17.8	9.6
演奏会	3.8	0	4.7	0.9	0	1.3
その他	1.9	0	0.5	0	0	0
計	100	100	100	100	100	100

42番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
歌唱	7	12	39	57	23	35	173
器楽	13	14	72	90	43	48	280
鑑賞	4	8	35	57	19	25	148
ふしづくり	3	2	12	13	4	6	40
音符など	4	1	18	20	8	14	65
その他			1(合唱奏)				1
計	31	37	177	238	97	128	708

42番 もっと経験したかった学習領域 (%)

	A	B	C	D	E	F
歌唱	22.6	32.4	22	23.9	23.7	27.3
器楽	41.9	37.8	40.7	37.8	44.3	37.5
鑑賞	12.9	21.6	19.8	23.9	19.6	19.5
ふしづくり	9.7	5.4	6.8	5.5	4.1	4.7
音符など	12.9	2.7	10.2	8.4	8.2	10.9
その他	0	0	0.6	0.4	0	0
計	100	100	100	100	100	100

	A	B	C	D	E	F	計
歌唱	19	16	82	97	43	54	311
器楽	7	13	57	81	38	43	239
鑑賞	8	10	39	78	29	24	188
ふしづくり	1	1	2	4	0	2	10
音符など	3	0	3	2	1	3	12
その他	0	0	1	0	0	3	4
計	38	40	184	262	111	129	764

	A	B	C	D	E	F
歌唱	50	40	44.6	37	38.7	41.9
器楽	18.4	32.5	31	30.9	34.2	33.3
鑑賞	21.1	25	21.2	29.8	26.1	18.6
ふしづくり	2.6	2.5	1.1	1.5	0	1.6
音符など	7.9	0	1.6	0.8	0.9	2.3
その他	0	0	0.5	0	0	2.3
計	100	100	100	100	100	100

	A	B	C	D	E	F	計
良い音楽	8	9	55	56	22	33	183
活動の楽しさ	9	10	48	77	30	33	207
友達との協力	8	15	58	86	38	50	255
計	25	34	161	219	90	116	645

	A	B	C	D	E	F
良い音楽	32	26.5	34.2	25.6	24.4	28.4
活動の楽しさ	36	29.4	29.8	35.2	33.3	28.4
友達との協力	32	44.1	36.0	39.3	42.2	43.1
計	100	100	100	100	100	100

	A	B	C	D	E	F	計
歌	5	8	25	51	18	19	126
器楽	10	12	57	78	25	29	211
鑑賞	7	7	39	37	15	35	140
楽譜	12	6	67	92	44	44	265
その他	0	0	2	4	0	1	7
計	34	33	190	262	102	128	749

	A	B	C	D	E	F
歌	14.7	24.2	13.2	19.5	17.6	14.8
器楽	29.4	36.4	30	29.8	24.5	22.7
鑑賞	20.6	21.2	20.5	14.1	14.7	27.3
楽譜	35.3	18.2	35.3	35.1	43.1	34.4
その他	0	0	1.1	1.5	0	0.8
計	100	100	100	100	100	100

カイ自乗検定結果

表 7

結果	3 0 番	グループ名	結果	3 1 番	グループ名
**	0.0224	(A)	*	0.0779	(A)
***	0.0097	(B)		0.1073	(B)
***	4.7E-12	(C)	***	1.4E-05	(C)
***	6.7E-22	(D)	***	0.0023	(D)
***	2.9E-11	(E)	***	0.1870	(E)
***	3.3E-11	(F)	***	0.0063	(F)
結果	3 3 番	グループ名	結果	3 5 番	グループ名
***	5.6E-05	(A)	***	0.0014	(A)
***	7E-10	(B)	***	0.0003	(B)
***	2.2E-20	(C)	***	2.2E-22	(C)
***	7.1E-66	(D)	***	2E-59	(D)
***	6.2E-28	(E)	***	2.2E-26	(E)
***	1.8E-47	(F)	***	2.7E-53	(F)
結果	3 6 番	グループ名	結果	3 9 番	グループ名
**	0.0186	(A)	**	0.0385	(A)
**	0.0210	(B)	***	0.0004	(B)
***	7.3E-15	(C)	***	3E-07	(C)
***	4.8E-21	(D)	***	5.4E-21	(D)
***	3.6E-06	(E)	***	2.3E-10	(E)
***	2.7E-06	(F)	***	5.8E-16	(F)

結果	4 2 番	グループ名	結果	4 4 番	グループ名
**	0.0292	(A)	***	3.7E-05	(A)
***	0.0011	(B)	***	3.6E-05	(B)
***	8.3E-13	(C)	***	2E-27	(C)
***	4.1E-17	(D)	***	2.1E-33	(D)
***	8.1E-10	(E)	***	1.8E-15	(E)
***	8.8E-09	(F)	***	7.4E-18	(F)
結果	4 5 番	グループ名	結果	4 6 番	グループ名
	0.9608	(A)		0.3324	(A)
	0.4018	(B)		0.4726	(B)
	0.6122	(C)	***	5.7E-05	(C)
**	0.0389	(D)	***	2.1E-06	(D)
	0.1184	(E)	***	0.0002	(E)
*	0.0828	(F)	**	0.0153	(F)

これらの調査項目の有意差の検定は観測値つまり観察度数 (observed frequency) とその数値から割り出した期待度数 (expected frequency) の二つの理論度数を使いカイ自乗テストにより行った。

有意差の基準は F 検定及び t 検定と同じく次の通りとする。

N.S. は有意差なしを意味する。

* は 10% 水準で有意傾向が見られたことを意味する。

** は 5% 水準で有意差が見られたことを意味する。

*** は 1% 水準で有意差が見られたことを意味する。

また P 値に現れた E は小数第何位であることを示したものであり 4 6 番の (C)・(D) の P 値を例にとると次のようになる。

例 (C) [5.7E-05] = 0.000057

(D) [2.1E-06] = 0.0000021 を意味する

尚、表 7 カイ自乗検定の結果からは多くの有意差が見られたが、ここでは各グループの特徴的な内容を中心に記述した。

【 A グループの特徴】

- ・現在行っている音楽活動内容についての割合の順は、歌 > 楽器・鑑賞 > D T Mであり他のグループとは異なった傾向にあるといえる。
- ・普段口ずさむ音楽では童謡 > 演歌 > 唱歌の順で上位 3 位を占めており、次に民謡が続いている。
- ・好きな音楽の種類は演歌が 31.3% で一番多く、次に唱歌、続いて童謡・民謡 (16.7%) の順であるが 4 つがバランスをとって占めている。
- ・音楽の聴取方法についてはテレビが最も多く次にラジオ、C D ・カセットと続いているが、後者の 3 つは 20% 強でほぼ同じである。

【 B グループの特徴】

- ・普段口ずさむ音楽では演歌が突出して 1 番であり、続いて童謡、ポップス・唱歌となり他は 2 % 以下となっている。
- ・好きな音楽の種類も演歌 (37.8%) が突出しており、続くポップス、童謡、クラシック・唱歌は 10% 代であり開きがみられる。
- ・音楽の聴取方法についてはテレビが最も多く次にラジオであるがこの 2 つで 60% を占め、カセット、C D と続くが C D はわずかに 13% に止まっている。

【 C グループの特徴】

- ・普段口ずさむ音楽での 上位 4 位はポップス > 演歌 > 童謡 > 唱歌 の順で、ポップスと演歌を合わせた割合は約 50%、童謡と唱歌の合計は約 30% である。
- ・好きな音楽の種類 1 位 2 位はポップスと演歌で計約 60% あり、続いてクラシックや童謡の 10% 台が続いている。

- ・できるようになりたい音楽活動内容の割合は楽器 > 歌 > 鑑賞 > D T Mの順となっておりDグループとともに他のグループとは違った傾向にある。
- ・音楽の聴取方法であるがこの年代からC D類が急激に伸びている。上位3位はテレビ、ラジオ、CDであり、25%強でそろっているが、この年代の後CDが更に増え最上位となっていく。
- ・適切な指導を受けられなかった学習内容では楽譜の読み方が35.3%で1番多く、2番に器楽指導(30%)、3番に鑑賞指導(20.5%)の順であるが歌唱についてはどのグループよりも低く13.2%である。

【Dグループの特徴】

- ・普段口ずさむ音楽での特徴はDグループから急激にポップスが増え、約50%を占めE Fグループになるほど増え続けている。また2位以下は演歌、童謡、ロック、唱歌が続いている。
- ・好きな音楽の種類については「普段口ずさむ音楽」と同様でポップスがこの年代から急速に増え50%近くとなっている。またロックは、Cの年代では3.7%であったのがDの年代から14.6%と二桁になりFの年代の40.3%にまで急速に伸びていくスタート地点を示している。
- ・できるようになりたい音楽活動内容の割合は歌・楽器 > 鑑賞 > D T Mの順となっており、A B E Fグループの、歌 > 楽器の順とは異なった傾向にある。
- ・音楽の聴取方法については、Cグループではテレビ、ラジオ、CDが均等であったがDグループの年代になってCDが一番多く(34.7%)テレビ、カセット(20%台)となり、ラジオはこの後大きく下降して行く傾向にある。
- ・適切な指導を受けられなかった学習内容では上位2位の割合はCとほぼ同じであるが、3位には歌唱(19.5%)が上がっており鑑賞の割合は14.1%と低くなっている。

【Eグループの特徴】

- ・普段口ずさむ音楽での特徴はD Fグループと同じく、ポップスが約50%を占めている。またロック、童謡と続いているが、これらは「好きな音楽の種類」と同様の順位になっている。
- ・音楽の聴取方法についてはDグループと同様の傾向にあり、CDが更に伸びて(38.5%)1番多く、続いてカセット、テレビの順であるがCDが伸びた分だけカセット、テレビとの差は広がっている。
- ・適切な指導を受けられなかった学習内容では楽譜の読み方の割合が非常に高く43.1%となっており、2位の器楽の指導(24.5%)と比較すると大きな差が見られるのが特徴である。3位は歌唱に対する指導であるが、これはFグループの年代では4番目となって下降している。

【Fグループの特徴】

- ・普段口ずさむ音楽での特徴はD Eグループと同じく、ポップスが約50%を占め、2位のロックと合わせると85%以上となり大変偏った結果となっている。また、好きな音楽の種類についてもポップス・ロックの上位2位は変わらないが更に増加を見せ、計90%を占めているため偏りは一層増している。
- ・音楽の聴取方法については、C Dとカセットで70%となり、テレビ・ラジオは更に下降傾向が強くなっている。
- ・適切な指導を受けられなかった学習内容での上位3つの順番は楽譜の読み方、鑑賞(音楽の聴き方)、楽器演奏の仕方であるが、鑑賞が27.3%と高い割合を示しているのはこのグループの特徴といえる。

【各グループの共通した特徴】

- ・現在行っている音楽活動内容についての割合が歌>鑑賞>楽器>DTMの順であるグループが多く、Aグループ以外はこの傾向にある。また今後活動したいと考えている音楽活動内容の割合は、楽器>歌>鑑賞>DTMであるグループはA C D Fであるが、B Eについては有意差が見られていないためこの4つのグループにおいての共通した特徴といえる。
- ・A B E Fグループは共通して、できるようになりたい音楽活動内容の割合が歌>楽器>鑑賞>DTMの順であるが、C Dはやや異なった傾向を示している。
- ・もっと経験したかった学習領域では6グループともに共通した傾向がみられる。一番割合の多いのが器楽、次に歌唱で、鑑賞が3番目、音符や記号の学習へと続いている。A B Fグループは歌唱と鑑賞の差が開いているのに対して、C D Eグループはその差がわずかであることが各グループの特徴といえる。
- ・楽しかった授業内容では上位3位は歌唱、器楽、鑑賞の順が多く、Aグループ以外はこの順番であるが、Aグループのみ歌唱、鑑賞、器楽の順となっている
- ・楽しかった授業内容の理由についてはD Fグループのみカイ自乗検定における有意差または有意傾向が見られているので、2つのグループの割合だけしか見ることはできないが、大きく3つに分かれ、その中で「友達と一緒にできるのが楽しかった。」がどちらも約40%有り、友達との関わりの中で音楽を楽しんでいることがわかる。
- ・適切な指導を受けられなかった学習内容ではA Bグループについて有意差が現れなかったためC D E Fグループについての共通の特徴であるが、一番明確なことは楽譜に対する指導の不適切さである。約35%以上の数値が各グループともに見られる。

(3) 回答者数に対する割合の表をもとに

(41番・43番)

以下の二つの調査項目は解答形式が該当する内容を全て選び出す方法により行った。各グループ間の回答者数及び回答数等が大きく異なるため、(1)で行った「平均値による比較」や(2)の「グループ内を100%とした割合によるグループ間の比較」などの分析方法は不相当と考える。そこで、それぞれの解答がそのグループの回答者数の何%に当たるかに換算することにより数値の条件を揃えることにより各グループ間の比較を行った。

以下の表の左側は実測数を示しており、右側の表は回答者数に対して何%に当たるかを換算した表である。

表8

41番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
歌唱	21	22	105	152	65	73	438
器楽	9	11	88	144	56	59	367
鑑賞	9	9	61	117	51	52	299
ふしづくり	3	1	11	28	7	5	55
音符など	8	11	60	101	45	54	279
計	50	54	325	542	224	243	1438

41番 小学校で経験した学習領域 (%)

	A	B	C	D	E	F
歌唱	95.5	95.7	90.5	90.5	95.6	94.8
器楽	41.0	47.8	75.9	85.7	82.4	76.6
鑑賞	40.9	39.1	52.6	69.9	75	67.5
ふしづくり	13.6	4.3	9.5	16.7	10.3	6.5
音符など	36.4	47.8	51.7	60.1	66.2	70.1
計	227.4	234.7	280.2	322.9	329.5	315.5
回答者数	22人	23人	116人	168人	68人	77人

(回答者数に対する%)

43番 実測数(人)

	A	B	C	D	E	F	計
ハモニカ	16	22	106	157	64	62	427
鍵盤ハモニカ	1	1	7	38	41	31	119
オルガン	6	4	38	86	36	22	192
オーディオ	1	2	15	32	21	17	88
リコーダー	1	2	67	132	53	59	314
木琴類	14	18	84	121	46	48	331
打楽器	3	8	40	50	25	14	140
計	42	57	357	616	286	253	1611

43番 小学校で体験した楽器の種類 (%)

	A	B	C	D	E	F
ハモニカ	61.5	88.0	84.8	91.8	90.1	79.5
鍵盤ハモニカ	3.8	4	5.6	22.2	57.7	39.7
オルガン	23.1	16	30.4	50.3	50.7	28.2
オーディオ	3.8	8	12.0	18.7	29.6	21.3
リコーダー	3.8	8	53.6	77.2	74.6	75.6
木琴類	53.8	72	67.2	70.8	64.8	61.5
打楽器	11.5	32	32	29.2	35.2	17.9
計	161.3	228	286	360.2	402.7	323.7
回答者数	26人	25人	125人	171人	71人	78人

(回答者数に対する%)

なお、このデータに関しては今まで行ってきた各種の検定はなじまないことと複雑さを伴うためこれらの項目では生のデータからわかることのみを分析・考察していきたいと考える。また、この2つ(41番・43番)の調査項目のみ、当てはまるもの全てを解答する形式をとっているが集計した解答例を見てみると一項目のみの解答も多くあり、選んで解答している様子もうかがえることを考慮しておきたい。

【 4 1 番 小学校で経験した学習領域の表から 】

- ・歌唱については全てのグループで 90%以上の数值があり学習内容の保証がみうけられる。
- ・器楽については、A ~ Dまでは41 ~ 85.7%に徐々に増加し、その後はFグループの76.6%へと減少している。
- ・鑑賞についてはAの40.9%からEグループの75%まで増加し、Fでは少々の減少が見られる。
- ・ふしづくりについては最高のグループでも 16.7%で定着が困難であることを表している。
- ・音符などの学習についてはAグループ36.4%からFグループの70.1%まで平均して伸びていることがわかる。

【 4 3 番 小学校で体験した楽器の種類を表から 】

- ・ハーモニカについては殆どの年代が85%以上であるがAグループ61.5%・Fグループ79.5%と2グループのみ低い値を示しているがAグループの時代は、戦後間もなくのため経済的にも無理があり、持ち寄っての授業であったことが背景にある。またFグループでは鍵盤ハーモニカとの選択で1楽器の学習の傾向が広まり、両方購入する学校が少なくなったためと考えられる。
- ・鍵盤ハーモニカについてはCグループが5.6%でその後Eグループの57.7%にまで上がっているが、Fグループでは39.7%に止まっている。これはハーモニカの減少と同様で低学年の楽器が一つに絞られたためであると考えられる。
- ・オルガンではBグループの16%からEグループの50.7%まで伸びているが、Fグループでは下降している。
- ・アコーディオンは一番多いEの年代においても約30%であるように一部の体験者に止まっている。
- ・リコーダーはDグループ以降は個人持ちで購入したためほぼ全員が経験していると考えられるが、「縦笛・笛」の名称を使用して学習していたため正式な名称の理解が不十分であったり、アンケートの記入方法の理解不足ため低位の解答となってしまった面もあると考えられる。
- ・木琴類は常に60%台から70%台を占めており広範囲な年代の指導の広がりを思わせている。
- ・打楽器はカスタネットやトライアングル等小物については個人持ち或いは教室保管等で数多く整備されており、もっと数值が高まると考えていたが、太鼓類やシンバル等大きな物をイメージして捉えている回答者もあり、この件については信頼性はやや低いと考える。

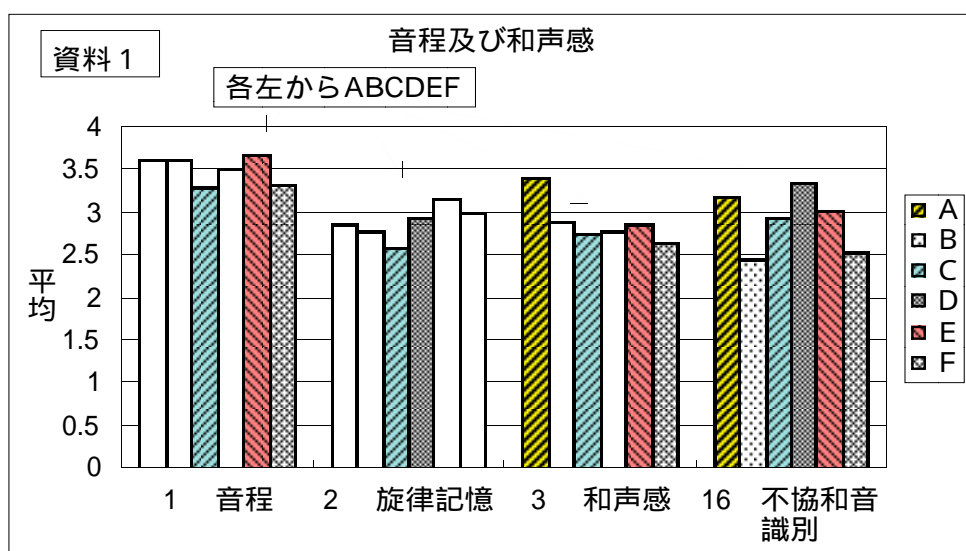
第4章 考察

この章においては、第3章により有意差の見られたグループ間の分析を中心に、調査項目毎の各グループの平均の値をグラフを用いて比較すること、また複数の選択肢により得た回答については、割合を表したグラフを用いて比較をすることにより考察を進める。

第1節 各項目別グラフからの考察

(1) 平均の差のグラフをもとに(1～31番・38番)

音程及び和声感



(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

資料1は項目別に各グループの平均を比較したグラフである。

1の項目のA B D及び2の項目のA B E F他白抜きのグラフは有意差が現れなかったものを示しているなのでここでは凡例の柄のあるものを中心に考察を加えたい。

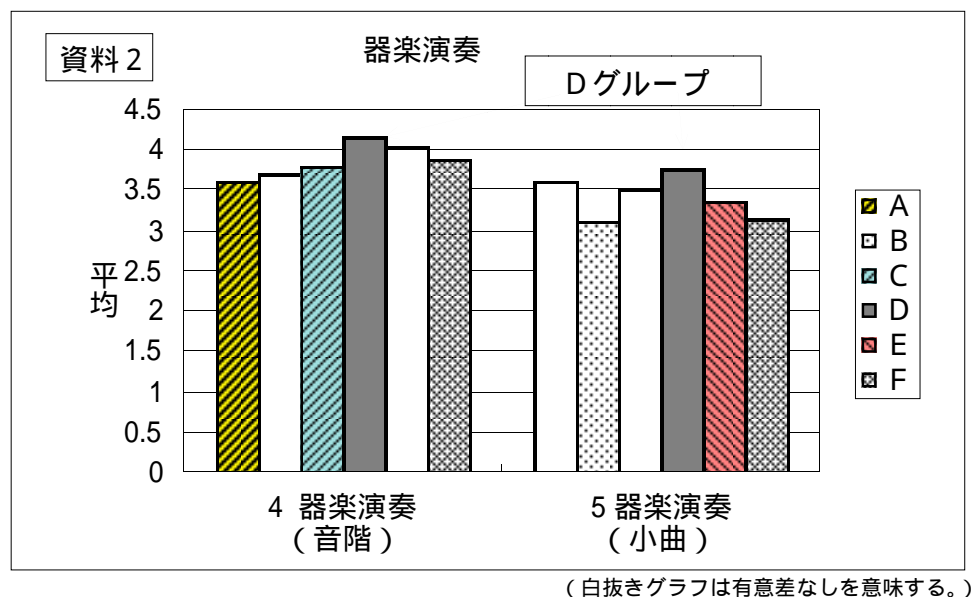
項目1「正しい音程で歌う」ではC E及びE Fの関係において有意差が見られ、C FはEと比較すると劣っている。

2「聴いた旋律を覚えて歌う」・3「他のパートにつられずに歌う」の項目は1に比べ各グループともに落ち込んでいるが2の旋律記憶力はCよりもDの方が優れているといえる。また3の「他のパートにつられずに歌う力」はAがC E Fよりも高い結果となっているが楽器も十分にそ

るわない中で歌唱中心の授業の時代であったが、そのことと上のグラフの表す結果が関連するかどうかについては、今後も考察を続けていきたい。

16「不協和音識別」については、AとBF・BとACDE・CとBDF・DとBCF・EとBF・FとACDEのグループ間での有意差が見られる。ここではD、続いてAが高い結果となっている。これは1・2・3の項目が歌唱を中心とした内容であることに対して、16は旋律と伴奏が合っていないことを聴いて識別する事であり、主要3和音の聞き分け、聞き取りなど基礎的な学習が抽出されて行われていた時代と関連していると思われる。また、その反対に、BFが2.5の値の通り、かなり低い結果となっている。音の響き合いを楽しんだり、和音の美しさを味わう基礎となる力が不十分であると考えられる。

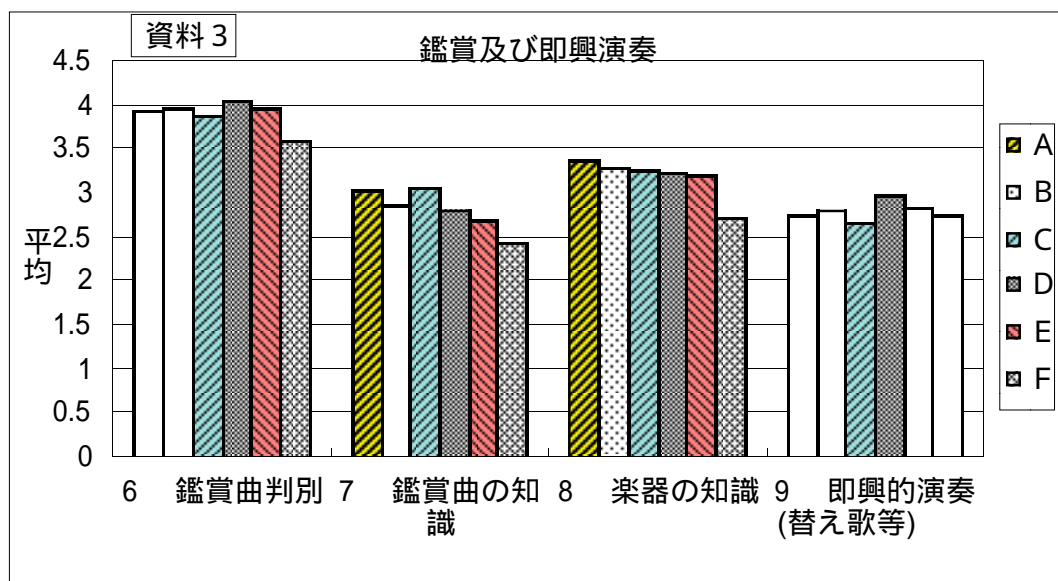
器楽演奏



資料2では4・5項目とも、概ね山形を描き同型をしているが項目5については全体的に数値は低くなっている。共通していえることはDグループが頂点となりEFは下降していることである。Dグループの受けた時代の学校教育は、各教科において基礎的・基本的な学習内容の到達を目指し徹底的な繰り返し学習が行われたことが、特徴の一つに揚げられ、その効果がここで現れていると考えられるが、このことが音楽科として好ましいことかどうかは判断することは出来な

い。しかし、小学校の音楽科教育のみの経験において、一つの楽器を殆どの人が音階を吹き、小曲が演奏できるまでに達したことは大きな成果であるとする。

鑑賞及び即興演奏



(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

資料3において考察するに当たって有意差を確認しておきたい。

6ではFとC D Eにおいて、7ではFとA C Dにおいて、またCとEの間で有意差が見られる。8はA B C D EがFに対して、9ではC D間で有意差が見られる。

以上のことから各項目に於いてFが低い位置にあることがわかった。

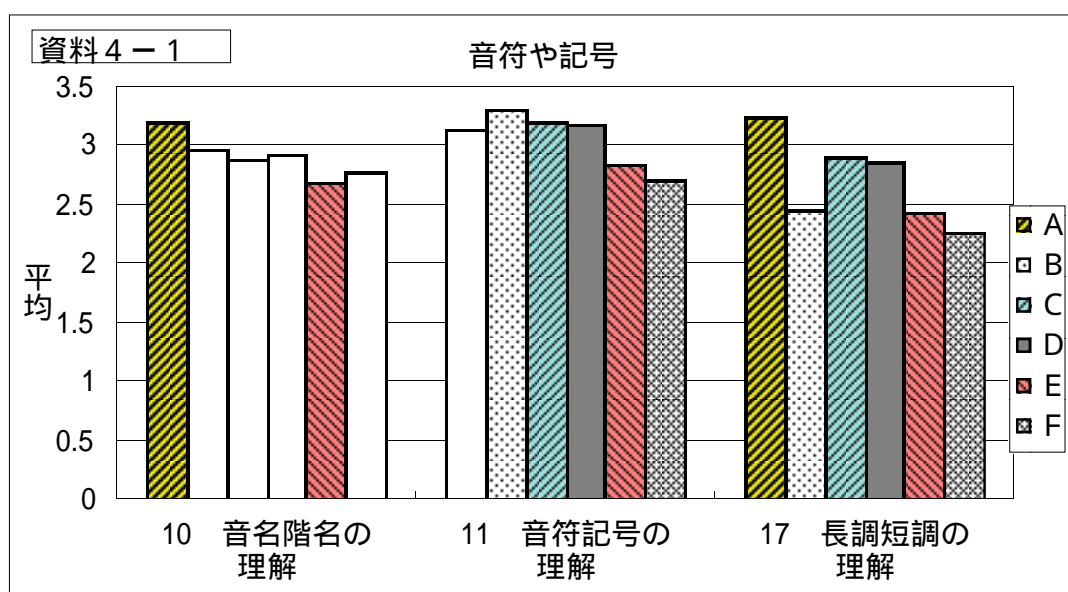
また、項目6 7 8 9について見た場合、6の鑑賞曲判別はどのグループも高い数値を示しているが7 8 9は6と比較するとかなりの落差が見られる。特に7と9は大きく下回っている。

6で、鑑賞曲を聴き学習した曲であるとわかっていても7の曲名や作曲者の知識となると忘れてしまっているのが実態と考えられる。7の鑑賞曲の知識のグラフでは年齢が若くなるほど下がっているがこれは単に年月を経て記憶内容が減少すると考えると逆の傾斜となるはずであるのに対して、一番若い世代のFグループが低いのは、明らかに学習内容や授業の進め方と関連していると思われる。

9の即興演奏は年代によって学習の有無や内容の違い等があり一概には比較は出来ないが、ど

のグループにおいても「出来にくい」という解答が多く見られる。またこの分野は平成元年度改訂の学習指導要領により盛り込まれた「つくって表現する活動」としてFグループ以降に新しい学習内容として大きく注目されているため追跡調査が必要である。更にFグループの特徴としては、多くの項目において他のグループから大きく引き離されている点が揚げられるが、現在の音楽科教育につながりを持つ世代であることを考えると、大変気になるところである。

音符や記号の理解及び続譜・記譜



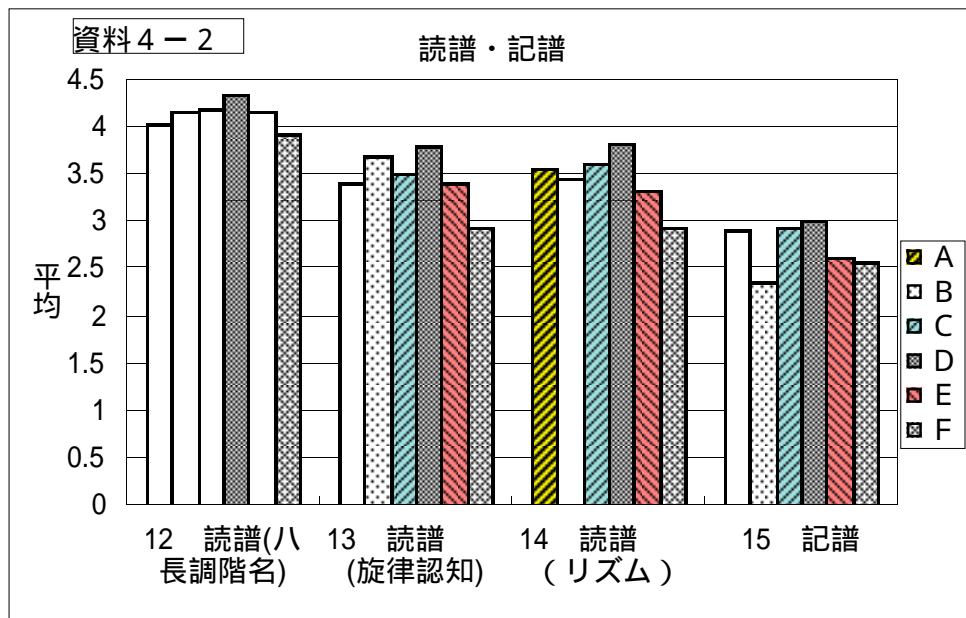
(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

資料4では楽典についての項目をまとめて考察したい。

まず、資料4-1では、「音符や記号」についての約束事が理解できているかどうかについてであるが、項目10での有意差が見られるグループ間はA Eであり、AはEよりも優れているといえる。

11ではB C DとE F間に有意差が見られ、B C DはE Fよりも高いといえる。

17ではAとB E・CとE・DとE F・EとA C Dのグループ間に有意差が見られる。つまりAはB Eより高く、CはEより高い。またDはE Fよりも高く、EはA C Dよりも低いことがわかる。3項目共通していることはE Fが下降していることである。



(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

資料 4 - 2 は読譜・記譜に関する能力のグループ毎の平均値の比較である。

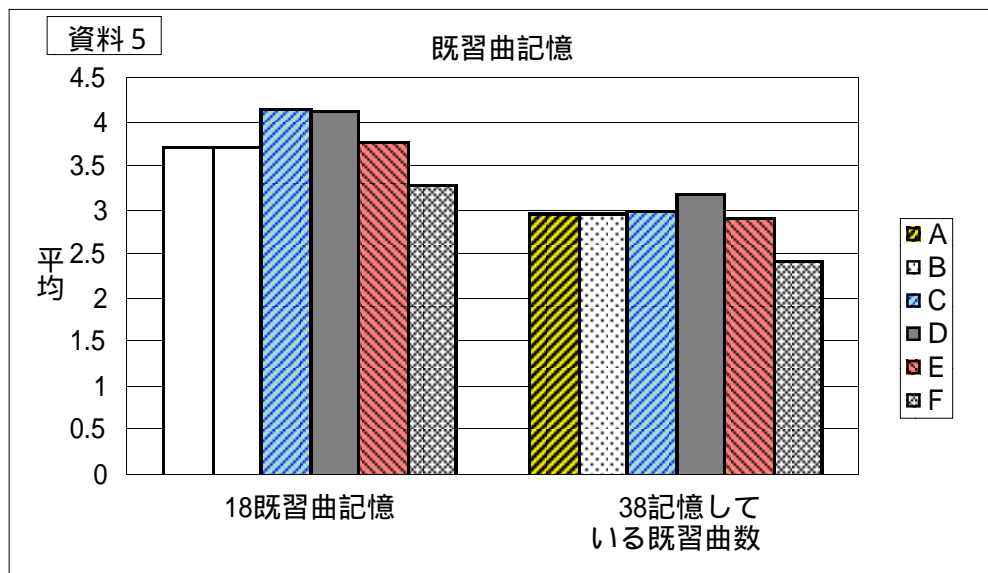
12 の八長調の読譜では、D F 間のみ有意差が見られることから D グループの平均は F グループの平均よりも高いといえる。

13 の楽譜を見てどんな旋律かをイメージする「旋律認知」の能力については、B C D が F に対して優位であるという意味での有意差が見られる。さらに D E 間にも有意差が見られ、D は E より優れているといえる。

14 の楽譜からリズムを読みとることについては、A C D と F 間・D と E 間とに有意差が見られ、A C D は F より高く、D は E よりも高いことがわかる。

15 の知っている簡単な旋律を記譜することについては A 以外のグループ間に有意差が見られ、B F は C D よりも低く、さらに D は E よりも高い結果を示している。

既習曲記憶



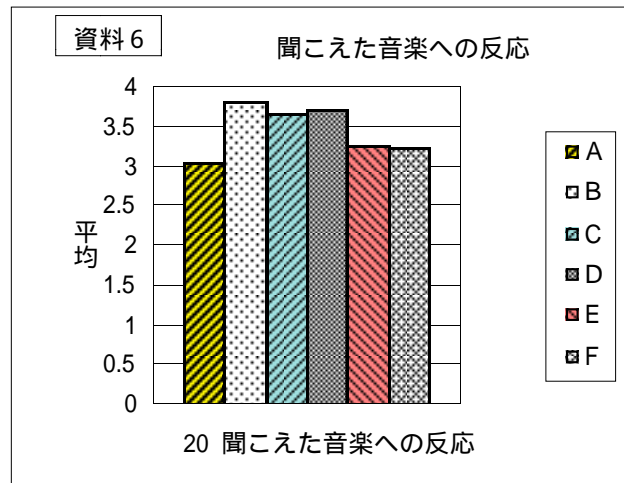
(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

既習曲をどのくらい記憶しているかについての調査項目であるが18は、初めの旋律を聴けば思い出せるかどうか、38番は記憶している既習曲数についての調査である。

まず18についてはC DとE F間について有意差が見られC DグループはE Fグループよりも高く平均値が4ということは初めの旋律を聴けばほぼ思い出せると考えて良い。またEグループはFグループよりも高く、FはC D Eグループよりも低いといえる。

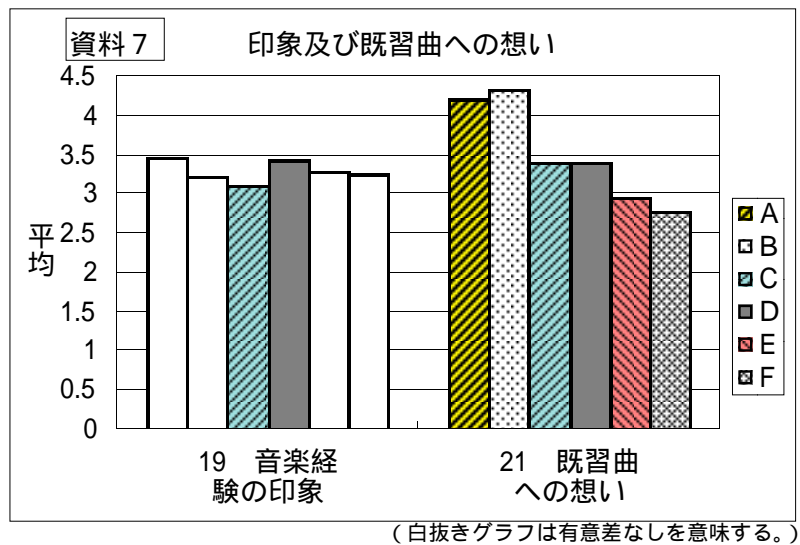
38についても、Fグループにおいては18番同様の傾向が見られ、どのグループよりも低い結果となっているが、一番若い年代にあり学習してからの時間的経過も各グループと比較すれば一番有利な条件にありながらこの結果が見られるのは学習内容や指導方法と関係するのではないだろうか。

聞こえた音楽への反応



20、聞こえた音楽への反応については、BCDグループはAEFグループより優れているといえるがポップスやロックを好み体全体で音楽を楽しんでいる若者達が多く見られる中で意外な結果であった。彼らにとって能動的に聴こうとする音楽と外から自然に耳に入る音楽とは受けとめ方や楽しみ方が異なっているのではないだろうか。

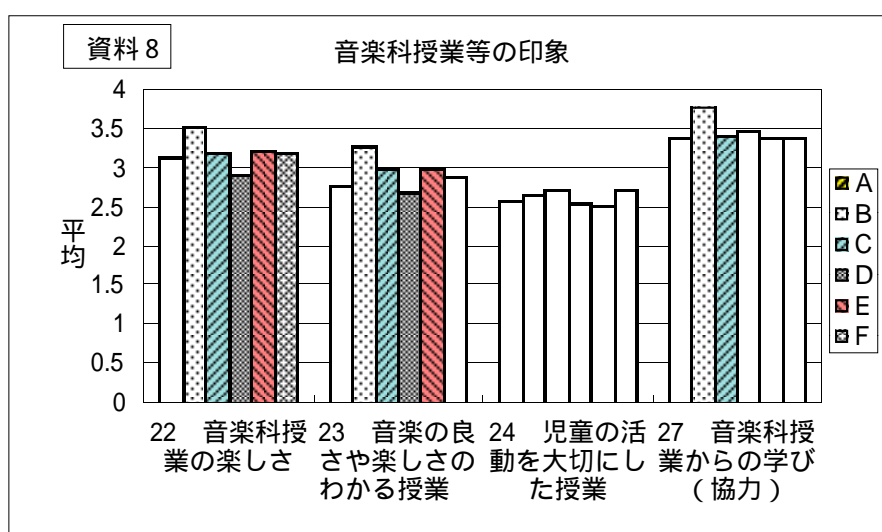
音楽経験の印象及び既習曲への想い



19の音楽経験の印象が残っているかどうかについては、CD間に有意差が見られる。従ってCはDよりも小学校での音楽経験の印象が強く残っているといえる。

21の既習曲への想いは自然や季節の中で既習曲を思い出し、なつかしく感じたりするかどうかについての調査であるが、ABはCDEFよりも高く、EFはABよりも低い結果が出ている。またCDはEFよりも高いがABよりも低く、全体から見て中間的な位置を占めているといえる。

音楽科授業の等の印象



(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

22、音楽科授業の楽しさについてはBCDEFはDより高く、DはBCDEFより低い。Dグループの平均値が3に達していないということは平均すると楽しくなかった方にやや傾いていると考えられる。

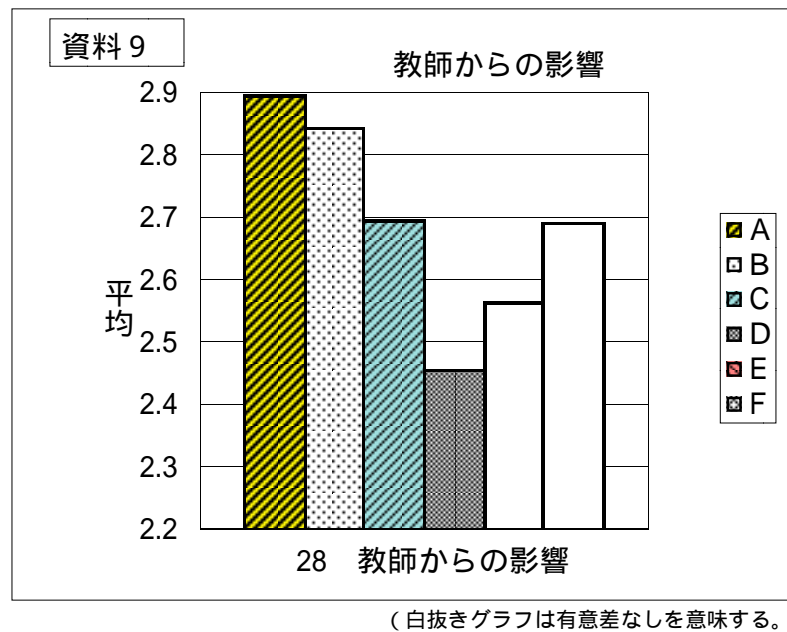
23、音楽の良さや楽しさのわかる授業での有意差は、BCDE間に見られた。このことからBCDEはDと比較すると楽しさや良さを味わって学習することができ、DはBCDEよりも楽しさや良さのわかる音楽科授業を味わう経験が少なかったと考えられる。

24の児童の活動を大切にしました授業については、全く有意差が見られなかったためこれについての考察は不可能でありここでは除外したい。

27、音楽科授業を通して協力の喜びや大切さを学ぶことができたかどうかについては、BCのグループ間で有意差が見られ、Bが高くCが低い結果を示している。この項目については全

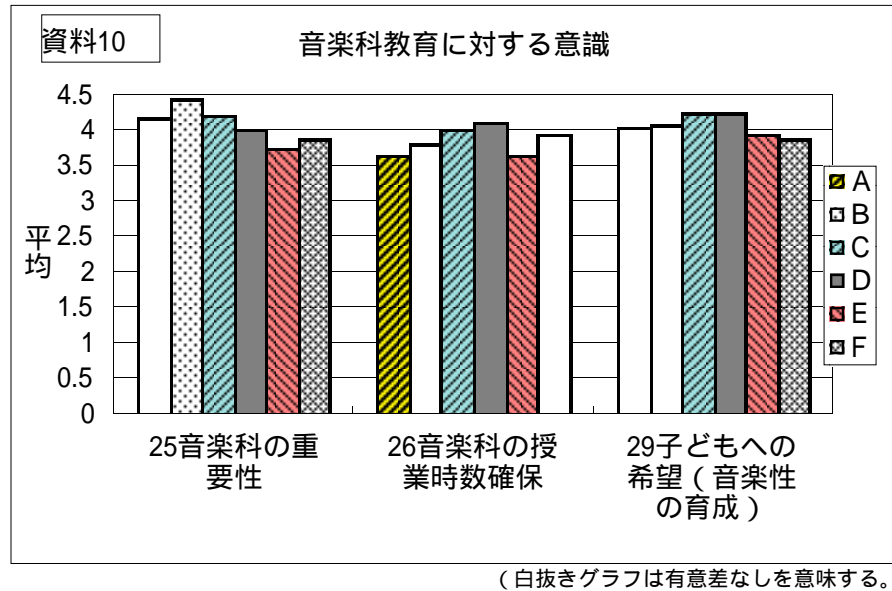
体的に高い数値を示しており、どのグループにおいても音楽活動を通して友達と励まし合い高め合うような経験を得ることができたと考えられる。

教師からの影響



28、教師から影響を受けて音楽が好きになったかどうかについてはA B C Dのグループ間に有意差が見られた。つまり、Dが一番低く、A B CはDよりも高い。しかし数値的に見ると最高のAグループにおいても3に満たず、Dでは2.5以下となっており教師を通しての良い出会いは少なかったようである。

音楽科教育に対する意識



25、音楽科の重要性(小学校の音楽の学習は心を豊かにするために大切である。)についてはAグループ以外の関わりの中で有意差が見られ、DグループはBより、E FグループはBCより低い結果を示している。またBグループはDE Fより、CグループはEFより高くなっている。全般的に各グループとも平均値が高く3.7～4.4を占めている。このことは全ての年代の人間がほぼそういった考えをもっており、音楽科の目標が音楽的な力を伸ばすことだけでなく、心の教育にも働きかけていることを認識しているといえる。

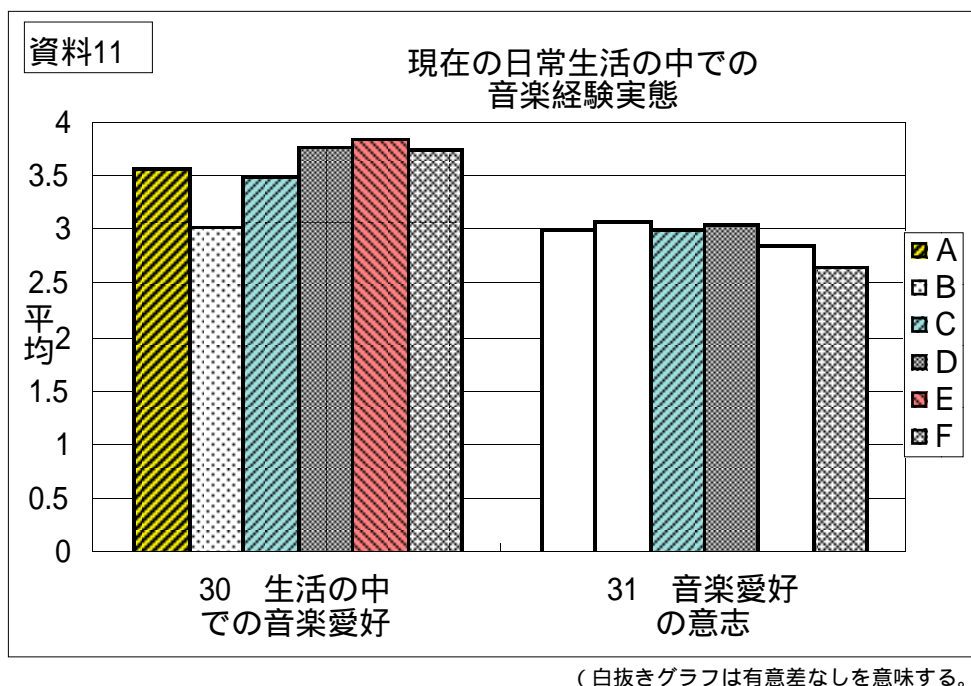
26、音楽科の授業時数確保では、音楽科の授業時数が削減されない方が良いと考えているかどうかについての数値であるが、25番と同じく総合的に高い数値を表している。その中でACDEのグループ間に有意差が見られ、CDはAEよりも数値が高く音楽科の授業時数を確保したいと考えているといえる。

29、子どもや家族への希望(音楽を楽しむ人になってほしいと考えている。)についても比較的に高い平均値を示しているがEFグループと比較してCDグループがよりその傾向が強いといえる。

以上の3項目についての共通点は音楽科の教科としての意味とその重要性に対する認識を調べたものであるがこれらの項目についてはあまり格差は見られず全体的に高得点であることが揚

げられる。受験戦争が問題視されている教育情勢の中で心をどう育てるかについて誰しも関心のあることがうかがえる。

現在の日常生活の中での音楽経験実態



30 生活の中での音楽愛好の実態としては、A C D E FのグループはBよりも高く、逆にBグループはA C D E Fよりも低いという関係において有意差が見られる。更に加えてC D E F間にも有意差が見られ、CグループはD Eより低く逆にD EグループはCよりも高い。つまり、Bは他のグループと比較して大きく下回っており、次にCグループがD Eとの関係において低い値を出しているがどちらにしても、Bグループ以外は何らかの方法で音楽を愛好している様子が見られる。

31 音楽を今後愛好しようとする意志の有無についてはC D Fにおいて有意差が見られ、C DはFよりも高い。逆にFはC Dよりも数値が低く、2.7に止まっているということは今後も余り音楽を経験しようとする意志は少ないと考えられる。

(2) 各項目別・グループ別の割合によるグラフをもとに

(30・31・33・35・36・39・41番～46番)

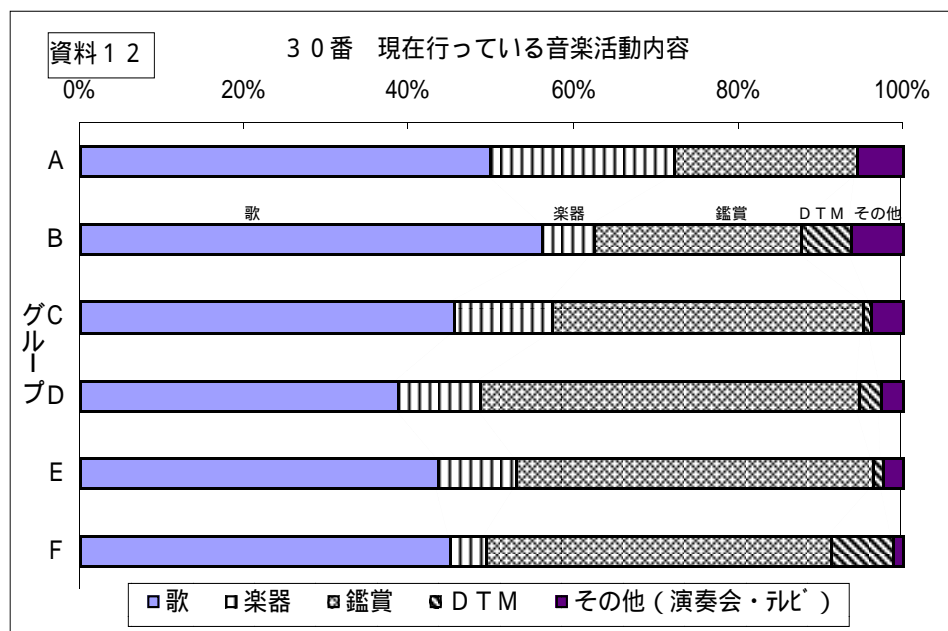
[30番 現在行っている音楽活動の内容]

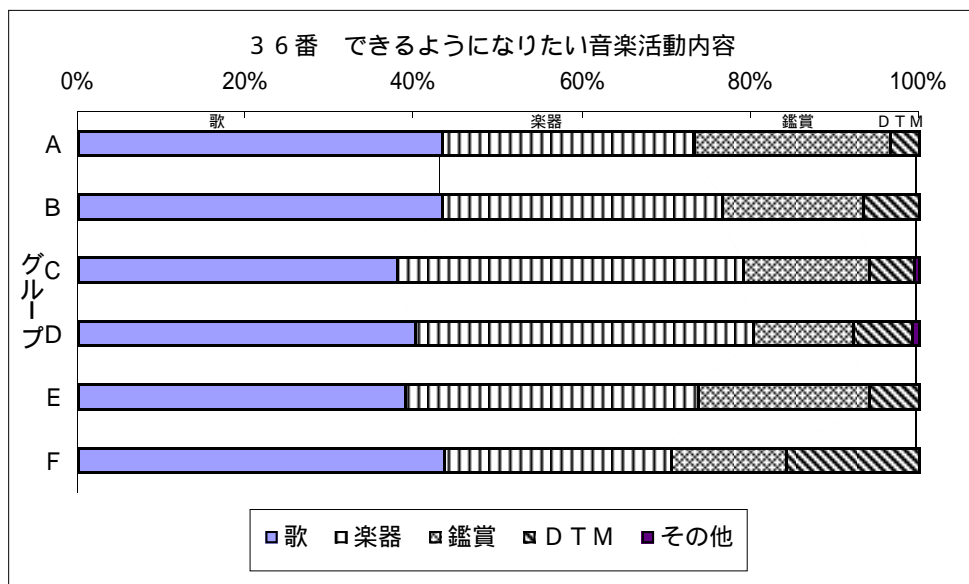
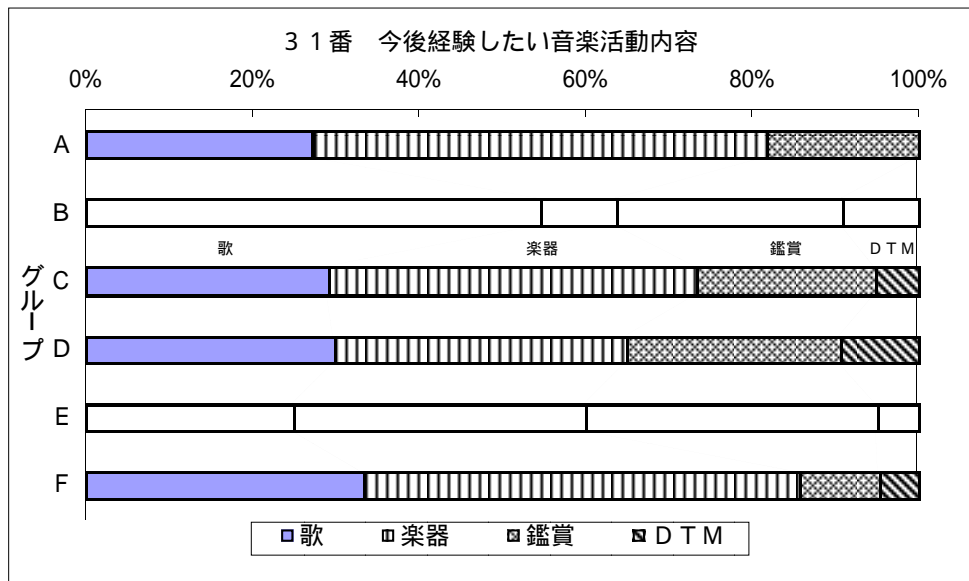
[31番 今後経験したい音楽活動の内容]

[36番 できるようになりたい音楽活動の内容]

この3つ調査項目は4つの選択肢の中から該当する内容2つを記入する形式で行った。従って解答合計は回答者数の約2倍となる。グラフ作成にあたっては、一問のみの解答や未記入による無回答など不足分を排除し総有効回答数を100%とした割合のグラフに表すこととした。つまりグラフ中の50%は全員であることに気をつけたい。尚、以下についても同解答形式による項目については同様とする。

また、30番は音楽活動を行っている人を、31番では今後音楽活動を行いたいと考えている人を対象としており、36番は回答者全員を対象としている点を考慮して考察を進めたい。





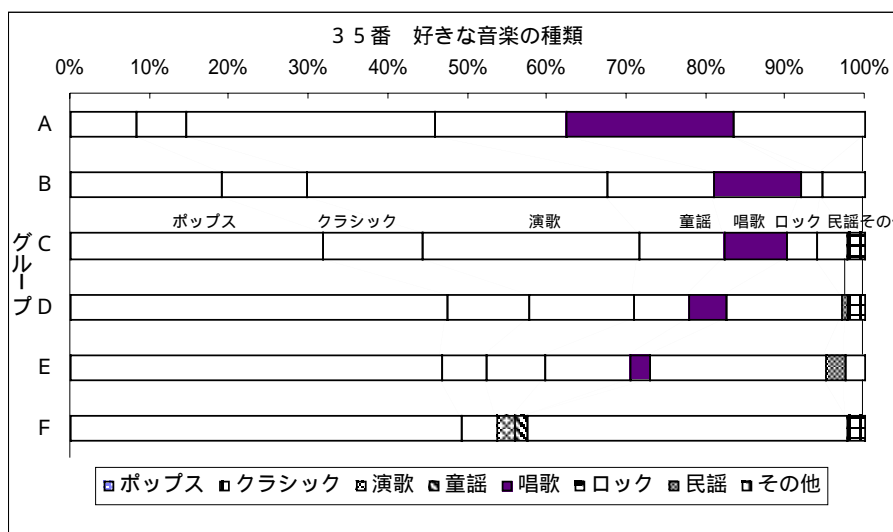
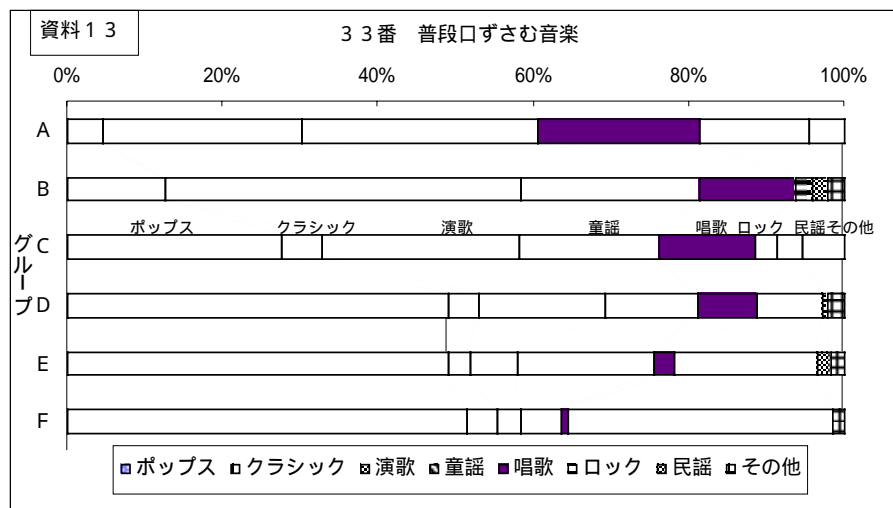
まず、30番のグラフからは不定形の増減が見られ一定の方向性を見いだすことは困難であるが各グループともに歌と鑑賞により上位2位を占めていることがわかる。31番の経験したい内

容と比較した場合、後者は楽器の割合が非常に大きくなっていることがわかる。現在は無理でも今後何らかの楽器を演奏してみたいとの思いが非常に大きく、殆どのグループにおいて最上位となっている。Bグループのみが30番とよく似た結果となり他のグループとは異なっているがこれにはカイ自乗検定の分析結果では有意差が出ていないため考察を加えることは不可能である。

また36番のグラフからは、各グループにおいて歌や楽器ができるようになりたいという希望が約70～80%あることに注目したい。成人後の生活の中で音楽と主体的な関わりをもった生活を望んでいる実態と受けとめることができるのではないだろうか。ではそれぞれの年代別グループはどんな音楽を必要としているのであろうか。33番・35番の結果から考えていきたい。

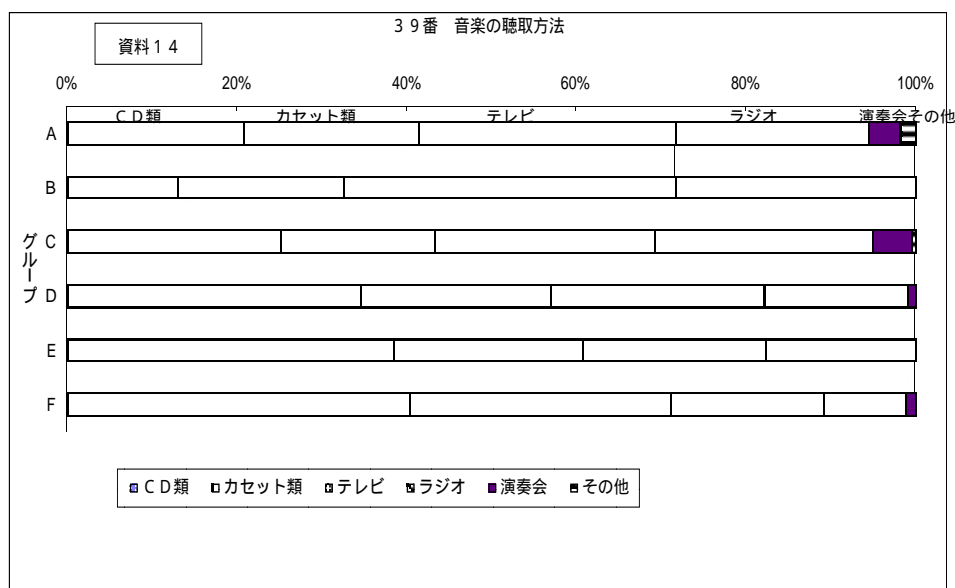
[33番 普段口ずさむ曲]

[35番 好きな音楽の種類]



質問傾向が似ていることから調査結果も良く似たものとなっていると考えられるが、共通して著しい傾向が現れていることに気付く。Aのグループは比較的バランスの良い割合を示しているのに対してFグループに近づくに従って大きな偏りが現れている。このことは、年齢を経た世代の人たちがゆったりと落ちついた音楽やなつかしい気分になる音楽を好んだり、若い世代の人たちが、ロックやポップスなど流行を楽しみエネルギッシュな音楽を愛好したりすることが、年齢の違いによることも一つの要因と考えられるが、過ごしてきた時代的背景が、グループ間によって大きく異なること、また社会情勢や教育環境も大きく変化していること等を考えると、その要因を焦点化するには無理がある。しかし、このFグループのロックとポップスを合わせて80%以上という実態から、現在の若い世代が今後どのような音楽経験を重ねて行くのだろうか不安が感じられる。

[39番 音楽の鑑賞方法]



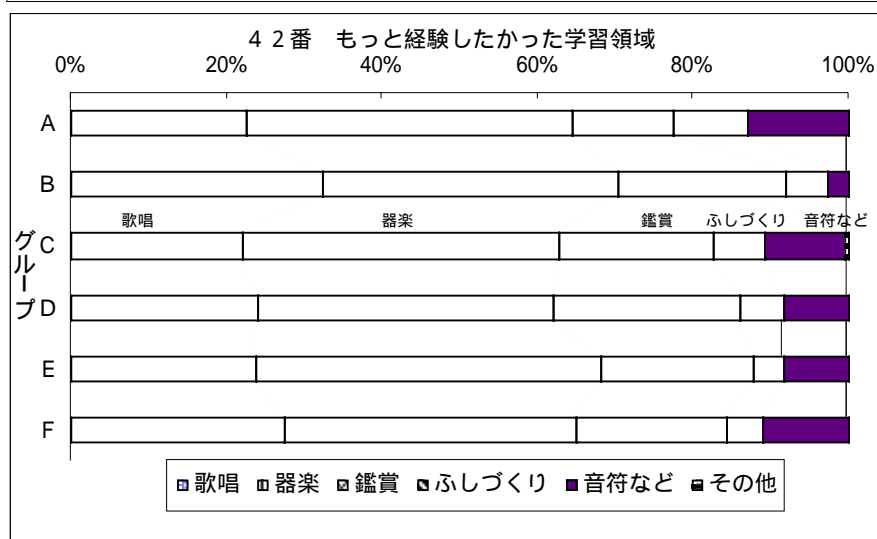
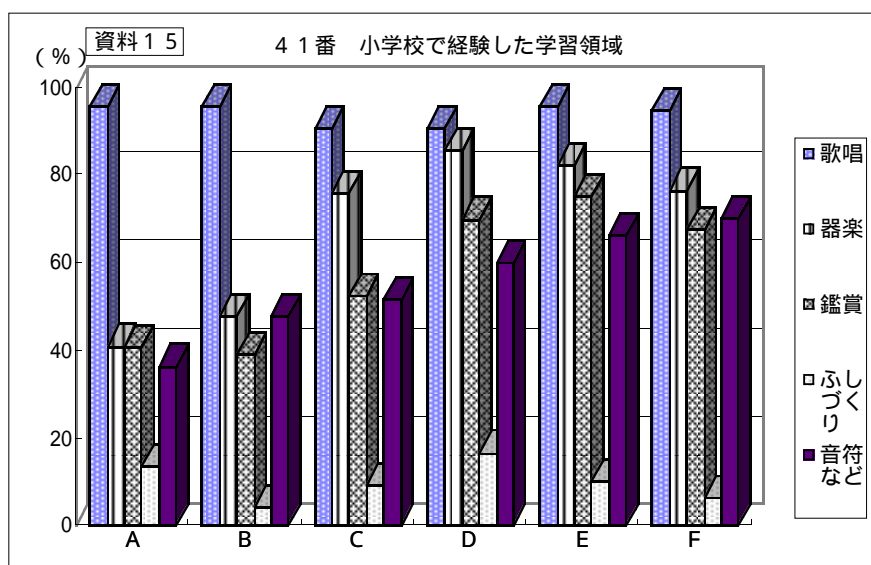
この質問項目は音楽をどのようにして聴いているかを調べたものである。より良い音色で味わって聴くためにはCDやカセット等のオーディオ機器が必要と考えるが、A B Cの各グループにおいては両方合わせて40%前後となっており、逆にテレビとラジオの合計比率が50%以上と大きくなっている。特にBグループではCDとカセットの計は約30%でテレビとラジオの計は70%近くとなっている。一方D E Fグループでは、CD・カセットともにCからFに向かって大きな伸びが現れている。特にFではBと比較すると逆転していることがわかる。CDラジカセやカ

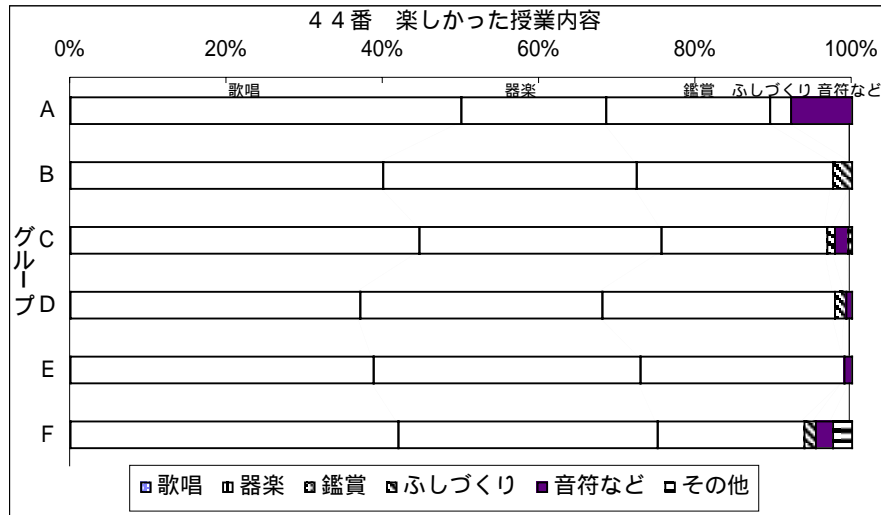
セットテープレコーダーが殆どの家庭においてもほぼ一般化されており家庭の生活レベルがこの差を作っているとは考えにくくむしろ、新しい機器に対する操作のわずらわしさから使用に慣れているテレビやラジオでの聴取が多くなると考えるが、テレビには画像による楽しみ方もあること、またテレビやラジオでは聴くための音楽CDやカセットテープなどを別に購入しなくてもよく、経済的な利点も有るため一概にはいえない。いずれにしても、若い世代になるほどCDカセットの使用が増加しており、既製の番組で構成されるものの中から選んで聴くことよりも自分の嗜好にあったものを、より音楽的な環境の中で味わおうとする傾向にあると考えられる。

[4 1 番 小学校で経験した学習領域]

[4 2 番 小学校でもっと経験したかった学習領域]

[4 4 番 楽しかった授業内容]





分析方法及びグラフ作成基準は前記までと同様であるが、4 1 番については小学校での全ての学習内容を調べる目的で該当内容を全部記入する形式で行っているため、分析方法は、次の通りとする。回答者数が A ~ F グループともに異なることから、比較する方法として回答者数に対する割合でグラフを作成する。

4 1 番のグラフからは歌唱がどのグループにおいても大きく取り扱われており音楽科の重要な部分を占めることは周知のことであるが、戦後学習領域として新しく加わった他の学習内容について考えてみたい。音楽室の楽器不足の深刻さが残っている中で新しい学習領域としての器楽学習であったが、A B グループの年代から早くも器楽教育はスタートしている。この年代では簡単なリズム楽器及びハーモニカ・木琴等の旋律楽器による器楽指導が行われていたが、現在のように個人持ちで全国全ての学校で行われていたわけではなく、学校や地域の事情に合わせて取り組まれており、地域や学校間での格差が大きかったと考えられる。しかし、リズムバンドやリズム合奏と呼ばれる打楽器中心の合奏にも力を入れる等当時の教師の意気込みは大変なものであった。木琴やハーモニカ等が個人持ちになるのは C グループの頃からであり、器楽の一斉指導が行われるようになった。昭和 3 3 年度の学習指導要領には縦笛が旋律楽器として従来の木琴に加えられ、4 年生から個人持ちで導入されたが D グループの時には 3 年生の器楽の学習内容となっており、合奏の編成も発展してきている。このことは、グラフからも C D グループの器楽の割合の増加によってうかがうことができる。

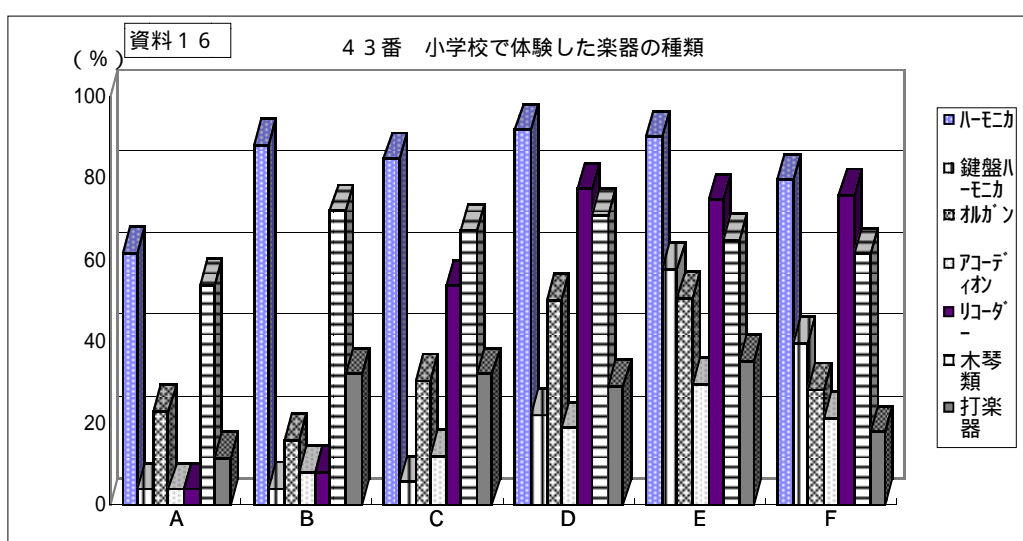
全体的には歌唱・器楽・鑑賞・音符や記号の学習など一定の割合で新しい音楽教育の開始時から定着しており、徐々に発展してきていることがわかるが、ふしづくりの学習についてはさまざま

まな取り組みがなされている中で10%以上に伸びないのは教師自身の指導法が未だに明確でないことが原因ではないだろうか。学級担任として音楽を専門としていない教師の悩みがこの結果から感じられる。

4 2 番のグラフからは、全てのグループが器楽の学習をより多く希望していることが顕著に現れており、器楽学習が子ども達にとって大きな魅力であると考ええる。[3 1 番 今後経験したい音楽活動の内容]とも関連していると思われるが、このことを授業の中でも留意しておきたい。時間的な配当は別としても子ども達が器楽学習への興味や関心を強く持っていることが授業の展開に生かされるべきである。

[4 4 番 楽しかった授業内容]のグラフでふしづくりや音符や記号の学習の落ち込みが明確に現れており、他の学習領域と比べて、非常に小さい数値となっている。さらに注目すべき点は冒頭で述べている通り、昭和33年度及び43年度の学習指導要領では各教科とも基礎的基本的事項の定着を大切にした学習内容となり、音楽科も「基礎」の項目が盛り込まれている。しかし、この結果を見る限りでは、音楽を楽しみながら「基礎」を感得するという意味では、十分な成果とはなっていないと考えられる。どの学習内容も音楽を主体的に楽しみ、生涯教育を目指す意味において重要な内容であるため指導の仕方についてももう一度考えていく必要がある。

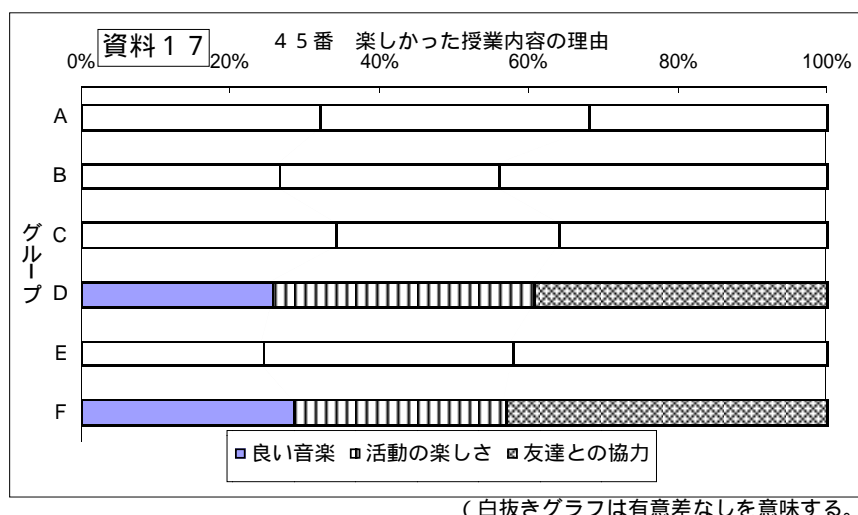
[4 3 番 小学校で体験した楽器の種類]



この調査項目も該当項目全てを解答する形式であるため、集計整理は41番と同様の扱いとし、各楽器とも回答者数に対する割合でグラフに表した。

Aグループは学習領域として初めて器楽学習が導入された年代であるが、ハーモニカが61.5%と比較的高い割合となっている。ハーモニカは戦時中から国民の生活の中で愛好されており家庭の中にあつたという時代背景があり、教育楽器が整備されていない中で、持ち寄りで学習したと考えられる。また学用品購入に対する家庭環境の整っていない時代ではあつたがAグループの時から木琴が普及しているのがわかる。これは、ハーモニカに先駆けて木琴が教育楽器として広まっていったからであるがこのころの木琴は簡単な卓上用のものでありピッチもそろわないものであつたが、学校や家庭の事情に合わせて個人持ちへと広がっていった。さらに昭和33年度の学習指導要領改訂以降ハーモニカ・木琴・リコーダー（縦笛）・鍵盤ハーモニカへと教育楽器が開発され、器楽学習が発展していくことになるが、それには日本の楽器産業の発展と密接な関係がある。EFグループでハーモニカの割合が下がっているがこれは、鍵盤ハーモニカがハーモニカに替わって低学年の学習楽器となったためである。昭和33年以降、音楽の基礎的内容として読譜や記譜、リズムなど楽典の初歩を系統的に学習するためには鍵盤楽器は最適な楽器と考えられ、一年生からの導入が計画された。しかし、価格の問題もあり各家庭や学校の事情によりハーモニカを使用する学校と鍵盤ハーモニカを使用する学校、また両方学習する学校など不揃いな状態が続いた後、52年以降は殆どの場合、一年生で鍵盤ハーモニカを学習するようになった。意外なことに、このデータに見る限りではFグループの鍵盤ハーモニカの学習率が減少しているがこれについて考察することは困難である。わかることはハーモニカと鍵盤ハーモニカの両方を学習していたEグループの時代からFグループの時代には、はっきりと1楽器を指定しての学習に移行していったことである。

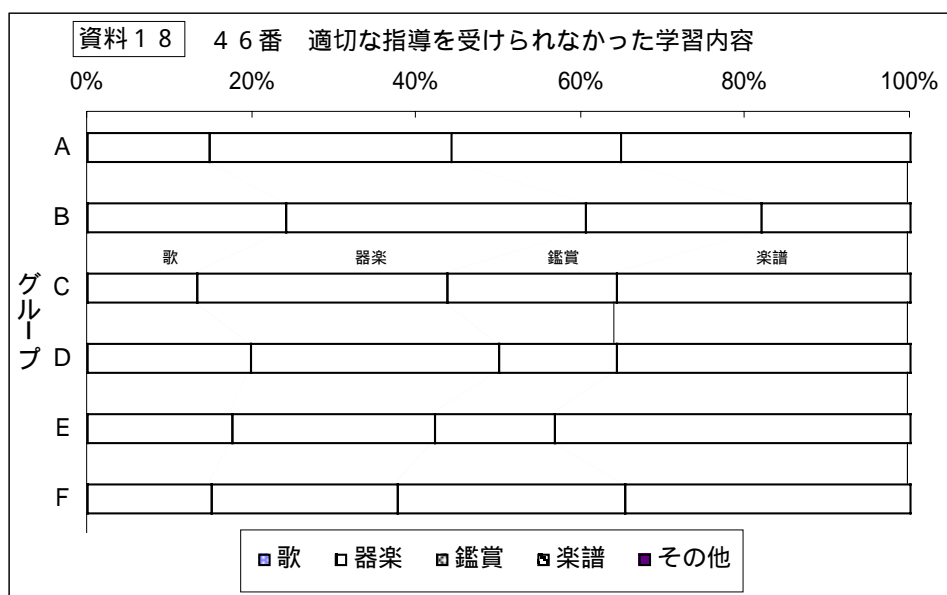
[45番 楽しかった授業内容の理由]



6グループ中2グループのみ有意差が見られる結果であるため考察はできにくい、「良い音楽への出会い・活動の楽しさ・友達との協力の喜び」の3項目についてそれぞれ適度な割合を占めていると思われる。芸術教育としての意味においては、音楽の良さを味わい音楽活動そのものの楽しさを体験させたいと考えるが、学校教育の場という意味では、友達とのさまざまな関わりの中で体験し成長する教科でもあると考えることから、有意差の見られたDFグループの割合は妥当である。

学校での音楽教育ではこのことを生かしながら授業の組み立てを熟慮しなければならないことをこの項目では示唆している。

[46番 適切な指導を受けられなかった学習内容]



(白抜きグラフは有意差なしを意味する。)

アンケート回答の中には、「全く指導がなかった」とか「ただ歌っていただけ」など厳しい意見の回答も含まれていた。専科制をとっていないところでは学級担任が全ての教科を指導するため、かなり厳しい意見であると受けとめるが、その反面、教師の中にも「音楽は苦手」と堂々と公言する者も実際にあり、他教科では教師の責任上許されない発言であるのに音楽科ではそういったことが認められてしまう現状にも問題がある。子供たちに指導する以上、他教科と同様に

また、苦手であればそれ以上に教材研究を重ねなければならないのは当然のことである。

全体からは、「楽譜の読み方の指導が適切でなかった。」との回答が大きな割合を占めている。このことを、もう一度44番で考えたい。読譜や記譜などの授業内容は確かに他の学習内容と比較して楽しいものではないかも知れない。しかし46番の結果から、適切な指導を受けられなかったことが原因の一つであることもこの結果から理解しておきたい。またグループ別に見てみるとEグループが、「読譜」に関する項目で50%近くの数値が出ているがこれはほとんどの回答者が2項目中1項目に読譜指導の不適切を選んでいることになる。おそらく楽譜に対する指導があまり行われなかったか、あるいは、指導の仕方が適切でなかったと思われる。各教科では学年でそれぞれ到達すべき内容を明確にし、それに即してどの教師も定着を目指して指導を行っているのに比べ、音楽科に対してはその認識が大変薄いと考える。またそのことがEグループにおいて顕著に見られるのには何か原因があるのであろうか。昭和52年度学習指導要領が気になるところである。43年度の学習指導要領の反省から、「ゆとりと学習内容の精選」が叫ばれた時代であるが、「精選」により「基礎」の指導が不十分となったのであれば言葉のはき違えである。大切なことは「精選された内容をどのように指導するか。」であると考え。指導に当たって教師は更なる研鑽を積み重ねなければならないことをこのグラフが示しているといえるのではないだろうか。

第2節 まとめ

(1) 各グループ毎の年代による差異

以上のように各グループ毎にみられた様々な特徴及びグループ間の差異について項目内容に従い考察を加えてきたが、更に焦点化する目的で一覧表にまとめてみた。

一覧表の作成については以下の手順で行った。

- ・ t 検定での有意差の見られるものの結果を中心とする。従って音楽の嗜好の種類、学習した楽器や内容の調査、その他複数の選択肢から解答を得たデータに関するものは省略する。
- ・ 内容の分類については質問紙作成時のカテゴリー別とし、質問項目中の類似した内容はまとめて考察し、総合的に判断した。
- ・ 判定については他のグループとの比較において、優位であったものに、劣っていたものにつけ、どちらでもなかったものは空白とした。また()のついているものはややその傾向が見られたものである。

資料19

分類内容	調査項目	調査番号	A	B	C	D	E	F
音楽の基礎能力	音程・和声感	1 ~ 3 1 6						
	器楽演奏	4、5						
	鑑賞 即興演奏	6 ~ 9						
	音符・記号	1 0、1 1 1 7			() ()			
	読譜・記譜	1 2 ~ 1 5						
	既習曲記憶	1 8、3 8						
	聞こえた音楽 への反応	2 0						
経験した音楽活動 について	印象・既習曲 への想い	1 9、2 1						
	音楽科授業 の印象	2 2 ~ 2 4 2 7						
	教師からの 影響	2 8						
音楽科教育に対する意識		2 5、2 6 2 9				() ()		
現在の日常生活での音楽経験		3 0、3 1						

ここで、仮説に戻りたい。仮説は、
「成人後の音楽的行動は学齢期の音楽科教育の結果を反映している。」
であるが、これまでの調査結果および考察によりこの仮説は支持されたと考える。

資料19からわかるようにDグループ、つまり昭和43年度の学習指導要領による音楽科教育を受けた年代は音楽の基礎能力の面で他のグループと比較して一番の定着度を示している。これは、第1章第2節で述べている通り、全教科において系統的学習が押し進められ、音楽科では基礎領域が新設された学習指導要領の改訂であり、資料19の基礎能力の欄はその結果の反映とみることができる。

また、「音楽を愛好する心情」の育成を目指す目標を掲げた昭和52年度改訂の学習指導要領実施の結果、質問項目22及び23の「音楽の授業は楽しかった。」や「音楽の良さや活動する楽しさを味わいながら授業が進められた。」に対する評価は、Dグループの落ち込みの後、Eグループ、つまりこの学習指導要領での教育を受けた年代により回復を見せている。

最後に平成元年の学習指導要領によるFグループの結果であるが、「つくって表現する」という新しい学習内容である「創造的音楽学習」が全国的に熱心に研究される中で音楽の基礎能力の定着は、大変厳しい結果を表している。

学習指導要領と調査結果を一つ一つ照らし合わせ検証することはこの論文の方向性として限界があるが、以上の3つの観点から小学校の音楽科教育は学習指導要領の内容に従い、忠実に押し進められてきたことが明確となった。このことを実際の音楽科教育推進の姿として更に、「教育音楽」から追求したいと考える。

尚、Fグループについては平成元年度から5年間という期間は、取り組み時期としてやや早期すぎる面があるが、成人後の音楽行動を対象とするためそれ以後の期間では成人後の被験者のデータと期間上で食い違いが生じる危険性が考えられるので、なるべく近い期間として告示からの5年間に限定することとした。

また授業実践例の内容の比較については、掲載内容の様式が年度によって異なり、毎回提案者が変わるものや3回又は4回等、シリーズで継続した展開を掲載しているもの、また、本時の展開例のみのもものや指導計画中心のもの、あるいは題材と教材が同じものや主題を掲げてそれに対する教材を選定している形式、学年テーマ特設の有無など数々の書式の異なりが見られるため、数値の上での物理的な比較は避けることとし、読みとりからその特徴を分析することとしたい。

<昭和47年～昭和51年の実践例より>

- ・ 授業展開時における留意点の明記
- ・ 各領域の指導のポイント重視（発声の指導や器楽指導のポイント等）
- ・ 基礎的内容の確認的な授業（和音の聞き取り・旋律聴音の練習・聞き取りの記譜練習・階名唱・リズム唱やリズム打ち・鑑賞の解説やテーマの旋律の聴取等）
- ・ 教師の指導的発言や楽曲の知識を徹底する発問（何調か・何拍子か・階名は何か・何の和音か等）
- ・ 一斉指導中心
- ・ 技術指導的内容多数（美しい歌声づくり・リコーダーの指導の仕方・読譜指導や記譜指導の仕方・鑑賞指導法・旋律創作の手だて等教師の基本的な教材研究的内容）

<昭和59年から昭和63年の実践例より>

- ・ 授業の自然な流れの中で基礎的・基本的な学習内容を取り扱う指導方法
- ・ 授業の基盤として子どもが考え工夫するよう考慮された展開
- ・ 授業の重点的テーマを特設し、それを具体化する形式で執筆
- ・ リズム遊び（リズムリレー・リズム問答）身体表現等子どもたちが楽しめるよう工夫された授業
- ・ 技術面や基礎的・基本的な学習内容も多く実践されているが子どもたちの側にたった指導に移行
- ・ 一斉指導から個に焦点をあてた指導への移行（グループ学習・アンサンブル学習等学習形態の工夫）

- ・「楽しく・生き生きと」等の心情面のテーマと「基礎能力を楽しく身につける」等音楽的な能力の育成等もめあてにしたテーマが混在しどちらも重要視されている。

<平成元年から平成5年の実践例より>

- ・「つくって表現」に関する題材及び教材多数
- ・童歌や日本の音楽・世界の音楽など国際理解と関連した教材増加
- ・グループ学習やアンサンブル学習など少人数による学習形態の定着
- ・児童自らが創意工夫する学習の推進
- ・学習の進め方として音楽遊び形式で楽しむことをさらに追求
- ・「教え」から「気づき」を大切にした指導
- ・文化の伝達的な「表現」から創造性のある「自己表現」
- ・音楽物語づくりなど他教科との関連ある総合的な取り組みの開発
- ・旋律づくりは従来の音楽の要素や形式を大切にしたいものと、形式にとらわれず自由に表現するものとの大別される傾向有り
- ・表現および鑑賞ともイメージの想起やイメージづくりを重視した展開

以上がそれぞれの年代の授業実践の特徴的な内容である。こうして特徴をまとめてみると、学習指導要領と密接に関係しながら変容してきたことを明確に感じとることができる。このことを踏まえて、さらにもう一つの方向からそれぞれの年代の特徴に迫ってみたいと考える。

【各音楽教育研究会における研究テーマより】

同じく「教育音楽」から各年代毎に音楽教育研究会各ブロックや附属小学校等の研究テーマを集計し、3つのグループの特徴を調べた。

方法および手順としては、【実践授業例から】と同じ年代区分における各音楽教育研究会の研究テーマを集計し、各テーマの中で重要視されていると考えられる文言をキーワードとしてカテゴリー別に分類した。キーワード作成については、複数の重点を持つ研究テーマも多く見られたため一つに限らず複数で作成したものも含まれている。

カテゴリーの分類については選び出したキーワードをカードにしてKJ法を行い、以下の6つに分類した。

尚KJ法の実施については客観性を持たせるため複数名で行い、話し合いながら分類を進めていった。

資料20はその分類結果のカテゴリー別の集計表及び各グループ内におけるカテゴリー別の円グラフである。また円グラフ作成にあたっては全体を100%にして割合で表示する形式のものを採用した。

カテゴリーの分類

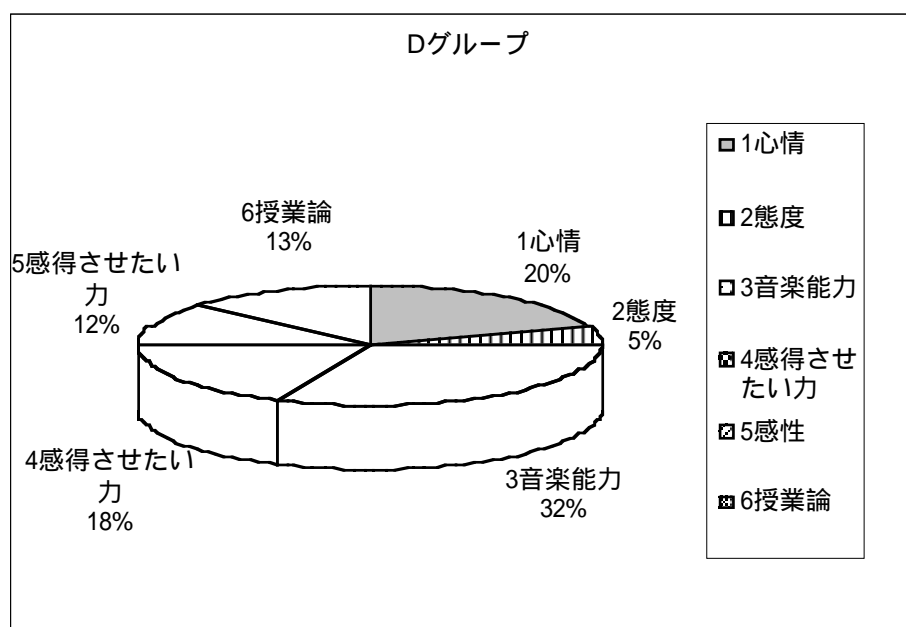
1、心情面に関するもの	2、態度面に関するもの	3、音楽的能力に関するもの
4、感得させたい力(音楽以外)に関するもの	5、感性に関するもの	6、授業論に関するもの

<昭和47年～昭和51年の研究テーマより>

資料20

Dグループ

カテゴリー	1心情	2態度	3音楽能力	4感得させたい力	5感性	6授業論
テーマ数	12	3	19	11	7	8
割合(%)	20	5	32	18	12	13



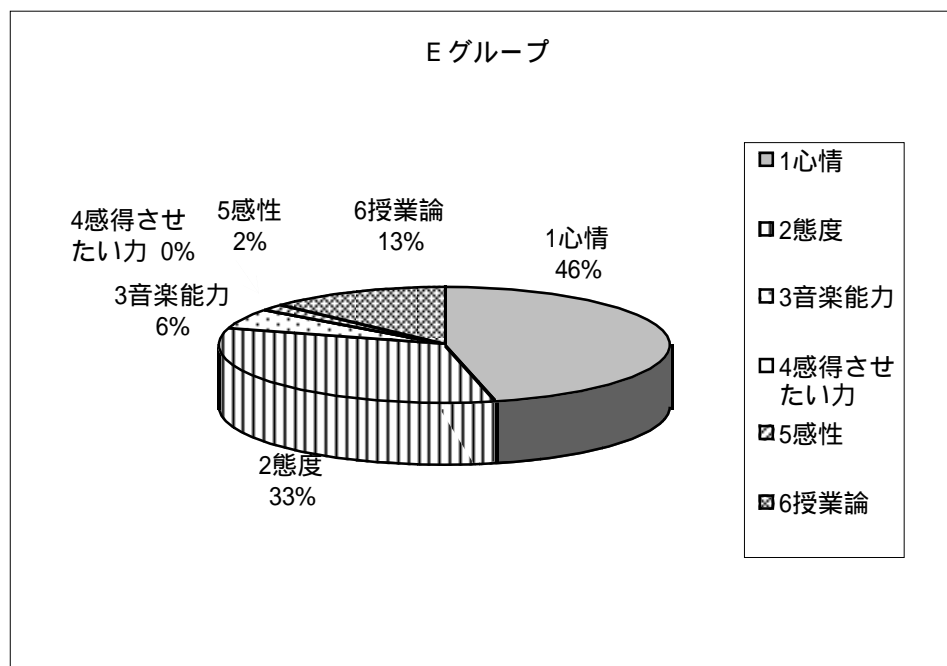
上の表から音楽的な能力の伸張を重視した取り組みが行われていたことは明確である。ソルフェージュ的な目的で旋律を聴き階名に直して歌ったり、階名暗唱するまで歌い込む学習、主要3和音を聞き分けたり和声感を身につけるための学習として和音伴唱で主旋律と重ねて歌うこと、またリズム学習として様々なリズム遊びを繰り返し行うなど徹底して身につくまで練習を重ねる授業が行われていたことと一致した結果であるといえる。

<昭和59年から昭和63年の研究テーマより>

資料 2 1

Eグループ

カテゴリー	1心情	2態度	3音楽能力	4感得させたい力	5感性	6授業論
テーマ数	25	18	3	0	1	7
割合(%)	46	33	6	0	2	13



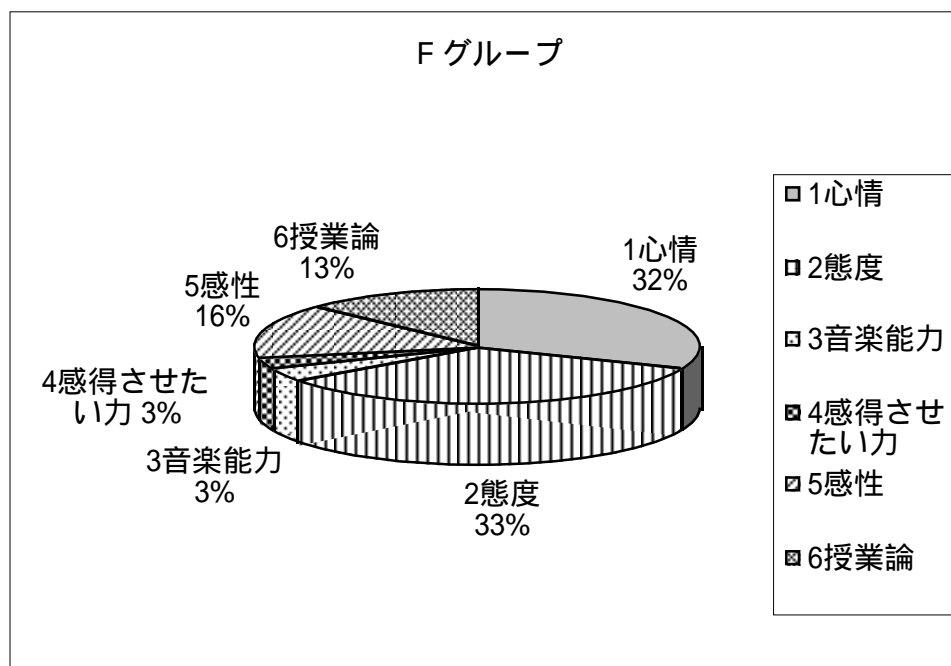
1の心情に関する研究テーマの割合をDグループのグラフと比較すると2倍以上の46%に大きく増加していることがわかる。これは52年度の学習指導要領の音楽科の目標が「音楽を愛好する心情」の育成を前面に出したことが影響していると考えられる。音楽の基礎的な能力を身につけるため全ての領域において基礎・基本に関する学習活動が突出してしまい、音楽に対する味わいや、楽しさの共有などが薄れてしまった結果、音楽嫌いの子どもたちが増えてしまったことの反省にたった改訂であった。また、主体的に取り組むための学習形態(グループ学習、アンサンブル学習等)の研究なども進み、積極的に取り組もうとする子どもたちの姿を求めた実践や研究も多く見られたことと深く関連していると考えられる。また、気になる点として4の、感得させたい力に含まれている「創造性を高める」などの工夫して創り出す力の育成に対するテーマがこの年代では殆ど見られなくなってしまったことがあげられる。1と2の項目の合計は約80%近くあり、心情面の豊かさと積極的に学ぼうとする態度面の育成を目指す熱心な取り組みが行われたことがこのグラフから読みとることができる。

<平成元年から平成5年の研究テーマより>

資料22

Fグループ

カテゴリー	1心情	2態度	3音楽能力	4感得させたい力	5感性	6授業論
テーマ数	20	21	2	2	10	8
割合(%)	32	33	3	3	16	13



資料22では、Eグループの円グラフに引き続き、1と2の割合が非常に大きいことに気づく。合わせて全体の3分の2となっており昭和59年からのグラフと比較するとこの項目については減少の傾向にあるが、5番の16%は感性の育成、また6番の13%には個に応じた指導や学習展開、個性を生かす授業など個性尊重の意味が含まれており、新しい方向に向けての増加といえる。前者の6番の内容は授業の全般的な取り組み方や評価に関する研究などが中心であったのに対して、ここでは学習指導要領をうけて、子どもたち一人ひとりの良さを伸ばし、その人らしさを大切にしたい取り組みをめざし、従来の授業のあり方を問い直す意味をもつものであると思われる。

以上3つの年代の音楽科教育の実際を焦点化して考察してきたが、学習指導要領の音楽科目標を忠実に具現化して実践や研究が行われてきたことがわかった。しかし、「音楽性の基礎を培う。」という目標は今も明確に記されており、目指す音楽教育から遠ざかってはならないものである。1の心情面や2の態度面に関する研究はもちろん重要ではあるが、やや偏りを生じてしまったのではないだろうか。

平成元年からの授業実践例の題材は「音楽づくり」に関するものが殆どであるといえる状態で

あり、また、各研究発表大会での公開授業も「つくって表現する」授業内容が概ねであった。音楽づくりの過程にはさまざまな教育的な内容が盛り込まれていることは十分理解できているつもりではあるが、出来上がった音楽を聴くと嬉々とした表情の中にも苦しそうな歌唱の仕方であったり、演奏技能が身につけていないため自分たちの演奏を聴いて十分な満足度を得られない結果のものも多く見られた。

能力や技術面を重視しすぎたあまり音楽を愛好することが希薄となったと思われる過去の音楽科教育に対する反省も大切である。しかし、主体的に楽しんで学習することばかりを追うことによって、音楽の美しさや心地よさなど音楽そのものを味わうための力が身につけにくい実態も真剣に受けとめなければならないと思う。この研究を終えるにあたって現在痛感していることは、過去の教育の良さを生かしながら新しい方向性を模索していく必要性である。新しい音楽科教育のあり方は一言には見いだすことができなかったが更にその方向性を探り続けていきたいと考えている。

「第2節 2-2 教育音楽からの考察」のための「授業実践例」及び「各音楽教育研究会研究テーマ」についての資料は一覧表として作成し巻末の資料集に綴じてあるので参考にされたい。

おわりに

戦後の音楽科教育がどのような経過を経て今日に至っているのか、その足どりをたどることから研究をスタートしたが、大きな時代のうねりとともに様々な変容が見られた。その時代時代の音楽科教育を受けた人々の現在での様子には、音楽的な基礎能力や生活行動の中に年代の違いによる差異が数多く見られた。しかし、それは、単なる年齢の違いから発生したものではなく、個人が受けてきた音楽科教育に起因していることを実証すべく、冒頭の研究仮説を立てて研究を進めてきた。

調査結果から見られた年代毎の差異は各年代の学習指導要領の音楽科の目標や内容からも数多くの関連性が見い出せたが、さらに、より現実的な因果関係を探るため「教育音楽」の授業実践例での取り組み内容と照らし合わせてみることにした。それらの差異は、第四章の考察文にあるとおり、「行われてきた音楽科教育」を反映する結果となっている。訓練のような練習過程を、繰り返し経験してきた年代は現在もその知識や技能は生きてはいるが音楽科の授業としての楽しかった印象は希薄であること、また最近の新しい音楽科教育を受けているものは音楽科の授業を楽しく受けることはできていても音楽を自分で楽しむために必要となる知識や技能は十分とはいえない結果となった。

音楽科教育の土台となる「音楽を愛好する心情」の育成は大変重要であるが、それに止まることなくそれをスタート台として生涯にわたって音楽を楽しみ、味わいながら学ぶことができる力の育成やその学び方を身につけるためにはどのような音楽科教育を進めていけば良いのであろうか。今後の課題として継続的な研究の方向性が見えたところで今回の研究を終えることとなった。

また研究の基となったアンケート調査の貴重なデータは学校外の音楽教育の「経験群」と「非経験群」との比較など今回の研究では分析していない様々な方法で今後も活用することができるものである。これからも今回の研究をスタートとして日々変容し発展している音楽科教育のあり方について更に研究を深めていきたいと考えている。

謝辞

2年間という長いようですが、ふと気づけば今になっていたという心境です。

初等教育科出身のため音楽の経験も研究も十分でないままの長期間の教職生活を振り返り、もう一度学び直したいという想いがようやくかなったの入学でした。

数々の授業での学びは私にとってとても新鮮で全てが楽しいものでしたが、研究となると何に焦点をあてていいかもわからず迷う毎日でした。

そんな中で鈴木先生から助言をいただいてこのテーマで研究することになり、本当に充実した学園生活を過ごすことができました。しかし今までの勉強不足のため、また機械音痴という弱点を持つ私にとっては苦難の連続で「いったいこの先はどうなるのだろう」と落ち込みや不安に包まれての研究生生活でした。が、おそろおそろ経過報告し指導していただいたときの的確な指示と励ましのお言葉は毎回、募った不安を払拭し次へのエネルギーとなり、そしてようやく今日にたどり着くことができたのでした。その中でも、最も印象に残るのは「自分の足で山に登る」ということです。この研究では鈴木先生はじめ、私のまわりの多くの方に手をひいてもらったり後ろから押してもらったりと、助けられての山登りでした。しかし、山に登ることがどんなに大変か、登り始めたら頂上を目指すしか下り道は無いことを、そして何よりも頂きに立った時の爽やかな風がどんなに心地よいものかを知ることができました。今度山に登るときは先生のお言葉を思い出し自分の足だけで登ってみたいと思います。こんな風に研究の指導だけではなく人生の歩み方までを教えていただいた鈴木先生、本当にありがとうございました。

そして上り坂が続く中、遅々たる歩みの私を常に励まし、同じゴールを目指そうと力強い声で励まして下さった同期の薬袋さん。どんなに心強かったことでしょう。本当にお世話になりました。そして、共に学ぶ楽しさを分かち合ったM1の内田さん、香西さん、暖かい声援をありがとうございました。

また研究のスタートとなった調査の依頼を快く引き受けて協力していただいた「株）サンデリックフーズ」のみなさん・「京都市少年合唱団」「京都市立音羽小学校」の保護者及び指導者の方々・兵庫教育大学大学院の関係の方々、本当にお世話になりました。

さらに素晴らしい出会いとなった13名の仲間達、私の学園生活に明るさと活力を与えてくれました。

最後になりましたが貴重な研究の機会を与えて下さった京都市教育委員会の皆様と気持ちよく送り出して下さった京都市立音羽小学校の教職員の方々に心から感謝したいと思います。

大熊 藤代子

平成10年12月21日

参考文献及び資料

【参考文献】

<単行本>

- 安彦忠彦：1996『新学力観と基礎学力』明治図書 東京
- チョクシー, ルイス / エイブラムソン, ロバート / ガレスピー, エイヴォン /
ウッズ, デイヴィット共著：1994『音楽教育メソッドの比較』(板野和彦訳)
全音楽譜出版社 東京
- Dalcroze, Emile, Jaques : 1975『リズムと音楽と教育』(板野平訳)全音楽譜出版 東京
- 藤田英典：1997『教育改革—共生時代の学校づくり—』岩波書店 東京
- 浜野政雄：1967『新版 音楽教育概説』音楽之友社 東京
- 浜野政雄：1982『戦後音楽教育は何をしたか』音楽之友社 東京
- 岩井正浩：1978『資料 日本音楽教育小史』青葉図書 東京
- 金本正武：1997『音楽科授業論』東洋館出版社 東京
- 河口道朗編：1995『音楽教育入門 基本理念の構築』音楽之友社 東京
- 真篠将：1986『音楽教育四十年史』東洋館出版社 東京
- 松本恒敏・山本文茂：1985『音楽学習の試み—この音でいいかな?—』音楽之友社 東京
- 文部省小学校教育課全教科調査官：1977
- 『小学校新指導要領の解説 あすの授業をどう展開するか』東洋館出版社 東京
- Mursell, James L. / Glenn, Mabelle 共著：1965『音楽教育心理学』(供田武嘉津訳)
音楽之友社 東京
- Mursell, James L. : 1967『音楽教育と人間形成』(美田節子訳)音楽之友社 東京
- Mursell, James L. : 1971『音楽的成長のための教育』(美田節子訳)音楽之友社 東京
- 明星大学戦後教育史研究センター編：1993『戦後教育改革通史』明星大学出版部 東京
- 西口錠太郎：1976『及川平治のカリキュラム改造論』黎明書房 名古屋
- 西澤昭男：1989『音楽教育の原理と実際』音楽之友社 東京
- 西園芳信：1993『音楽科カリキュラムの研究』音楽之友社 東京
- 西園芳信：1994『音楽科の学習指導と評価』日本書籍 東京
- 野村幸治・中山裕一編：1995『音楽教育を読む』音楽之友社 東京
- 小原光一編：1989『小学校新教育課程の解説 音楽』第一法規 東京
- 小原光一編：1989『'89告示 小学校学習指導要領 音楽科の解説と実践』小学館 東京
- 奥田真丈監修：1985『教科教育百年』：建帛社 東京
- 大田堯：1978『戦後日本教育史』岩波書店 東京
- 佐瀬仁：1962『音楽心理学』音楽之友社 東京

- 渋谷伝：1982 『現代音楽教育批判と創造』 国土社 東京
- Tellstrom ,Theodore：1985 『アメリカ音楽教育史』(川島正二訳) 音楽鑑賞振興会 東京
- 東京教育大学付属小学校初等教育研究会：1971 『オルフの音楽教育』 文理書院 東京
- 東京教育大学付属小学校初等教育研究会：1977 『音楽科教育における現代的課題』
泰流社 東京
- 供田武嘉津：1975 『音楽教育学』 音楽之友社 東京
- 上原一馬：1988 『日本音楽教育文化史』 音楽之友社 東京
- 八木正一・吉田孝共著：1996 『新・音楽科宣言』 学事出版 東京
- 山田浅蔵：1991 『実践音楽教育学』 音楽之友社 東京
- 山田浅蔵：1996 『これでいいのか、音楽教育』 音楽之友社 東京
- 山崎英則・徳本達夫編：1994 『西洋教育史』 ミネルヴァ書房 京都
- 山住正己：1987 『日本教育小史』 岩波書店 東京
- 読売新聞戦後史班編：1982 『教育のあゆみ』 読売新聞社 東京
- Zoltan ,Kodaly：1980 『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』(中川弘一郎訳)
全音楽譜出版 東京

< 論文 >

- 美田節子：1971 「音楽的成長から人間的成長へ」 音楽療法年報第6巻 東京
- 鈴木寛：1997 「S . M . Lの音楽教育()()()」 鈴木ゼミ研究紀要第7号
- 鈴木寛：1998 「S . M . Lの音楽教育()」 鈴木ゼミ研究紀要第8号
- 鈴木富三・沢崎真彦：1971 「初等教育教育における音楽教育の歴史的考察」
東京学芸大学 紀要第22集 東京
- 鈴木富三・沢崎真彦：1971 「初等教育教育における音楽教育の歴史的考察」
東京学芸大学 紀要第23集 東京

< 雑誌・指導書等 >

- 文部省：1991 『指導計画の作成と学習指導』 教育芸術社 東京
- 文部省：1993 『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』 東洋館出版 東京
- 文部省：1995 『新しい学力観に立つ 音楽科の授業の工夫』 教育芸術社 東京
- 日本教育音楽協会：1948 ~ 1957 『教育音楽』 音楽之友社 東京
- 日本教育音楽協会：1957 ~ 1998 『教育音楽 小学版』 音楽之友社 東京

資料編

小学校音楽教育に関するアンケート

貴方の小学校の時の音楽の授業や現在の音楽に関する生活の様子、音楽教育に対する考えなどについてありのままにご記入下さい。

年齢() 性別() 職業() 趣味()

学歴(差し支えなければお答え下さい)

中学校 高校・専門学校 それ以上

学校時代の音楽に関する習い事や音楽活動の有無(有 無)

有の方は内容や行っていた期間もご記入下さい。

内容() 期間(年間)

大変、あてはまる	ほぼあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
----------	---------	---------	------------	-----------

それではお願いします。右側の該当する番号に をつけて下さい。

- | | | | | | | |
|----|--|---|---|---|---|---|
| 1 | 音程がおかしいと人からよく言われる。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 | 歌詞のないメロディーを聴いてすぐ覚えるのは苦手である _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | 合唱で、他のパートにつられてしまう。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | リコーダー(ハーモニカ)は苦手で音階(ドレミファソラシド)も吹けない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | リコーダー(ハーモニカ)で曲(春の小川程度)を吹くことはできない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | テレビやラジオ・喫茶店などから学習したことがある鑑賞曲が流れていても学習した曲であることが分からない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | 作曲家とその作品名を5人分は言えない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 | 楽器の種類や音色についてほとんど知らない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 | 替え歌や即興的な歌は不得意である。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | 階名(ドレミ)と音名(ハニホ)の区別ができない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11 | 音符や記号の名前はほとんど知らない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 |  | | | | | |
| | 上の楽譜を見て階名(ドレミ)が分からない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 | 上の楽譜を見てどんなメロディーか浮かんでこない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14 | 上の楽譜を見てどんなリズムか分からない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15 |  | | | | | |
| | (蛙の歌)の続きを楽譜には書けない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16 | メロディーの音と伴奏の和音が合っていないと分からない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17 | 長調と短調のちがいが分からない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18 | 「ふるさと」や「もみじ」などの曲は、小学校の時に誰もが学習した曲であるが、はじめのメロディーを聴いても続きのメロディーが浮かんでこない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19 | 学芸会や音楽発表会等の行事における音楽経験は印象に残っていない。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20 | 心地よい音楽が聞こえくると指先で拍子をとったりして聞き入ることがある。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 21 | 海や野山などの自然にふれたときや季節を感じたときなど学校で学習した「海」や「茶摘み」「富士山」「スキー」などを思い出し、なつかしい気持ちになる。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22 | 小学校の音楽の授業は楽しかった。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 23 | 音楽の良さや活動する楽しさを味わいながら授業がすすめられた。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 24 | 教師が次々に指示を与え、言われた通りに活動することが多い音楽授業だった。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 25 | 小学校の音楽の学習は心を豊かにするために大切であると思う。 _____ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

- 26 小学校での授業時間は図工や音楽を減らして算数や国語等を多くする方が良いと思う。 — 5 4 3 2 1
- 27 学級や学年などの音楽活動を通して、みんなで合唱したり合奏したりしたことで協力
することの楽しさと大切さを学んだ。 _____ 5 4 3 2 1
- 28 担任や音楽の教師から影響を受けて音楽が好きになったといえる。 _____ 5 4 3 2 1
- 29 子供や家族に音楽を楽しむ人になってほしいと思っている。 _____ 5 4 3 2 1
- 30 日常生活の中ではほとんど音楽にふれる時間はない。 _____ 5 4 3 2 1
1・2と答えられた方はその内容の中で上位二つに をつけて下さい。
- 歌 楽器 レコード鑑賞 コンピュータミュージック その他 ()
- 31 自分も今後何らかの音楽をしたいと考えている。 _____ 5 4 3 2 1
4・5と答えられた方はその内容の中で上位二つに をつけて下さい。
- 歌 楽器 レコード鑑賞 コンピュータミュージック その他 ()
- 32 学校時代、クラブ活動や合唱団などの音楽活動をされていた方におたずねします。
そのときの活動は音楽を理解したり愛好したりするきっかけとなった。 _____ 5 4 3 2 1
- 33 何気ないときに、ふと口ずさんでいる曲はどんなものですか。上位二つに をつけて下
さい。
- ポップス クラシック 演歌 童謡 唱歌 ロック 民謡 その他 ()
- 34 現在、合唱団やコーラスグループ・バンドや市民楽団などで音楽活動をしている。 _____ 5 4 3 2 1
4・5と答えられた方はその内容を書いて下さい。()
- 35 どんな音楽が好きですか。上位二つに をつけて下さい。
- ポップス クラシック 演歌 童謡 唱歌 ロック 民謡 その他 ()
- 36 もっとできるようになりたいと思うのはどんなことですか。上位二つに をつけて下さい。
- 歌 楽器 レコード鑑賞 コンピュータミュージック その他 ()
- 37 小学校の時学習した曲目(学芸会や音楽発表会などで演奏した曲も含む)の中で心に残る曲目を書けるだけ
書いて下さい。
()
- 38 小学校の時学習した曲の中でメロディーを思い出せるのは何曲くらいありますか。
まるで思い出せない 3曲位 6曲位 10曲位 それ以上
- 39 どんな方法で音楽を聴いていますか。上位二つに をつけて下さい。
- レコード・CD カセットテープ・MD テレビ ラジオ 演奏会 その他()
- 40 昨年1年間でどんなコンサートに何回位行きましたか。
回数() 内容()
- 41 小学校の音楽の授業でどんな活動をしましたか。すべてに をつけて下さい。
- 歌唱 器楽 鑑賞 ふしづくり 音符や記号 その他 ()
- 42 もっと多く活動をしたかったものはどれですか。上位二つに をつけて下さい。
- 歌唱 器楽 鑑賞 ふしづくり 音符や記号 その他 ()
- 43 小学校の音楽の授業で体験した楽器すべてに やその名前を記入して下さい。
- ハーモニカ 鍵盤ハーモニカ オルガン アコーデオン リコーダー 木琴類
打楽器() その他()
- 44 楽しかった音楽の授業内容はどれですか。上位二つに をつけて下さい
- 歌唱 器楽 鑑賞 ふしづくり 音符や記号 その他 ()
- 45 楽しかった理由の中で上位二つに をつけて下さい。
- 良い音楽に出会って楽しかった 活動そのものが楽しかった 友達と一緒にできるのが楽しかった
- 46 適切な指導を受けられなかったのはどんなことですか。上位二つに をつけて下さい。
- 歌い方 楽器演奏の仕方 音楽の聴き方 楽譜の読み方 その他 ()

お忙しい中をご協力ありがとうございました。今後の小学校での音楽教育の実践に役立てていきたいと思ひます。

(資料 2) t 検定結果

1

AB t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Bグループ) and 10 rows of statistical data.

AE t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Eグループ) and 10 rows of statistical data.

BD t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Bグループ, Dグループ) and 10 rows of statistical data.

CD t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Cグループ, Dグループ) and 10 rows of statistical data.

DE t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Dグループ, Eグループ) and 10 rows of statistical data.

AC t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Cグループ) and 10 rows of statistical data.

AF t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Fグループ) and 10 rows of statistical data.

BE t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Bグループ, Eグループ) and 10 rows of statistical data.

CE t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Cグループ, Eグループ) and 10 rows of statistical data.

DF t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Dグループ, Fグループ) and 10 rows of statistical data.

AD t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Dグループ) and 10 rows of statistical data.

BC t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Bグループ, Cグループ) and 10 rows of statistical data.

BF t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Bグループ, Fグループ) and 10 rows of statistical data.

CF t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Cグループ, Fグループ) and 10 rows of statistical data.

EF t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Eグループ, Fグループ) and 10 rows of statistical data.

2

AB t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Bグループ) and 10 rows of statistical data.

AE t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Eグループ) and 10 rows of statistical data.

AC t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Cグループ) and 10 rows of statistical data.

AF t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, AFグループ) and 10 rows of statistical data.

AD t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Aグループ, Dグループ) and 10 rows of statistical data.

BC t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定 Table with 2 columns (Bグループ, Cグループ) and 10 rows of statistical data.

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.769	2.931
分散	1.305	1.204
観測数	26	173
プールされた分散	1.217	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.696	
P(T<=t) 片側	0.244	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.488	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.769	3.169
分散	1.305	0.914
観測数	26	71
プールされた分散	1.017	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-1.730	
P(T<=t) 片側	0.043	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.087	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.769	2.987
分散	1.305	1.363
観測数	26	78
プールされた分散	1.349	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.829	
P(T<=t) 片側	0.205	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.409	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.576	2.931
分散	1.311	1.204
観測数	125	173
プールされた分散	1.249	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.703	
P(T<=t) 片側	0.004	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.007	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.576	3.169
分散	1.311	0.914
観測数	125	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	168	
t	-3.880	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.974	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.576	2.987
分散	1.311	1.363
観測数	125	78
プールされた分散	1.331	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	-2.470	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.014	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.931	3.169
分散	1.204	0.914
観測数	173	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.693	
P(T<=t) 片側	0.046	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.093	
t境界値 両側	1.976	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.931	2.987
分散	1.204	1.363
観測数	173	78
プールされた分散	1.254	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	-0.370	
P(T<=t) 片側	0.356	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.711	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.169	2.987
分散	0.914	1.363
観測数	71	78
プールされた分散	1.149	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.034	
P(T<=t) 片側	0.151	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.303	
t境界値 両側	1.976	

3

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.414	2.885
分散	1.537	1.626
観測数	29	26
プールされた分散	1.579	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.559	
P(T<=t) 片側	0.062	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.125	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.414	2.736
分散	1.537	1.422
観測数	29	125
プールされた分散	1.443	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	2.738	
P(T<=t) 片側	0.003	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.007	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.414	2.763
分散	1.537	1.147
観測数	29	173
プールされた分散	1.202	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	2.959	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.414	2.845
分散	1.537	1.276
観測数	29	71
プールされた分散	1.350	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	2.221	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.029	
t境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.414	2.641
分散	1.537	1.246
観測数	29	78
プールされた分散	1.324	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	3.088	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.885	2.736
分散	1.626	1.422
観測数	26	125
プールされた分散	1.456	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.571	
P(T<=t) 片側	0.284	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.569	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.885	2.763
分散	1.626	1.147
観測数	26	173
プールされた分散	1.208	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.526	
P(T<=t) 片側	0.300	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.599	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.885	2.845
分散	1.626	1.276
観測数	26	71
プールされた分散	1.368	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.148	
P(T<=t) 片側	0.442	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.883	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.885	2.641
分散	1.626	1.246
観測数	26	78
プールされた分散	1.339	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.929	
P(T<=t) 片側	0.177	
t境界値 片側	1.680	
P(T<=t) 両側	0.355	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.736	2.763
分散	1.422	1.147
観測数	125	173
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	250	
t	-0.201	
P(T<=t) 片側	0.420	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.841	
t境界値 両側	1.969	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.736	2.845
分散	1.422	1.276
観測数	125	71
プールされた分散	1.369	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-0.627	
P(T<=t) 片側	0.266	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.531	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.736	2.641
分散	1.422	1.246
観測数	125	78
プールされた分散	1.354	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.566	
P(T<=t) 片側	0.286	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.572	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.763	2.845
分散	1.147	1.276
観測数	173	71
プールの分散	1.184	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	-0.535	
P(T<=t) 片側	0.297	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.593	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.763	2.641
分散	1.147	1.246
観測数	173	78
プールの分散	1.178	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	0.824	
P(T<=t) 片側	0.205	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.411	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.845	2.641
分散	1.276	1.246
観測数	71	78
プールの分散	1.260	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.108	
P(T<=t) 片側	0.135	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.270	
t境界値 両側	1.976	

4

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.621	3.692
分散	2.172	1.822
観測数	29	26
プールの分散	2.007	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.187	
P(T<=t) 片側	0.426	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.852	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.621	3.792
分散	2.172	1.747
観測数	29	125
プールの分散	1.825	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.615	
P(T<=t) 片側	0.270	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.539	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.621	4.150
分散	2.172	1.338
観測数	29	173
仮説平均との差異	0	
自由度	34	
t	-1.842	
P(T<=t) 片側	0.037	
t境界値 片側	1.691	
P(T<=t) 両側	0.074	
t境界値 両側	2.032	

AE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.621	4.042
分散	2.172	1.355
観測数	29	71
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	-1.375	
P(T<=t) 片側	0.088	
t境界値 片側	1.681	
P(T<=t) 両側	0.176	
t境界値 両側	2.017	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.621	3.872
分散	2.172	1.776
観測数	29	78
プールの分散	1.881	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.842	
P(T<=t) 片側	0.201	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.402	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.692	3.792
分散	1.822	1.747
観測数	26	125
プールの分散	1.759	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.349	
P(T<=t) 片側	0.364	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.728	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.692	4.150
分散	1.822	1.338
観測数	26	173
プールの分散	1.399	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-1.841	
P(T<=t) 片側	0.034	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.067	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.692	4.042
分散	1.822	1.355
観測数	26	71
プールの分散	1.478	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-1.256	
P(T<=t) 片側	0.106	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.212	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.692	3.872
分散	1.822	1.776
観測数	26	78
プールの分散	1.787	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.593	
P(T<=t) 片側	0.277	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.555	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.792	4.150
分散	1.747	1.338
観測数	125	173
仮説平均との差異	0	
自由度	245	
t	-2.432	
P(T<=t) 片側	0.008	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.016	
t境界値 両側	1.970	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.792	4.042
分散	1.747	1.355
観測数	125	71
プールの分散	1.605	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-1.329	
P(T<=t) 片側	0.093	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.185	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.792	3.872
分散	1.747	1.776
観測数	125	78
プールの分散	1.758	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	-0.417	
P(T<=t) 片側	0.339	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.677	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.150	4.042
分散	1.338	1.355
観測数	173	71
プールの分散	1.343	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.661	
P(T<=t) 片側	0.254	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.509	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.150	3.872
分散	1.338	1.776
観測数	173	78
プールの分散	1.473	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	1.682	
P(T<=t) 片側	0.047	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.094	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	4.042	3.872
分散	1.355	1.776
観測数	71	78
プールの分散	1.575	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.828	
P(T<=t) 片側	0.205	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.409	
t境界値 両側	1.976	

5

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.621	3.115
分散	2.315	2.506
観測数	29	26
プールの分散	2.405	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.206	
P(T<=t) 片側	0.117	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.233	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.621	3.520
分散	2.315	1.800
観測数	29	125
プールの分散	1.895	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	0.355	
P(T<=t) 片側	0.362	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.723	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.621	3.746
分散	2.315	1.784
観測数	29	173
プールの分散	1.858	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.457	
P(T<=t) 片側	0.324	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.648	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.621	3.352
分散	2.315	1.860
観測数	29	71
プールされた分散	1.990	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.864	
P(T<=t) 片側	0.195	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.390	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.115	3.746
分散	2.506	1.784
観測数	26	173
プールされた分散	1.875	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-2.188	
P(T<=t) 片側	0.015	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.030	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.520	3.746
分散	1.800	1.784
観測数	125	173
プールされた分散	1.791	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-1.437	
P(T<=t) 片側	0.076	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.152	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.746	3.352
分散	1.784	1.860
観測数	173	71
プールされた分散	1.806	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.078	
P(T<=t) 片側	0.019	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.970	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.931	3.962
分散	1.567	1.158
観測数	29	26
プールされた分散	1.374	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.096	
P(T<=t) 片側	0.462	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.924	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.931	3.972
分散	1.567	1.085
観測数	29	71
プールされた分散	1.223	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	-0.167	
P(T<=t) 片側	0.434	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.867	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.962	4.052
分散	1.158	1.178
観測数	26	173
プールされた分散	1.175	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.397	
P(T<=t) 片側	0.346	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.692	
t境界値 両側	1.972	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.621	3.154
分散	2.315	2.236
観測数	29	78
プールされた分散	2.257	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.429	
P(T<=t) 片側	0.078	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.156	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.115	3.352
分散	2.506	1.860
観測数	26	71
プールされた分散	2.030	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-0.725	
P(T<=t) 片側	0.235	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.470	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.520	3.352
分散	1.800	1.860
観測数	125	71
プールされた分散	1.822	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.837	
P(T<=t) 片側	0.202	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.404	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.746	3.154
分散	1.784	2.236
観測数	173	78
プールされた分散	1.924	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.129	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.931	3.880
分散	1.567	1.155
観測数	29	125
プールされた分散	1.231	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	0.223	
P(T<=t) 片側	0.412	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.824	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.931	3.590
分散	1.567	1.648
観測数	29	78
プールされた分散	1.626	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.231	
P(T<=t) 片側	0.111	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.221	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.962	3.972
分散	1.158	1.085
観測数	26	71
プールされた分散	1.104	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-0.043	
P(T<=t) 片側	0.483	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.966	
t境界値 両側	1.985	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.115	3.520
分散	2.506	1.800
観測数	26	125
プールされた分散	1.918	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.355	
P(T<=t) 片側	0.089	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.177	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.115	3.154
分散	2.506	2.236
観測数	26	78
プールされた分散	2.302	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.112	
P(T<=t) 片側	0.456	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.911	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.520	3.154
分散	1.800	2.236
観測数	125	78
プールされた分散	1.967	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.809	
P(T<=t) 片側	0.036	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.072	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.352	3.154
分散	1.860	2.236
観測数	71	78
プールされた分散	2.057	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.843	
P(T<=t) 片側	0.200	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.401	
t境界値 両側	1.976	

6

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.931	4.052
分散	1.567	1.178
観測数	29	173
プールされた分散	1.232	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.543	
P(T<=t) 片側	0.294	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.588	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.962	3.880
分散	1.158	1.155
観測数	26	125
プールされた分散	1.155	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.352	
P(T<=t) 片側	0.363	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.725	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.962	3.590
分散	1.158	1.648
観測数	26	78
プールされた分散	1.528	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.328	
P(T<=t) 片側	0.094	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.187	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.880	4.052
分散	1.155	1.178
観測数	125	173
プールされた分散	1.168	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-1.356	
P(T<=t) 片側	0.088	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.176	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.052	3.972
分散	1.178	1.085
観測数	173	71
プールされた分散	1.151	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.530	
P(T<=t) 片側	0.298	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.596	
t境界値 両側	1.970	

7
AB
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.034	2.846
分散	2.249	1.895
観測数	29	26
プールされた分散	2.082	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.483	
P(T<=t) 片側	0.315	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.631	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.034	2.690
分散	2.249	2.017
観測数	29	71
プールされた分散	2.083	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	1.083	
P(T<=t) 片側	0.141	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.282	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.846	2.803
分散	1.895	1.694
観測数	26	173
プールされた分散	1.719	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.155	
P(T<=t) 片側	0.439	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.877	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.048	2.803
分散	2.127	1.694
観測数	125	173
仮説平均との差異	0	
自由度	248	
t	1.494	
P(T<=t) 片側	0.068	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.137	
t境界値 両側	1.970	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.803	2.690
分散	1.694	2.017
観測数	173	71
プールされた分散	1.787	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.601	
P(T<=t) 片側	0.274	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.548	
t境界値 両側	1.970	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.880	3.972
分散	1.155	1.085
観測数	125	71
プールされた分散	1.130	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-0.581	
P(T<=t) 片側	0.281	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.562	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.052	3.590
分散	1.178	1.648
観測数	173	78
プールされた分散	1.323	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.947	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.004	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.034	3.048
分散	2.249	2.127
観測数	29	125
プールされた分散	2.149	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.045	
P(T<=t) 片側	0.482	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.964	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.034	2.423
分散	2.249	2.065
観測数	29	78
プールされた分散	2.114	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.933	
P(T<=t) 片側	0.028	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.056	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.846	2.690
分散	1.895	2.017
観測数	26	71
プールされた分散	1.985	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.483	
P(T<=t) 片側	0.315	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.630	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.048	2.690
分散	2.127	2.017
観測数	125	71
プールされた分散	2.087	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.667	
P(T<=t) 片側	0.049	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.097	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.803	2.423
分散	1.694	2.065
観測数	173	78
プールされた分散	1.809	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.074	
P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.970	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.880	3.590
分散	1.155	1.648
観測数	125	78
プールされた分散	1.344	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.735	
P(T<=t) 片側	0.042	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.084	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.972	3.590
分散	1.085	1.648
観測数	71	78
プールされた分散	1.380	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.983	
P(T<=t) 片側	0.025	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.049	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.034	2.803
分散	2.249	1.694
観測数	29	173
プールされた分散	1.771	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.865	
P(T<=t) 片側	0.194	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.388	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.846	3.048
分散	1.895	2.127
観測数	26	125
プールされた分散	2.088	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.648	
P(T<=t) 片側	0.259	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.518	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.846	2.423
分散	1.895	2.065
観測数	26	78
プールされた分散	2.024	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.313	
P(T<=t) 片側	0.096	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.192	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.048	2.423
分散	2.127	2.065
観測数	125	78
プールされた分散	2.103	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.986	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.690	2.423
分散	2.017	2.065
観測数	71	78
プールされた分散	2.042	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.139	
P(T<=t) 片側	0.128	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.256	
t境界値 両側	1.976	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.379	3.269
分散	1.172	1.565
観測数	29	26
プールの分散	1.357	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.350	
P(T<=t) 片側	0.364	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.728	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.379	3.197
分散	1.172	1.275
観測数	29	71
プールの分散	1.246	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.740	
P(T<=t) 片側	0.230	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.461	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.269	3.231
分散	1.565	1.283
観測数	26	173
プールの分散	1.319	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.157	
P(T<=t) 片側	0.438	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.875	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.264	3.231
分散	1.228	1.283
観測数	125	173
プールの分散	1.260	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	0.249	
P(T<=t) 片側	0.402	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.804	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.231	3.197
分散	1.283	1.275
観測数	173	71
プールの分散	1.261	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.213	
P(T<=t) 片側	0.416	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.831	
t境界値 両側	1.970	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.759	2.808
分散	1.333	1.362
観測数	29	26
プールの分散	1.346	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.157	
P(T<=t) 片側	0.438	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.876	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.759	2.831
分散	1.333	1.257
観測数	29	71
プールの分散	1.278	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	-0.290	
P(T<=t) 片側	0.386	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.772	
t境界値 両側	1.984	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.379	3.264
分散	1.172	1.228
観測数	29	125
プールの分散	1.218	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	0.507	
P(T<=t) 片側	0.306	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.613	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.379	2.705
分散	1.172	1.509
観測数	29	78
プールの分散	1.419	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	2.602	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.011	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.269	3.197
分散	1.565	1.275
観測数	26	71
プールの分散	1.351	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.270	
P(T<=t) 片側	0.394	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.787	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.264	3.197
分散	1.228	1.275
観測数	125	71
プールの分散	1.245	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.403	
P(T<=t) 片側	0.344	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.687	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.231	2.705
分散	1.283	1.509
観測数	173	78
プールの分散	1.353	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.316	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.970	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.379	3.231
分散	1.172	1.283
観測数	29	173
プールの分散	1.268	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.655	
P(T<=t) 片側	0.256	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.513	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.269	3.264
分散	1.565	1.228
観測数	26	125
プールの分散	1.285	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.021	
P(T<=t) 片側	0.491	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.983	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.269	2.705
分散	1.565	1.509
観測数	26	78
プールの分散	1.523	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.019	
P(T<=t) 片側	0.023	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.046	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.264	2.705
分散	1.228	1.509
観測数	125	78
プールの分散	1.336	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.351	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.197	2.705
分散	1.275	1.509
観測数	71	78
プールの分散	1.398	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.537	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.012	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.759	2.983
分散	1.333	1.436
観測数	29	173
プールの分散	1.421	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.937	
P(T<=t) 片側	0.175	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.350	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.808	2.656
分散	1.362	1.469
観測数	26	125
プールの分散	1.451	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.584	
P(T<=t) 片側	0.280	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.560	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.808	2.983
分散	1.362	1.436
観測数	26	173
プールされた分散	1.426	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.697	
P(T<=t) 片側	0.243	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.487	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.808	2.831
分散	1.362	1.257
観測数	26	71
プールされた分散	1.284	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-0.090	
P(T<=t) 片側	0.464	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.929	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	変数1	変数2
平均	2.808	2.756
分散	1.362	1.563
観測数	26	78
プールされた分散	1.514	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.184	
P(T<=t) 片側	0.427	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.854	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.656	2.983
分散	1.469	1.436
観測数	125	173
プールされた分散	1.450	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.311	
P(T<=t) 片側	0.011	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.022	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.656	2.831
分散	1.469	1.257
観測数	125	71
プールされた分散	1.393	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-0.998	
P(T<=t) 片側	0.160	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.320	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.656	2.756
分散	1.469	1.563
観測数	125	78
プールされた分散	1.505	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	-0.567	
P(T<=t) 片側	0.286	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.571	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.983	2.831
分散	1.436	1.257
観測数	173	71
プールされた分散	1.384	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.915	
P(T<=t) 片側	0.181	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.361	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.983	2.756
分散	1.436	1.563
観測数	173	78
プールされた分散	1.475	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	1.366	
P(T<=t) 片側	0.087	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.173	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.831	2.756
分散	1.257	1.563
観測数	71	78
プールされた分散	1.417	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.382	
P(T<=t) 片側	0.352	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.703	
t境界値 両側	1.976	

10

AB
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.207	2.962
分散	1.456	2.118
観測数	29	26
プールされた分散	1.768	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.683	
P(T<=t) 片側	0.249	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.497	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.207	2.888
分散	1.456	1.826
観測数	29	125
プールされた分散	1.758	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	1.167	
P(T<=t) 片側	0.123	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.245	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.207	2.931
分散	1.456	2.065
観測数	29	173
プールされた分散	1.980	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.979	
P(T<=t) 片側	0.164	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.329	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.207	2.690
分散	1.456	1.445
観測数	29	71
プールされた分散	1.448	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.027	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.054	
t境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.207	2.769
分散	1.456	1.790
観測数	29	78
プールされた分散	1.701	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.543	
P(T<=t) 片側	0.063	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.126	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.962	2.888
分散	2.118	1.826
観測数	26	125
プールされた分散	1.875	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.249	
P(T<=t) 片側	0.402	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.804	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.962	2.931
分散	2.118	2.065
観測数	26	173
プールされた分散	2.072	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.102	
P(T<=t) 片側	0.459	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.919	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.962	2.690
分散	2.118	1.445
観測数	26	71
プールされた分散	1.623	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.929	
P(T<=t) 片側	0.178	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.355	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.962	2.769
分散	2.118	1.790
観測数	26	78
プールされた分散	1.871	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.621	
P(T<=t) 片側	0.268	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.536	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.888	2.931
分散	1.826	2.065
観測数	125	173
プールされた分散	1.965	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.259	
P(T<=t) 片側	0.398	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.796	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.888	2.690
分散	1.826	1.445
観測数	125	71
プールされた分散	1.689	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.025	
P(T<=t) 片側	0.153	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.307	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.888	2.769
分散	1.826	1.790
観測数	125	78
プールされた分散	1.812	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.611	
P(T<=t) 片側	0.271	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.542	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 分散が等しくないとして仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.931	2.690
分散	2.065	1.445
観測数	173	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	155	
t	1.338	
P(T<=t) 片側	0.091	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.183	
t境界値 両側	1.975	

11

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.138	3.310
分散	1.623	1.351
観測数	29	26
プールされた分散	1.495	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.522	
P(T<=t) 片側	0.302	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.604	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 分散が等しくないとして仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.138	2.845
分散	1.623	0.990
観測数	29	71
プールされた分散	1.495	
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	1.108	
P(T<=t) 片側	0.137	
t境界値 片側	1.681	
P(T<=t) 両側	0.274	
t境界値 両側	2.017	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.310	3.179
分散	1.351	1.404
観測数	26	173
プールされた分散	1.397	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.527	
P(T<=t) 片側	0.299	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.599	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.197	3.179
分散	1.394	1.404
観測数	125	173
プールされた分散	1.400	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	0.131	
P(T<=t) 片側	0.448	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.896	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 分散が等しくないとして仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.179	2.845
分散	1.404	0.990
観測数	173	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	154	
t	2.250	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.026	
t境界値 両側	1.975	

12

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	4.034	4.154
分散	1.463	1.895
観測数	29	26
プールされた分散	1.667	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.342	
P(T<=t) 片側	0.367	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.733	
t境界値 両側	2.006	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.931	2.769
分散	2.065	1.790
観測数	173	78
プールされた分散	1.980	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	0.841	
P(T<=t) 片側	0.201	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.401	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.138	3.197
分散	1.623	1.394
観測数	29	125
プールされた分散	1.437	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.240	
P(T<=t) 片側	0.405	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.810	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.138	2.718
分散	1.623	1.322
観測数	29	78
プールされた分散	1.402	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.631	
P(T<=t) 片側	0.053	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.106	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.310	2.845
分散	1.351	0.990
観測数	26	71
プールされた分散	1.085	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.027	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.054	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 分散が等しくないとして仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.197	2.845
分散	1.394	0.990
観測数	125	71
プールされた分散	1.378	
仮説平均との差異	0	
自由度	167	
t	2.224	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.028	
t境界値 両側	1.974	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.179	2.718
分散	1.404	1.322
観測数	173	78
プールされた分散	1.378	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.880	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.004	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	4.034	4.176
分散	1.463	1.614
観測数	29	125
プールされた分散	1.586	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.545	
P(T<=t) 片側	0.293	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.586	
t境界値 両側	1.976	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.690	2.769
分散	1.445	1.790
観測数	71	78
プールされた分散	1.626	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	-0.378	
P(T<=t) 片側	0.353	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.706	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.138	3.179
分散	1.623	1.404
観測数	29	173
プールされた分散	1.434	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.172	
P(T<=t) 片側	0.432	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.864	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.310	3.197
分散	1.351	1.394
観測数	26	125
プールされた分散	1.387	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.445	
P(T<=t) 片側	0.329	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.657	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.310	2.718
分散	1.351	1.322
観測数	26	78
プールされた分散	1.329	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.269	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.025	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.197	2.718
分散	1.394	1.322
観測数	125	78
プールされた分散	1.367	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.842	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.005	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.845	2.718
分散	0.990	1.322
観測数	71	78
プールされた分散	1.164	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.718	
P(T<=t) 片側	0.237	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.474	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	4.034	4.353
分散	1.463	1.416
観測数	29	173
プールされた分散	1.422	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-1.329	
P(T<=t) 片側	0.093	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.185	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	4.034	4.169
分散	1.463	1.371
観測数	29	71
プールされた分散	1.397	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	-0.516	
P(T<=t) 片側	0.303	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.607	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	4.154	4.353
分散	1.895	1.416
観測数	26	173
プールされた分散	1.477	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.778	
P(T<=t) 片側	0.219	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.438	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	4.176	4.353
分散	1.614	1.416
観測数	125	173
プールされた分散	1.499	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-1.229	
P(T<=t) 片側	0.110	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.220	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.353	4.169
分散	1.416	1.371
観測数	173	71
プールされた分散	1.403	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.100	
P(T<=t) 片側	0.136	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.273	
t境界値 両側	1.970	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.414	3.692
分散	2.108	2.542
観測数	29	26
プールされた分散	2.313	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.678	
P(T<=t) 片側	0.250	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.501	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.414	3.394
分散	2.108	2.157
観測数	29	71
プールされた分散	2.143	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.060	
P(T<=t) 片側	0.476	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.952	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.692	3.798
分散	2.542	2.197
観測数	26	173
プールされた分散	2.241	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.335	
P(T<=t) 片側	0.369	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.738	
t境界値 両側	1.972	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	4.034	3.936
分散	1.463	2.139
観測数	29	78
プールされた分散	1.959	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	0.324	
P(T<=t) 片側	0.373	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.747	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	4.154	4.169
分散	1.895	1.371
観測数	26	71
プールされた分散	1.509	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-0.054	
P(T<=t) 片側	0.479	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.957	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.176	4.169
分散	1.614	1.371
観測数	125	71
プールされた分散	1.526	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.038	
P(T<=t) 片側	0.485	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.970	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.353	3.936
分散	1.416	2.139
観測数	173	78
プールされた分散	1.639	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.386	
P(T<=t) 片側	0.009	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.018	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.414	3.504
分散	2.108	2.413
観測数	29	125
プールされた分散	2.357	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.285	
P(T<=t) 片側	0.388	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.776	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.414	2.936
分散	2.108	2.269
観測数	29	78
プールされた分散	2.226	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.473	
P(T<=t) 片側	0.072	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.144	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.692	3.394
分散	2.542	2.157
観測数	26	71
プールされた分散	2.258	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.865	
P(T<=t) 片側	0.195	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.389	
t境界値 両側	1.985	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	4.154	4.176
分散	1.895	1.614
観測数	26	125
プールされた分散	1.661	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.080	
P(T<=t) 片側	0.468	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.937	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	4.154	3.936
分散	1.895	2.139
観測数	26	78
プールされた分散	2.079	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.667	
P(T<=t) 片側	0.253	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.506	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.176	3.936
分散	1.614	2.139
観測数	125	78
プールされた分散	1.815	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.235	
P(T<=t) 片側	0.109	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.218	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	4.169	3.936
分散	1.371	2.139
観測数	71	78
プールされた分散	1.773	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.067	
P(T<=t) 片側	0.144	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.288	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.414	3.798
分散	2.108	2.197
観測数	29	173
プールされた分散	2.185	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-1.294	
P(T<=t) 片側	0.099	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.197	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.692	3.504
分散	2.542	2.413
観測数	26	125
プールされた分散	2.435	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.560	
P(T<=t) 片側	0.288	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.576	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.692	2.936
分散	2.542	2.269
観測数	26	78
プールされた分散	2.335	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.186	
P(T<=t) 片側	0.016	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.031	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.504	3.798
分散	2.413	2.197
観測数	125	173
プールされた分散	2.288	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-1.654	
P(T<=t) 片側	0.050	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.099	
t 境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.504	3.394
分散	2.413	2.157
観測数	125	71
プールされた分散	2.321	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.484	
P(T<=t) 片側	0.314	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.629	
t 境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.504	2.936
分散	2.413	2.269
観測数	125	78
プールされた分散	2.358	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.564	
P(T<=t) 片側	0.006	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.011	
t 境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.798	3.394
分散	2.197	2.157
観測数	173	71
プールされた分散	2.185	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.936	
P(T<=t) 片側	0.027	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.054	
t 境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.798	2.936
分散	2.197	2.269
観測数	173	78
プールされた分散	2.219	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.242	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.394	2.936
分散	2.157	2.269
観測数	71	78
プールされた分散	2.215	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.878	
P(T<=t) 片側	0.031	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.062	
t 境界値 両側	1.976	

14

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.552	3.462
分散	2.042	2.338
観測数	29	26
プールされた分散	2.182	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.226	
P(T<=t) 片側	0.411	
t 境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.822	
t 境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.552	3.616
分散	2.042	2.093
観測数	29	125
プールされた分散	2.084	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.216	
P(T<=t) 片側	0.415	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.829	
t 境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.552	3.809
分散	2.042	2.179
観測数	29	173
プールされた分散	2.159	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.873	
P(T<=t) 片側	0.192	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.384	
t 境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.552	3.324
分散	2.042	2.165
観測数	29	71
プールされた分散	2.130	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.708	
P(T<=t) 片側	0.240	
t 境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.480	
t 境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.552	2.936
分散	2.042	2.139
観測数	29	78
プールされた分散	2.113	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.027	
t 境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.054	
t 境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.462	3.616
分散	2.338	2.093
観測数	26	125
プールされた分散	2.134	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.490	
P(T<=t) 片側	0.312	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.625	
t 境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.462	3.809
分散	2.338	2.179
観測数	26	173
プールされた分散	2.199	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-1.115	
P(T<=t) 片側	0.133	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.266	
t 境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ	変数 2
平均	3.462	3.324	
分散	2.338	2.165	
観測数	26	71	
プールされた分散	2.211		
仮説平均との差異	0		
自由度	95		
t	0.404		
P(T<=t) 片側	0.344		
t 境界値 片側	1.661		
P(T<=t) 両側	0.687		
t 境界値 両側	1.985		

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.462	2.936
分散	2.338	2.139
観測数	26	78
プールされた分散	2.188	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.569	
P(T<=t) 片側	0.060	
t 境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.120	
t 境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.616	3.809
分散	2.093	2.179
観測数	125	173
プールされた分散	2.143	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-1.125	
P(T<=t) 片側	0.131	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.262	
t 境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.616	3.324
分散	2.093	2.165
観測数	125	71
プールされた分散	2.119	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.350	
P(T<=t) 片側	0.089	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.179	
t 境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.616	2.936
分散	2.093	2.139
観測数	125	78
プールされた分散	2.111	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.244	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.001	
t 境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.809	3.324
分散	2.179	2.165
観測数	173	71
プールされた分散	2.175	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.335	
P(T<=t) 片側	0.010	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.020	
t 境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.809	2.936
分散	2.179	2.139
観測数	173	78
プールされた分散	2.166	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.351	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.324	2.936
分散	2.165	2.139
観測数	71	78
プールされた分散	2.151	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.613	
P(T<=t) 片側	0.054	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.109	
t 境界値 両側	1.976	

AB
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.897	2.346
分散	2.596	2.075
観測数	29	26
プールされた分散	2.350	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.329	
P(T<=t) 片側	0.095	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.189	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.897	2.620
分散	2.596	2.553
観測数	29	71
プールされた分散	2.566	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.784	
P(T<=t) 片側	0.217	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.435	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.346	3.006
分散	2.075	2.622
観測数	26	173
プールされた分散	2.553	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-1.963	
P(T<=t) 片側	0.026	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.051	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.936	3.006
分散	2.512	2.622
観測数	125	173
プールされた分散	2.576	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.370	
P(T<=t) 片側	0.356	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.711	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.006	2.620
分散	2.622	2.553
観測数	173	71
プールされた分散	2.602	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.698	
P(T<=t) 片側	0.045	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.091	
t境界値 両側	1.970	

AB
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.172	2.462
分散	2.005	2.018
観測数	29	26
プールされた分散	2.011	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.856	
P(T<=t) 片側	0.035	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.069	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.172	3.028
分散	2.005	1.913
観測数	29	71
プールされた分散	1.940	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.470	
P(T<=t) 片側	0.320	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.639	
t境界値 両側	1.984	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	2.897	2.936
分散	2.596	2.512
観測数	29	125
プールされた分散	2.527	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.120	
P(T<=t) 片側	0.452	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.904	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	2.897	2.551
分散	2.596	2.510
観測数	29	78
プールされた分散	2.533	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	0.997	
P(T<=t) 片側	0.160	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.321	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.346	2.620
分散	2.075	2.553
観測数	26	71
プールされた分散	2.428	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-0.766	
P(T<=t) 片側	0.223	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.446	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.936	2.620
分散	2.512	2.553
観測数	125	71
プールされた分散	2.527	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.339	
P(T<=t) 片側	0.091	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.182	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.006	2.551
分散	2.622	2.510
観測数	173	78
プールされた分散	2.588	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.072	
P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.172	2.944
分散	2.005	1.682
観測数	29	125
プールされた分散	1.742	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	0.840	
P(T<=t) 片側	0.201	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.402	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.172	2.513
分散	2.005	1.760
観測数	29	78
プールされた分散	1.825	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	2.245	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.027	
t境界値 両側	1.983	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.897	3.006
分散	2.596	2.622
観測数	29	173
プールされた分散	2.618	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.336	
P(T<=t) 片側	0.368	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.737	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.346	2.936
分散	2.075	2.512
観測数	26	125
プールされた分散	2.439	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.752	
P(T<=t) 片側	0.041	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.082	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.346	2.551
分散	2.075	2.510
観測数	26	78
プールされた分散	2.404	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.584	
P(T<=t) 片側	0.280	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.560	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.936	2.551
分散	2.512	2.510
観測数	125	78
プールされた分散	2.511	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.682	
P(T<=t) 片側	0.047	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.094	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.620	2.551
分散	2.553	2.510
観測数	71	78
プールされた分散	2.531	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.262	
P(T<=t) 片側	0.397	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.793	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.172	3.335
分散	2.005	1.724
観測数	29	173
プールされた分散	1.763	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.611	
P(T<=t) 片側	0.271	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.542	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.462	2.944
分散	2.018	1.682
観測数	26	125
プールされた分散	1.739	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.697	
P(T<=t) 片側	0.046	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.092	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.462	3.335
分散	2.018	1.724
観測数	26	173
プールされた分散	1.762	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-3.130	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.944	3.335
分散	1.682	1.724
観測数	125	173
プールされた分散	1.707	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.551	
P(T<=t) 片側	0.006	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.011	
t 境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.335	3.028
分散	1.724	1.913
観測数	173	71
プールされた分散	1.779	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.634	
P(T<=t) 片側	0.052	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.104	
t 境界値 両側	1.970	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.462	3.028
分散	2.018	1.913
観測数	26	71
プールされた分散	1.941	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-1.774	
P(T<=t) 片側	0.040	
t 境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.079	
t 境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.944	3.028
分散	1.682	1.913
観測数	125	71
プールされた分散	1.766	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-0.426	
P(T<=t) 片側	0.335	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.670	
t 境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.335	2.513
分散	1.724	1.760
観測数	173	78
プールされた分散	1.735	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.578	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.970	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.462	2.513
分散	2.018	1.760
観測数	26	78
プールされた分散	1.823	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.168	
P(T<=t) 片側	0.434	
t 境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.867	
t 境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.944	2.513
分散	1.682	1.760
観測数	125	78
プールされた分散	1.712	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.284	
P(T<=t) 片側	0.012	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.023	
t 境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.028	2.513
分散	1.913	1.760
観測数	71	78
プールされた分散	1.833	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.321	
P(T<=t) 片側	0.011	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.022	
t 境界値 両側	1.976	

17

AB
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.241	2.462
分散	2.404	1.778
観測数	29	26
プールされた分散	2.109	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.988	
P(T<=t) 片側	0.026	
t 境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.052	
t 境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.241	2.437
分散	2.404	1.449
観測数	29	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	42	
t	2.504	
P(T<=t) 片側	0.008	
t 境界値 片側	1.682	
P(T<=t) 両側	0.016	
t 境界値 両側	2.018	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.462	2.867
分散	1.778	2.058
観測数	26	173
プールされた分散	2.022	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-1.356	
P(T<=t) 片側	0.088	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.177	
t 境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.896	2.867
分散	1.933	2.058
観測数	125	173
プールされた分散	2.005	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	0.174	
P(T<=t) 片側	0.431	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.862	
t 境界値 両側	1.968	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.241	2.896
分散	2.404	1.933
観測数	29	125
プールされた分散	2.019	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	1.179	
P(T<=t) 片側	0.120	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.240	
t 境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.241	2.269
分散	2.404	1.836
観測数	29	78
プールされた分散	1.987	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	3.171	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.462	2.437
分散	1.778	1.449
観測数	26	71
プールされた分散	1.536	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.088	
P(T<=t) 片側	0.465	
t 境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.930	
t 境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.896	2.437
分散	1.933	1.449
観測数	125	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	163	
t	2.425	
P(T<=t) 片側	0.008	
t 境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.016	
t 境界値 両側	1.975	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.241	2.867
分散	2.404	2.058
観測数	29	173
プールされた分散	2.106	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	1.285	
P(T<=t) 片側	0.100	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.200	
t 境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.462	2.896
分散	1.778	1.933
観測数	26	125
プールされた分散	1.907	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.460	
P(T<=t) 片側	0.073	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.146	
t 境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.462	2.269
分散	1.778	1.836
観測数	26	78
プールされた分散	1.822	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.629	
P(T<=t) 片側	0.265	
t 境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.531	
t 境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.896	2.269
分散	1.933	1.836
観測数	125	78
プールされた分散	1.895	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.155	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.867	2.437
分散	2.058	1.449
観測数	173	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	154	
t	2.395	
P(T<=t) 片側	0.009	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.018	
t境界値 両側	1.975	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.867	2.269
分散	2.058	1.836
観測数	173	78
プールされた分散	1.989	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.108	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.437	2.269
分散	1.449	1.836
観測数	71	78
プールされた分散	1.652	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.794	
P(T<=t) 片側	0.214	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.428	
t境界値 両側	1.976	

18

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.724	3.731
分散	1.850	1.885
観測数	29	26
プールされた分散	1.866	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.018	
P(T<=t) 片側	0.493	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.986	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.724	4.144
分散	1.850	1.076
観測数	29	125
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	36	
t	-1.560	
P(T<=t) 片側	0.064	
t境界値 片側	1.688	
P(T<=t) 両側	0.127	
t境界値 両側	2.028	

AD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.724	4.127
分散	1.850	1.251
観測数	29	173
仮説平均との差異	0	
自由度	35	
t	-1.512	
P(T<=t) 片側	0.070	
t境界値 片側	1.690	
P(T<=t) 両側	0.139	
t境界値 両側	2.030	

AE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	変数 1	変数 2
平均	3.724	3.761
分散	1.850	1.128
観測数	29	71
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	-0.129	
P(T<=t) 片側	0.449	
t境界値 片側	1.681	
P(T<=t) 両側	0.898	
t境界値 両側	2.017	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	変数 1	変数 2
平均	3.724	3.295
分散	1.850	2.263
観測数	29	78
プールされた分散	2.152	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.345	
P(T<=t) 片側	0.091	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.181	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.731	4.144
分散	1.885	1.076
観測数	26	125
仮説平均との差異	0	
自由度	31	
t	-1.451	
P(T<=t) 片側	0.078	
t境界値 片側	1.696	
P(T<=t) 両側	0.157	
t境界値 両側	2.040	

BD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.731	4.127
分散	1.885	1.251
観測数	26	173
仮説平均との差異	0	
自由度	30	
t	-1.404	
P(T<=t) 片側	0.085	
t境界値 片側	1.697	
P(T<=t) 両側	0.171	
t境界値 両側	2.042	

BE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.731	3.761
分散	1.885	1.128
観測数	26	71
仮説平均との差異	0	
自由度	37	
t	-0.100	
P(T<=t) 片側	0.460	
t境界値 片側	1.687	
P(T<=t) 両側	0.921	
t境界値 両側	2.026	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.731	3.295
分散	1.885	2.263
観測数	26	78
プールされた分散	2.170	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.307	
P(T<=t) 片側	0.097	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.194	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	4.144	4.127
分散	1.076	1.251
観測数	125	173
プールされた分散	1.178	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	0.132	
P(T<=t) 片側	0.447	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.895	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.144	3.761
分散	1.076	1.128
観測数	125	71
プールされた分散	1.095	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.466	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.015	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.144	3.295
分散	1.076	2.263
観測数	125	78
プールされた分散	1.530	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	4.757	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.127	3.761
分散	1.251	1.128
観測数	173	71
プールされた分散	1.215	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.359	
P(T<=t) 片側	0.010	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.019	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.127	3.295
分散	1.251	2.263
観測数	173	78
プールされた分散	1.564	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.880	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.761	3.295
分散	1.128	2.263
観測数	71	78
プールされた分散	1.722	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.163	
P(T<=t) 片側	0.016	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.032	
t境界値 両側	1.976	

19

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.448	3.231
分散	2.328	2.025
観測数	29	26
プールされた分散	2.185	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.545	
P(T<=t) 片側	0.294	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.588	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.448	3.096
分散	2.328	1.878
観測数	29	125
プールされた分散	1.961	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	1.221	
P(T<=t) 片側	0.112	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.224	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.448	3.416
分散	2.328	1.803
観測数	29	173
プールされた分散	1.876	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.117	
P(T<=t) 片側	0.454	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.907	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.448	3.268
分散	2.328	1.799
観測数	29	71
プールのされた分散	1.950	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.587	
P(T<=t) 片側	0.279	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.558	
t境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.448	3.256
分散	2.328	2.063
観測数	29	78
プールのされた分散	2.134	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	0.604	
P(T<=t) 片側	0.274	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.547	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.231	3.096
分散	2.025	1.878
観測数	26	125
プールのされた分散	1.902	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.453	
P(T<=t) 片側	0.325	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.651	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.231	3.416
分散	2.025	1.803
観測数	26	173
プールのされた分散	1.831	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.652	
P(T<=t) 片側	0.258	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.515	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.231	3.268
分散	2.025	1.799
観測数	26	71
プールのされた分散	1.858	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-0.118	
P(T<=t) 片側	0.453	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.906	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.231	3.256
分散	2.025	2.063
観測数	26	78
プールのされた分散	2.054	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.079	
P(T<=t) 片側	0.469	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.937	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.096	3.416
分散	1.878	1.803
観測数	125	173
プールのされた分散	1.834	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.014	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.045	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.096	3.268
分散	1.878	1.799
観測数	125	71
プールのされた分散	1.849	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-0.849	
P(T<=t) 片側	0.198	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.397	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.096	3.256
分散	1.878	2.063
観測数	125	78
プールのされた分散	1.949	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	-0.796	
P(T<=t) 片側	0.213	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.427	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.416	3.268
分散	1.803	1.799
観測数	173	71
プールのされた分散	1.801	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.785	
P(T<=t) 片側	0.216	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.433	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.416	3.256
分散	1.803	2.063
観測数	173	78
プールのされた分散	1.883	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	0.854	
P(T<=t) 片側	0.197	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.394	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.268	3.256
分散	1.799	2.063
観測数	71	78
プールのされた分散	1.937	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.049	
P(T<=t) 片側	0.480	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.961	
t境界値 両側	1.976	

20

AB
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.034	3.808
分散	2.177	1.042
観測数	29	26
仮説平均との差異	0	
自由度	50	
t	-2.279	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.676	
P(T<=t) 両側	0.027	
t境界値 両側	2.009	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.034	3.648
分散	2.177	1.553
観測数	29	125
プールのされた分散	1.668	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-2.305	
P(T<=t) 片側	0.011	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.023	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.034	3.694
分散	2.177	1.679
観測数	29	173
プールのされた分散	1.749	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-2.484	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.014	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.034	3.254
分散	2.177	1.678
観測数	29	71
プールのされた分散	1.820	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	-0.737	
P(T<=t) 片側	0.232	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.463	
t境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.034	3.218
分散	2.177	2.121
観測数	29	78
プールのされた分散	2.136	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.577	
P(T<=t) 片側	0.283	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.565	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.808	3.648
分散	1.042	1.553
観測数	26	125
プールのされた分散	1.467	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.612	
P(T<=t) 片側	0.271	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.542	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.808	3.694
分散	1.042	1.679
観測数	26	173
プールのされた分散	1.598	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.429	
P(T<=t) 片側	0.334	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.668	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.808	3.254
分散	1.042	1.678
観測数	26	71
プールのされた分散	1.510	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.967	
P(T<=t) 片側	0.026	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.052	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.808	3.218
分散	1.042	2.121
観測数	26	78
プールのされた分散	1.856	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.911	
P(T<=t) 片側	0.029	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.059	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.648	3.694
分散	1.553	1.679
観測数	125	173
プールされた分散	1.626	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.305	
P(T<=t) 片側	0.380	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.761	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.694	3.254
分散	1.679	1.678
観測数	173	71
プールされた分散	1.679	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.410	
P(T<=t) 片側	0.008	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.017	
t境界値 両側	1.970	

21
AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	4.207	4.308
分散	1.170	1.022
観測数	29	26
プールされた分散	1.100	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.356	
P(T<=t) 片側	0.362	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.723	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	4.207	2.958
分散	1.170	1.898
観測数	29	71
プールされた分散	1.690	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	4.360	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	4.308	3.405
分散	1.022	1.568
観測数	26	173
プールされた分散	1.499	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	3.507	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.400	3.405
分散	1.839	1.568
観測数	125	173
プールされた分散	1.681	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.030	
P(T<=t) 片側	0.488	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.976	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.405	2.958
分散	1.568	1.898
観測数	173	71
プールされた分散	1.663	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.458	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.015	
t境界値 両側	1.970	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.648	3.254
分散	1.553	1.678
観測数	125	71
プールされた分散	1.598	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.100	
P(T<=t) 片側	0.019	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.037	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.694	3.218
分散	1.679	2.121
観測数	173	78
プールされた分散	1.815	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.589	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.010	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	4.207	3.400
分散	1.170	1.839
観測数	29	125
プールされた分散	1.716	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	2.989	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	4.207	2.769
分散	1.170	1.946
観測数	29	78
プールされた分散	1.739	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	5.012	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	4.308	2.958
分散	1.022	1.898
観測数	26	71
プールされた分散	1.667	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	4.561	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.400	2.958
分散	1.839	1.898
観測数	125	71
プールされた分散	1.860	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.182	
P(T<=t) 片側	0.015	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.030	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.405	2.769
分散	1.568	1.946
観測数	173	78
プールされた分散	1.685	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.589	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.648	3.218
分散	1.553	2.121
観測数	125	78
プールされた分散	1.770	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.240	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.026	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.254	3.218
分散	1.678	2.121
観測数	71	78
プールされた分散	1.910	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.157	
P(T<=t) 片側	0.438	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.876	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	4.207	3.405
分散	1.170	1.568
観測数	29	173
プールされた分散	1.512	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	3.251	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	4.308	3.400
分散	1.022	1.839
観測数	26	125
プールされた分散	1.702	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	3.228	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	4.308	2.769
分散	1.022	1.946
観測数	26	78
プールされた分散	1.719	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	5.181	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.400	2.769
分散	1.839	1.946
観測数	125	78
プールされた分散	1.880	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.188	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.958	2.769
分散	1.898	1.946
観測数	71	78
プールされた分散	1.923	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.829	
P(T<=t) 片側	0.204	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.409	
t境界値 両側	1.976	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.138	3.538
分散	1.623	1.138
観測数	29	26
プールされた分散	1.395	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-1.256	
P(T<=t) 片側	0.107	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.215	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	変数 1	変数 2
平均	3.138	3.225
分散	1.623	1.091
観測数	29	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	44	
t	-0.327	
P(T<=t) 片側	0.372	
t境界値 片側	1.680	
P(T<=t) 両側	0.745	
t境界値 両側	2.015	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.538	2.902
分散	1.138	1.380
観測数	26	173
プールされた分散	1.349	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	2.606	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.010	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.192	2.902
分散	1.398	1.380
観測数	125	173
プールされた分散	1.388	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	2.099	
P(T<=t) 片側	0.018	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.037	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.902	3.225
分散	1.380	1.091
観測数	173	71
プールされた分散	1.296	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	-2.017	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.045	
t境界値 両側	1.970	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.759	3.269
分散	1.618	1.245
観測数	29	26
プールされた分散	1.442	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-1.574	
P(T<=t) 片側	0.061	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.121	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.759	2.986
分散	1.618	0.957
観測数	29	71
プールされた分散	0	
仮説平均との差異	0	
自由度	42	
t	-0.864	
P(T<=t) 片側	0.196	
t境界値 片側	1.682	
P(T<=t) 両側	0.393	
t境界値 両側	2.018	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.138	3.192
分散	1.623	1.398
観測数	29	125
プールされた分散	1.440	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.219	
P(T<=t) 片側	0.414	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.827	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	変数 1	変数 2
平均	3.138	3.192
分散	1.623	1.742
観測数	29	78
プールされた分散	1.710	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.191	
P(T<=t) 片側	0.424	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.849	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.538	3.225
分散	1.138	1.091
観測数	26	71
プールされた分散	1.104	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.300	
P(T<=t) 片側	0.098	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.197	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.192	3.225
分散	1.398	1.091
観測数	125	71
プールされた分散	1.288	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-0.198	
P(T<=t) 片側	0.422	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.843	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.902	3.192
分散	1.380	1.742
観測数	173	78
プールされた分散	1.492	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	-1.744	
P(T<=t) 片側	0.041	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.082	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	2.759	2.992
分散	1.618	1.395
観測数	29	125
プールされた分散	1.436	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.945	
P(T<=t) 片側	0.173	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.346	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	2.759	2.885
分散	1.618	1.324
観測数	29	78
プールされた分散	1.403	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.489	
P(T<=t) 片側	0.313	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.626	
t境界値 両側	1.983	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.138	2.902
分散	1.623	1.380
観測数	29	173
プールされた分散	1.414	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.990	
P(T<=t) 片側	0.162	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.323	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.538	3.192
分散	1.138	1.398
観測数	26	125
プールされた分散	1.355	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	1.381	
P(T<=t) 片側	0.085	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.169	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.538	3.192
分散	1.138	1.742
観測数	26	78
プールされた分散	1.594	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.211	
P(T<=t) 片側	0.114	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.229	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.192	3.192
分散	1.398	1.742
観測数	125	78
プールされた分散	1.530	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	-0.002	
P(T<=t) 片側	0.499	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.999	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.225	3.192
分散	1.091	1.742
観測数	71	78
プールされた分散	1.432	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.168	
P(T<=t) 片側	0.433	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.867	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.759	2.688
分散	1.618	1.181
観測数	29	173
プールされた分散	1.242	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.316	
P(T<=t) 片側	0.376	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.752	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.269	2.992
分散	1.245	1.395
観測数	26	125
プールされた分散	1.370	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	1.099	
P(T<=t) 片側	0.137	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.274	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.269	2.688
分散	1.245	1.181
観測数	26	173
プールされた分散	1.189	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	2.535	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.012	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.269	2.986
分散	1.245	0.957
観測数	26	71
プールされた分散	1.033	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.216	
P(T<=t) 片側	0.113	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.227	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.269	2.885
分散	1.245	1.324
観測数	26	78
プールされた分散	1.305	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.487	
P(T<=t) 片側	0.070	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.140	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.992	2.688
分散	1.395	1.181
観測数	125	173
プールされた分散	1.271	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	2.298	
P(T<=t) 片側	0.011	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.022	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.992	2.986
分散	1.395	0.957
観測数	125	71
仮説平均との差異	0	
自由度	169	
t	0.039	
P(T<=t) 片側	0.485	
t境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.969	
t境界値 両側	1.974	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.992	2.885
分散	1.395	1.324
観測数	125	78
プールされた分散	1.368	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.636	
P(T<=t) 片側	0.263	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.525	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.688	2.986
分散	1.181	0.957
観測数	173	71
プールされた分散	1.116	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	-2.002	
P(T<=t) 片側	0.023	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.046	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.688	2.885
分散	1.181	1.324
観測数	173	78
プールされた分散	1.225	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	-1.303	
P(T<=t) 片側	0.097	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.194	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.986	2.885
分散	0.957	1.324
観測数	71	78
プールされた分散	1.149	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.576	
P(T<=t) 片側	0.283	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.585	
t境界値 両側	1.976	

24

AB
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.586	2.654
分散	1.323	1.515
観測数	29	26
プールされた分散	1.414	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.211	
P(T<=t) 片側	0.417	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.834	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	2.586	2.712
分散	1.323	1.303
観測数	29	125
プールされた分散	1.307	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.534	
P(T<=t) 片側	0.297	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.594	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.586	2.555
分散	1.323	1.109
観測数	29	173
プールされた分散	1.139	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.146	
P(T<=t) 片側	0.442	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.884	
t境界値 両側	1.97189365	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.586	2.507
分散	1.323	0.996
観測数	29	71
プールされた分散	1.090	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.344	
P(T<=t) 片側	0.366	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.731	
t境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	2.586	2.705
分散	1.323	1.483
観測数	29	78
プールされた分散	1.440	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.456	
P(T<=t) 片側	0.325	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.650	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.654	2.712
分散	1.515	1.303
観測数	26	125
プールされた分散	1.339	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.233	
P(T<=t) 片側	0.408	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.816	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.654	2.555
分散	1.515	1.109
観測数	26	173
プールされた分散	1.160	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	0.437	
P(T<=t) 片側	0.331	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.663	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.654	2.507
分散	1.515	0.996
観測数	26	71
仮説平均との差異	0	
自由度	38	
t	0.546	
P(T<=t) 片側	0.294	
t境界値 片側	1.686	
P(T<=t) 両側	0.588	
t境界値 両側	2.024	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.654	2.705
分散	1.515	1.483
観測数	26	78
プールされた分散	1.491	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.185	
P(T<=t) 片側	0.427	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.853	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.712	2.555
分散	1.303	1.109
観測数	125	173
プールされた分散	1.190	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	1.226	
P(T<=t) 片側	0.110	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.221	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.712	2.507
分散	1.303	0.996
観測数	125	71
プールされた分散	1.193	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.263	
P(T<=t) 片側	0.104	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.208	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.712	2.705
分散	1.303	1.483
観測数	125	78
プールされた分散	1.372	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.041	
P(T<=t) 片側	0.484	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.968	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.555	2.507
分散	1.109	0.996
観測数	173	71
プールのされた分散	1.076	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.327	
P(T<=t) 片側	0.372	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.744	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.555	2.705
分散	1.109	1.483
観測数	173	78
プールのされた分散	1.225	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	-0.995	
P(T<=t) 片側	0.160	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.321	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.507	2.705
分散	0.996	1.483
観測数	71	78
プールのされた分散	1.251	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	-1.080	
P(T<=t) 片側	0.141	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.282	
t境界値 両側	1.976	

25

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	4.172	4.423
分散	1.433	1.054
観測数	29	26
プールのされた分散	1.254	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.829	
P(T<=t) 片側	0.206	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.411	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	4.172	4.192
分散	1.433	1.124
観測数	29	125
プールのされた分散	1.181	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.087	
P(T<=t) 片側	0.465	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.930	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	4.172	4.006
分散	1.433	1.355
観測数	29	173
プールのされた分散	1.366	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	0.711	
P(T<=t) 片側	0.239	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.478	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	4.172	3.732
分散	1.433	1.742
観測数	29	71
プールのされた分散	1.654	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	1.553	
P(T<=t) 片側	0.062	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.124	
t境界値 両側	1.984	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	4.172	3.859
分散	1.433	1.292
観測数	29	78
プールのされた分散	1.329	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.250	
P(T<=t) 片側	0.107	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.214	
t境界値 両側	1.983	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	4.423	4.192
分散	1.054	1.124
観測数	26	125
プールのされた分散	1.112	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	1.016	
P(T<=t) 片側	0.156	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.311	
t境界値 両側	1.976	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	4.423	4.006
分散	1.054	1.355
観測数	26	173
プールのされた分散	1.316	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	1.729	
P(T<=t) 片側	0.043	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.085	
t境界値 両側	1.972	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	4.423	3.732
分散	1.054	1.742
観測数	26	71
プールのされた分散	1.561	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	2.412	
P(T<=t) 片側	0.009	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.018	
t境界値 両側	1.985	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	4.423	3.859
分散	1.054	1.292
観測数	26	78
プールのされた分散	1.233	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.243	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.027	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	4.192	4.006
分散	1.124	1.355
観測数	125	173
プールのされた分散	1.258	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	1.414	
P(T<=t) 片側	0.079	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.158	
t境界値 両側	1.968	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.192	3.732
分散	1.124	1.742
観測数	125	71
プールのされた分散	1.347	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.665	
P(T<=t) 片側	0.004	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.008	
t境界値 両側	1.972	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.192	3.859
分散	1.124	1.292
観測数	125	78
プールのされた分散	1.188	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.117	
P(T<=t) 片側	0.018	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.035	
t境界値 両側	1.972	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.006	3.732
分散	1.355	1.742
観測数	173	71
プールのされた分散	1.467	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.602	
P(T<=t) 片側	0.055	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.111	
t境界値 両側	1.970	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.006	3.859
分散	1.355	1.292
観測数	173	78
プールのされた分散	1.335	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	0.932	
P(T<=t) 片側	0.176	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.352	
t境界値 両側	1.970	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.732	3.859
分散	1.742	1.292
観測数	71	78
プールのされた分散	1.506	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	-0.629	
P(T<=t) 片側	0.265	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.530	
t境界値 両側	1.976	

26

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.621	3.808
分散	1.458	0.962
観測数	29	26
プールのされた分散	1.224	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.626	
P(T<=t) 片側	0.267	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.534	
t境界値 両側	2.006	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.621	3.992
分散	1.458	1.089
観測数	29	125
プールのされた分散	1.157	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-1.675	
P(T<=t) 片側	0.048	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.096	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.621	4.110
分散	1.458	1.203
観測数	29,000	173,000
プールのされた分散	1.239	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-2.190	
P(T<=t) 片側	0.015	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.030	
t境界値 両側	1.972	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.621	3.648
分散	1.458	1.660
観測数	29	71
プールのされた分散	1.602	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	-0.097	
P(T<=t) 片側	0.461	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.923	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.808	4.110
分散	0.962	1.203
観測数	26	173
プールのされた分散	1.172	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-1.327	
P(T<=t) 片側	0.093	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.186	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.992	4.110
分散	1.089	1.203
観測数	125	173
プールのされた分散	1.155	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.934	
P(T<=t) 片側	0.176	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.351	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.110	3.648
分散	1.203	1.660
観測数	173	71
プールのされた分散	1.335	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.836	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.005	
t境界値 両側	1.970	

27

AB
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.379	3.769
分散	1.244	0.745
観測数	29	26
仮説平均との差異	0	
自由度	52	
t	-1.458	
P(T<=t) 片側	0.075	
t境界値 片側	1.675	
P(T<=t) 両側	0.151	
t境界値 両側	2.007	

AE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.379	3.380
分散	1.244	1.553
観測数	29	71
プールのされた分散	1.465	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	-0.004	
P(T<=t) 片側	0.499	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.997	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.769	3.462
分散	0.745	1.180
観測数	26	173
プールのされた分散	1.125	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	1.375	
P(T<=t) 片側	0.085	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.171	
t境界値 両側	1.972	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.621	3.949
分散	1.458	1.919
観測数	29	78
プールのされた分散	1.796	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-1.125	
P(T<=t) 片側	0.132	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.263	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.808	3.648
分散	0.962	1.660
観測数	26	71
プールのされた分散	1.476	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.574	
P(T<=t) 片側	0.284	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.567	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.992	3.648
分散	1.089	1.660
観測数	125	71
プールのされた分散	1.295	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.035	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.043	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.110	3.949
分散	1.203	1.919
観測数	173	78
プールのされた分散	1.425	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	0.990	
P(T<=t) 片側	0.162	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.323	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.379	3.400
分散	1.244	1.097
観測数	29	125
プールのされた分散	1.124	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.095	
P(T<=t) 片側	0.462	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.925	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.379	3.397
分散	1.244	1.489
観測数	29	78
プールのされた分散	1.424	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.070	
P(T<=t) 片側	0.472	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.944	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.769	3.380
分散	0.745	1.553
観測数	26	71
プールのされた分散	1.341	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.466	
P(T<=t) 片側	0.073	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.146	
t境界値 両側	1.985	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.808	3.992
分散	0.962	1.089
観測数	26	125
プールのされた分散	1.067	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.828	
P(T<=t) 片側	0.205	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.409	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.808	3.949
分散	0.962	1.919
観測数	26	78
プールのされた分散	1.685	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-0.480	
P(T<=t) 片側	0.316	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.632	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.992	3.949
分散	1.089	1.919
観測数	125	78
プールのされた分散	1.407	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.253	
P(T<=t) 片側	0.400	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.801	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.648	3.949
分散	1.660	1.919
観測数	71	78
プールのされた分散	1.796	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	-1.369	
P(T<=t) 片側	0.087	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.173	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.379	3.462
分散	1.244	1.180
観測数	29	173
プールのされた分散	1.189	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.380	
P(T<=t) 片側	0.352	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.704	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.769	3.400
分散	0.745	1.097
観測数	26	125
プールのされた分散	1.038	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	1.682	
P(T<=t) 片側	0.047	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.095	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.769	3.397
分散	0.745	1.489
観測数	26	78
プールのされた分散	1.307	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.436	
P(T<=t) 片側	0.077	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.154	
t境界値 両側	1.983	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.400	3.462
分散	1.097	1.180
観測数	125	173
プールの分散	1.145	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.497	
P(T<=t) 片側	0.310	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.620	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.462	3.380
分散	1.180	1.553
観測数	173	71
プールの分散	1.288	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	0.514	
P(T<=t) 片側	0.304	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.608	
t境界値 両側	1.970	

28
AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.897	2.846
分散	1.167	1.255
観測数	29	26
プールの分散	1.209	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.170	
P(T<=t) 片側	0.433	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.866	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.897	2.563
分散	1.167	1.192
観測数	29	71
プールの分散	1.185	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	1.389	
P(T<=t) 片側	0.084	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.168	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.846	2.457
分散	1.255	1.226
観測数	26	173
プールの分散	1.230	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	1.670	
P(T<=t) 片側	0.048	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.097	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.696	2.457
分散	1.375	1.226
観測数	125	173
プールの分散	1.288	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	1.796	
P(T<=t) 片側	0.037	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.073	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.457	2.563
分散	1.226	1.192
観測数	173	71
プールの分散	1.216	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	-0.687	
P(T<=t) 片側	0.246	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.493	
t境界値 両側	1.970	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.400	3.380
分散	1.097	1.553
観測数	125	71
プールの分散	1.262	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.118	
P(T<=t) 片側	0.453	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.906	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.462	3.397
分散	1.180	1.489
観測数	173	78
プールの分散	1.276	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	0.422	
P(T<=t) 片側	0.337	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.673	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	2.897	2.696
分散	1.167	1.375
観測数	29	125
プールの分散	1.336	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	0.842	
P(T<=t) 片側	0.201	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.401	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	2.897	2.692
分散	1.167	1.411
観測数	29	78
プールの分散	1.346	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	0.810	
P(T<=t) 片側	0.210	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.420	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.846	2.563
分散	1.255	1.192
観測数	26	71
プールの分散	1.209	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.122	
P(T<=t) 片側	0.132	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.265	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.696	2.563
分散	1.375	1.192
観測数	125	71
プールの分散	1.309	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.780	
P(T<=t) 片側	0.218	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.436	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.457	2.692
分散	1.226	1.411
観測数	173	78
プールの分散	1.283	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	-1.525	
P(T<=t) 片側	0.064	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.128	
t境界値 両側	1.970	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.400	3.397
分散	1.097	1.489
観測数	125	78
プールの分散	1.247	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.016	
P(T<=t) 片側	0.494	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.987	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.380	3.397
分散	1.553	1.489
観測数	71	78
プールの分散	1.520	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	-0.085	
P(T<=t) 片側	0.466	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.933	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.897	2.457
分散	1.167	1.226
観測数	29	173
プールの分散	1.218	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	1.986	
P(T<=t) 片側	0.024	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.048	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.846	2.696
分散	1.255	1.375
観測数	26	125
プールの分散	1.355	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.599	
P(T<=t) 片側	0.275	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.550	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.846	2.692
分散	1.255	1.411
観測数	26	78
プールの分散	1.373	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.580	
P(T<=t) 片側	0.282	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.563	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.696	2.692
分散	1.375	1.411
観測数	125	78
プールの分散	1.388	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	0.022	
P(T<=t) 片側	0.491	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.983	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.563	2.692
分散	1.192	1.411
観測数	71	78
プールの分散	1.307	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	-0.688	
P(T<=t) 片側	0.246	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.493	
t境界値 両側	1.976	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	4.034	4.077
分散	0.963	0.874
観測数	29	26
プールされた分散	0.921	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.164	
P(T<=t) 片側	0.435	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.871	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	4.034	3.944
分散	0.963	1.311
観測数	29	71
プールされた分散	1.212	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.374	
P(T<=t) 片側	0.354	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.709	
t境界値 両側	1.984	

BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	4.077	4.249
分散	0.874	1.083
観測数	26	173
プールされた分散	1.057	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.794	
P(T<=t) 片側	0.214	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.428	
t境界値 両側	1.972	

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	4.248	4.249
分散	1.043	1.083
観測数	125	173
プールされた分散	1.066	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.005	
P(T<=t) 片側	0.498	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.996	
t境界値 両側	1.968	

DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.249	3.944
分散	1.083	1.311
観測数	173	71
プールされた分散	1.149	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.018	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.045	
t境界値 両側	1.970	

AB
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.586	3.038
分散	1.680	1.158
観測数	29	26
プールされた分散	1.434	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.694	
P(T<=t) 片側	0.048	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.096	
t境界値 両側	2.006	

AE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.586	3.845
分散	1.680	1.104
観測数	29	71
仮説平均との差異	0	
自由度	44	
t	-0.955	
P(T<=t) 片側	0.172	
t境界値 片側	1.680	
P(T<=t) 両側	0.345	
t境界値 両側	2.015	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	4.034	4.248
分散	0.963	1.043
観測数	29	125
プールされた分散	1.028	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-1.022	
P(T<=t) 片側	0.154	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.309	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	4.034	3.872
分散	0.963	1.048
観測数	29	78
プールされた分散	1.026	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	0.739	
P(T<=t) 片側	0.231	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.462	
t境界値 両側	1.983	

BE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	4.077	3.944
分散	0.874	1.311
観測数	26	71
プールされた分散	1.196	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.532	
P(T<=t) 片側	0.298	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.596	
t境界値 両側	1.985	

CE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.248	3.944
分散	1.043	1.311
観測数	125	71
プールされた分散	1.140	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.918	
P(T<=t) 片側	0.028	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.057	
t境界値 両側	1.972	

DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.249	3.872
分散	1.083	1.048
観測数	173	78
プールされた分散	1.072	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.668	
P(T<=t) 片側	0.004	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.008	
t境界値 両側	1.970	

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.586	3.496
分散	1.680	1.446
観測数	29	125
プールされた分散	1.489	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	0.359	
P(T<=t) 片側	0.360	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.720	
t境界値 両側	1.976	

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.586	3.756
分散	1.680	1.537
観測数	29	78
プールされた分散	1.575	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-0.624	
P(T<=t) 片側	0.267	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.534	
t境界値 両側	1.983	

AD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	4.034	4.249
分散	0.963	1.083
観測数	29	173
プールされた分散	1.066	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-1.033	
P(T<=t) 片側	0.151	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.303	
t境界値 両側	1.972	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	4.077	4.248
分散	0.874	1.043
観測数	26	125
プールされた分散	1.014	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-0.788	
P(T<=t) 片側	0.216	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.432	
t境界値 両側	1.976	

BF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	4.077	3.872
分散	0.874	1.048
観測数	26	78
プールされた分散	1.006	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	0.903	
P(T<=t) 片側	0.184	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.368	
t境界値 両側	1.983	

CF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.248	3.872
分散	1.043	1.048
観測数	125	78
プールされた分散	1.045	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.551	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.011	
t境界値 両側	1.972	

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.944	3.872
分散	1.311	1.048
観測数	71	78
プールされた分散	1.173	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	0.404	
P(T<=t) 片側	0.343	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.686	
t境界値 両側	1.976	

AD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.586	3.775
分散	1.680	1.187
観測数	29	173
仮説平均との差異	0	
自由度	35	
t	-0.740	
P(T<=t) 片側	0.232	
t境界値 片側	1.690	
P(T<=t) 両側	0.464	
t境界値 両側	2.030	

BC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.038	3.496
分散	1.158	1.446
観測数	26	125
プールされた分散	1.397	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.796	
P(T<=t) 片側	0.037	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.075	
t境界値 両側	1.976	

A B
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3	3.038
分散	1.143	1.078
観測数	29	26
プールされた分散	1.112	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	-0.135	
P(T<=t) 片側	0.447	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.893	
t境界値 両側	2.006	

A E
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.000	2.859
分散	1.143	1.151
観測数	29	71
プールされた分散	1.149	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.596	
P(T<=t) 片側	0.276	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.552	
t境界値 両側	1.984	

B D
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.038	3.046
分散	1.078	1.533
観測数	26	173
プールされた分散	1.475	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-0.030	
P(T<=t) 片側	0.488	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.976	
t境界値 両側	1.972	

C D
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.008	3.046
分散	1.427	1.533
観測数	125	173
プールされた分散	1.489	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-0.267	
P(T<=t) 片側	0.395	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.790	
t境界値 両側	1.968	

D E
t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.046	2.859
分散	1.533	1.151
観測数	173	71
プールされた分散		
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	1.181	
P(T<=t) 片側	0.120	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.239	
t境界値 両側	1.976	

A B
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.966	2.962
分散	1.177	1.318
観測数	29	26
プールされた分散	1.244	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.013	
P(T<=t) 片側	0.495	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.990	
t境界値 両側	2.006	

A E
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.966	2.915
分散	1.177	1.536
観測数	29	71
プールされた分散	1.433	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.190	
P(T<=t) 片側	0.425	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.850	
t境界値 両側	1.984	

A C
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3	3.008
分散	1.143	1.427
観測数	29	125
プールされた分散	1.375	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.033	
P(T<=t) 片側	0.487	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.974	
t境界値 両側	1.976	

A F
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.000	2.667
分散	1.143	1.524
観測数	29	78
プールされた分散	1.422	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.285	
P(T<=t) 片側	0.101	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.202	
t境界値 両側	1.983	

B E
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.038	2.859
分散	1.078	1.151
観測数	26	71
プールされた分散	1.132	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	0.735	
P(T<=t) 片側	0.232	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.464	
t境界値 両側	1.985	

C E
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.008	2.859
分散	1.427	1.151
観測数	125	71
プールされた分散	1.328	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.869	
P(T<=t) 片側	0.193	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.386	
t境界値 両側	1.972	

D F
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.046	2.667
分散	1.533	1.524
観測数	173	78
プールされた分散	1.530	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.250	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.025	
t境界値 両側	1.970	

A D
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3	3.046
分散	1.143	1.533
観測数	29	173
プールされた分散	1.478	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.190	
P(T<=t) 片側	0.425	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.850	
t境界値 両側	1.972	

B C
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.038	3.008
分散	1.078	1.427
観測数	26	125
プールされた分散	1.369	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	0.121	
P(T<=t) 片側	0.452	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.904	
t境界値 両側	1.976	

B F
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.038	2.667
分散	1.078	1.524
観測数	26	78
プールされた分散	1.415	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.380	
P(T<=t) 片側	0.085	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.170	
t境界値 両側	1.983	

C F
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.008	2.667
分散	1.427	1.524
観測数	125	78
プールされた分散	1.464	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.955	
P(T<=t) 片側	0.026	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.052	
t境界値 両側	1.972	

E F
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.859	2.667
分散	1.151	1.524
観測数	71	78
プールされた分散	1.346	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.011	
P(T<=t) 片側	0.157	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.314	
t境界値 両側	1.976	

A B
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	2.966	2.962
分散	1.177	1.318
観測数	29	26
プールされた分散	1.244	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	0.013	
P(T<=t) 片側	0.495	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.990	
t境界値 両側	2.006	

A E
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	2.966	2.915
分散	1.177	1.536
観測数	29	71
プールされた分散	1.433	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	0.190	
P(T<=t) 片側	0.425	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.850	
t境界値 両側	1.984	

A C
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	2.966	2.984
分散	1.177	1.161
観測数	29	125
プールされた分散	1.164	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-0.083	
P(T<=t) 片側	0.467	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.934	
t境界値 両側	1.976	

A F
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	2.966	2.423
分散	1.177	1.286
観測数	29	78
プールされた分散	1.257	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	2.224	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.028	
t境界値 両側	1.983	

A D
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.966	3.179
分散	1.177	1.287
観測数	29	173
プールされた分散	1.272	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-0.944	
P(T<=t) 片側	0.173	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.346	
t境界値 両側	1.972	

B C
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.962	2.984
分散	1.318	1.161
観測数	26	125
プールされた分散	1.187	
仮説平均との差異	-0.149	
自由度	-0.096	
t	-0.096	
P(T<=t) 片側	0.462	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.924	
t境界値 両側	1.976	

B D
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.962	3.179
分散	1.318	1.287
観測数	26	173
プールされた分散	1.291	
仮説平均との差異	0	
t	-0.911	
P(T<=t) 片側	0.182	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.364	
t境界値 両側	1.972	

C D
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.984	3.179
分散	1.161	1.287
観測数	125	173
プールされた分散	1.235	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-1.497	
P(T<=t) 片側	0.068	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.136	
t境界値 両側	1.968	

D E
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.179	2.915
分散	1.287	1.536
観測数	173	71
プールされた分散	1.359	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
P(T<=t) 片側	0.055	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.110	
t境界値 両側	1.970	

B E
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.962	2.915
分散	1.318	1.536
観測数	26	71
プールされた分散	1.478	
仮説平均との差異	0	
t	0.165	
P(T<=t) 片側	0.435	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.869	
t境界値 両側	1.985	

C E
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.984	2.915
分散	1.161	1.536
観測数	125	71
プールされた分散	1.296	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	0.405	
P(T<=t) 片側	0.343	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.686	
t境界値 両側	1.972	

D F
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.179	2.423
分散	1.287	1.286
観測数	173	78
プールされた分散	1.287	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

B F
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.962	2.423
分散	1.318	1.286
観測数	26	78
プールされた分散	1.294	
仮説平均との差異	0	
t	2.090	
P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.983	

C F
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.984	2.423
分散	1.161	1.286
観測数	125	78
プールされた分散	1.209	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.535	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

E F
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.915	2.423
分散	1.536	1.286
観測数	71	78
プールされた分散	1.405	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.012	
t境界値 両側	1.976	

(資料3) 有意差の見られた t 検定

t 検定結果の中から有意差のあるものだけを抽出した。数値については四捨五入により小数第3位までとした。表下の文中にある p 値における「E」は小数第何位であるかを示したものである。例(13番 DF)[P 値 3E-05]=0.00003 (14番 DF)[P 値 2E-05]=0.00002 を意味するものである。

1 正しい音程で歌う1

CE
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.304	3.676
分散	1.633	1.136
観測数	125	71
仮説平均との差異	0	
自由度	168	
t	-2.182	
P(T<=t) 片側	0.015	
t 境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.030	
t 境界値 両側	1.974	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.03 両側検定)
Cグループの平均は3.304、Eグループの平均は3.676 であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

1 正しい音程で歌う2

EF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.676	3.308
分散	1.136	1.359
観測数	71	78
プールされた分散	1.253	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.006	
P(T<=t) 片側	0.023	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.047	
t 境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、EグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.047 両側検定)
Eグループの平均は3.676、Fグループの平均は3.308 であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

2 旋律を記憶する

CD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.576	2.931
分散	1.311	1.204
観測数	125	173
プールされた分散	1.249	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.703	
P(T<=t) 片側	0.004	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.007	
t 境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、CグループとDグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P 値 0.007 両側検定)
Cグループの平均は2.576、Dグループの平均は2.931 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

3 他声部につられずに歌う1

AC
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.414	2.736
分散	1.537	1.422
観測数	29	125
プールされた分散	1.443	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	2.738	
P(T<=t) 片側	0.003	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.007	
t 境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、AグループとCグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P 値 0.007 両側検定)
Aグループの平均は3.414、Cグループの平均は2.736 であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

3 他声部につられずに歌う2

AE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.414	2.845
分散	1.537	1.276
観測数	29	71
プールされた分散	1.350	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	2.221	
P(T<=t) 片側	0.014	
t 境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.029	
t 境界値 両側	1.984	

t 検定の結果、AグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.029 両側検定)
Aグループの平均は3.414、Eグループの平均は2.845 であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

3 他声部につられずに歌う3

AF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.414	2.641
分散	1.537	1.246
観測数	29	78
プールされた分散	1.324	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	3.088	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.003	
t 境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、AグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P 値 0.003 両側検定)
Aグループの平均は3.414、Fグループの平均は2.641 であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

4 リコーダー（ハーモニカ）で音階を吹く 1
AD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.621	4.150
分散	2.172	1.338
観測数	29	173
仮説平均との差異	0	
自由度	34	
t	-1.842	
P(T<=t) 片側	0.037	
t境界値 片側	1.691	
P(T<=t) 両側	0.074	
t境界値 両側	2.032	

t 検定の結果、AグループとDグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P 値 0.074 両側検定)

Aグループの平均は3.621、Dグループの平均は4.150 であるのでDグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

4 リコーダー（ハーモニカ）で音階を吹く 2
CD
t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.792	4.150
分散	1.747	1.338
観測数	125	173
仮説平均との差異	0	
自由度	245	
t	-2.432	
P(T<=t) 片側	0.008	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.016	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、CグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.016 両側検定)

Cグループの平均は3.792、Dグループの平均は4.150 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

4 リコーダー（ハーモニカ）で音階を吹く 3
DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.150	3.872
分散	1.338	1.776
観測数	173	78
プールされた分散	1.473	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	1.682	
P(T<=t) 片側	0.047	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.094	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P 値 0.094 両側検定)

Dグループの平均は4.15、Fグループの平均は3.872 であるのでDグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

5 リコーダー（ハーモニカ）で小曲を吹く 1
BD
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.115	3.746
分散	2.506	1.784
観測数	26	173
プールされた分散	1.875	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-2.188	
P(T<=t) 片側	0.015	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.030	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、BグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.03 両側検定)

Bグループの平均は3.115、Dグループの平均は3.746 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

5 リコーダー（ハーモニカ）で小曲を吹く 2
DE
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.746	3.352
分散	1.784	1.860
観測数	173	71
プールされた分散	1.806	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.078	
P(T<=t) 片側	0.019	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.039 両側検定)

Dグループの平均は3.746、Eグループの平均は3.352 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

5 リコーダー（ハーモニカ）で小曲を吹く 3
DF
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.746	3.154
分散	1.784	2.236
観測数	173	78
プールされた分散	1.924	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.129	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P 値 0.002 両側検定)

Dグループの平均は3.746、Fグループの平均は3.154 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

6 学習した鑑賞曲が分かる 1

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.880	3.590
分散	1.155	1.648
観測数	125	78
プールされた分散	1.344	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.735	
P(T<=t) 片側	0.042	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.084	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.084 両側検定)

Cグループの平均は3.88、Fグループの平均は3.59であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

6 学習した鑑賞曲が分かる 2

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.052	3.590
分散	1.178	1.648
観測数	173	78
プールされた分散	1.323	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.947	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.004	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.004 両側検定)

Dグループの平均は4.052、Fグループの平均は3.59であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

6 学習した鑑賞曲が分かる 3

EF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.972	3.590
分散	1.085	1.648
観測数	71	78
プールされた分散	1.380	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	1.983	
P(T<=t) 片側	0.025	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.049	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、EグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.049 両側検定)

Eグループの平均は3.972、Fグループの平均は3.59であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

7 作曲家と作品名が言える 1

AF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.034	2.423
分散	2.249	2.065
観測数	29	78
プールされた分散	2.114	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.933	
P(T<=t) 片側	0.028	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.056	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、AグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.056 両側検定)

Aグループの平均は3.034、Fグループの平均は2.423であるのでAグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

7 作曲家と作品名が言える 2

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.048	2.690
分散	2.127	2.017
観測数	125	71
プールされた分散	2.087	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.667	
P(T<=t) 片側	0.049	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.097	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.097 両側検定)

Cグループの平均は3.048、Eグループの平均は2.690であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

7 作曲家と作品名が言える 3

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.048	2.423
分散	2.127	2.065
観測数	125	78
プールされた分散	2.103	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.986	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.003 両側検定)

Cグループの平均は3.048、Fグループの平均は2.423であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

7 作曲家と作品名が言える 4

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.803	2.423
分散	1.694	2.065
観測数	173	78
プールされた分散	1.809	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.074	
P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.039 両側検定)
Dグループの平均は 2.803、Fグループの平均は 2.423 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

8 楽器の種類や音色が分かる 1

AF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.379	2.705
分散	1.172	1.509
観測数	29	78
プールされた分散	1.419	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	2.602	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.011	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、AグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.011 両側検定)
Aグループの平均は 3.379、Fグループの平均は 2.705 であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

8 楽器の種類や音色が分かる 2

BF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.269	2.705
分散	1.565	1.509
観測数	26	78
プールされた分散	1.523	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.019	
P(T<=t) 片側	0.023	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.046	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.046 両側検定)
Bグループの平均は 3.269、Fグループの平均は 2.705 であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

8 楽器の種類や音色が分かる 3

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.264	2.705
分散	1.228	1.509
観測数	125	78
プールされた分散	1.336	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.351	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 1E-03 両側検定)
Cグループの平均は 3.264、Fグループの平均は 2.705 であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

8 楽器の種類や音色が分かる 4

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.231	2.705
分散	1.283	1.509
観測数	173	78
プールされた分散	1.353	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.316	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.001 両側検定)
Dグループの平均は 3.231、Fグループの平均は 2.705 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

8 楽器の種類や音色が分かる 5

EF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.197	2.705
分散	1.275	1.509
観測数	71	78
プールされた分散	1.398	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.537	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.012	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、EグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.012 両側検定)
Eグループの平均は 3.197、Fグループの平均は 2.705 であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

9 替え歌など即興的な演奏をする

CD

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.656	2.983
分散	1.469	1.436
観測数	125	173
プールされた分散	1.450	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.311	
P(T<=t) 片側	0.011	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.022	
t境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、CグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.022 両側検定)
Cグループの平均は2.656、Dグループの平均は2.983であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

10 階名と音名の区別ができる

AE

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.207	2.690
分散	1.456	1.445
観測数	29	71
プールされた分散	1.448	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.027	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.054	
t境界値 両側	1.984	

t 検定の結果、AグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.054 両側検定)
Aグループの平均は3.207、Eグループの平均は2.690であるのでAグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

11 音符や記号の名前が分かる1

BE

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.310	2.845
分散	1.351	0.990
観測数	26	71
プールされた分散	1.085	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.027	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.054	
t境界値 両側	1.985	

t 検定の結果、BグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.054 両側検定)
Eグループの平均は3.31、Fグループの平均は2.8451であるのでBグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

11 音符や記号の名前が分かる2

BF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.310	2.718
分散	1.351	1.322
観測数	26	78
プールされた分散	1.329	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.269	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.025	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.025 両側検定)
Bグループの平均は3.31、Fグループの平均は2.718であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

11 音符や記号の名前が分かる3

CE

t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.197	2.845
分散	1.394	0.990
観測数	125	71
仮説平均との差異	0	
自由度	167	
t	2.224	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.028	
t境界値 両側	1.974	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.028 両側検定)
Cグループの平均は3.197、Eグループの平均は2.845であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

11 音符や記号の名前が分かる4

CF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.197	2.718
分散	1.394	1.322
観測数	125	78
プールされた分散	1.367	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.842	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.005	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.005 両側検定)
Cグループの平均は3.197、Fグループの平均は2.718であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

1 1 音符や記号の名前が分かる 5

DE

t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.179	2.845
分散	1.404	0.990
観測数	173	71
仮説平均との差異	0	
自由度	154	
t	2.250	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.026	
t境界値 両側	1.975	

t 検定の結果、DグループとEグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.026 両側検定)
Dグループの平均は 3.179、Eグループの平均は 2.845 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1 1 音符や記号の名前が分かる 6

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.179	2.718
分散	1.404	1.322
観測数	173	78
プールされた分散	1.378	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.880	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.004	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.004 両側検定)
Dグループの平均は 3.179、Fグループの平均は 2.718 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1 2 楽譜を見て八長調の階名が分かる 2

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.353	3.936
分散	1.416	2.139
観測数	173	78
プールされた分散	1.639	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.386	
P(T<=t) 片側	0.009	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.018	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.018 両側検定)
Dグループの平均は 4.353、Fグループの平均は 3.936 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1 3 楽譜を見て曲をイメージできる 1

BF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.692	2.936
分散	2.542	2.269
観測数	26	78
プールされた分散	2.335	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.186	
P(T<=t) 片側	0.016	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.031	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.031 両側検定)
Bグループの平均は 3.692、Fグループの平均は 2.936 であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

1 3 楽譜を見て曲をイメージできる 2

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.504	2.936
分散	2.413	2.269
観測数	125	78
プールされた分散	2.358	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.564	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.011	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.011 両側検定)
Cグループの平均は 3.504、Fグループの平均は 2.936 であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

1 3 楽譜を見て曲をイメージできる 3

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.798	3.394
分散	2.197	2.157
観測数	173	71
プールされた分散	2.185	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.936	
P(T<=t) 片側	0.027	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.054	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとEグループの平均の差は 10%水準で有意傾向であった。(P 値 0.054 両側検定)
Dグループの平均は 3.798、Eグループの平均は 3.394 であるのでDグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

13 楽譜を見て曲をイメージできる 4

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.798	2.936
分散	2.197	2.269
観測数	173	78
プールされた分散	2.219	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.242	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 3E-05 両側検定)
Dグループの平均は3.798、Fグループの平均は2.936であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

14 楽譜を見てリズムが分かる 1

AF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.552	2.936
分散	2.042	2.139
観測数	29	78
プールされた分散	2.113	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.027	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.054	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、AグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値 0.054 両側検定)
Aグループの平均は3.552、Fグループの平均は2.936であるのでAグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

14 楽譜を見てリズムが分かる 2

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.616	2.936
分散	2.093	2.139
観測数	125	78
プールされた分散	2.111	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.244	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 0.001 両側検定)
Cグループの平均は3.616、Fグループの平均は2.936であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

14 楽譜を見てリズムが分かる 3

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.809	3.324
分散	2.179	2.165
観測数	173	71
プールされた分散	2.175	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.335	
P(T<=t) 片側	0.010	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.020	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値 0.02 両側検定)
Dグループの平均は3.809、Eグループの平均は3.324であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

14 楽譜を見てリズムが分かる 4

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.809	2.936
分散	2.179	2.139
観測数	173	78
プールされた分散	2.166	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.351	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 2E-05 両側検定)
Dグループの平均は3.809、Fグループの平均は2.936であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

15 知っている旋律を楽譜に書ける 1

BC

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.346	2.936
分散	2.075	2.512
観測数	26	125
プールされた分散	2.439	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.752	
P(T<=t) 片側	0.041	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.082	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、BグループとCグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値 0.082 両側検定)
Bグループの平均は2.346、Cグループの平均は2.936であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

15 知っている旋律を楽譜に書ける2

BD

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.346	3.006
分散	2.075	2.622
観測数	26	173
プールされた分散	2.553	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-1.963	
P(T<=t) 片側	0.026	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.051	
t境界値 両側	1.972	

t検定の結果、BグループとDグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.051両側検定)

Bグループの平均は2.346、Dグループの平均は3.006であるのでDグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

15 知っている旋律を楽譜に書ける3

CF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.936	2.551
分散	2.512	2.510
観測数	125	78
プールされた分散	2.511	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.682	
P(T<=t) 片側	0.047	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.094	
t境界値 両側	1.972	

t検定の結果、CグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.094両側検定)

Cグループの平均は2.936、Fグループの平均は2.551であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

15 知っている旋律を楽譜に書ける4

DE

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.006	2.620
分散	2.622	2.553
観測数	173	71
プールされた分散	2.602	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	1.698	
P(T<=t) 片側	0.045	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.091	
t境界値 両側	1.970	

t検定の結果、DグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.091両側検定)

Dグループの平均は3.006、Eグループの平均は2.62であるのでDグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

15 知っている旋律を楽譜に書ける5

DF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.006	2.551
分散	2.622	2.510
観測数	173	78
プールされた分散	2.588	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.072	
P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.970	

t検定の結果、DグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.039両側検定)

Dグループの平均は3.006、Fグループの平均は2.551であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

16 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる1

AB

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.172	2.462
分散	2.005	2.018
観測数	29	26
プールされた分散	2.011	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.856	
P(T<=t) 片側	0.035	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.069	
t境界値 両側	2.006	

t検定の結果、AグループとBグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.069両側検定)

Aグループの平均は3.172、Bグループの平均は2.462であるのでAグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

16 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる2

AF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	3.172	2.513
分散	2.005	1.760
観測数	29	78
プールされた分散	1.825	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	2.245	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.027	
t境界値 両側	1.983	

t検定の結果、AグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.027両側検定)

Aグループの平均は3.172、Fグループの平均は2.513であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 3

BC

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	2.462	2.944
分散	2.018	1.682
観測数	26	125
プールされた分散	1.739	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.697	
P(T<=t) 片側	0.046	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.092	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、BグループとCグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.092 両側検定)

Bグループの平均は2.462、Cグループの平均は2.944 であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 4

BD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.462	3.335
分散	2.018	1.724
観測数	26	173
プールされた分散	1.762	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-3.130	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、BグループとDグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.002 両側検定)

Bグループの平均は2.462、Dグループの平均は3.335 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 5

BE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	2.462	3.028
分散	2.018	1.913
観測数	26	71
プールされた分散	1.941	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-1.774	
P(T<=t) 片側	0.040	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.079	
t境界値 両側	1.985	

t 検定の結果、BグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.079 両側検定)

Bグループの平均は2.462、Eグループの平均は3.028 であるのでEグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 6

CD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.944	3.335
分散	1.682	1.724
観測数	125	173
プールされた分散	1.707	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.551	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.011	
t境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、CグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.011 両側検定)

Cグループの平均は2.944、Dグループの平均は3.335 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 7

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.944	2.513
分散	1.682	1.760
観測数	125	78
プールされた分散	1.712	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.284	
P(T<=t) 片側	0.012	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.023	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.023 両側検定)

Cグループの平均は2.944、Fグループの平均は2.513 であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 8

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.335	2.513
分散	1.724	1.760
観測数	173	78
プールされた分散	1.735	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.578	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値7E-06 両側検定)

Dグループの平均は3.335、Fグループの平均は2.513 であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1 6 主旋律と和音伴奏があっているかどうか分かる 9
EF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.028	2.513
分散	1.913	1.760
観測数	71	78
プールされた分散	1.833	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.321	
P(T<=t) 片側	0.011	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.022	
t 境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、EグループとFグループの平均の差は 5%水準
で有意であった。(P 値 0.022 両側検定)
Eグループの平均は 3.028、Fグループの平均は 2.513 であるの
でEグループの平均の方が高いといえる。

1 7 長調と短調の違いが分かる 1
AB

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.241	2.462
分散	2.404	1.778
観測数	29	26
プールされた分散	2.109	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.988	
P(T<=t) 片側	0.026	
t 境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.052	
t 境界値 両側	2.006	

t 検定の結果、AグループとBグループの平均の差は 10%水準
で有意傾向であった。(P 値 0.052 両側検定)
Aグループの平均は 3.241、Bグループの平均は 2.462 であるの
でAグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

1 7 長調と短調の違いが分かる 2

AE

t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	3.241	2.437
分散	2.404	1.449
観測数	29	71
仮説平均との差異	0	
自由度	42	
t	2.504	
P(T<=t) 片側	0.008	
t 境界値 片側	1.682	
P(T<=t) 両側	0.016	
t 境界値 両側	2.018	

t 検定の結果、AグループとEグループの平均の差は 5%水準
で有意であった。(P 値 0.016 両側検定)
Aグループの平均は 3.241、Eグループの平均は 2.437 であるの
でAグループの平均の方が高いといえる。

1 7 長調と短調の違いが分かる 3

CE

t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	2.896	2.437
分散	1.933	1.449
観測数	125	71
仮説平均との差異	0	
自由度	163	
t	2.425	
P(T<=t) 片側	0.008	
t 境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.016	
t 境界値 両側	1.975	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は 5%水準
で有意であった。(P 値 0.016 両側検定)
Cグループの平均は 2.896、Eグループの平均は 2.437 であるの
でCグループの平均の方が高いといえる。

1 7 長調と短調の違いが分かる 4

DE

t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.867	2.437
分散	2.058	1.449
観測数	173	71
仮説平均との差異	0	
自由度	154	
t	2.395	
P(T<=t) 片側	0.009	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.018	
t 境界値 両側	1.975	

t 検定の結果、DグループとEグループの平均の差は 5%水準
で有意であった。(P 値 0.018 両側検定)
Dグループの平均は 2.867、Eグループの平均は 2.437 であるの
でDグループの平均の方が高いといえる。

1 7 長調と短調の違いが分かる 5

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.867	2.269
分散	2.058	1.836
観測数	173	78
プールされた分散	1.989	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.108	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は 1%水準
で有意であった。(P 値 0.002 両側検定)
Dグループの平均は 2.867、Fグループの平均は 2.269 であるの
でDグループの平均の方が高いといえる。

1.8 既習曲（共通教材）を聴いて分かる 1

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.144	3.761
分散	1.076	1.128
観測数	125	71
プールされた分散	1.095	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.466	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.015	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 0.015 両側検定)

Cグループの平均は4.14、Eグループの平均は3.76であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

1.8 既習曲（共通教材）を聴いて分かる 4

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.127	3.295
分散	1.251	2.263
観測数	173	78
プールされた分散	1.564	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	4.880	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 2E-06 両側検定)

Dグループの平均は4.127、Fグループの平均は3.295であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1.8 既習曲（共通教材）を聴いて分かる 2

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.144	3.295
分散	1.076	2.263
観測数	125	78
プールされた分散	1.530	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	4.757	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 4E-06 両側検定)

Cグループの平均は4.144、Fグループの平均は3.295であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

1.8 既習曲（共通教材）を聴いて分かる 5

EF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	3.761	3.295
分散	1.128	2.263
観測数	71	78
プールされた分散	1.722	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
t	2.163	
P(T<=t) 片側	0.016	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.032	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、EグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 0.032 両側検定)

Eグループの平均は3.761、Fグループの平均は3.295であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

1.8 既習曲（共通教材）を聴いて分かる 3

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.127	3.761
分散	1.251	1.128
観測数	173	71
プールされた分散	1.215	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.359	
P(T<=t) 片側	0.010	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.019	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値 0.019 両側検定)

Dグループの平均は4.127、Eグループの平均は3.76であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

1.9 学会等での音楽経験が印象に残っている

CD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.096	3.416
分散	1.878	1.803
観測数	125	173
プールされた分散	1.834	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.014	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.045	
t境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、CグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値 0.045 両側検定)

Cグループの平均は3.096、Dグループの平均は3.416であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

20 聞こえてきた音楽に聞き入る 1

AB

t-検定: 分散が等しくないと仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.034	3.808
分散	2.177	1.042
観測数	29	26
プールされた分散		
仮説平均との差異	0	
自由度	50	
t	-2.279	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.676	
P(T<=t) 両側	0.027	
t境界値 両側	2.009	

t 検定の結果、AグループとBグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.027 両側検定)

Aグループの平均は3.034、Bグループの平均は3.808であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

20 聞こえてきた音楽に聞き入る 2

AC

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.034	3.648
分散	2.177	1.553
観測数	29	125
プールされた分散	1.668	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-2.305	
P(T<=t) 片側	0.011	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.023	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、AグループとCグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.023 両側検定)

Aグループの平均は3.034、Cグループの平均は3.648であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

20 聞こえてきた音楽に聞き入る 3

AD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.034	3.694
分散	2.177	1.679
観測数	29	173
プールされた分散	1.749	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-2.484	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.014	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、AグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.014 両側検定)

Aグループの平均は3.034、Dグループの平均は3.694であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

20 聞こえてきた音楽に聞き入る 4

BE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.808	3.254
分散	1.042	1.678
観測数	26	71
プールされた分散	1.510	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	1.967	
P(T<=t) 片側	0.026	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.052	
t境界値 両側	1.985	

t 検定の結果、BグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P 値 0.052 両側検定)

Bグループの平均は3.808、Eグループの平均は3.254であるのでBグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

20 聞こえてきた音楽に聞き入る 5

BF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.808	3.218
分散	1.042	2.121
観測数	26	78
プールされた分散	1.856	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	1.911	
P(T<=t) 片側	0.029	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.059	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P 値 0.059 両側検定)

Bグループの平均は3.808、Fグループの平均は3.218であるのでBグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

20 聞こえてきた音楽に聞き入る 6

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.648	3.254
分散	1.553	1.678
観測数	125	71
プールされた分散	1.598	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.100	
P(T<=t) 片側	0.019	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.037	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P 値 0.037 両側検定)

Cグループの平均は3.648、Eグループの平均は3.254であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

2 0 聞こえてきた音楽に聞き入る 7

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.648	3.218
分散	1.553	2.121
観測数	125	78
プールされた分散	1.770	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.240	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.026	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、Cグループと Fグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.026 両側検定)

Cグループの平均は 3.648、Fグループの平均は 3.218 であるので Cグループの平均の方が高いといえる。

2 0 聞こえてきた音楽に聞き入る 8

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.694	3.254
分散	1.679	1.678
観測数	173	71
プールされた分散	1.679	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.410	
P(T<=t) 片側	0.008	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.017	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Eグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.017 両側検定)

Dグループの平均は 3.694、Eグループの平均は 3.254 であるので Dグループの平均の方が高いといえる。

2 0 聞こえてきた音楽に聞き入る 9

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.694	3.218
分散	1.679	2.121
観測数	173	78
プールされた分散	1.815	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.589	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.010	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Fグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.01 両側検定)

Dグループの平均は 3.694、Fグループの平均は 3.218 であるので Dグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 1

AC

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	4.207	3.400
分散	1.170	1.839
観測数	29	125
プールされた分散	1.716	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	2.989	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、Aグループと Cグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.003 両側検定)

Aグループの平均は 4.207、Cグループの平均は 3.4 であるので Aグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 2

AD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	4.207	3.405
分散	1.170	1.568
観測数	29	173
プールされた分散	1.512	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	3.251	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、Aグループと Dグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.001 両側検定)

Aグループの平均は 4.207、Dグループの平均は 3.405 であるので Aグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 3

AE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Eグループ
平均	4.207	2.958
分散	1.170	1.898
観測数	29	71
プールされた分散	1.690	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	4.360	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.984	

t 検定の結果、Aグループと Eグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 3E-05 両側検定)

Aグループの平均は 4.207、Eグループの平均は 2.958 であるので Aグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 4

AF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	4.207	2.769
分散	1.170	1.946
観測数	29	78
プールされた分散	1.739	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	5.012	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、AグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 2E-06 両側検定)

Aグループの平均は4.207、Fグループの平均は2.769であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 7

BE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	4.308	2.958
分散	1.022	1.898
観測数	26	71
プールされた分散	1.667	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	4.561	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.985	

t 検定の結果、BグループとEグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 2E-05 両側検定)

Bグループの平均は4.308、Eグループの平均は2.958であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 5

BC

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	4.308	3.400
分散	1.022	1.839
観測数	26	125
プールされた分散	1.702	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	3.228	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、BグループとCグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 0.002 両側検定)

Bグループの平均は4.308、Cグループの平均は3.4であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 8

BF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	4.308	2.769
分散	1.022	1.946
観測数	26	78
プールされた分散	1.719	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	5.181	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 1E-06 両側検定)

Bグループの平均は4.308、Fグループの平均は2.769であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 6

BD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	4.308	3.405
分散	1.022	1.568
観測数	26	173
プールされた分散	1.499	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	3.507	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.001	
t 境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、BグループとDグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 6E-04 両側検定)

Bグループの平均は4.308、Dグループの平均は3.405であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

2 1 既習曲をなつかしく思う 9

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.400	2.958
分散	1.839	1.898
観測数	125	71
プールされた分散	1.860	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.182	
P(T<=t) 片側	0.015	
t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.030	
t 境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 0.03 両側検定)

Cグループの平均は3.4、Eグループの平均は2.958であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

2.1 既習曲をなつかしく思う 10

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.400	2.769
分散	1.839	1.946
観測数	125	78
プールされた分散	1.880	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.188	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、Cグループと Fグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.002 両側検定)
Cグループの平均は 3.4、Fグループの平均は 2.769 であるので Cグループの平均の方が高いといえる。

2.1 既習曲をなつかしく思う 11

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	3.405	2.958
分散	1.568	1.898
観測数	173	71
プールされた分散	1.663	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.458	
P(T<=t) 片側	0.007	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.015	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Eグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.015 両側検定)
Dグループの平均は 3.405、Eグループの平均は 2.958 であるので Dグループの平均の方が高いといえる。

2.1 既習曲をなつかしく思う 12

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.405	2.769
分散	1.568	1.946
観測数	173	78
プールされた分散	1.685	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	3.589	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Fグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 4E-04 両側検定)
Dグループの平均は 3.405、Fグループの平均は 2.769 であるので Dグループの平均の方が高いといえる。

2.2 音楽の授業は楽しかった 1

BD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.538	2.902
分散	1.138	1.380
観測数	26	173
プールされた分散	1.349	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	2.606	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.010	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、Bグループと Dグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.01 両側検定)
Bグループの平均は 3.538、Dグループの平均は 2.902 であるので Bグループの平均の方が高いといえる。

2.2 音楽の授業は楽しかった 2

CD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.192	2.902
分散	1.398	1.380
観測数	125	173
プールされた分散	1.388	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	2.099	
P(T<=t) 片側	0.018	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.037	
t境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、Cグループと Dグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.037 両側検定)
Cグループの平均は 3.192、Dグループの平均は 2.902 であるので Cグループの平均の方が高いといえる。

2.2 音楽の授業は楽しかった 3

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.902	3.225
分散	1.380	1.091
観測数	173	71
プールされた分散	1.296	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	-2.017	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.045	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Eグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.045 両側検定)
Dグループの平均は 2.902、Eグループの平均は 3.225 であるので Eグループの平均の方が高いといえる。

2 2 音楽の授業は楽しかった 4

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	2.902	3.192
分散	1.380	1.742
観測数	173	78
プールされた分散	1.492	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	-1.744	
P(T<=t) 片側	0.041	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.082	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Fグループの平均の差は 10%水準で有意であった。(P 値 0.082 両側検定)
Dグループの平均は 2.902、Fグループの平均は 3.192 であるので Fグループの平均の方が高いといえる。

2 3 音楽の良さや活動の楽しさを味わいながら授業が進められた 1

BD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.269	2.688
分散	1.245	1.181
観測数	26	173
プールされた分散	1.189	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	2.535	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.012	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、Bグループと Dグループの平均の差は 1%水準で有意であった。(P 値 0.012 両側検定)
Bグループの平均は 3.269、Dグループの平均は 2.688 であるので Bグループの平均の方が高いといえる。

2 3 音楽の良さや活動の楽しさを味わいながら授業が進められた 2

CD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.992	2.688
分散	1.395	1.181
観測数	125	173
プールされた分散	1.271	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	2.298	
P(T<=t) 片側	0.011	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.022	
t境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、Cグループと Dグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.022 両側検定)
Cグループの平均は 2.992、Dグループの平均は 2.688 であるので Cグループの平均の方が高いといえる。

2 3 音楽の良さや活動の楽しさを味わいながら授業が進められた 3

DE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	2.688	2.986
分散	1.181	0.957
観測数	173	71
プールされた分散	1.116	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	-2.002	
P(T<=t) 片側	0.023	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.046	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、Dグループと Eグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.046 両側検定)
Dグループの平均は 2.688、Eグループの平均は 2.986 であるので Eグループの平均の方が高いといえる。

2 5 音楽科の授業は大切である 1

BD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	4.423	4.006
分散	1.054	1.355
観測数	26	173
プールされた分散	1.316	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	1.729	
P(T<=t) 片側	0.043	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.085	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、Bグループと Dグループの平均の差は 10%水準で有意傾向であった。(P 値 0.085 両側検定)
Bグループの平均は 4.423、Dグループの平均は 4.006 であるので Bグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

2 5 音楽科の授業は大切である 2

BE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	4.423	3.732
分散	1.054	1.742
観測数	26	71
プールされた分散	1.561	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	2.412	
P(T<=t) 片側	0.009	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.018	
t境界値 両側	1.985	

t 検定の結果、Bグループと Eグループの平均の差は 5%水準で有意であった。(P 値 0.018 両側検定)
Bグループの平均は 4.423、Eグループの平均は 3.732 であるので Bグループの平均の方が高いといえる。

2 5 音楽科の授業は大切である 3

BF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	4.423	3.859
分散	1.054	1.292
観測数	26	78
プールされた分散	1.233	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	2.243	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.027	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.027 両側検定)

Bグループの平均は4.423、Fグループの平均は3.859であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

2 5 音楽科の授業は大切である 4

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.192	3.732
分散	1.124	1.742
観測数	125	71
プールされた分散	1.347	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.665	
P(T<=t) 片側	0.004	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.008	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.008 両側検定)

Cグループの平均は4.192、Eグループの平均は3.732であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

2 5 音楽科の授業は大切である 5

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.192	3.859
分散	1.124	1.292
観測数	125	78
プールされた分散	1.188	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.117	
P(T<=t) 片側	0.018	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.035	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.035 両側検定)

Cグループの平均は4.192、Fグループの平均は3.859であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

2 6 音楽の授業時間の削減は好ましくない 1

AC

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Cグループ
平均	3.621	3.992
分散	1.458	1.089
観測数	29	125
プールされた分散	1.157	
仮説平均との差異	0	
自由度	152	
t	-1.675	
P(T<=t) 片側	0.048	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.096	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、AグループとCグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.096 両側検定)

Aグループの平均は3.621、Cグループの平均は3.992であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

2 6 音楽の授業時間の削減は好ましくない 2

AD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	3.621	4.110
分散	1.458	1.203
観測数	29.000	173.000
プールされた分散	1.239	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	-2.190	
P(T<=t) 片側	0.015	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.030	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、AグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.030 両側検定)

Aグループの平均は3.621、Dグループの平均は4.11であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

2 6 音楽の授業時間の削減は好ましくない 3

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.992	3.648
分散	1.089	1.660
観測数	125	71
プールされた分散	1.295	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	2.035	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.043	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.043 両側検定)

Cグループの平均は3.992、Eグループの平均は3.648であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

2 6 音楽の授業時間の削減は好ましくない4

DE

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.110	3.648
分散	1.203	1.660
観測数	173	71
プールされた分散	1.335	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.836	
P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.005	
t境界値 両側	1.970	

t検定の結果、DグループとEグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.005両側検定)

Dグループの平均は4.11、Eグループの平均は3.648であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

2 7 学校の音楽活動を通して協力する意味を学んだ

BC

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.769	3.400
分散	0.745	1.097
観測数	26	125
プールされた分散	1.038	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	1.682	
P(T<=t) 片側	0.047	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.095	
t境界値 両側	1.976	

t検定の結果、BグループとCグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.095両側検定)

Bグループの平均は3.769、Cグループの平均は3.4であるのでBグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

2 8 教師の影響を受けて音楽が好きになった1

AD

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Dグループ
平均	2.897	2.457
分散	1.167	1.226
観測数	29	173
プールされた分散	1.218	
仮説平均との差異	0	
自由度	200	
t	1.986	
P(T<=t) 片側	0.024	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.048	
t境界値 両側	1.972	

t検定の結果、AグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.048両側検定)

Aグループの平均は2.897、Dグループの平均は2.457であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

2 8 教師の影響を受けて音楽が好きになった2

BD

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	2.846	2.457
分散	1.255	1.226
観測数	26	173
プールされた分散	1.230	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	1.670	
P(T<=t) 片側	0.048	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.097	
t境界値 両側	1.972	

t検定の結果、BグループとDグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.097両側検定)

Bグループの平均は2.846、Dグループの平均は2.457であるのでBグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

2 8 教師の影響を受けて音楽が好きになった3

CD

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	2.696	2.457
分散	1.375	1.226
観測数	125	173
プールされた分散	1.288	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	1.796	
P(T<=t) 片側	0.037	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.073	
t境界値 両側	1.968	

t検定の結果、CグループとDグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.073両側検定)

Cグループの平均は2.696、Dグループの平均は2.457であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

2 9 子どもや家族に音楽を楽しむ人になってほしい1

CE

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	4.248	3.944
分散	1.043	1.311
観測数	125	71
プールされた分散	1.140	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	1.918	
P(T<=t) 片側	0.028	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.057	
t境界値 両側	1.972	

t検定の結果、CグループとEグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.057両側検定)

Cグループの平均は4.248、Eグループの平均は3.944であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

29 子どもや家族に音楽を楽しむ人になってほしい2

CF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	4.248	3.872
分散	1.043	1.048
観測数	125	78
プールされた分散	1.045	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	2.551	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.011	
t境界値 両側	1.972	

t-検定の結果、CグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.011両側検定)
Cグループの平均は4.248、Fグループの平均は3.872であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

29 子どもや家族に音楽を楽しむ人になってほしい3

DE

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Eグループ
平均	4.249	3.944
分散	1.083	1.311
観測数	173	71
プールされた分散	1.149	
仮説平均との差異	0	
自由度	242	
t	2.018	
P(T<=t) 片側	0.022	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.045	
t境界値 両側	1.970	

t-検定の結果、DグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.045両側検定)
Dグループの平均は4.249、Eグループの平均は3.944であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

29 子どもや家族に音楽を楽しむ人になってほしい4

DF

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	4.249	3.872
分散	1.083	1.048
観測数	173	78
プールされた分散	1.072	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.668	
P(T<=t) 片側	0.004	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.008	
t境界値 両側	1.970	

t-検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.008両側検定)
Dグループの平均は4.249、Fグループの平均は3.872であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

30 日常生活で音楽を楽しんでいる1

AB

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Aグループ	Bグループ
平均	3.586	3.038
分散	1.680	1.158
観測数	29	26
プールされた分散	1.434	
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	1.694	
P(T<=t) 片側	0.048	
t境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.096	
t境界値 両側	2.006	

t-検定の結果、AグループとBグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.096両側検定)
Aグループの平均は3.586、Bグループの平均は3.039であるのでAグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

30 日常生活で音楽を楽しんでいる2

BC

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Cグループ
平均	3.038	3.496
分散	1.158	1.446
観測数	26	125
プールされた分散	1.397	
仮説平均との差異	0	
自由度	149	
t	-1.796	
P(T<=t) 片側	0.037	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.075	
t境界値 両側	1.976	

t-検定の結果、BグループとCグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.075両側検定)
Bグループの平均は3.039、Cグループの平均は3.496であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあると考えられる。

30 日常生活で音楽を楽しんでいる3

BD

t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定

	Bグループ	Dグループ
平均	3.038	3.775
分散	1.158	1.187
観測数	26	173
プールされた分散	1.184	
仮説平均との差異	0	
自由度	197	
t	-3.217	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.002	
t境界値 両側	1.972	

t-検定の結果、BグループとDグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.002両側検定)
Bグループの平均は3.038、Dグループの平均は3.775であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

3 0 日常生活で音楽を楽しんでいる 4

BE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Eグループ
平均	3.038	3.845
分散	1.158	1.104
観測数	26	71
プールされた分散	1.118	
仮説平均との差異	0	
自由度	95	
t	-3.327	
P(T<=t) 片側	0.001	
t境界値 片側	1.661	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.985	

t 検定の結果、BグループとEグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.001 両側検定)
Bグループの平均は3.038、Eグループの平均は3.845であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

3 0 日常生活で音楽を楽しんでいる 5

BF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	3.038	3.756
分散	1.158	1.537
観測数	26	78
プールされた分散	1.444	
仮説平均との差異	0	
自由度	102	
t	-2.638	
P(T<=t) 片側	0.005	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.010	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値0.0096 両側検定)
Bグループの平均は3.038、Fグループの平均は3.756であるのでFグループの平均の方が高いといえる。

3 0 日常生活で音楽を楽しんでいる 6

CD

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Dグループ
平均	3.496	3.775
分散	1.446	1.187
観測数	125	173
プールされた分散	1.295	
仮説平均との差異	0	
自由度	296	
t	-2.085	
P(T<=t) 片側	0.019	
t境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.038	
t境界値 両側	1.968	

t 検定の結果、CグループとDグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.038 両側検定)
Cグループの平均は3.496、Dグループの平均は3.775であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

3 0 日常生活で音楽を楽しんでいる 7

CE

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Eグループ
平均	3.496	3.845
分散	1.446	1.104
観測数	125	71
プールされた分散	1.322	
仮説平均との差異	0	
自由度	194	
t	-2.043	
P(T<=t) 片側	0.021	
t境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.042	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとEグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.042 両側検定)
Cグループの平均は3.496、Eグループの平均は3.845であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

3 1 音楽愛好の意志 1

CF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	3.008	2.667
分散	1.427	1.524
観測数	125	78
プールされた分散	1.464	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	1.955	
P(T<=t) 片側	0.026	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.052	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は10%水準で有意傾向であった。(P値0.052 両側検定)
Cグループの平均は3.008、Fグループの平均は2.667であるのでCグループの平均の方が高い傾向にあるといえる。

3 1 音楽愛好の意志 2

DF

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.046	2.667
分散	1.533	1.524
観測数	173	78
プールされた分散	1.530	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
t	2.250	
P(T<=t) 片側	0.013	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.025	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値0.025 両側検定)
Dグループの平均は3.046、Fグループの平均は2.667であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

3 8 記憶している既習曲数 1

A F

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Aグループ	Fグループ
平均	2.966	2.423
分散	1.177	1.286
観測数	29	78
プールされた分散	1.257	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	2.224	
P(T<=t) 片側	0.014	
t境界値 片側	1.659	
P(T<=t) 両側	0.028	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、AグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値 0.028 両側検定)
Aグループの平均は2.966、Fグループの平均は2.423であるのでAグループの平均の方が高いといえる。

3 8 記憶している既習曲数 2

B F

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Bグループ	Fグループ
平均	2.962	2.423
分散	1.318	1.286
観測数	26	78
プールされた分散	1.294	
仮説平均との差異	0	
t	2.090	
P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.983	

t 検定の結果、BグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値 0.039 両側検定)
Bグループの平均は2.962、Fグループの平均は2.423であるのでBグループの平均の方が高いといえる。

3 8 記憶している既習曲数 3

C F

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Cグループ	Fグループ
平均	2.984	2.423
分散	1.161	1.286
観測数	125	78
プールされた分散	1.209	
仮説平均との差異	0	
自由度	201	
t	3.535	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.001	
t境界値 両側	1.972	

t 検定の結果、CグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 0.001 両側検定)
Cグループの平均は2.984、Fグループの平均は2.423であるのでCグループの平均の方が高いといえる。

3 8 記憶している既習曲数 4

D F

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Dグループ	Fグループ
平均	3.179	2.423
分散	1.287	1.286
観測数	173	78
プールされた分散	1.287	
仮説平均との差異	0	
自由度	249	
P(T<=t) 片側	0.000	
t境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.970	

t 検定の結果、DグループとFグループの平均の差は1%水準で有意であった。(P値 1.8E-06 両側検定)
Dグループの平均は3.179、Fグループの平均は2.423であるのでDグループの平均の方が高いといえる。

3 8 記憶している既習曲数 5

E F

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定

	Eグループ	Fグループ
平均	2.915	2.423
分散	1.536	1.286
観測数	71	78
プールされた分散	1.405	
仮説平均との差異	0	
自由度	147	
P(T<=t) 片側	0.006	
t境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.012	
t境界値 両側	1.976	

t 検定の結果、EグループとFグループの平均の差は5%水準で有意であった。(P値 0.012 両側検定)
Eグループの平均は2.915、Fグループの平均は2.423であるのでEグループの平均の方が高いといえる。

「(資料4)教育音楽」より 授業実践例等一覧表 (昭和47年度から昭和51年度)

月・「教材」・(理論)	氏名	学年	中心内容(キーワード)	学習内容 領域等
1972/4 「きよしこの夜」	広島県 山下裕	1	僻地での合同音楽の取り組み	器楽
4 「さくら」	東京都 安田喜義	2	楽しく歌う	歌唱
4 「トランペットふきの休日」	鳥根県 田中弥生	3	感覚的	鑑賞
4 「かすみか雲か」	千葉県 矢島弘	4	主体的	歌唱
4 「ドナドナ」	東京都 井口省司	5	音楽に対する感動	歌唱
4 「ふるさと」	兵庫県 中尾恒己	6	アンサンブルの取り組み	器楽
5 「つばみのうた」	神奈川県 清藤志志	1	一年生の歌唱指導	歌唱
5 「かっこう」	鳥根県 山田泰子	2	リズム伴奏の工夫	器楽
5 「ふじ山」	新潟県 天野栄子	3	美しく表現	器楽
5 「山の音楽家」	岡山県 神尾一郎	4	基礎の指導方法	基礎
5 (旋律創作の入門期)	鹿児島県 則武輝和	5	旋律創作の手順	創作
5 (鑑賞指導で思うこと)	東京都 吉田政次	6	鑑賞の指導法	鑑賞
6 「かごめかごめ」	福島県 荒晶子	1	即興的なリズム創作	歌唱 器楽
6 (一人一人に学習の成立を)	群馬県 青木隆	2	一人一人に学習の成立を	歌唱 器楽
6 (能力に応じた伴奏付けの実験的な学習と結果)	岡山県 大窪道生	3	伴奏付け	基礎
6 (好きこそもののじょうずなれ)	愛知県 山田隆	4	歌と笛の指導法	歌唱 器楽
6 「おお牧場は緑」	奈良県 西田幸二	5	リズム	歌唱
6 「川はよんでる」	埼玉県 持田敏夫	6	楽曲のもつ美しさに感動を	器楽
7 「うみ」	山口県 佐伯聡子	1	身体反応	歌唱
7 「こいのぼり」	群馬県 須藤キクエ	2	八長調の視唱力	歌唱 器楽
7 「みなと」	新潟県 磯部芳徳	3	主体的	歌唱 基礎
7 (リズムと指揮と名曲と)	東京都 三浦孝剛	4	リズムの基礎指導	基礎
7 「おうまの親子」	東京都 志田芳久	5	指導のポイント	歌唱
7 (合唱成立までの取り組み)	兵庫県 平野勝夫	6	合唱ができる	歌唱
8 (1年生の歌唱指導)	神奈川県 増田実	1	きれいな声	歌唱
8 「だるまさん」「どんぐりさんのおうち」他	三重県 藤門光昭	2	自分で表現し自分で創造する楽しさ	歌唱 器楽
8 (創作についての構えと願い)	滋賀県 堀野徳雄	3	創作指導の取り組み	創作
8 「いずみをくみに」	岡山県 小山皓	4	創造的に音楽学習を(伴奏の工夫)	器楽
8 「線路は続くよ」	東京都 江畑龜三郎	5	合唱への手だて	歌唱 鑑賞
8 「マンボ春風」	山梨県 中山岳彦	6	代用楽器でラテンのリズムを	器楽
9 「もっくん」	埼玉県 田森初枝	1	合唱奏を楽しむ	歌唱 器楽
9 「とんぼのめがね」	京都府 山崎博	2	創造性・基礎能力	歌唱 基礎
9 「友だち」	秋田県 松本秋次	3	夏休みの体験を授業に関連させて	歌唱
9 (基礎づくりの学習について)	大分県 後藤正人	4	基礎能力の育成	基礎
9 「こいぬ」	奈良県 中尾寛玄	5	全員参加の音楽教育	歌唱
9 (ほくもわたしも作曲家)	広島県 牧野輝道	6	創作学習の取り組み	創作
10 「ぶんぶんぶん」	岩手県 太田代政男	1	リズム指導	歌唱 リズム
11 (基礎を考えた指導事例「バイオリンはいいね」)	鳥根県 田中義浩	2	創造性	歌唱
10 「山の歌」	栃木県 渡辺利子	3	主体的	歌唱 リズム
10 (子どもたちと確かめ合うーそろってスタートする喜び)	神奈川県 石井久	4	和音	歌唱 基礎
10 (笛の吹けない子どものために)	大阪府 神田毅	5	音楽性	全般
10 「野いちご」	新潟県 中島明夫	6	少人数を生かした取り組み	器楽
11 (個々の音楽性を伸ばす取り組み)	青森県 山本清春	1	楽しく聴こうとする意欲	基礎
11 (階名暗唱曲活用の必要性)	東京都 尾原昭夫	2	階名暗唱	基礎
11 「キンコンカン」	埼玉県 市村良恵子	3	意欲	歌唱 器楽
11 「夏の日ぐれ」	鳥取県 蓮仏隆朗	4	音楽する力(基礎的感覚と基礎技能の組み合わせ)	歌唱
11 (楽しんでやった一部形式の三重奏曲創作学習)	長野県 小林権太郎	5	創作指導	創作
11 「こきょうの人々」	神奈川県 松田全子	6	正しい演奏・楽しい音楽	歌唱
12 「たき火」	長野県 高野栄介	1	創造性	器楽
12 「はるがきた」	石川県 浅井喜八郎	2	音楽の身体表現の美しさにふれる	歌唱
12 「小ぎつね」	岡山県 武田崇	3	子ども自身が目標を持ち解決への意識を働かせて	器楽
12 「月の光」	山形県 松田末五郎	4	自主的	器楽
12 「ドナウ川のさざ波」	鹿児島県 川崎栄実	5	鑑賞鑑賞指導のポイント	鑑賞
12 「はてもなき荒野原」	東京都 高木保司	6	副教材の選択について	歌唱
1973/1 「ゆうやけこやけ」	新潟県 勝又忠孚	1	生き生きと表現	歌唱 身体表現
1 「びよんびよんびよん」	秋田県 小田嶋辰治	2	輪唱の指導	歌唱
1 「こんこんこな雪こんには」	東京都 松富節子	3	自発的	歌唱 創作
1 「スケーターワルツ」	京都府 多田周覚	4	鑑賞レコードと器楽合奏の有機結合	鑑賞 器楽
1 「星の世界」	神奈川県 笠松光子	5	音楽による人間形成	歌唱
1 「クレーゲルのメヌエット」	長崎県 松本真知子	6	個別化	器楽
2 (1年生から五線に親しみ書きおけいこをしましょう)	兵庫県 室之園美智子	1	リズム	歌唱 リズム
2 「きくの花」	埼玉県 持田保二	2	5領域の自然な結びつきの授業	歌唱 リズム
2 「ふじ山」	福島県 星芳昭	3	基礎的技術の育成とそうそうてきな表現する態度	歌唱 器楽
2 (器楽指導における学習形態のあり方への模索「ミューンボルカ」)	広島県 阿部己巳男	4	進んで	器楽
2 「星の世界」	三重県 平野二郎	5	生き生きと活動・豊かな夢	歌唱
2 (ひとりどりの作品をとおして)	大阪府 酒井三郎	6	聴音学習の取り組み(総合的に)	創作
3 「手をたたきましょう」	鳥根県 三成百枝	1	楽しさの中で基礎能力を	歌唱 リズム
3 「たのしいよる」	佐賀県 岩崎恵子	2	楽しむ心を育てる指導	歌唱 和音
3 (創造性をたかめるためのふしづくり)	奈良県 岩倉清子	3	創造性	創作
3 (4年生としての音楽の学習目標)	群馬県 大沢義弘	4	音楽を楽しむ子どもに	歌唱 器楽
3 「こいのぼり」	石川県 笠間昭子	5	自主的	歌唱 器楽
3 「ふるさと」	京都府 白井清美	6	一つの教材を総合的に(基礎指導の定着を目標に)	基礎

月・「教材」・(理論)	氏名	学年	中心内容(キーワード)	学習内容 領域等
1973/4 (全校合奏の中での一年生の役割)	山口県 原田咲子	1	小規模校の取り組み	合奏
4 「はるかぜそよそよやってきた」	東京都 松本恒敏	2	心情にうったえる	歌唱
4 「春の小川」	千葉県 海保淑子	3	指導計画展開例	歌唱 器楽
4 「子もり歌」	福島県 上遠野一也	4	創造的学力	歌唱
4 「春風」	東京都 大場利治	5	アンサンブル	器楽
4 (即興曲のための取り組み)	兵庫県 竹野光治	6	即興曲	創作
5 「ひのまる」	神奈川県 風間光子	1	効率的な授業	歌唱
5 (和音・和声の指導例一遊びを通して)	宮城県 佐藤則夫	2	和音・和声	基礎
5 「山の音楽家」	滋賀県 板坂康子	3	和音・和声	歌唱 基礎
5 「しもばしら」	岡山県 根木悟匡	4	創造的表現	創作
5 「こいのぼり」	茨城県 木村恒雄	5	へ長調の指導	歌唱 基礎
5 「こきょうの人々」	新潟県 小林綾	6	主体的	歌唱
6 「たなばたさま」	埼玉県 徳田延	1	リズム	歌唱 器楽
6 (ハーモニカの習得のために)	京都府 田口信二	2	自主的	歌唱
6 (鍵盤和声による主要三和音のひき方導)	秋田県 後藤昭三	3	和音・和声	器楽
6 「アマリス」	大分県 松浪和男	4	多様な学習内容	器楽
6 「サラバンド」	奈良県 山根奨	5	アンサンブル	器楽
6 「小鳥ならば」他	広島県 大森欣子	6	アンサンブル	器楽
7 「しろくまのジェンカ」	岩手県 桜花毅	1	表現の楽しさ	歌唱 身体反応
7 「さくらさくら」	鳥根県 成瀬重代	2	音楽を好きに	歌唱 器楽
7 (歌唱における和声感の養成)	熊本県 勝本家安	3	和声感	歌唱 基礎
7 「夏の日ぐれ」	神奈川県 小関邦衛	4	美しさ・楽しさ	歌唱
7 「おうまの親子」	大阪府 川端吉宏	5	喜びある授業	器楽
7 (児童に自信をもたせて)	東京都 中西茂富	6	自信を持たせる	全般
8 「なぞなぞ」	宮城県 相沢和幸	1	拍子感・和音感	歌唱
8 (自ら音楽する子どもを育てる学習指導)	宮崎県 横山雅子	2	自ら音楽する	全般
8 (笛が吹ける子に・美しい歌声を教室に)	埼玉県 西山安子	3	喜びある授業	歌唱 器楽
8 「茶つみ」	鳥取県 関原照枝	4	創作	器楽
8 「かえる」	群馬県 岡村六合子	5	基礎	歌唱 鑑賞
8 「メヌエット」	神奈川県 西木美智子	6	アンサンブル	器楽
9 「みつばちぶんぶん」	長野県 柴山正隆	1	リズム	基礎
9 「虫の声」	石川県 桶谷幸夫	2	印象	歌唱
9 「山の歌」	兵庫県 朝田知行	3	導入の工夫	歌唱
9 「村のかじや」	山形県 平栄子	4	自主的	器楽
9 「線路は続くよどこまでも」	鹿児島県 永吉慶次	5	リズム	器楽
9 (基礎能力の必要性・基礎の指導)	東京都 大山和子	6	基礎	全般
10 「ぶんぶんぶん」	東京都 榎内省三	1	楽しい授業	歌唱
11 (基礎を考えた指導事例「バイオリンはいいね」)	青森県 長内クニ子	2	基礎	基礎 創作
10 「ユーモレスク」	宮城県 佐藤美子	3	形式の取り扱い(鑑賞)	鑑賞
10 (子どもたちと確かめ合うーそろってスタートする喜び)	石川県 山瀬泰吾	4	創作	創作
10 (笛の吹けない子どものために)	神奈川県 古田あや子	5	リコーダー演奏習得の手だて	器楽
10 (音楽は楽しいもの、楽しい中で学ぶの)	長崎県 指方辰吾	6	楽しい授業	全般
11 「たんぼぼ」「12月のうた」ほか	新潟県 桑名紀子	1	楽しく聴こうとする意欲	歌唱
11 「たのしい夜」	埼玉県 熊谷高三	2	教材の系統性	歌唱
11 (できる喜び・ふしづくりを通して)	福島県 星市	3	できる喜び	創作
11 (小グループによる音楽学習「小川」)	広島県 伊藤敏	4	グループ学習	歌唱 器楽
11 (歌詞と音を結びつけて「線路のしと」)	三重県 坂久	5	歌詞と音の流れの一致	歌唱
11 「こきょうの人々」	大阪府 塚本茂	6	アンサンブル	器楽
12 「たきび」	奈良県 西村澄子	1	効果的指導	器楽
12 「パスパスはしる」	佐賀県 島本ソエ	2	身体表現	歌唱
12 「大きなくりの木の下で」	鳥根県 高岸博之	3	リコーダーの指導	器楽
12 「スケータースワルツ」	群馬県 波多野久子	4	活き活き	器楽
12 「小さい秋見つけた」	石川県 子山田秀一	5	主体的	歌唱
12 「まっかな秋」	京都府 塩見幸男	6	グループ学習	歌唱
1974/1 「なぞなぞ」	鹿児島県 上井みき	1	指導の仕方(オルガンパート)	器楽
1 (基礎的事項の定着を)「きたかぜふいて」	神奈川県 金元勇	2	基礎	基礎
1 「秋」「たのしいワルツ」	兵庫県 森本豊	3	演奏の仕方	歌唱 器楽
1 「子守歌」	栃木県 三浦角太郎	4	日本旋法	歌唱
1 「口ぶえふいて」	滋賀県 横山芳子	5	グループアンサンブル	歌唱 器楽
1 「冬景色」	青森県 塚合晟	6	問題意識	歌唱
2 (1年生から五線に親しみ書くおけいこをしましょう)	大阪府 植山光博	1	五線指導の仕方	記譜 器楽
2 「こいのぼり」	佐賀県 江頭九州男	2	基礎・楽しさ	創作 リズム
2 「スウェーデンマーチ」	石川県 小林茂	3	和音の聴きとり	器楽 基礎
2 (器楽指導における学習形態のあり方への模索「ミュンヘンホルカ」)	奈良県 松本たみ江	4	和声感	歌唱
2 「線路は続くよ」	京都府 西垣哲夫	5	小太鼓の指導	器楽
2 「ドレミの歌」	山梨県 渡辺和男	6	音の重なり(体位旋律)	歌唱
3 「どけいのうた」	東京都 千代延尚	1	授業展開の仕方	歌唱 器楽
3 「たのしいよる」	宮城県 末永聡行	2	基礎	基礎 歌唱
3 (中学年における美しい音づくりについて)	大阪府 福田正一	3	リコーダー指導の仕方	器楽
3 「とんび」	青森県 中沢善信	4	和音伴奏づくり	器楽
3 「一部形式(a, a')旋律即興」	新潟県 石塚治行	5	ふしづくり	即興表現
3 「そつらん節」	長野県 畔上純治	6	心から歌う喜び	歌唱

月・「教材」・(理論)	氏名	学年	中心内容(キーワード)	学習内容 領域等
1974/4 「ドレミの歌」	東京都 松本恒敏	1	階名指導	基礎
4 「さくらさくら」	東京都 高橋清	2	展開の仕方	歌唱
4 「春の小川」へんそうきょく	東京都 裨輝男	3	鑑賞の指導	鑑賞
4 「かすみか雲か」	東京都 石川仁助	4	3部形式に気づく	基礎
4 「春風」	東京都 三浦孝則	5	個別指導	器楽
4 「おぼろ月夜」	東京都 今成睦夫	6	一人一人	歌唱
5 「かごめかごめ」「ひらいたひらいた」	東京都 松本恒敏	1	童歌を中心に	歌唱 リズム
5 「こいのぼり」	東京都 高橋清	2	授業展開の仕方	歌唱
5 「アマリス」	東京都 裨輝男	3	合奏の取り組み方	器楽
5 「茶摘み」	東京都 石川仁助	4	授業の進め方	歌唱
5 「とんとんお寺の」	東京都 三浦孝則	5	日本旋法の指導法	歌唱
5 「川はよんでる」	東京都 今成睦夫	6	指導の展開	歌唱 器楽
6 「くちぶえふきとこいぬ」	東京都 松本恒敏	1	鑑賞の授業展開	歌唱 器楽 基礎
6 「かっこう」	東京都 高橋清	2	授業の進め方	歌唱 器楽 鑑賞
6 「みんなでおどろう」	東京都 裨輝男	3	合奏指導	器楽
6 「子もり歌」	東京都 石川仁助	4	速度の工夫	歌唱 身体反応
6 「山のごちそう」	東京都 三浦孝則	5	授業の進め方	歌唱
6 「野いちご」「弦楽セレナーデ」	東京都 今成睦夫	6	指導計画	歌唱 鑑賞
7 「きらきらぼし」	東京都 松本恒敏	1	指導方法(ハーモニカ)	器楽
7 「しゃぼんだま」	東京都 高橋清	2	指導法(合奏)	歌唱 器楽 基礎
7 (3年生の笛のねらい)	東京都 裨輝男	3	指導法(リコーダー)	歌唱 器楽 基礎
7 「夏の日くれ」	東京都 石川仁助	4	授業展開の仕方	器楽
7 「おうまの親子」	東京都 三浦孝則	5	横笛の指導法	器楽 歌唱
7 「われは海の子」	東京都 今成睦夫	6	7月の指導計画	歌唱
8 (1年生の評価について)	東京都 松本恒敏	1	評価	評価
8 (2年生の評価について)	東京都 高橋清	2	評価	評価
8 (3年生の評価について)	東京都 裨輝男	3	評価	評価
8 (子どもたちとの出会い-ふれあうよるび)	東京都 山田好文	4	築き上げる喜び	歌唱 器楽
8 (5年生の評価)	東京都 三浦孝則	5	評価	鑑賞
8 (6年生の評価)	東京都 今成睦夫	6	評価	全般(創作)
9 「つき」	東京都 橋本恭子	1	指導のポイント	歌唱
9 「とんぼのめがね」	東京都 志田芳久	2	授業展開例	基礎 表現
9 「秋」	東京都 遊佐幸章	3	和音の判別	基礎
9 (子どもたちと確かめ合う-認め合う喜び)	東京都 山田好文	4	学級集団	全般
9 「一二三鉢返しの調べ」	東京都 茅原芳男	5	展開の仕方	鑑賞
9 「思い出」	東京都 平野元清	6	主体的	歌唱
10 「ぶんぶんぶん」	東京都 橋本恭子	1	和音	歌唱
11 (基礎を考えた指導事例「バイオリンはいいね」)	東京都 志田芳久	2	授業展開例	同前
10 「金こんしき」	東京都 遊佐幸章	3	鑑賞の指導法	鑑賞
10 (子どもたちと確かめ合う-そろってスタートする喜び)	東京都 山田好文	4	学級集団	全般
10 (笛の吹けない子どものために)	東京都 茅原芳男	5	楽しく	全般
10 (わが名はカウボーイ)	東京都 平野元清	6	グループ学習	歌唱 器楽
11 「耳をすましてごらん」	東京都 橋本恭子	1	楽しく聴こうとする意欲	器楽
11 「ゆうやけ」「トルコ行進曲」	東京都 志田芳久	2	鑑賞指導のポイント	鑑賞 歌唱
11 「あわてんぼうのうた」	東京都 遊佐幸章	3	合奏の工夫	器楽
11 (子どもたちと聞き合う-味わう喜び)	東京都 山田好文	4	主体的に取り組む	歌唱 基礎
11 (器楽合奏に和楽器)	東京都 茅原芳男	5	日本音楽を中心に	器楽
11 「魔王」	東京都 平野元清	6	授業展開例	鑑賞
12 (子どもはみんな音楽が好き)	東京都 橋本恭子	1	主体的に取り組む	全般
12 「サンタのおじさん」	東京都 志田芳久	2	即興的表現	リズム
12 「子ぎつね」	東京都 遊佐幸章	3	和音の学習	歌唱
12 (子どもたちと聞き合う-伸びる喜び)	東京都 山田好文	4	聴き合い	器楽
12 (旋律創作について)	東京都 茅原芳男	5	創作野学習	創作
12 (音楽科テストへの試み)	東京都 平野元清	6	楽典テスト	基礎
1975/1 「おもちゃのまーち」	東京都 石水修二	1	楽しい学習活動を通して	基礎あそび
1 「ゆき」	東京都 宮崎敦子	2	リズム	歌唱
1 「スケート」「メヌエット」	東京都 山田宏	3	指導法	鑑賞
1 (教材選定の視点と指導上の留意点)	東京都 高橋昭五	4	個別指導	歌唱 器楽
1 「ずいずいずっころばし」	東京都 伊藤明	5	日本の音楽	歌唱
1 「メヌエット」	東京都 佐久間英夫	6	グループ合奏	器楽
2 (1年生から五線に親しみ書くおけいこをしましょう)	東京都 石水修二	1	基礎	基礎
2 「ふるいもくば」	東京都 宮崎敦子	2	曲想の工夫	歌唱 器楽
2 「手まりうた」	東京都 山田宏	3	リズム伴奏の工夫	歌唱 器楽
2 (器楽指導における学習形態のあり方への模索「ミンヘンボルカ」)	東京都 高橋昭五	4	グループ学習	器楽
2 (創作のまとめ「学級の歌をつくらう」)	東京都 伊藤明	5	学級のうたづくり	創作
2 (和音の学習を笑音を通して)	東京都 佐久間英夫	6	和音の学習	基礎
3 「そっさん」「子熊のジェンカ」「しし王の行進」	東京都 清水修二	1	楽しい授業	歌唱 鑑賞
3 「たのしいよる」	東京都 宮崎敦子	2	和音の聴き分け	基礎(和音)
3 「もうすぐ春」	東京都 山田宏	3	学習のまとめとしての展開	全般
3 (音楽を楽しむということ)	東京都 高橋昭五	4	音楽を楽しむ	全般
3 (評価について)	東京都 伊藤明	5	評価	評価
3 「こきょうの人々」	東京都 佐久間英夫	6	和声の学習	歌唱 器楽

月 「教材」 (理論)	氏名	学年	中心内容(キーワード)	学習内容 領域等
1975/4 「夜があけた」	東京都 荻節子	1	楽しく出会う	歌唱 基礎
4 「さくらさくら」	東京都 横川公二	2	日本旋法の指導法	歌唱(日本歌)
4 「春の小川」	東京都 田中喜雄	3	指導計画の実際	全般
4 (4年生という時期と無条件の愛について)	東京都 土田敏夫	4	教師と共に学習し、楽しむ授業	全般
4 「春の風」	東京都 大平秀弥	5	指導のポイント	歌唱
4 「おぼろ月夜」	東京都 黒田孝一	6	積極的 創造的	歌唱
5 「日のまる」	東京都 荻節子	1	楽器を加えて楽しく	歌唱 器楽
5 「きんこんかん」	東京都 横川公二	2	基礎を大切にしたい指導計画	歌唱 器楽
5 「せいくらべ」他	東京都 田中喜雄	3	たて笛の初歩指導	歌唱 器楽
5 (リズムにポイントをおいた指導の実例)	東京都 土田敏夫	4	基礎領域を中心とした指導(リズム)	基礎
5 「こいのぼり」	東京都 大平秀弥	5	へ長調の指導	基礎 器楽
5 「喜びの歌」「川はよんでいる」	東京都 黒田孝一	6	自主的な音楽学習	基礎 鑑賞
6 「かたつむり」	東京都 荻節子	1	和音	歌唱 基礎
6 「かっこう」	東京都 横川公二	2	和音	歌唱 鑑賞
6 (たて笛の練習)	東京都 田中喜雄	3	縦笛の指導	器楽
6 「子もり歌」	東京都 土田敏夫	4	個に応じた指導例	歌唱(日本旋法)
6 「山のごちそう」	東京都 大平秀弥	5	授業形態の工夫	全般
6 「ピクニック」「野ばら」	東京都 黒田孝一	6	正しい発声で美しく	歌唱
7 「うみ」	東京都 荻節子	1	工夫して、楽しく	歌唱 身体反応
7 「しゃぼんだま」	東京都 横川公二	2	ハーモニカの指導ポイント	歌唱 基礎
7 「みなと」	東京都 田中喜雄	3	指導計画例	歌唱 基礎
7 「夏の日ぐれ」	東京都 中島貞子	4	動唱表現	全般
7 「おうまの親子」	東京都 大平秀弥	5	心にふれる表現力	歌唱
7 「ペールギュント」	東京都 黒田孝一	6	主体的 意欲	鑑賞
8 「ぞうさんとくものす」	東京都 荻節子	1	音楽の生活化	歌唱
8 (音楽嫌いの子どもをなくすために)	東京都 横川公二	2	教材の精選	全般
8 (音楽の生活化のために)	東京都 田中喜雄	3	音楽の生活化(全校音楽)	歌唱 器楽
8 (音楽の生活化)	東京都 中島貞子	4	音楽の生活化	歌唱
8 (笛のレポートをふやすために)	東京都 大平秀弥	5	愛好曲をふやすために	歌唱 鑑賞
8 (生活化の前に)	東京都 黒田孝一	6	学級での生活化	全般
9 「もっくん」	鳥取県 下田幸男	1	統合的な取り扱い(基礎を根幹として)	歌唱 器楽
9 「とんぼのめがね」	京都府 小谷輝雄	2	到達度評価	評価
9 「秋」	広島県 清水源康	3	カリキュラム作成の必要性	歌唱 器楽
9 「100点あげたいな」	福島県 荒川吉弘	4	合唱指導のポイント	歌唱
9 「ゆかいに歩けば」	兵庫県 田中安夫	5	歌の心	歌唱
9 「めんどりマーチ」	大阪府 初井律夫	6	協力し合う	器楽
10 「ぶんぶんぶん」	鳥取県 下田幸男	1	即興的表現	器楽
11 (基礎を考えた指導事例「バイオリンはいいね」)	京都府 小谷輝雄	2	目標確認により意欲を高める	全般
10 「おほしが光る」	広島県 清水源康	3	和音の聞き取り	器楽 基礎
10 (子どもたちと確かめ合うーそろってスタートする喜び)	福島県 荒川吉弘	4	たて笛の指導	器楽
10 (笛の吹けない子どものために)	兵庫県 田中安夫	5	声づくり	歌唱
10 「めんどりマーチ」	大阪府 初井律夫	6	グループ練習	器楽
11 「ギャロップ」	鳥取県 下田幸男	1	楽しく聴こうとする意欲	鑑賞
11 (生きて働く力)	京都府 小谷輝雄	2	記譜の指導について	基礎
11 「軽騎兵」序曲	広島県 清水源康	3	鑑賞の指導法	鑑賞
11 (創作指導のための基礎指導)	福島県 荒川吉弘	4	創作の指導法	創作
11 (音楽室づくりに思うこと)	兵庫県 田中安夫	5	一人一人を生かす学習指導法	全般
11 「飛べよ飛べ」	大阪府 初井律夫	6	指導のポイント	器楽
12 (1年生のハーモニー指導)	鳥取県 下田幸男	1	ハーモニー(和声)感を養う	基礎
12 「ウィーンの音楽時計」	京都府 小谷輝雄	2	鑑賞の指導法	鑑賞
12 (創造的なアンサンブルの指導)	広島県 清水源康	3	創造的学習	器楽
12 (具体的な創作指導)	福島県 荒川吉弘	4	創作の指導法	創作
12 「ぼくは行くんです」	兵庫県 田中安夫	5	手作り教材	歌唱 器楽
12 「ドレミの歌」	大阪府 初井律夫	6	ラテンリズムを入れて	器楽
1976/1 (子どもの求めるものは何か)	東京都 楠瀬敏則	1	生活との関連	歌唱 器楽
1 「たのしいそりあそび」	東京都 宮本欣哲	2	2年生の特徴を生かした鑑賞指導	鑑賞
1 「ふじ山」	東京都 黒田卓馬	3	自主的創造的な学習をめざして	合奏
1 「ホルン協奏曲」	東京都 加藤肇	4	4年生3学期の指導のポイント	全般
1 「スキー」	東京都 瀬戸匡弘	5	教材研究の仕方	歌唱
1 「駆馬車」	東京都 間嶋春夫	6	世界の音楽(民謡)の取り扱い	歌唱
2 (1年生から五線に親しみ書くおけいこをしましょう)	東京都 楠瀬敏則	1	音楽の授業で何をするか	歌唱
2 「ふるいもくば」	東京都 宮本欣哲	2	3拍子のリズム	合奏
2 「ボンボンピアノ」	東京都 黒田卓馬	3	歌唱教材の合奏編曲と扱い	歌唱 合奏
2 (器楽指導における学習形態のあり方への模索「ミンヘンボルカ」)	東京都 加藤肇	4	和音の指導 リズムの重要性	合奏
2 「燈台もり」	東京都 瀬戸匡弘	5	歌唱指導の重点	歌唱
2 「ボキ-大佐」	東京都 間嶋春夫	6	合奏指導の重点	合奏
3 (教材選択も指導方法も探求的に)	東京都 楠瀬敏則	1	指導の手順(鑑賞 演奏 創作)	全般
3 「たのしいよる」	東京都 宮本欣哲	2	楽しく歌う	全般
3 「ボンボンピアノ」	東京都 黒田卓馬	3	音楽の楽しさ ひとりひとりにスポットを当てた指導	全般
3 (しめくりと反省)	東京都 加藤肇	4	一人一人と取り組む	全般
3 「友だちよ」	東京都 瀬戸匡弘	5	子供と共に楽曲の研究を	歌唱
3 「一つのこと」	東京都 間嶋春夫	6	卒業式の歌(一つのこと)の指導例	歌唱

月 「教材」 (理論)	氏名	学年	中心内容(キーワード)	学習内容 領域等
1976/4「ちゅうりつぷ」	埼玉県 市村良恵子	1	身体反応	歌唱 身体反応
4「さんぽ」	東京都 今成睦夫	2	リズム感の育成	歌唱 身体表現
4「春の小川」	東京都 高橋清	3	音楽言葉(階名)を増やす	基礎
4「かすみか雲か」	東京都 瀬戸弘子	4	アンサンブルの創作	器楽 基礎
4「春の風」	神奈川県 戒能蘭子	5	各領域での指導のポイント	歌唱 器楽
4「おぼろ月夜」	東京都 千代延尚	6	曲想の工夫	歌唱
5「ぶんぶんぶん」	埼玉県 市村良恵子	1	のびのびとうたう	歌唱
5「きんこんかん」 ゆうやけこやけ	東京都 今成睦夫	2	輪唱	歌唱
5「おどり」	東京都 高橋清	3	美しい笛の音	器楽
5「アマリリス」	東京都 瀬戸弘子	4	スタカート奏法	器楽
5「こいのぼり」	神奈川県 戒能蘭子	5	へ長調の階名視唱の導入	基礎
5「川はよんでる」	東京都 千代延尚	6	ト長調の階名唱	基礎
6「かたつむり」	埼玉県 市村良恵子	1	導入の工夫	歌唱 器楽
6「あんたがたどこさ」「おちゃらかほい」	東京都 今成睦夫	2	童歌あそび	歌唱 鑑賞
6いろいろなるわらべうた	東京都 高橋清	3	童歌でアンサンブル	器楽
6「子もりうた」	東京都 瀬戸弘子	4	日本旋法の理解	基礎
6「 Rond」	神奈川県 戒能蘭子	5	鑑賞指導のポイント	鑑賞
6「喜びの歌」	東京都 千代延尚	6	曲の構成の素晴らしさを伝える	器楽
7「うみ」	埼玉県 市村良恵子	1	歌うことに自信を持たせる指導法	歌唱
7「トルコ行進曲」「クシコスポスト」ほか	東京都 今成睦夫	2	歌って覚える	歌唱 基礎
7「みなと」	東京都 高橋清	3	拍子感の育成	歌唱 基礎
7「夏の日くれ」	東京都 瀬戸弘子	4	8分の6拍子 長調と短調の指導法	基礎
7「おうまの親子」	神奈川県 戒能蘭子	5	合唱を好きに	歌唱
7「われは海の子」	東京都 千代延尚	6	視聴覚機器の活用	器楽
8「リズムあそび ふしあそび」	埼玉県 市村良恵子	1	リズム遊び ふし遊び	基礎
8いろいろなジェスチャーソング	東京都 今成睦夫	2	キャンプファイヤーのための歌唱指導	歌唱
8喜歌劇「軽騎兵」	東京都 高橋清	3	鑑賞指導の試み(よりよい音楽体験で自主性を)	鑑賞
8拍子あて和音書取り	東京都 瀬戸弘子	4	音楽的要素	基礎
8「線路は続くよどこまでも」「夏の山」	神奈川県 戒能蘭子	5	夏休みの課題	歌唱 器楽
8「若者たち」	東京都 千代延尚	6	学校行事と音楽	器楽
9「つき」	埼玉県 池田宏章	1	情趣に合った表現	歌唱 器楽
9「おしのこえ」	千葉県 矢島弘	2	曲のイメージ	歌唱 器楽
9「秋」	東京都 陣内省三	3	階名唱 和音伴奏ののって	歌唱 基礎
9「山の音楽家」	東京都 石水修二	4	子どもたちがつくる学習計画	歌唱
9「線路は続くよどこまでも」	東京都 畠沢郎	5	曲の感じをとらえて	歌唱
9「思い出」	静岡県 野中豊治	6	曲のイメージ	歌唱
10「ぶんぶんぶん」	埼玉県 池田宏章	1	創造的な歌唱の工夫	歌唱
11(基礎を考えた指導事例「バイオリンはいいね」)	千葉県 矢島弘	2	3部形式の楽しい指導	歌唱
10「もみじ」	東京都 陣内省三	3	フレーズ感 正しい発音	歌唱
10(子どもたちと確かめ合うーそろってスタートする喜び)	東京都 石水修二	4	他の学習内容と関連づけて	鑑賞
10(笛の吹けない子どものために)	東京都 畠沢郎	5	表情豊か 響きのある歌声	歌唱
10「こきょうの人々」	静岡県 野中豊治	6	創造的な活動の場	合奏
11「おうま」	埼玉県 池田宏章	1	楽しく聴こうとする意欲	合奏
11「がちょうのおいのり」	千葉県 矢島弘	2	お話の歌	歌唱
11「あわてんぼうのうた」	東京都 陣内省三	3	リズム伴奏の工夫	歌唱
11「子もりうた」	東京都 石水修二	4	グループ学習	合奏
11「橋の上で」	東京都 畠沢郎	5	リズム伴奏の工夫 和声の流れ	合奏
11「メヌエット」	静岡県 野中豊治	6	パート別練習で演奏技能をのばす	合奏
12「たきび」	埼玉県 池田宏章	1	たきびの展開例	歌唱 合奏
12「たのしいよる」	千葉県 矢島弘	2	イメージ 曲の形式 和音感覚	歌唱
12「小さいね」	東京都 陣内省三	3	和音の感覚をつかみ和音伴奏する	合奏
12「かわいい小ぎく」	東京都 石水修二	4	歌心を大切に	器楽
12「古いイギリスの歌」	東京都 畠沢郎	5	小アンサンブルを楽しむ	器楽
12「きよこの夜」	静岡県 野中豊治	6	美しい和音の響きのある合唱	歌唱
1977/1「なべなべ そこぬけ」	埼玉県 中島静江	1	わらべ歌で遊ぼう	歌唱
1「ゆき」	千葉県 小川正	2	リズムの感得	歌唱
1「ぶじ山」	東京都 柳田秀武	3	グループ合奏を楽しもう	合奏
1(豊かな歌唱表現を高めるために)	東京都 小島正一	4	歌唱表現力を高める	歌唱
1「スキー」	東京都 木塚光雄	5	ねらいを明確にして	歌唱
1「だれもいない海」	千葉県 石橋早苗	6	歌う楽しさのための展開	歌唱
2(1年生から五線に親しみ書くおけいこをしましょう)	埼玉県 中島静江	1	歌詞内容を想像して	歌唱
2「こくまの2月」	千葉県 小川正	2	リズム伴奏の工夫	合奏
2「あわてんぼうのうた」	東京都 柳田秀武	3	きれいな音で	合奏
2(器楽指導における学習形態のあり方への模索「ミュンヘンホルカ」)	東京都 小島正一	4	創作の導入	創作
2「古いフランスの歌」	東京都 木塚光雄	5	表現と鑑賞を一体化して	鑑賞
2「こぶたのラッパ」	千葉県 石橋早苗	6	輪唱の仕組みをしり楽しく歌う	歌唱
3「ももたろう」	埼玉県 中島静江	1	劇化を工夫し楽しく演出する	歌唱 創造的活
3「たのしいよる」	千葉県 小川正	2	和音の感得	歌唱 基礎
3(評価を次年度の指導に生かそう)	東京都 柳田秀武	3	評価表の工夫	評価
3(美しい笛の奏法を身につけよう)	東京都 小島正一	4	美しい笛の奏法	器楽
3「小人のおどり」	東京都 木塚光雄	5	5年のまとめを中心として	基礎 創作
3(卒業音楽会をひらく)	千葉県 石橋早苗	6	創作発表	創作

(昭和59年度から昭和63年度)

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)の やさしい声・の びのびと 音の発見・喜び	学習内容 領域等
1984/4 1年生の歌声を考える時に 4 たのしいとけい「時計の歌」他	兵庫県 岩崎純子 大阪府 藤原孝郎	1・やさしい声でのびのびとうたおう1 2・音を発見し、表現する喜びを1	歌唱	歌唱 つくって表現 身体表現
4 リズムにのって楽しく歌おう「ゆかいなまきば」 4 曲の感じをつかんで表現しよう「おどろろ楽しい ポーレチケ」	北海道 井田英子 岩手県 太田代政男 新潟県 丸田勲	3・つくる喜びを高める音楽学習1 4・表現の喜びを求めて1 5・喜び、満足する音楽学習をめざして1	表現の喜び 喜び・満足 自主的活動	歌唱 身体表現 歌唱 器楽 歌唱 器楽
4 響きのある歌声を工夫しよう「グリーングリーン」 4 春の喜びを歌おう「おぼろ月夜」他	東京都 野依由美子 兵庫県 岩崎純子	6・児童の自主的活動を育てる音楽指導1 1・やさしい声でのびのびとうたおう2	同前	同前
5 たのしくイメージさせながら「おつかいありさん」 5 まねっこあそび「山びこっこ」	大阪府 藤原孝郎	2・音を発見し、表現する喜びを2	同前	同前
5 さあ、いっしょに出かけよう「ドレミでレッツ ゴー」他	北海道 井田英子	3・つくる喜びを高める音楽学習2	同前	歌唱 つくって 表現
5 輪唱を楽しく「蛙の合唱」「うたいましょう」	岩手県 太田代政男	4・表現の喜びを求めて2	同前	歌唱
5 へ長調の楽譜を見て演奏しよう「オカリナのおか」 5 みんなで工夫して合奏しよう「鳥と少年」	新潟県 丸田勲 東京都 野依由美子	5・喜び、満足する音楽学習をめざして2 6・児童の自主的活動を育てる音楽指導2	同前	へ長調の理解 合唱 合唱
6 発声練習といっしょに「たきび」 6 のりもの「バスこっこ」	兵庫県 岩崎純子 大阪府 藤原孝郎	1・やさしい声でのびのびとうたおう3 2・音を発見し、表現する喜びを3	同前	同前
6 お話をするように歌おう「アイアイ」「森のくまさん」	北海道 井田英子	3・つくる喜びを高める音楽学習3	同前	歌唱
6 音楽物語をつくらう「ねんねんねむれよつくみの 子」	岩手県 太田代政男 新潟県 丸田勲	4・表現の喜びを求めて3 5・レザナーイタを使用した鑑賞指導1	同前	つくって表現 鑑賞
6 行進曲を軽快に演奏しよう「ボキキ大佐」 7 曲遊びの基準「おおブレネリ」	東京都 野依由美子 兵庫県 岩崎純子	6・児童の自主的活動を育てる音楽指導3 1・やさしい声でのびのびとうたおう4	同前	器楽 同前
7 リズムにのって「いろいろダンス」 7 こはやリズムの感じを生かして楽しく歌おう「南 の国のハメハメハ大王」	大阪府 藤原孝郎 北海道 井田英子	2・音を発見し、表現する喜びを4 3・つくる喜びを高める音楽学習4	同前	歌唱 リズム 歌唱
7 学年合唱発表会をしよう「宇宙船のパラード」他 7 「ます」	岩手県 太田代政男 新潟県 丸田勲	4・表現の喜びを求めて4 5・レザナーイタを使用した鑑賞指導2	同前	同前
7 ロックにのって合奏しよう「クリーゲルのメヌエッ ト」	東京都 野依由美子	6・児童の自主的活動を育てる音楽指導4	同前	器楽
8 1年生の発声のまとめ 8 秋の虫「虫の声」	兵庫県 岩崎純子 大阪府 藤原孝郎	1・やさしい声でのびのびとうたおう5 2・音を発見し、表現する喜びを5	同前	歌唱 つくって表現
8 楽しく輪唱使用「毛虫が三びき」「かねが鳴る」 8 リズムにのって楽しく「茶色のこびん」他	北海道 井田英子 岩手県 太田代政男	3・つくる喜びを高める音楽学習5 4・表現の喜びを求めて5	同前	歌唱 器楽
8 「滝廉太郎の歌」 8 音楽で心を結び合おう「今日の日ばさようなら」	新潟県 丸田勲 東京都 野依由美子	5・レザナーイタを使用した鑑賞指導3 6・児童の自主的活動を育てる音楽指導5	同前	同前 器楽
9 みんなでできよう元気よく「おんがくたいがやっ てる」他	愛知県 菅野道夫	1・いろいろなリズムで音楽しよう1	リズム	全般
9 「橋の上で」 9 どんな声か美しいか気づいて歌おう「花のうた」	奈良県 後藤充郎 熊本県 関栄	2・音楽学習への新しいアプローチ1 3・音を聴き合って表現する2	即興的表現(つく って表現)	即興表現 歌唱
9 ようすを思いうかべて「白鳥」他	宮城県 結城潔美	4・ひとりひとりに応じられる指導をめざし て1	ひとりひとり	鑑賞
9 うたい方の工夫「ゆかいに歩けば」他 9 郷土の歌を演奏しよう「大山賛歌 わがこころの 山」	石川県 毛利佳世子 鳥取県 金森弘弘	5・ひとりひとりが生き生きと音楽学習をする ために1 6・ひとりひとりを大切にした音楽教育1	生き生き	歌唱 器楽
10 楽しく「ウン パッ」「るる ららら るるん るん」	愛知県 菅野道夫 奈良県 後藤充郎	1・いろいろなリズムで音楽しよう2 2・音楽学習への新しいアプローチ2	同前	歌唱 リズム 歌唱
10 リズムにのって表現しよう「基本のリズム」 10 リズムにのって「風船はいかが」	熊本県 関栄 宮城県 結城潔美	3・音を聴き合って表現する3 4・ひとりひとりに応じられる指導をめざし て2	リズム	リズム 器楽
10 豊かな表現の工夫「オペレッタ」物語づくり 10 二部合唱をしよう「まっかな秋」	石川県 毛利佳世子 鳥取県 金森弘弘	5・ひとりひとりが生き生きと音楽学習をする ために2 6・ひとりひとりを大切にした音楽教育2	同前	物語づくり 歌唱
11 ネコの鳴き声3拍子「おどろこねこ」 11 音の創作「自分のリズムをつくらう」他	愛知県 菅野道夫 奈良県 後藤充郎	1・いろいろなリズムで音楽しよう3 2・音楽学習への新しいアプローチ3	同前	鑑賞 器楽
11 消えていく音「カノンの余韻を楽しむ」「かねがな る」	熊本県 関栄	3・音を聴き合って表現する4 4・ひとりひとりに応じられる指導をめざし て3	主体的学習	歌唱
11 美しくひびく声をくふうしよう「もみじ」 11 豊かな表現の工夫「オペレッタ」物語づくり2	宮城県 結城潔美 石川県 毛利佳世子	5・ひとりひとりが生き生きと音楽学習をする ために3 6・ひとりひとりを大切にした音楽教育3	同前	歌唱 曲づくり
11 場面を想像して「ペーパークラフト」	鳥取県 金森弘弘		同前	鑑賞
12 クリスマスには魔女もおどる「魔女のスキップ」 12 子どもが生きる音楽会	愛知県 菅野道夫 奈良県 後藤充郎	1・いろいろなリズムで音楽しよう4 2・音楽学習への新しいアプローチ4	同前	遊び感覚の中 でリズムにの る指導 音楽会
12 声まねをしよう「おーい海」「春の風」他 12 音の重なりや響きをつけて合奏しよう「ドミニク」他	熊本県 関栄 宮城県 結城潔美	3・音を聴き合って表現する4 4・ひとりひとりに応じられる指導をめざし て4	聴き合い	合奏
12 豊かな表現の工夫「オペレッタ」物語づくり3 12 リズムを生かそう「スキー」	石川県 毛利佳世子 鳥取県 金森弘弘	5・ひとりひとりが生き生きと音楽学習をする ために4 6・ひとりひとりを大切にした音楽教育4	同前	オペレッタ 歌唱 器楽
1985/1 うたにあわせて「ぶんぶんぶん」 1 気持ちをこめて「たぬきのたにこ」	鳥取県 谷野安子 沖縄県 喜久山英子	1・基礎的能力を楽しく身につける学習展開 2・豊かに感じとり、表現する喜びを1	同前	歌唱 基礎 歌唱 拍子感
1 わらべ歌で楽しもう「うさぎ」 1 リズムや旋律のおもしろさを感じて歌おう「雪山賛 歌」	熊本県 吉田朝海 大阪府 天野俊捷	3・曲の持ち味を味わってより楽しく1 4・曲奏表現力を養う学習指導1	同前	歌唱 曲想表現力
1 曲想を工夫して楽しく表現しよう「スキーの歌」 1 三部合唱をしよう「かりがわたる」	徳島県 船越節子 神奈川県 藤沢市授 業セミナー研究員	5・より美しいものを求めて工夫する子ども の育成1 6・楽しい音楽の授業めざして1	工夫(美しさ)	歌唱 歌唱 身体表現
2 リズムにのって「いろいろダンス」 2 「たぬきのたにこ」	鳥取県 谷野安子 沖縄県 喜久山英子	1・基礎的能力を楽しく身につける学習展開 2・豊かに感じとり、表現する喜びを2	同前	リズム 器楽
2 気持ちよこめて歌おう「大きな歌」 2 美しいひびきを楽しもう「スケターズワルツ」	熊本県 吉田朝海 大阪府 天野俊捷	3・曲の持ち味を味わってより楽しく2 4・曲奏表現力を養う学習指導2	同前	歌唱 器楽
2 日本の音楽に親しもう「子守歌」 2 曲の形をつかんで歌おう「思い出」	徳島県 船越節子 神奈川県 藤沢市授 業セミナー研究員	5・より美しいものを求めて工夫する子ども の育成2 6・楽しい音楽の授業めざして2	同前	即興表現 歌唱
3 「サンバを踊ろう」 3 おはなしの音楽「オペレッタがちょうおいのり」	鳥取県 谷野安子 沖縄県 喜久山英子	1・基礎的能力を楽しく身につける学習展開 3 2・豊かに感じとり、表現する喜びを3	同前	身体表現 リズム オペレッタ
3 気持ちを揃えて演奏しよう「ふし山」 3 曲の特徴を感じて聴いたり、演奏したりする「きゅ う友」	熊本県 吉田朝海 大阪府 天野俊捷	3・曲の持ち味を味わってより楽しく3 4・曲奏表現力を養う学習指導3	同前	同前 鑑賞
3 音の重なりや響き合いを感じとりながら表現しよう 「冬景色」「まどを聞いて」	徳島県 船越節子 神奈川県 藤沢市授 業セミナー研究員	5・より美しいものを求めて工夫する子ども の育成3 6・楽しい音楽の授業めざして3	同前	歌唱 即興演 奏
3 合唱の楽しさを味わおう「故郷の人々」			同前	歌唱 創作

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年 テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1985/4 「あなたのなまえ」	滋賀県 中井憲照	1 うたう楽しさ求めて1	歌う楽しさ	歌唱
4 「山びこあそび」	広島県 金子佳子	2 主体的に取り組む音楽学習1	主体的に取り組む	歌唱
4 明るい声で「小鳥の音楽」	福島県 大堀満広	3 楽しさを共に分かちあう音楽学習1	楽しさを分かち合う	歌唱
4 「さくらさくら」	秋田県 進藤彰一	4 より美しい声に目ざめさせるために1	美しい声	歌唱
4 軽やかに、春を歌おう「春の山」	埼玉県 藤田久男	5 豊かな感受性 表現力をひきだす学習1	感受性 表現力	歌唱
4 「誰かが口笛ふいた」	静岡県 福元禮子	6 個のちがいを生かした合唱指導1	個を生かす	歌唱
5 「たんたんたん」のリズムを感じて表情豊かに表現する「ぶんぶんぶん」他	滋賀県 中井憲照	1 うたう楽しさ求めて2	同前	同前
5 よびかけあそび「パスパスはしる」	広島県 金子佳子	2 主体的に取り組む音楽学習2	同前	同前
5 たて笛といっしょに「アチャバチャノチャ」	福島県 大堀満広	3 楽しさを共に分かちあう音楽学習2	同前	評価
5 「大きな歌」	秋田県 進藤彰一	4 より美しい声に目ざめさせるために2	同前	同前
5 輪唱から合唱へ、お互いの声部を聴き合って歌おう「朝のあいさつ」他	埼玉県 藤田久男	5 豊かな感受性 表現力をひきだす学習2	同前	同前
5 「手」	静岡県 福元禮子	6 個のちがいを生かした合唱指導2	同前	同前
6 フレーズのまとまりを感じて、楽しい表現をつくる「かたつむり」他	滋賀県 中井憲照	1 うたう楽しさ求めて3	同前	同前 リズム
6 たのしいリズム「かっこう」「ジャングルジム」	広島県 金子佳子	2 主体的に取り組む音楽学習3	同前	歌唱 身体表
6 ドレミと五線「ゆかいな木琴」	福島県 大堀満広	3 楽しさを共に分かちあう音楽学習3	同前	基礎
6 (表情指導1-7)	秋田県 進藤彰一	4 より美しい声に目ざめさせるために3	同前	同前
6 美しいひびきのある声を見つけよう「グリーングリーン」	埼玉県 藤田久男	5 豊かな感受性 表現力をひきだす学習3	同前	同前
6 「ドナドナ」	静岡県 福元禮子	6 個のちがいを生かした合唱指導3	同前	同前
7 拍の流れのついで、「私の表現」をつくらう「たなばた」「うみ」	滋賀県 中井憲照	1 うたう楽しさ求めて4	同前	歌唱
7 明るい声で「シャボンだま」「どんぼのめがね」	広島県 金子佳子	2 主体的に取り組む音楽学習4	同前	歌唱
7 楽しいリズム「かえるのびよんた」	福島県 大堀満広	3 楽しさを共に分かちあう音楽学習4	同前	リズム
7 ふしの形による感じの連いに気をつけて演奏しよう「とんび」「友達賛歌」	秋田県 進藤彰一	4 より美しい声に目ざめさせるために4	同前	同前
7 歌劇「ウィリアム テル」序曲	埼玉県 藤田久男	5 豊かな感受性 表現力をひきだす学習4	同前	鑑賞
7 「友達賛歌」	静岡県 福元禮子	6 個のちがいを生かした合唱指導4	同前	同前
8 (一学期にめざしたこと)	滋賀県 中井憲照	1 うたう楽しさ求めて5	同前	全般
8 ふしのりり	広島県 金子佳子	2 主体的に取り組む音楽学習5	同前	創作
8 「うさぎ」	福島県 大堀満広	3 楽しさを共に分かちあう音楽学習5	同前	歌唱
8 リズムや旋律の特徴を生かして、楽しい表現をしよう「おどろろ楽しいポーレチケ」	秋田県 進藤彰一	4 より美しい声に目ざめさせるために5	同前	同前
8 へ長調のふしに親しむ「川はよんでる」	埼玉県 藤田久男	5 豊かな感受性 表現力をひきだす学習5	同前	歌唱 基礎
8 「空がこんなに青いとは」	静岡県 福元禮子	6 個のちがいを生かした合唱指導5	同前	同前
9 (1、2学期の最初の出会いを大切に)	東京都 岩上広志	1 レパートリーを広げよう1	レパートリー	歌唱 器楽
9 リズムのついでようげんしよう「虫の声」	宮城県 佐藤久	2 「関心 態度」の評価資料を求めて1	評価(関心 態度)	評価
9 リズムのついで「アルプスーまんじゃく」	広島県 佐倉京子	3 自分で工夫して楽しむ音楽学習1	楽しむ(自分で)	創作
9 「わたしはそよかせ」	大分県 田中達	4 美しい響きをもった歌声めざして1	美しい響き	歌唱
9 「鹿児島おはら節」	兵庫県 河野輝昭	5 鍵盤ハーモニカのレパートリーづくり1	レパートリー	器楽
9 美しい声で斉唱する「つばさを下さい」	東京都 須佐雅俊	6 視聴覚教材を利用した指導1	視聴覚機器	歌唱
10 (指導計画のたて方)	東京都 岩上広志	1 レパートリーを広げよう2	主体性	歌唱 レパート
10 「3拍子の曲に親しもう「たぬきのたいこ」	宮城県 佐藤久	2 「関心 態度」の評価資料を求めて2	同前	同前
10 3拍子の流れのついで「空とぶにわとり」	広島県 佐倉京子	3 自分で工夫して楽しむ音楽学習2	同前	器楽
10 「かねが唄る」	大分県 田中達	4 美しい響きをもった歌声めざして2	同前	同前
10 小原節に打楽器の伴奏をつける「管弦楽のための木挽き歌」	兵庫県 河野輝昭	5 鍵盤ハーモニカのレパートリーづくり2	同前	同前
10 合唱を楽しもう「翼をください」	東京都 須佐雅俊	6 視聴覚教材を利用した指導2	同前	同前
11 (オペレッタの意義)	東京都 岩上広志	1 レパートリーを広げよう3	合科的学習	オペレッタ
11 気持ちをこめて歌おう「シャボンだま」	宮城県 佐藤久	2 「関心 態度」の評価資料を求めて3	同前	同前
11 (創作活動の実践例)	広島県 佐倉京子	3 自分で工夫して楽しむ音楽学習3	同前	同前(創作)
11 「まきはの子牛」	大分県 田中達	4 美しい響きをもった歌声めざして3	同前	同前
11 「小原節」	兵庫県 河野輝昭	5 鍵盤ハーモニカのレパートリーづくり3	同前	同前
11 名曲を器楽合奏で楽しもう「剣の舞」	東京都 須佐雅俊	6 視聴覚教材を利用した指導3	同前	同前
12 「さんたのおじさん」	東京都 岩上広志	1 レパートリーを広げよう4	同前(主体的)	歌唱 器楽
12 輪唱をしよう「かわいいな」	宮城県 佐藤久	2 「関心 態度」の評価資料を求めて4	同前	同前
12 変奏曲をつくらう「きらきら星」	広島県 佐倉京子	3 自分で工夫して楽しむ音楽学習4	同前	同前
12 「ティンティララ」	大分県 田中達	4 美しい響きをもった歌声めざして4	同前	同前
12 小原節を中心に据えた全校集会「高須西小鍵盤ハーモニカ祭り」	兵庫県 河野輝昭	5 鍵盤ハーモニカのレパートリーづくり4	同前	同前
12 器楽合奏を楽しもう「汽車は走るよ」	東京都 須佐雅俊	6 視聴覚教材を利用した指導4	同前	同前
1986/1 (いろいろなりズムあそび)	神奈川県 荻原かほり	1 リズムあそびを通して楽しく表現しよう1	楽しく表現	即興表現
1 気持ちをこめて歌おう「くちぶえさん」	京都府 内藤敦子	2 楽しい音楽を1	楽しい音楽	全般
1 ドレミは楽し「ドレミの歌」	愛媛県 阪本佳子	3 学習意欲を喚起し、持続させる主題構成のあり方1	学習意欲の喚起	歌唱
1 ホルンの音色「ホルン協奏曲」	石川県 清水正明	4 レーザー ディスク教材を使った鑑賞指導1	レーザーディスク	鑑賞
1 (思い出のアルバム)の年間計画と指導の実際)	佐賀県 貞松征夫	5 子どものやる気をひきおこす音楽学習1	やる気をおこす	歌唱 器楽
1 曲の感じを生かして	山口県 宝迫恒敏	6 音楽性を高める歌唱指導	音楽性を高める	歌唱
2 (身体反応 身体表現について「きらきら星」)	神奈川県 荻原かほり	1 リズムあそびを通して楽しく表現しよう2	同前	歌唱 身体表
2 音まねあそび「こぎつね」	京都府 内藤敦子	2 楽しい音楽を2	同前	歌唱 身体表
2 日本のふし(わらべうた)に親しもう「なんのき」「うちのつらの黒ねこ」	愛媛県 阪本佳子	3 学習意欲を喚起し、持続させる主題構成のあり方2	同前	歌唱(わらべ歌)
2 ふしの美しさ「白鳥」	石川県 清水正明	4 レーザー ディスク教材を使った鑑賞指導2	同前	同前
2 「思い出のアルバム」の取り組み	佐賀県 貞松征夫	5 子どものやる気をひきおこす音楽学習2	同前	歌唱
2 美しい合奏「ボギー大佐」	山口県 宝迫恒敏	6 音楽性を高める器楽指導	同前	器楽
3 気持ちをこめて歌おう「ぶんぶんぶん」	神奈川県 荻原かほり	1 リズムあそびを通して楽しく表現しよう3	同前	歌唱
3 ようすを思い浮かべながら歌おう「おぼけなんてないさ」	京都府 内藤敦子	2 楽しい音楽を3	同前	歌唱
3 わらべうたづくりをしよう	愛媛県 阪本佳子	3 学習意欲を喚起し、持続させる主題構成のあり方3	同前	同前
3 オーボエの音色「ガボット」	石川県 清水正明	4 レーザー ディスク教材を使った鑑賞指導3	同前	同前
3 (教材との出会いの工夫)	佐賀県 貞松征夫	5 子どものやる気をひきおこす音楽学習3	同前	ミニ
3 山田耕作の歌曲「待ちぼうけ」	山口県 宝迫恒敏	6 内的聴覚を育てる鑑賞指導	同前	内的聴覚の育成 鑑賞

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年 テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1986/4 (知的理解より感覚を優先させた指導)	東京都 菅原克巳	1 音に対する集中力とその持続がある学習をめざして	音に対する集中力	全般
4 (よりよい授業をめざして めあてを持ってとり組む)	東京都 清水和	2 子ども(人間)にとつての音楽という視点から	めあて	全般
4 (音楽教育のめざすもの)	兵庫県 玉置喜美男	3 美しいものに向かう心を育てるために	美しいものに向かう	全般
4 (あそびのなかにある音楽)	東京都 石水修二	4 一人一人が嬉々として取り組む楽しい学習-手作りの音楽をとおして-	手作り(自分たちで成立させる)	全般
4 (「自由さ」のある学習を)	大分県 山本博	5 音楽的コミュニケーションを大切に学習	楽しむ授業	全般
4 (和音 和声の指導のどらえ方)	東京都 進藤真郎	6 和声感を養う和声指導-根音の重視-	和声感を養う	全般
5 ふしの感じを変えて「きらきら星」	東京都 菅原克巳	1 音に対する集中力とその持続がある学習をめざして	同前	歌唱 基礎
5 拍の流れにのって「リズムの横做」「リズムの Rond」他	東京都 清水和	2 子ども(人間)にとつての音楽という視点から	同前	基礎 (リズム)
5 合唱へのアプローチ=輪唱の楽しみ「坂道」	兵庫県 玉置喜美男	3 美しいものに向かう心を育てるために	同前	歌唱
5 手作り音楽を楽しもう	東京都 石水修二	4 一人一人が嬉々として取り組む楽しい学習-手作りの音楽をとおして-	同前	学習態度
5 へ長調についての理解を深める「川はよんでる」	大分県 山本博	5 音楽的コミュニケーションを大切に学習	同前	歌唱 器楽
5 和声のやくめの違いを感じとって合奏しよう「誰かが口笛ふいた」	東京都 進藤真郎	6 和声感を養う和声指導	同前	歌唱 基礎
6 ふしの感じを変えて「うみの変奏曲」	東京都 菅原克巳	1 音に対する集中力とその持続がある学習をめざして	同前	鑑賞
6 (リズムの Rond 拍打ちリレーの取り組み)	東京都 清水和	2 子ども(人間)にとつての音楽という視点から	同前	基礎 (リズム)
6 同前「山の朝」	兵庫県 玉置喜美男	3 美しいものに向かう心を育てるために	同前	歌唱
6 「手づくりで音楽を楽しもう」	東京都 石水修二	4 一人一人が嬉々として取り組む楽しい学習-手作りの音楽をとおして-	同前	手づくりの音楽授業
6 同前(第3時)	大分県 山本博	5 音楽的コミュニケーションを大切に学習	同前	歌唱 器楽
6 同前(第3次)	東京都 進藤真郎	6 和声感を養う和声指導	同前	歌唱 基礎
7 同前(第6次)	東京都 菅原克巳	1 音に対する集中力とその持続がある学習をめざして	同前	器楽 創作(言葉の即興)
7 (ことばの即興 楽器で伴奏の取り組み)	東京都 清水和	2 子ども(人間)にとつての音楽という視点から	同前	同前
7 同前(第3時)	兵庫県 玉置喜美男	3 美しいものに向かう心を育てるために	同前	歌唱
7 (今日の学習計画をたてよう)	東京都 石水修二	4 一人一人が嬉々として取り組む楽しい学習-手作りの音楽をとおして-	同前	歌唱 器楽
7 同前(第4時)	大分県 山本博	5 音楽的コミュニケーションを大切に学習	同前	器楽 基礎
7 同前(第3次)	東京都 進藤真郎	6 和声感を養う和声指導	同前	基礎
8 (生命の通った音楽活動をめざして)	大分県 太田妃美	1 音楽活動への子どもの想いがつながる授業づくり	創造的音楽学習	つくって表現
8 (教室音楽における正 美 楽)	山口県 中村毅	2 楽しく自由な教室音楽を求めて	楽しい授業	全般
8 (授業で大切にしたいこと)	石川県 東京都自夫	3 音を大事にする姿勢と音に対する集中力を育てる	音を大事に	多様な教材
8 (中学生の音楽の授業)	愛知県 菅野道夫	4 「音楽する」態度を育てる授業をめざして	音楽する態度	つくって表現
8 (「音楽は空気である」)	東京都 福田美穂	5 音楽の美しさ 楽しさを一人でも多く子どもに味わわせたい、という願いを込めて	楽しさ 美しさ	全般
8 (身体表現「モダン タイムス」の時代に)	東京都 宮崎進	6 音の心 心の音-今、熱い心で音楽を-	熱い心で	全般
9 「ジャングルをたんけんしよう」「どうぶつサンバ」	大分県 太田妃美	1 音楽活動への子どもの想いがつながる授業づくり	同前	同前
9 気持ちをこめて演奏しよう「タヤげこやけ」	山口県 中村毅	2 楽しく自由な教室音楽を求めて	同前	歌唱 器楽
9 リコーダーに親しもう「いろいろなおとづくり タンギング」	山口県 中村毅	3 音を大事にする姿勢と音に対する集中力を育てる	同前	同前
9 日本音楽のひびきに親しもう-わらべうたずこくで遊ぶ-「さくらさくら」	石川県 東京都自夫	4 「音楽する」態度を育てる授業をめざして	同前	歌唱(日本の音楽)
9 和声の美しさを味わおう「星の世界」「きよしこの夜」	愛知県 菅野道夫	5 音楽の美しさ 楽しさを一人でも多く子どもに味わわせたい、という願いを込めて	同前	歌唱
9 日本の楽器「春の海」	東京都 福田美穂	6 音の心 心の音-今、熱い心で音楽を-	熱い心	全般
10 同前(第2次3の1時)	大分県 太田妃美	1 音楽活動への子どもの想いがつながる授業づくり	同前	同前
10 同前(第2次)	山口県 中村毅	2 楽しく自由な教室音楽を求めて	同前	器楽
10 同前「ゆやげこやけ」	石川県 東京都自夫	3 音を大事にする姿勢と音に対する集中力を育てる	同前	同前
10 同前(第2次)	愛知県 菅野道夫	4 「音楽する」態度を育てる授業をめざして	同前	つくって表現
10 同前(第3次)	東京都 福田美穂	5 音楽の美しさ 楽しさを一人でも多く子どもに味わわせたい、という願いを込めて	同前	歌唱 器楽
10 同前	東京都 宮崎進	6 音の心 心の音-今、熱い心で音楽を-	熱い心	鑑賞
11 同前(第2次3の2時)	大分県 太田妃美	1 音楽活動への子どもの想いがつながる授業づくり	同前	同前
11 同前(第3次)	山口県 中村毅	2 楽しく自由な教室音楽を求めて	同前	同前
11 同前(第4次)	石川県 東京都自夫	3 音を大事にする姿勢と音に対する集中力を育てる	同前	同前
11 同前(第3次)	愛知県 菅野道夫	4 「音楽する」態度を育てる授業をめざして	同前	同前
11 同前(第4次)	東京都 福田美穂	5 音楽の美しさ 楽しさを一人でも多く子どもに味わわせたい、という願いを込めて	同前	歌唱 器楽(和楽器)
11 同前(祭り囃子の演奏)	東京都 宮崎進	6 音の心 心の音-今、熱い心で音楽を-	同前	全般
12 (1年生として身につけておきたい力)	岐阜県 三宅敏弘	1 子どもも教師も共に楽しみ喜ぶ合える学習	できる喜び	全般
12 (子どもを主役に)	京都府 山崎博	2 主体性の芽生えを積極的なものへと育てる	主体性	全般
12 (生涯教育の展望に立って)	東京都 荻節子	3 豊かな表現力をめざしやわらかな心身をはぐくむ	豊かな表現力	歌唱 器楽
12 (音楽する姿勢を見直す)	山口県 廣田登志子	4 ひとりが生きてみんなが生きる音楽学習	ひとり みんな(個と集団)	全般
12 (聴唱の進め方)	岡山県 井上真澄	5 聴唱から和音伴唱へ	聴唱	歌唱
12 (音楽教室での約束ごと)	東京都 宮崎敦子	6 心のハーモニーを求めて	心のハーモニー(協力支え合い)	全般
1987/1 たんとたた「べんぎんさん」	岐阜県 三宅敏弘	1 子どもも教師も共に楽しみ喜ぶ合える学習	同前	歌唱 リズム
1 簡単な合唱をしよう「あかちゃん」	京都府 山崎博	2 主体性の芽生えを積極的なものへと育てる	同前	歌唱 拍子
1 リズムがとれるよ「空とぶにわとり」	東京都 荻節子	3 豊かな表現力をめざしやわらかな心身をはぐくむ	同前	歌唱 リズム
1 音で気持ちを表そう「どんび」	山口県 廣田登志子	4 ひとりが生きてみんなが生きる音楽学習	同前	歌唱
1 スキャット唱「林の朝」「星の世界」	岡山県 井上真澄	5 聴唱から和音伴唱へ	同前	歌唱
1 和声の美しさを味わおう「かりがわたる」	東京都 宮崎敦子	6 心のハーモニーを求めて	同前	歌唱
2 同前(第2時)	岐阜県 三宅敏弘	1 子どもも教師も共に楽しみ喜ぶ合える学習	同前	同前
2 同前(第2次)	京都府 山崎博	2 主体性の芽生えを積極的なものへと育てる	同前	歌唱 器楽
2 同前(第2次)	東京都 荻節子	3 豊かな表現力をめざしやわらかな心身をはぐくむ	同前	同前
2 同前(第2次)	山口県 廣田登志子	4 ひとりが生きてみんなが生きる音楽学習	同前	つくって表現
2 同前(第3時)	岡山県 井上真澄	5 聴唱から和音伴唱へ	同前	同前
2 同前(第4時)	東京都 宮崎敦子	6 心のハーモニーを求めて	同前	同前
3 同前(第2次)	岐阜県 三宅敏弘	1 子どもも教師も共に楽しみ喜ぶ合える学習	同前	器楽
3 同前(第3次)	京都府 山崎博	2 主体性の芽生えを積極的なものへと育てる	同前	歌唱
3 同前(第4次)	東京都 荻節子	3 豊かな表現力をめざしやわらかな心身をはぐくむ	同前	つくって表現
3 同前(第3次)	山口県 廣田登志子	4 ひとりが生きてみんなが生きる音楽学習	同前	歌唱 器楽
3 同前(第2次)	岡山県 井上真澄	5 聴唱から和音伴唱へ	同前	つくって表現
3 同前(第6時)	東京都 宮崎敦子	6 心のハーモニーを求めて	同前	同前

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1987/4 (系統だった指導の大切さと低学年指導の充実) 4 (授業はいつも難しい)	熊本県 万谷雄一 東京都 高橋清	1・「楽しむ」「好きになる」授業をめざして 2・課題に向かって生き生きと活動する 3・生き生きと音楽学習に取り組む姿を求めて	楽しむ・好き 課題・生き生き	全般 全般
4 (授業で心がけていること) 4 (すばらしい音楽体験を子どもに) 4 (灰色の男に立ち向かう)	北海道 棒手久美子 滋賀県 曾根威彦 愛知県 松岡育代	4・豊かな表現活動を育てる授業を求めて 5・創造性豊かな表現を生み出す授業 6・創造的音楽学習<グループ学習>を通して意欲あふれる子どもを育てるために	生き生き 豊かな表現 創造性	全般 全般 全般
4 (音楽教育のあり方) 5 リズムにのって歌ったり、演奏したりしよう「ぶんぶんぶん」他 5 音楽に合わせて「春がきた」	兵庫県 田村敦 熊本県 万谷雄一 東京都 高橋清	1・「楽しむ」「好きになる」授業をめざして 2・課題に向かって生き生きと活動する 3・生き生きと音楽学習に取り組む姿を求めて	意欲 同前 同前	全般 歌唱 歌唱 器楽
5 楽しい合奏「ふじ山」 5 リズムにのって、はぎれのよい合奏をしよう「冬の歌」「おじいちゃんのおとし」 5 「リズム前奏を創ろう」「いろんな木ノ実」クック諸島の音楽 5 情景を思い浮かべながら美しく合奏しよう「おぼろ月夜」	北海道 棒手久美子 滋賀県 曾根威彦 愛知県 松岡育代 兵庫県 田村敦	4・豊かな表現活動を育てる授業を求めて 5・創造性豊かな表現を生み出す授業 6・創造的音楽学習<グループ学習>を通して意欲あふれる子どもを育てるために	同前 同前 同前 同前	器楽 歌唱 鑑賞 リズム 器楽 基礎 (和声)
6 同前(第2次) 6 同前(第3時)	熊本県 万谷雄一 東京都 高橋清	1・「楽しむ」「好きになる」授業をめざして 2・課題に向かって生き生きと活動する 3・生き生きと音楽学習に取り組む姿を求めて	同前 同前 同前	歌唱 器楽 同前
6 同前(第3次) 6 同前(第5時) 6 宇宙のイメージで音楽を創ろう「星の世界」	北海道 棒手久美子 滋賀県 曾根威彦 愛知県 松岡育代	4・豊かな表現活動を育てる授業を求めて 5・創造性豊かな表現を生み出す授業 6・創造的音楽学習<グループ学習>を通して意欲あふれる子どもを育てるために	同前 同前 同前	同前 同前 つくって表現
6 同前	兵庫県 田村敦	1・「楽しむ」「好きになる」授業をめざして	同前	基礎(和音)
7 同前(第3次) 7 同前(第4時)	熊本県 万谷雄一 東京都 高橋清	2・課題に向かって生き生きと活動する 3・生き生きと音楽学習に取り組む姿を求めて	同前 同前	同前 同前
7 同前(第4次) 7 同前(第6時) 7 世界に一つしかない声の音楽を創ろう「四季より「春」」	北海道 棒手久美子 滋賀県 曾根威彦 愛知県 松岡育代	4・豊かな表現活動を育てる授業を求めて 5・創造性豊かな表現を生み出す授業 6・創造的音楽学習<グループ学習>を通して意欲あふれる子どもを育てるために	同前 同前 同前	歌唱 器楽 創作 同前
7 同前(第4時)	兵庫県 田村敦	1・自分なりに表現して生き生き音楽する子ども	同前	同前
8 (生き生きと音楽する子どもにするには)	新潟県 渡辺由紀	2・耳・目・体・心で感じ取りのひのびと表現できる子育てる 3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	生き生き 感じとる・のひのび 豊かな表現	全般 全般 全般
8 (心のキャッチボール) 8 (音楽専科教員として感じること)	岩手県 高橋ひさ子 神奈川県 豊田悦子	3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	豊かな表現	全般
8 (4年生で指導すべきこと)	静岡県 福長たか江	5・音楽をPLAYする心を持つ子供を育てるために	成就感	全般
8 (音楽する心を学級経営の柱に)	大阪府 林義信	6・ひとつの音の響きを大切にした統合的学習	PLAYする心	全般
8 (活動内容を絞って傾斜をかける)	東京都 黒島健	1・自分なりに表現して生き生き音楽する子ども	統合的学習	
9 おとえらび「すてきなあと」「きらきら星」	新潟県 渡辺由紀	2・耳・目・体・心で感じ取りのひのびと表現できる子育てる 3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	同前 同前 同前	つくって表現 基礎(3拍子) 鑑賞 歌唱
9 3拍子のリズム「小どりのあさ」「メヌエット」 9 歌に合わせて楽器を演奏しよう「ゆかいな木くん」 9 楽しいリズムで演奏しよう「線路は続くよどこまでも」	岩手県 高橋ひさ子 神奈川県 豊田悦子 静岡県 福長たか江	3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	同前 同前 同前	同前 同前 歌唱
9 へ長調のふし「だれも知らない」	大阪府 林義信	6・ひとつの音の響きを大切にした統合的学習	同前	歌唱
9 発声の工夫「まっかな秋」「大きなゆめのマーチ」	東京都 黒島健	1・自分なりに表現して生き生き音楽する子ども	同前	歌唱
10 同前(第6時)	新潟県 渡辺由紀	2・耳・目・体・心で感じ取りのひのびと表現できる子育てる 3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	同前 同前 同前	同前 つくって表現 器楽
10 同前(第4時) 10 同前(第2次)	岩手県 高橋ひさ子 神奈川県 豊田悦子	3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	同前 同前	同前 同前
10 同前(第2次)	静岡県 福長たか江	5・音楽をPLAYする心を持つ子供を育てるために	同前	同前
10 同前(第2次)	大阪府 林義信	6・ひとつの音の響きを大切にした統合的学習	同前	同前
10 同前(第2時)	東京都 黒島健	1・自分なりに表現して生き生き音楽する子ども	同前	同前
11 同前(第7時)	新潟県 渡辺由紀	2・耳・目・体・心で感じ取りのひのびと表現できる子育てる 3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	同前 同前 同前	同前 同前 リズム伴奏の工夫(創作)
11 同前(第5時) 11 同前(第4時)	岩手県 高橋ひさ子 神奈川県 豊田悦子	3・学習形態を工夫して豊かな表現をめざす 4・一人一人が喜んで取り組み成就感の持てる授業をめざして	同前 同前	同前 同前
11 同前(第3次)	静岡県 福長たか江	5・音楽をPLAYする心を持つ子供を育てるために	同前	同前
11 同前(第3時)	大阪府 林義信	6・ひとつの音の響きを大切にした統合的学習	同前	同前
11 同前(第3時)	東京都 黒島健	1・自分なりに表現して生き生き音楽する子ども	同前	同前
12 (「ひと」としての子どもと音楽) 12 (歌声のある学級) 12 (「育てていく」という営み) 12 (音楽科における授業) 12 「エトピリカ」 12 (音楽と音楽教科)	富山県 馬場百々子 埼玉県 中島静江 奈良県 吉村紀代子 和歌山県 梅田陽子 長野県 唐沢流美子 東京都 澤雅枝	1・身体表現を通して生き生きと自分の表現を作り上げる子ども 2・リズムにのって生き生きと表現できる子 3・基礎感覚と歌心を育てる授業をめぐらして 4・生き生きと表現する指導のあり方 5・歌をたぎらせ溢れさせるために 6・より豊かな表現を求めて	生き生きと 生き生きと 感覚・歌心 生き生きと 溢れる(歌) 豊かな表現	全般 全般 全般 全般 全般 歌唱 歌唱 身体表現
1988/1 おどりのおんがく「とんくるりんぼんくるりん」「おどるこねこ」 1 また出たあのおふし「タンタンマーチ」「はだかの王さま」 1 音の重なりを聴こう「ひびくよ歌声」「あわてんぼうの歌」 1 リズムにのって表現しよう「冬の歌」 1 詩情を豊かに表現する「鳥の歌」 1 8分の6拍子のリズムにのって楽しく合奏しよう「小さな木の葉」	富山県 馬場百々子 埼玉県 中島静江 奈良県 吉村紀代子 和歌山県 梅田陽子 長野県 唐沢流美子 東京都 澤雅枝	1・身体表現を通して生き生きと自分の表現を作り上げる子ども 2・リズムにのって生き生きと表現できる子 3・基礎感覚と歌心を育てる授業をめぐらして 4・生き生きと表現する指導のあり方 5・歌をたぎらせ溢れさせるために 6・より豊かな表現を求めて	同前 同前 同前 同前 同前 同前	同前 同前 同前 同前 同前 同前
2 同前(第3次) 2 同前(第4時) 2 同前(第5時) 2 同前(第2次) 2 同前(第2時)	富山県 馬場百々子 埼玉県 中島静江 奈良県 吉村紀代子 和歌山県 梅田陽子 長野県 唐沢流美子	1・身体表現を通して生き生きと自分の表現を作り上げる子ども 2・リズムにのって生き生きと表現できる子 3・基礎感覚と歌心を育てる授業をめぐらして 4・生き生きと表現する指導のあり方 5・歌をたぎらせ溢れさせるために	同前 同前 同前 同前 同前	同前 同前 同前 同前 同前
2 それぞれの声を生かした発声の工夫をして「旅立ち」	東京都 澤雅枝	6・より豊かな表現を求めて	同前	歌唱
3 同前(第4次)	富山県 馬場百々子	1・身体表現を通して生き生きと自分の表現を作り上げる子ども	同前	同前
3 同前(第5時) 3 同前(第6時) 3 同前(第3次) 3 同前(第3時) 3 同前(第3時) 3 曲想を生かした表現を工夫しよう「さよなら素晴らしき日々」	埼玉県 中島静江 奈良県 吉村紀代子 和歌山県 梅田陽子 長野県 唐沢流美子 東京都 澤雅枝	2・リズムにのって生き生きと表現できる子 3・基礎感覚と歌心を育てる授業をめぐらして 4・生き生きと表現する指導のあり方 5・歌をたぎらせ溢れさせるために 6・より豊かな表現を求めて	同前 同前 同前 同前 同前 同前	同前 同前 同前 同前 同前 同前

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1988/4 (いい出会い、そして感動)	島根県 岡田正樹	1・子どもが感じたことを素直に表現できる	素直な表現(合)	全般
4 子どもたちの心を開く)	宮城県 新原正紀	2・創造的な活動を生かした授業	創造的な活動	つくって表現
4 (音楽5分間ノートから子供の意識をひろって)	香川県 岸本律子	3・楽しむ授業から学ぶ力を育てる授業 4・個を見つめ、音楽する楽しさを分かち合う	学ぶ力	全般
4 (個を見つめる)	山口県 山野昭正	4・個を見つめ、音楽する楽しさを分かち合う	楽しさ・個	全般
4 (心開かれた歌声を求めるための方策)	埼玉県 森屋國男	5・心開かれた歌声めざして	心開かれた歌声	歌唱
4 (本当は歌いたい6年生)	三重県 白井良昭	6・真に一人ひとりの子どもにかかわる指導をめざして	一人ひとり	歌唱
5 かえるになって(合科的学習)	島根県 岡田正樹	1・子どもが感じたことを素直に表現できる	授業	同前
5 小さな音楽劇をつくらう「はだかの王様」	宮城県 新原正紀	2・創造的な活動を生かした授業	授業	同前
5 ひびき合う演奏「ふじ山」	香川県 岸本律子	3・楽しむ授業から学ぶ力を育てる授業	授業	同前
5 曲の感じを生かして「若者達」	山口県 山野昭正	4・個を見つめ、音楽する楽しさを分かち合う	授業	同前
5 歌の気持ち「ほくのひこつき」	埼玉県 森屋國男	5・心開かれた歌声めざして	授業	同前
5 (思い出をこめた味のある歌い方をしよう「翼をください」)	三重県 白井良昭	6・真に一人ひとりの子どもにかかわる指導をめざして	授業	同前
6 同前(第3次)	島根県 岡田正樹	1・子どもが感じたことを素直に表現できる	授業	同前
6 同前(第3時)	宮城県 新原正紀	2・創造的な活動を生かした授業	授業	同前
6 同前(感じ)	香川県 岸本律子	3・楽しむ授業から学ぶ力を育てる授業	授業	同前
6 同前(第2時)	山口県 山野昭正	4・個を見つめ、音楽する楽しさを分かち合う	授業	同前
6 同前(第2次)	埼玉県 森屋國男	5・心開かれた歌声めざして	授業	同前
6 同前(第3時)	三重県 白井良昭	6・真に一人ひとりの子どもにかかわる指導をめざして	授業	同前
7 同前(第4次)	島根県 岡田正樹	1・子どもが感じたことを素直に表現できる	授業	同前
7 同前(第4時)	宮城県 新原正紀	2・創造的な活動を生かした授業	授業	同前
7 同前(ドレミ)	香川県 岸本律子	3・楽しむ授業から学ぶ力を育てる授業	授業	同前
7 同前(第3時)	山口県 山野昭正	4・個を見つめ、音楽する楽しさを分かち合う	授業	同前
7 同前(第3次)	埼玉県 森屋國男	5・心開かれた歌声めざして	授業	同前
7 同前(第4時)	三重県 白井良昭	6・真に一人ひとりの子どもにかかわる指導をめざして	授業	同前
8 (音楽科でめざす)	福岡県 高橋秀喜	1・歌い合わせる喜びを味わう子供をめざして	喜び・味わう	歌唱
8 (音楽の美しさを感じとり、豊かに表現できる子どもの育成)	鳥取県 下田幸男	2・歌心を育てる音楽学習)	歌心	歌唱
8 (音楽の授業においての心構えが大切)	新潟県 金子美智子	3・楽しみながら表現する力を育てる音楽学習)	楽しみ・表現できる	全般
8 (集団作りとしての音楽作り)	東京都 與五澤實	4・児童指揮による音楽作り	集団作り	授業形態
8 (子どもの表現を生かすには)	神奈川県 相田寿子	5・子どもの表現を生かし創る喜びのある学習)	創る	全般
8 (授業で教師も成長する)	大阪府 藤原一秀	6・良い顔で楽しく表現する子どもを求めて	楽しく表現	全般
9 まねっこでうたおう「やまびこごっこ」	福岡県 高橋秀喜	1・歌い合わせる喜びを味わう子供をめざして	同前	歌唱
9 気持ちをこめて歌おう「夕やけこやけ」	鳥取県 下田幸男	2・歌心を育てる音楽学習)	同前	歌唱
9 美しいひびきで「春の小川」「リコーダーのひびき」	新潟県 金子美智子	3・楽しみながら表現する力を育てる音楽学習)	同前	歌唱
9 児童指揮を通して、児童集団が音楽づくりをする学習「雲をよぶ歌」	東京都 與五澤實	4・児童指揮による音楽作り	同前	歌唱 指揮
9 イメージを広げよう「子守歌」「空を見上げて」	神奈川県 相田寿子	5・子どもの表現を生かし創る喜びのある学習)	同前	歌唱
9(リズムにのって、曲想を感じて歌おう「アンデスの祭り」)	大阪府 藤原一秀	6・良い顔で楽しく表現する子どもを求めて	同前	歌唱
10 同前(第2時)	福岡県 高橋秀喜	1・歌い合わせる喜びを味わう子供をめざして	同前	同前
10 同前(第3時)	鳥取県 下田幸男	2・歌心を育てる音楽学習)	同前	同前
10 同前(第3次1時)	新潟県 金子美智子	3・楽しみながら表現する力を育てる音楽学習)	同前	同前
10 同前(第3次1時)	東京都 與五澤實	4・児童指揮による音楽作り	同前	同前
10 同前(第7時)	神奈川県 相田寿子	5・子どもの表現を生かし創る喜びのある学習)	同前	同前
10 同前	大阪府 藤原一秀	6・良い顔で楽しく表現する子どもを求めて	同前	同前
11 同前(第3時)	福岡県 高橋秀喜	1・歌い合わせる喜びを味わう子供をめざして	同前	同前
11 同前(第4時)	鳥取県 下田幸男	2・歌心を育てる音楽学習)	同前	同前
11 同前(第3次3時)	新潟県 金子美智子	3・楽しみながら表現する力を育てる音楽学習)	同前	同前
11 同前(第5時)	東京都 與五澤實	4・児童指揮による音楽作り	同前	同前
11 同前(第10時)	神奈川県 相田寿子	5・子どもの表現を生かし創る喜びのある学習)	同前	同前
11 同前	大阪府 藤原一秀	6・良い顔で楽しく表現する子どもを求めて	同前	同前
12 (楽しい音楽学習をめざして)	青森県 繁在家啓子	1・のひのびと身体表現し合いながら音楽的な楽しさを感じとる	楽しさ・感じとる	全般
12 (音楽を通して子どもに何を待てほしいのか)	愛知県 出口誉子	2・音楽的な知識を楽しく身につける	知識を楽しく	全般
12 (ある日之授業から)	岡山県 河内智美	3・音楽を楽しみながら音楽する力を身につける	楽しく力を身につける	全般
12 (音楽科のねらい)	神奈川県 池野功	4・心と身体で表現する子どもの音楽学習	心と身体で表現	全般
12 (音楽とは何か)	山形県 東海林恵里子	5・みんなが喜び合える音楽の学習-音あそびを通して-	喜び合える学習	音あそび
12 (テーマ設定の趣旨)	埼玉県 佐藤優	6・音楽の美しさ楽しさを心から味わえる子を育てよう	美しさ楽しさを味わう	6年間指導計画
1989/1 リズムにのって「こいぬのマーチ」「おもちゃのへいたい」	青森県 繁在家啓子	1・のひのびと身体表現し合いながら音楽的な楽しさを感じとる	同前	同前
1 「こぶためきつねこ」	愛知県 出口誉子	2・音楽的な知識を楽しく身につける	同前	同前
1 21世紀のコール音	岡山県 河内智美	3・音楽を楽しみながら音楽する力を身につける	同前	同前
1 いろいろな楽器で合奏しよう「茶色の子びん」	神奈川県 池野功	4・心と身体で表現する子どもの音楽学習	同前	同前
1 音であそぼう「星の世界」	山形県 東海林恵里子	5・みんなが喜び合える音楽の学習-音あそびを通して-	同前	同前
1 しきにあわせよう「小さな木の実」	埼玉県 佐藤優	6・音楽の美しさ楽しさを心から味わえる子を育てよう	同前	同前
2 同前(第3時)	青森県 繁在家啓子	1・のひのびと身体表現し合いながら音楽的な楽しさを感じとる	同前	同前
2 同前(第2時)	愛知県 出口誉子	2・音楽的な知識を楽しく身につける	同前	同前
2 同前(第2時)	岡山県 河内智美	3・音楽を楽しみながら音楽する力を身につける	同前	同前
2 同前(第2時)	神奈川県 池野功	4・心と身体で表現する子どもの音楽学習	同前	同前
2 同前(第3次)	山形県 東海林恵里子	5・みんなが喜び合える音楽の学習-音あそびを通して-	同前	同前
2 同前(第4時)	埼玉県 佐藤優	6・音楽の美しさ楽しさを心から味わえる子を育てよう	同前	同前
3 同前(第5時)	青森県 繁在家啓子	1・のひのびと身体表現し合いながら音楽的な楽しさを感じとる	同前	同前
3 同前(第4時)	愛知県 出口誉子	2・音楽的な知識を楽しく身につける	同前	同前
3 同前(第3時)	岡山県 河内智美	3・音楽を楽しみながら音楽する力を身につける	同前	同前
3 同前(第3時)	神奈川県 池野功	4・心と身体で表現する子どもの音楽学習	同前	同前
3 同前(第4次)	山形県 東海林恵里子	5・みんなが喜び合える音楽の学習-音あそびを通して-	同前	同前
3 同前(第7時)	埼玉県 佐藤優	6・音楽の美しさ楽しさを心から味わえる子を育てよう	同前	同前

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

(平成元年度から平成5年度)

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1989/4 (子どもたちの生活と音楽1・生活のなかで音楽する子どもをめざして)	千葉県 庄司満治	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	生活のなかで音楽する 実感を分かち合う	統合学習 全般
4 (私の体が歌ってる)	石川県 乗富章子	3・イメージをとらえて楽しく表現する	楽しく表現	全般
4 (3年生におけるわらべ歌の扱い)	東京都 熊木真見子	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	自ら・生き生き 自己表現を高める	全般
4 (4年生の音楽の授業について)	神奈川県 山田令子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	自己表現を高める	全般
4 (音楽の授業において求めるもの)	鳥取県 小谷由美	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	一人ひとりの気持ちを	全般
4 (一人ひとりを大切に)	三重県 中西正行	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
5 3拍子のリズム「とんくるりん ばんくるりん」	千葉県 庄司満治	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 リズム
5 ようすを思いうかべて「夕やけこやけ」	石川県 乗富章子	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 リズム
5 春のイメージを表現しよう「どこかで春が」	東京都 熊木真見子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 創作
5 ふしをつくって演奏しよう「この山光る」	神奈川県 山田令子	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 創作
5 音のつり合い「グリーングリーン」	鳥取県 小谷由美	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	音楽 同前
5 合奏の楽しさを味わおう「コンドルは飛んで行く」	三重県 中西正行	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 リズム
6 同前(第2次)	千葉県 庄司満治	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 リズム
6 同前(第2次)	石川県 乗富章子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 リズム
6 同前(第2次)	東京都 熊木真見子	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 リズム
6 ふしをつくって演奏しよう「とんび」	神奈川県 山田令子	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 リズム
6 同前(第6時)	鳥取県 小谷由美	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 リズム
6 同前(第3時)	三重県 中西正行	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 リズム
6 同前(第7時)	千葉県 庄司満治	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 リズム
7 同前(第3次)	石川県 乗富章子	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 リズム
7 同前(第3次)	東京都 熊木真見子	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 リズム
7 同前	神奈川県 山田令子	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 リズム
7 同前(第7時)	鳥取県 小谷由美	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 リズム
7 同前(第3時)	三重県 中西正行	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 リズム
8 (「うたづくり」は<学級づくり>から)	兵庫県 黒田康弘	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 リズム
8 (「うたづくり」は<学級づくり>から)	兵庫県 黒田康弘	1・「うたづくり」を通して豊かな感性と表現力を育てるために 2・もっともっと楽しんで低学年にふさわしい指導法とは 3・楽曲へのおもいが深まる音楽学習を求めて	感性・表現力 もっともっと楽しむ	歌唱 身体表現
8 (「うたづくり」は<学級づくり>から)	広島県 叶堂秀城	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
8 (曲への思いを深める子どもたちを)	長野県 花岡澄	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
8 (赤ちゃんに笑顔を返さす母親から学ぶ)	石川県 袋井真之	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
8 (教師の指導性について)	東京都 泉本信子	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
8 (子どもたちは詩人?)	千葉県 谷中優	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
9 (だれでもでき、心の底から楽しめる授業づくりを目標に)	兵庫県 黒田康弘	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
9 合唱あそび「けいのうた」	広島県 叶堂秀城	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
9 空の歌「あの雲のように」	長野県 花岡澄	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
9 きょうそう曲の楽しさ「ホルン協奏曲第一番」	石川県 袋井真之	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
9 リコーダーで古代の音楽をつくろう	東京都 泉本信子	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
9 (難産だった最初の歌)	千葉県 谷中優	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
10 (いい顔 おいしい声 いい心)	兵庫県 黒田康弘	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
10 同前(第2時)	広島県 叶堂秀城	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
10 空の歌「雲はともだち」	長野県 花岡澄	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
10 同前(第2時)	石川県 袋井真之	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
10 同前(第2次)	東京都 泉本信子	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
10 「自分たちで歌を作ろう」	千葉県 谷中優	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
11 おとあそびをしよう「おもちゃのへいたい」	兵庫県 黒田康弘	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
11 同前(第3時)	広島県 叶堂秀城	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
11 空の歌「空と水」	長野県 花岡澄	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
11 同前(第3時)	石川県 袋井真之	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
11 同前(第2次2時)	東京都 泉本信子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
11 「こきりこがし」	千葉県 谷中優	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
12 (低学年にも創造的な活動を)	静岡県 竹内さち子	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
12 (一人ひとりが生きる)	佐賀県 峯晋	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
12 (3年生でしっかりと身につけさせたいこと)	埼玉県 田中誠子	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
12 (感性を育てる)	東京都 松田京子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
12 (音楽性とは?)	東京都 池田邦太郎	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
12 (学校で取り組む体制づくり)	北海道 西野誠一	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
1990/4きみの楽器で遊ぼう・総合的学習「あきのこうえんをつくろう」より「すてきな音」	静岡県 竹内さち子	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
1 楽しいリズム「ジャングルジム」	佐賀県 峯晋	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
1 リズムにのって「空とぶにわとり」	埼玉県 田中誠子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
1 音楽を心深く感じとり、創造性豊かに表現しよう「ソーラン節」	東京都 松田京子	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
1 (音探し・目隠しバンド)	東京都 池田邦太郎	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
1 かりがわたる「かりがわたる」	北海道 西野誠一	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第2時)	静岡県 竹内さち子	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第2時)	佐賀県 峯晋	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第5時)	埼玉県 田中誠子	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第4時)	東京都 松田京子	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
2 黒板という楽器	東京都 池田邦太郎	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
2 まっしろい心「まっしろい心」	北海道 西野誠一	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第3時)	静岡県 竹内さち子	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第3時)	佐賀県 峯晋	6・子供達一人ひとりの気持ちを考えてあげられる音楽活動を	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第7時)	埼玉県 田中誠子	1・生活のなかで音楽する子どもをめざして 2・音楽する実感を分かち合える授業への試み	同前	歌唱 身体表現
2 同前(第6時)	東京都 松田京子	3・イメージをとらえて楽しく表現する	同前	歌唱 身体表現
3 石という楽器	東京都 池田邦太郎	4・児童が自ら生き生きと表現する授業を求めて	同前	歌唱 身体表現
3 合唱を美しく響かせよう「太陽がくれた季節」	北海道 西野誠一	5・音楽する心-自己表現を高める音楽	同前	歌唱 身体表現

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1990/4 (なぜ童歌が必要か)	東京都 志村洋子 藤原公子	1・遊びながら自然に身に付く音楽の基礎	童歌(基礎)	基礎(童歌の分析)
4 リズムでいきいきと「ジャングルジムのぼろろ」他	大阪府 薬師寺美江	2・「個を生かす」学習をめざして	個を生かす	個を生かす授業の具体化
4 いろいろな音楽遊びを柱に)	秋田県 青木 誠	3・一つの曲を料理する/主体的で楽しく充実した過程を	主体的・楽しい	歌唱 創作
4 (音楽料が子供に培わねばならないもの他)	新潟県 俵山晴雄	4・創作活動―「長期的展望に立った柔軟な展開を持つ単元」の試み	創作	創作
4 5年で指導したいこと他	東京都 森井弘子	5・音楽を味わい豊かな表現をめざす	味わう・豊かな表現	全般
4 私の考える「音楽活動」	東京都 山田 好文 東京都 志村洋子 藤原公子	6・一日一日が、さよならの日々卒業学年を意識して	音楽する喜び	全般
5 たんとた「ぎっちょぎっちょ」「お茶のみに」他	東京都 藤原公子	1・遊びながら自然に身に付く音楽の基礎	同前	同前
5 同前(第2時)	大阪府 薬師寺美江	2・「個を生かす」学習をめざして	同前	基礎(リズムム)歌唱
5 リズムによって「あわてんぼうの歌」	秋田県 青木 誠	3・一つの曲を料理する/主体的で楽しく充実した過程を	同前	歌唱
5 ぼくも私も作曲家「関川を歩いて作曲しよう」	新潟県 俵山晴雄	4・創作活動―「長期的展望に立った柔軟な展開を持つ単元」の試み	同前	同前
5 響きのある声でのひやかに歌おう「ゆかいに歩けば」他	東京都 森井弘子	5・音楽を味わい豊かな表現をめざす	同前	歌唱
5 (レパートリーをふやす)	東京都 山田 好文	6・一日一日が、さよならの日々卒業学年を意識して	同前	歌唱 器楽
5 レド レドラ ミレド ミレドラ「ぎっちょ」「おじいさん」他	東京都 志村洋子 藤原公子	1・遊びながら自然に身に付く音楽の基礎	同前	同前
6 同前(第3時)	大阪府 薬師寺美江	2・「個を生かす」学習をめざして	同前	基礎(リズムム)歌唱 器楽
6 同前(第4時)	秋田県 青木 誠	3・一つの曲を料理する/主体的で楽しく充実した過程を	同前	器楽
6 ぼくも私も作曲家「関川を歩いて作曲しよう?」	新潟県 俵山晴雄	4・創作活動―「長期的展望に立った柔軟な展開を持つ単元」の試み	同前	同前
6 響きのある声でのひやかに歌おう「夕日が背中を押してくれる」	東京都 森井弘子	5・音楽を味わい豊かな表現をめざす	同前	同前
6 日本の音楽「越天楽今様」	東京都 山田 好文 東京都 志村洋子 藤原公子	6・一日一日が、さよならの日々卒業学年を意識して	楽曲の魅力	鑑賞(日本の音楽)
7 即興「あめこんこん」「たまりや」	東京都 志村洋子	1・遊びながら自然に身に付く音楽の基礎	同前	同前
7 リズムでいきいきと「インディアンのおまつり」	大阪府 薬師寺美江	2・「個を生かす」学習をめざして	同前	同前
7 リズムによって「雪のおどり」	秋田県 青木 誠	3・一つの曲を料理する/主体的で楽しく充実した過程を	同前	創作
7 ぼくも私も作曲家「リコーダーのための『組曲』をつくらう」	新潟県 俵山晴雄	4・創作活動―「長期的展望に立った柔軟な展開を持つ単元」の試み	同前	同前
7 響きのある声でのひやかに歌おう「夕日が背中を押してくれる」	東京都 森井弘子	5・音楽を味わい豊かな表現をめざす	同前	同前
7 音楽鑑賞教室(演奏会)	東京都 山田 好文	6・一日一日が、さよならの日々卒業学年を意識して	同前	鑑賞(オーケストラ)
8 (1年生における音楽指導)	大阪府 相良晴久	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	音高感の育成	歌唱/リズム
8 絵描き歌で遊ぼう「にいちゃん」	山口県 片岡義雄	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	生涯・愛好心	歌唱(童歌) 創作
8 (創造性を発揮させる)	東京都 岡千恵	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	楽しむ・生き生き	全般(つくって表現)
8 (意欲的に取り組める楽しい授業づくり)	兵庫県 藤原延之	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	多面的、有機的	全般
8 (子ども達に工夫させるためには)	東京都 丸山久代	5・一人一人が工夫し表現する学習	工夫して表現	全般
8 (音楽の活動を幅広く、歌声を豊かに)	神奈川県 田中由美子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	発想(創造的音楽学習)	つくって表現
9 ドレミあそび「ことりのうた」	大阪府 相良晴久	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	同前	歌唱
9 絵描き歌で遊ぼう「コックさん」	山口県 片岡義雄	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	同前	歌唱(童歌)
9 いい音つくる「音リレー」他	東京都 岡千恵	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	同前	器楽 創作
9 「チェロは歌う」	兵庫県 藤原延之	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	同前	鑑賞
9 物語の音楽を表現しよう「いーるかの旅」	東京都 丸山久代	5・一人一人が工夫し表現する学習	同前	同前
9 ひびきのある声で歌おう「エンデルワイス」	神奈川県 田中由美子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	同前	歌唱(音について考える)
10 ドレミ遊び第2次「どんぐりさんのあうち」	大阪府 相良晴久	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	同前	歌唱
10 絵描き歌で遊ぼう「絵描き歌作り」	山口県 片岡義雄	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	同前	創作
10 いい音つくる「イメージを持ったふしづくり」	東京都 岡千恵	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	同前	創作
10 チェロは歌う「白鳥」	兵庫県 藤原延之	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	同前	同前
10 同前(第3時)	東京都 丸山久代	5・一人一人が工夫し表現する学習	同前	同前
10 同前(第3時)	神奈川県 田中由美子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	同前	つくって表現(響く音探し)
11 ドレミ遊び第3次「すずむしのでんわ」	大阪府 相良晴久	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	同前	創作
11 同前(第2時)	山口県 片岡義雄	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	同前	同前
11 同前(第3時)	東京都 岡千恵	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	同前	同前
11 チェロは歌う「セロひきのゴーシュ」	兵庫県 藤原延之	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	同前	つくって表現
11 同前(第7時)	東京都 丸山久代	5・一人一人が工夫し表現する学習	同前	つくって表現
11 同前(第4時)	神奈川県 田中由美子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	同前	歌唱
12 (1年生に音楽はいらない?)	北海道 島山なよ子	1・読譜・記譜の技能を身につける音楽学習	身につける(基礎)	全般
12 (もっと自由に、もっと自分らしく)	千葉県 臺野芳孝	2・みんなミュージシャン セッションしようよ!	自分らしさを	第2学年の指導過程
12 (どの子にも楽しめる音楽授業)	北海道 佐野信孝	3・イメージをもとにして創造的自己表現活動	創造的	つくって表現
12 (学級担任だからこそできる音楽指導を目指して)	千葉県 田川伸一郎	4・感情をゆきぶり、豊かなイメージを持って創造的に表現させる事	創造的	つくって表現
12 (ポイントとなる奏法等)	東京都 千田鉄男	5・アルト・リコーダーの導入と合奏の指導	アルト・リコーダー	器楽
12 (学級の中に音楽の根つきを感じた・粟田子祭り「世界のお話」上演)	神奈川県 貴信子	6・生涯に向けたのプレゼント/他教科との関連を大切に音楽科授業の試み	他教科との関連	総合的な取り組み
1991/1 ドレミ王国で遊ぼう「ドレミの歌」	北海道 島山なよ子	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	同前	同前
1 自分たちだけの音楽劇をやるう「ぞうのたまごのたまごやき」	千葉県 臺野芳孝	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	同前	つくって表現
1 「動物の感じを工夫しよう」「いどの中のかえる」他	北海道 佐野信孝	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	同前	同前
1 「ごんぎつね」の音楽をつくらう	千葉県 田川伸一郎	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	同前	同前
1 アルト・リコーダーに慣れ、合奏を楽しもう「トム・ビロビ」	東京都 千田鉄男	5・一人一人が工夫し表現する学習	同前	同前
1 ことばと音楽のかかわりをとらえて表現を「秋」	神奈川県 貴信子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	同前	器楽
2 同前(第2次)	北海道 島山なよ子	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	同前	同前
2 同前(第6次1)	千葉県 臺野芳孝	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	同前	同前
2 同前(第3時)	北海道 佐野信孝	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	同前	同前
2 同前(第5時)	千葉県 田川伸一郎	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	同前	同前
2 同前(第3次)	東京都 千田鉄男	5・一人一人が工夫し表現する学習	同前	同前
2 同前「四季」	神奈川県 貴信子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	同前	同前
3 同前(第3次)	北海道 島山なよ子	1・多様な活動を通して音高感を育てよう	同前	つくって表現
3 同前(第6次の2)	千葉県 臺野芳孝	2・わらべうたの指導を通して生涯にわたる愛好心を育てる	同前	同前
3 同前(第5時)	北海道 佐野信孝	3・音楽を楽しむために生き生きした活動を	同前	同前
3 同前(第8時)	千葉県 田川伸一郎	4・多面的、有機的な音楽学習をめざして/鑑賞活動を基盤にした音楽学習	同前	同前
3 同前(第4次)	東京都 千田鉄男	5・一人一人が工夫し表現する学習	同前	同前
3 同前「やまなし」	神奈川県 貴信子	6・一人一人の発想を大切に音楽学習を求めて	同前	同前

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1991/4 (「音楽好きっ子」にするための方途)	岐阜県 加藤洋子	1・みんな「音楽好きっ子」になろうよ!	音楽好き	全般
4 (思いっきり体を動かして遊ぼう)	茨城県 堀真弓	2・遊びの中から音楽を表現する楽しさ	楽しさ	全般
4 (音楽嫌にする原因は何?)	宮城県 高橋純子	3・音楽嫌いをなくそう	嫌いをなくす	つくって表現
4 (イメージを明確化させるための音楽構想図)	山口県 三原裕人	4・音に問いかけ音で語り合う音楽学習	音で語り合う	つくって表現
4 (個を知り、励まし、育てる音楽指導)	埼玉県 戸澤悦子	5・心に響く音楽づくりをめざして	心に響く	つくって表現
4 (創造的活動を多く取り入れた授業を)	神奈川県 原登志江	6・生活の中に行きつ音楽教育をめざして	生活の中	つくって表現
5 リズムで遊ぼう「しゃべるでほい」	岐阜県 加藤洋子	1・リズムで遊ぼう	同前	つくって表現
5 わらべうたで遊ぼう「かごめかごめ」	茨城県 堀真弓	2・わらべうたで遊ぼう	同前	歌唱(わらべ歌)
5 リズムにのって表現しよう	宮城県 高橋純子	3・リズムにのって表現しよう	同前	つくって表現
5 音で描く汽車の旅	山口県 三原裕人	4・音で描く汽車の旅	同前	つくって表現
5 音楽の速さと強さ	埼玉県 戸澤悦子	5・音楽の速さと強さ	同前	歌唱
5 楽器の音色のひびきあいを聴こう	神奈川県 原登志江	6・楽器の音色のひびきあいを聴こう	同前	鑑賞
6 楽しいオペレッタをやるう「赤ちゃんのお部屋」	岐阜県 加藤洋子	1・楽しいオペレッタをやるう	同前	同前
6 音楽劇に親しもう	茨城県 堀真弓	2・音楽劇に親しもう	同前	つくって表現
6 同前(第3次)	宮城県 高橋純子	3・リズムにのって表現しよう	同前	同前
6 同前(第5時)	山口県 三原裕人	4・音で描く汽車の旅	同前	同前
6 同前(第4時)	埼玉県 戸澤悦子	5・音楽の速さと強さ	同前	つくって表現
6 心を合わせてミュージカルをしよう「いちようの実」	神奈川県 原登志江	6・心を合わせてミュージカルをしよう	同前	つくって表現
7 同前	岐阜県 加藤洋子	1・楽しいオペレッタをやるう	同前	同前
7 「おむすびころりん」	茨城県 堀真弓	2・音楽劇に親しもう	同前	同前
7 同前(第2次)	宮城県 高橋純子	3・リズムにのって表現しよう	同前	同前
7 同前(第2次)	山口県 三原裕人	4・音で描く汽車の旅	同前	同前
7 グループの歌を作ろう	埼玉県 戸澤悦子	5・グループの歌を作ろう	同前	同前
7 ファンファーレを作ろう	神奈川県 原登志江	6・ファンファーレを作ろう	同前	同前
8 (「豊かな感性」を育てるために)	徳島県 早尻信也	1・意欲的に音楽学習に取り組む子どもを育てよう	意欲的	全般
8 (音楽で育てたい心)	宮城県 岡野定玲子	2・楽しく遊びながら表現活動しよう	楽しい・遊び	つくって表現
8 (よく聴くことが表現の第一歩)	東京都 大湊勝弘	3・よく聴こう、そして表そう	よく聴く	つくって表現
8 (私の授業づくりのポイント)	山梨県 山本ふみ子	4・心に響く音楽活動の体験	心に響く	つくって表現
8 (なぜ音楽づくりか)	群馬県 小暮朋佳	5・総合的な観点で(音楽づくり)	総合的	つくって表現
8 (主体的活動の手だて)	東京都 足利紀子	6・教授から学習への転換	教授から学習(主体的に)	つくって表現
8 リズムにのって「しろくまのじゅんか」	徳島県 早尻信也	1・リズムにのって	リズム	歌唱 リズム 身体表現
9 音の重なりを感じて合唱あそびをしよう「ぶんぶんぶん」	宮城県 岡野定玲子	2・音の重なりを感じて合唱あそびをしよう	同前	同前
9 天気の違いを音で表そう・効果音・「ウイリアム・テル」序曲より	東京都 大湊勝弘	3・天気の違いを音で表そう	同前	同前
9 気持ちを込めて演奏しよう「とんび」	山梨県 山本ふみ子	4・気持ちを込めて演奏しよう	同前	同前
9 音楽で宇宙を表そう「星の世界」	群馬県 小暮朋佳	5・音楽で宇宙を表そう	同前	同前
9 いろいろな学習の仕方を工夫しよう「風を切って」	東京都 足利紀子	6・多様な学習	同前	同前
10 同前(第6時)	徳島県 早尻信也	1・リズムにのって	同前	つくって表現
10 すてきな音をくわえてあそぼう「虫の声」	宮城県 岡野定玲子	2・すてきな音をくわえてあそぼう	同前	同前
10 同前(第2次)	東京都 大湊勝弘	3・天気の違いを音で表そう	同前	同前
10 同前(第3次)	山梨県 山本ふみ子	4・気持ちを込めて演奏しよう	同前	同前
10 へ音譜表ってなに?/長調の梯子を動かそう	群馬県 小暮朋佳	5・へ音譜表ってなに?/長調の梯子を動かそう	同前	基礎
10 子どもの学び方で三部合唱をしよう「ふるさと」	東京都 足利紀子	6・子どもの学び方で三部合唱をしよう	同前	歌唱
11 同前(第7時)	徳島県 早尻信也	1・リズムにのって	同前	リズム っ くって表現
11 同前(第3次)	宮城県 岡野定玲子	2・すてきな音をくわえてあそぼう	同前	同前
11 同前(第3次)	東京都 大湊勝弘	3・天気の違いを音で表そう	同前	同前
11 音を重ねて、美しい響きをつくろう	山梨県 山本ふみ子	4・音を重ねて、美しい響きをつくろう	同前	同前
11 南の鳥々の音楽に親しもう「パンガムリ」	群馬県 小暮朋佳	5・南の鳥々の音楽に親しもう	同前	鑑賞(民族音楽)
11 子供が描くイメージを豊かに表現しよう	東京都 足利紀子	6・子供が描くイメージを豊かに表現しよう	同前	つくって表現
12 (子どもと音楽のかかわり)	京都府 井尻孝子	1・音楽のおもいをふくらませつくる喜びを 持てる子に	つくる喜び	つくって表現
12 (音楽って何?)	埼玉県 中村朋子	2・生きている音楽づくりをめざして	生きている音楽	つくって表現
12 (人間教育として音楽はなぜ必要なのか?)	東京都 小松晴子	3・生きる喜び音楽でつなぐ心	生きる喜び	全般
12 (出会いを大切に・うたごころを育てる)	埼玉県 奥泉徹	4・創造的な音楽活動の広がり求めて	創造的	全般
12 (音楽を通してこころな子どもに)	山形県 今井俊子	5・いきいきと表現する心を育てる音楽教育	いきいき	全般
12 (音楽を指導するうえで)	宮城県 中山純一	6・「音楽っていいな」と思う子どもに	音楽っていいな	全般
1992/1リズムのまとまりを感じて表現しよう「れっしゃこっこ」	京都府 井尻孝子	1・リズムのまとまりを感じて表現しよう	同前	リズム 歌唱
1 動物になって山の音楽会をしよう「山の音楽家」	埼玉県 中村朋子	2・動物になって山の音楽会をしよう	同前	歌唱 身体表現
1 音さがし音づくり「身の回りの音さがし」	東京都 小松晴子	3・音さがし音づくり	同前	つくって表現
1 想像した世界を音で表そう「白鳥」	埼玉県 奥泉徹	4・想像した世界を音で表そう	同前	つくって表現
1 様子を思い浮かべて美しい響きで表現しよう「音楽でかざろう星の絵本」	山形県 今井俊子	5・様子を思い浮かべて美しい響きで表現しよう	同前	歌唱
1 へ長と調二短調「ゆめをのせて」	宮城県 中山純一	6・へ長と調二短調	同前	つくって表現
2 すてきなあと「すてきなあと」	京都府 井尻孝子	1・すてきなあと	同前	つくって表現
2 同前(第2次の1)	埼玉県 中村朋子	2・動物になって山の音楽会をしよう	同前	つくって表現
2 同前(第2次)	東京都 小松晴子	3・音さがし音づくり	同前	同前
2 同前(第2次)	埼玉県 奥泉徹	4・想像した世界を音で表そう	同前	同前
2 様子を思い浮かべて美しい響きで表現しよう	山形県 今井俊子	5・様子を思い浮かべて美しい響きで表現しよう	同前	つくって表現
2 思い出に残る合唱を	宮城県 中山純一	6・思い出に残る合唱を	同前	歌唱
3 リズムのちがいを感じて動物のイメージに合った音をつくろう「こぶたぬきつねこ」	京都府 井尻孝子	1・リズムのちがいを感じて動物のイメージに合った音をつくろう	同前	同前
3 同前(第2次の2)	埼玉県 中村朋子	2・動物になって山の音楽会をしよう	同前	同前
3 音楽学級レパートリー活動の取り組み	東京都 小松晴子	3・音楽学級レパートリー活動	同前	歌唱 鑑賞 音楽 っく て表現
3 ひょうしにあわせて「おどろ楽しいポーレチケ」	埼玉県 奥泉徹	4・ひょうしにあわせて	同前	同前
3 様子を思い浮かべて美しい響きで表現しよう	山形県 今井俊子	5・様子を思い浮かべて美しい響きで表現しよう	同前	同前
3 学級ミニ・コンサートの取り組み	宮城県 中山純一	6・学級ミニ・コンサート	同前	歌唱 鑑賞 音楽

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年・テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1992/4 (授業づくりのポイント)	島根県 黒田都	1・「音楽っていいな」という想いがふくらむ音楽学習	音楽っていいな	全般
4 (授業づくりのポイント)	群馬県 大久保薫	2・遊びを通して学ぶ音楽学習	遊びを通して	全般
4 表現したいという気持ちから	東京都 谷本直美	3・子どもの自然なおもいを生かせる学習活動を探って	子どものおもい	全般
4 (4年生で指導すること)	三重県 伊東玲	4・音楽自体の楽しさを信じて	音楽の楽しさ	全般
4 (伝統音楽の楽しさ)	鹿児島県 遠藤武夫	5・日本の伝統音楽を楽しむ	日本音楽	伝統音楽
4 創作組曲「世界と握手」	新潟県 近藤隆司	6・音楽をつくる/創作組曲「世界と握手」	つくる(総合的 取り組み)	つくって表現
5 リズムにのって「きらきら星」他	島根県 黒田都	1・リズムにのって	リズム(音楽物 語)	歌唱
5 3拍子のリズムに乗って楽しく表現しよう「とんく るりんぱんくるりん」	群馬県 大久保薫	2・3拍子のリズムに乗って楽しく表現しよう	楽しく	リズム 歌唱
5 音楽会で発表しよう「ピーターパン」より	東京都 谷本直美	3・音楽会で発表しよう	創造的音楽学習	つくって表現
5 (歌う声の指導)	三重県 伊東玲	4・「歌う声」で歌おう	歌う声	歌唱
5 民謡に親しもう「おはら節」他	鹿児島県 遠藤武夫	5・民謡に親しもう	民謡	創作(つくっ て表現)
5 同前(年間計画)	新潟県 近藤隆司	6・音楽をつくる/創作組曲「世界と握手」	同前	創作
5 同前(第三次)	島根県 黒田都	1・リズムにのって	同前	つくって表現
6 2拍子のリズムに乗って楽しく表現しよう「ジャン グルジム」	群馬県 大久保薫	2・2拍子のリズムに乗って楽しく表現しよう	リズム	歌唱 リズム
6 工夫して表現しよう「すてきな三にんくみ」(絵 本)	東京都 谷本直美	3・工夫して表現しよう	表現工夫(創造 的音楽学習)	同前
6 (グループ学習)	三重県 伊東玲	4・教師はぬいぐるみになる	グループ学習	全般
6 おはやしで楽しもう「管弦楽のための木挽き歌」	鹿児島県 遠藤武夫	5・おはやしで楽しもう	同前	鑑賞
6 創作組曲「世界と握手」夏秋冬の実践例	新潟県 近藤隆司	6・音楽をつくる/創作組曲「世界と握手」	同前	同前
7 同前(第三次)	島根県 黒田都	1・リズムにのって	同前	同前
7 リズムに乗って楽しく表現しよう「かわいいな」	群馬県 大久保薫	2・リズムに乗って楽しく表現しよう	同前	歌唱 リト ミック
7 工夫して表現しよう「まさかのかさ」(絵本)	東京都 谷本直美	3・工夫して表現しよう(2)中間発表を通 して	同前	同前
7 (グループ学習)での教師の関わり方)	三重県 伊東玲	4・窓辺の「半生ゴリラ」	グループ学習	グループ学習
7 (和太鼓に挑戦しよう)	鹿児島県 遠藤武夫	5・改訂版「おはやしで楽しもう」	楽しむ	つくって表現
7 卒業発表会	新潟県 近藤隆司	6・音楽をつくる/創作組曲「世界と握手」	同前	創作 つくっ て表現
8 (合同音楽の取り組み)	山口県 藤本輝子	1・音楽を楽しむ子どもをめざして/1年生の 合同音楽学習を通して	楽しむ	全般
8 (即興表現・和太鼓の取り組み)	東京都 福田由明	2・子どもの中から引き出す即興表現	即興表現	つくって表現
8 (創造的音楽学習)	沖縄県 八重尾信	3・豊かなイメージを音楽で	豊かなイメージ	つくって表現
8 (安心して表現できる環境づくり他)	埼玉県 井田恵子	4・誰もが活躍できる音楽学習をめざして	誰もが活躍	全般
8 (音楽をつくって表現できるようになるために)	福島県 長尾順一郎	5・子どもが生きる授業を求めて	子どもが生きる	つくって表現
8 (音楽で自己実現する子・歌声リーダーとして)	石川県 篠原陽子	6・音楽を通して意欲的で前向きな子に	意欲的出前向き	歌唱
9 えかきうたであそぼう「コックさん」他	山口県 藤本輝子	1・えかきうたで遊ぼう	えかきうた	歌唱
9 楽器で遊ぼう	東京都 福田由明	2・楽器で遊ぼう	遊ぶ(効果音)	つくって表現
9 物語を音で表そう	沖縄県 八重尾信	3・物語を音で表そう	音で表す(つ くって表現)	つくって表現
9 リコーダーのひびき「若葉の歌」	埼玉県 井田恵子	4・誰もがやる気になるめあて、誰もがで きる方法	やる気・できる	創作
9 (図形楽譜を見直す)	福島県 長尾順一郎	5・図形楽譜を見直す	図形楽譜	つくって表現
9 和声のひびき「故郷の人々」	石川県 篠原陽子	6・オリジナル・アンサンブルを作ろう	アンサンブルを つくる	創作 つくっ て表現
10 てまりうたであそぼう「あんたがたどこさ」	山口県 藤本輝子	1・てまりうたであそぼう	てまりうたで遊 ぶ	歌唱
10 リズムにのって和太鼓を打とう「元氣太鼓」	東京都 福田由明	2・リズムにのって和太鼓を打とう	和太鼓	日本音楽
10 同前(第6時)	沖縄県 八重尾信	3・物語を音で表そう	音で表す(つ くって表現)	同前
10 拍子に合わせて「この山光る」	埼玉県 井田恵子	4・ひょうしに合わせて	音楽にのる楽し さ	歌唱
10 音の神経衰弱ゲーム	福島県 長尾順一郎	5・子どもたちはどのように音を残そうとす るか	音(ことばで表 現)	つくって表現
10 同前(アンサンブルづくり)	石川県 篠原陽子	6・オリジナル・アンサンブルを作ろう	同前	創作(アンサ ンブル譜)
11 どうぶつになってうたおう「おつかいありさん」	山口県 藤本輝子	1・どうぶつになってうたおう	身体表現	歌唱 身体表 現
11 協力して合奏しよう「なべなべそこぬけ」	東京都 福田由明	2・協力して合奏しよう(男子の活躍のため に)	同前	歌唱 つくっ て表現
11 同前(第8時)	沖縄県 八重尾信	3・物語を音で表そう	音で表す(つ くって表現)	同前
11 同前(全体)	埼玉県 井田恵子	4・子どもが自らめあてをたて意欲的に自己 表現できるように	意欲	歌唱 器楽
11 (シンセサイザーの加工)	福島県 長尾順一郎	5・新しい音楽表現の可能性を求めて	新しい音楽表現	つくって表現
11 同前(学年での発表会)	石川県 篠原陽子	6・オリジナル・アンサンブルを作ろう	同前	同前
12 (授業づくりのポイント)	岩手県 小島浩子	教育 音楽を身体で感じ楽しく表現できる子を めざして	楽しさいっぱい 感じる・楽しく 表現	全般
12 (授業づくりのポイント)	鳥取県 秦葉子	3・目標はやわらかい心の子	やわらかい心	全般
12 (本校音楽科目標「心のやわらかい子」)	東京都 大塚美保	4・自らつくり出す喜びを感じとり生き生き と表現する子どもを育てる指導	感じとる・生き 生き	歌唱 身体表 現
12 (動唱を取り入れることについて)	佐賀県 白木淳二	5・心優しい音楽好きな子どもたちを	音楽好き	全般
12 (音楽する喜びって?)	山口県 久保田尚	6・子どもの限りない可能性を引き出す授業 を求めて	可能性を引き出 す	歌唱 器楽
12 (6年生の子どもたちと私)	兵庫県 松尾衛子	歌唱 身体表 現	同前	同前
1993/1 たんたんにのって「しろくまのじえんか」	岩手県 小島浩子	1・たんたんにのって	リズムにのる	歌唱 身体表 現
1 たのしくがっそう「小ぎつね」	鳥取県 秦葉子	2・ふしつくりをして合奏しよう	ふしつくり	創作
1 「ファール」の音を使って「きらきら星」	東京都 大塚美保	3・リコーダーを弾きよう	楽しむ	器楽
1 八長調とイ短調「ドレミの歌」	佐賀県 白木淳二	4・八長調とイ短調	曲奏表現の工夫	歌唱
1 音楽で物語を表そう「大造じいさんとガン」	山口県 久保田尚	5・心優しい音楽好きな子どもたちを	音楽好き	つくって表現
1 (子どもの心をつかみたい)「寒ブリの歌」	兵庫県 松尾衛子	6・子どもの限りない可能性を引き出す授業 を求めて	可能性を引き出 す	歌唱 器楽
2 ようすをおもいうかべて「うみ」	岩手県 小島浩子	1・ようすをおもいうかべて	ようすを・ (イメージ)	歌唱 身体表 現
2 成徳うたぶきはやし」を作ろう	鳥取県 秦葉子	2・「成徳打吹はやし」を作ろう	つくって表現	つくって表現
2 (即興のあいさつ)	東京都 大塚美保	3・常時活動を組み込んで	常時活動を	歌唱 つくっ て表現
2 ふしのまとまり「とんぴ」	佐賀県 白木淳二	4・ふしのまとまり	同前	歌唱
2 和声のひびき「星の世界」	山口県 久保田尚	5・和声のひびきから音楽の喜びを	音楽の喜び (和音)	歌唱 基礎
2 (二重唱に取り組む理由)	兵庫県 松尾衛子	6・二重唱を楽しもう!	二重唱を楽しむ	歌唱
3 おはなしをおんがくで「おどろこねこ」	岩手県 小島浩子	1・おはなしとおんがくで	即興演奏(歌詞 づくり)	鑑賞
3 うたに合わせて「赤ちゃん」	鳥取県 秦葉子	2・うたに合わせて	うたに合わせて	歌唱
3 土鈴を使って音楽をつくる	東京都 大塚美保	3・すずの国へ行こう	つくって表現	つくって表現
3 歌の気持ち「青空へ登ろう」	佐賀県 白木淳二	4・歌の気持ち	同前	歌唱
3 (音楽の小枝集)	山口県 久保田尚	5・心優しい音楽好きな子どもたちを	同前	全般
3 (子どもの思いや願いを深めるために)「はばたけ 鳥」翼を下さい」他	兵庫県 松尾衛子	6・二重唱を楽しもう!	同前	歌唱

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

月・題材・「教材」・(理論)	氏名	学年 テーマ	中心内容 (キーワード)	学習内容 領域等
1993/4 身体全体で表現できる楽しさ 音に対する集中力	鳥根県 中村治子	1 感じたことを豊かに表現できる授業	感じる・豊かに	全般
4 創造的な活動を活発に 自ら学ぶ意欲と自ら学ぶ力の育成 個に応じ個を生かした指導の工夫	福島県 片野和子	2 共に高め合い生き生きと表現できる児童をめざして	いきいきと表現	全般
4 生活の中に音楽を 授業づくりのポイント	岩手県 高橋幸子	3 どの子ども生き生きと音を楽しむ授業をめざして	いきいき・楽しむ	全般
4 子どもたちの現実	宮崎県 中原さゆり	4 「音楽」が好き!	音楽が好き	全般
4 21世紀の音楽(作って表現コンピュータ 個性を生かす伝統的な音楽)	埼玉県 砂田弘行	5 失敗を恐れずに何でもチャレンジしよう	チャレンジ	全般
4 ひとりひとりを大切に(授業形態の工夫) 弦楽器の導入 即興的な表現	茨城県 岡部正徳	6 いつも子どもたちと「共に学ぶ」姿勢で	共に学ぶ	全般
5 自ぶんの力で恥ずかしがらずに思い切り表現	鳥根県 中村治子	1 さあうたおう/1の2のどじまんたいかい	恥ずかしがらずに歌う	歌唱
5 お話と音楽「おむすびころりん」	福島県 片野和子	2 おはなしと音楽	ひとりひとり	つくって表現
5 楽器で楽しく「ミッキー・マウスマーチ」「おまつり」	岩手県 高橋幸子	3 楽器で楽しく「ミッキー・マウスマーチ」「おまつり」	楽器で楽しく	つくって表現
5 リズムを生かして表現しよう「ゆかいに歩けば」	宮崎県 中原さゆり	4 音楽とのふれ合い	リズムを生かす	器楽 リズム 創作
5 ひびきのある声で「ゆかいに歩けば」「白い雲」	埼玉県 砂田弘行	5 歌える高学年を育てよう	歌う高学年	歌唱
5 オーケストラの響き「道化師」「ピーターと狼」	茨城県 岡部正徳	6 オーケストラの響き	オーケストラ	鑑賞
6 恥ずかしがらずに歌おう 表現のいいところを見つけながら聴こう	鳥根県 中村治子	1 さあうたおう/1の2のどじまんたいかい	同前	同前
6 「おむすびころりん」音楽をつくろう	福島県 片野和子	2 おはなしと音楽	おんがくづくり	同前
6 ようすを思いつかべて「ふし山」	岩手県 高橋幸子	3 ようすを思いつかべて	創造的音楽学習	つくって表現
6 かしを生かして歌おう「とんひ」「まきはの朝」他	宮崎県 中原さゆり	4 歌おう!	歌う	歌唱
6 音のつり合い「歌声とほそら」「サンバをおどろう」	埼玉県 砂田弘行	5 我楽多(がらくた)楽器で楽しもう	楽しむ	つくって表現
6 リズムをつくってあそぼう「ジャマイカルンパ」	茨城県 岡部正徳	6 リズム伴奏づくりの学習を通して	つくる	つくって表現
7 同前	鳥根県 中村治子	1 さあうたおう/1の2のどじまんたいかい	同前	歌唱
7 いろいろな楽器で「たぬきのたいこ」	福島県 片野和子	2 いろいろな楽器で/リズム伴奏を工夫して	リズム伴奏の工夫	器楽
7 リズムやふしをつくろう	岩手県 高橋幸子	3 リズムやふしをつくろう	ふしづくり	創作
7 「おどろ楽しいポレレチケ」	宮崎県 中原さゆり	4 「音楽」っておもしろい!	おもしろい	身体表現
7 声でイメージの音楽をつくろう	埼玉県 砂田弘行	5 イメージの音楽をつくろう	つくる	つくって表現
7 「花の街」「大きな古時計」「おぼろ月夜」	茨城県 岡部正徳	6 歌唱指導について思っていること	歌唱指導	歌唱
8 「かもつれっしゃ」	大阪府 堤範子	1 リズムにのって生き生きと表現しよう	リズム・生き生き	歌唱 身体表現
8 (創造的音楽活動のねらい)	群馬県 宮前恭子	2 創造的活動を生かした音楽学習	創造的音楽活動	創造的音楽活動
8 (マーチングバンドの活性化とリコーダーの授業)	東京都 清水卓	3 音楽で学校を活性化	活性化(マーチングバンド)	器楽
8 (小学校音楽教育素朴な疑問シリーズ)	岩手県 小原一穂	4 実録:鼻歌の逆襲	音楽教育	全般
8 (シンセサイザーを使った授業)	東京都 山岸敬子	5 一人一人が意欲的に参加できる授業の試み	一人一人・意欲的	全般
8 (楽しい音楽活動を促す授業展開のポイント)	徳島県 新納政美	6 楽しい音楽活動	楽しい	全般
9 リズムにあわせて楽しく表現しよう「とんくるりんばんくるりん」	大阪府 堤範子	1 リズムにのって生き生きと表現しよう	同前	歌唱 身体表現
9 ドレミで遊ぼう	群馬県 宮前恭子	2 基礎学習:ドレミで遊ぼう(1)	基礎学力	基礎 創造性
(笛の導入時に工夫しているポイント)	東京都 清水卓	3 児童が進んで取り組む授業をめざして	進んで取り組む	器楽
9 (あいうえおには個性がある)	岩手県 小原一穂	4 母音の色・実録:鼻歌の逆襲(その2)	母音の指導	歌唱
9 (音づくりの手段・ラジオ番組作り)	東京都 山岸敬子	5 音を作って遊ぶ授業の試み	つくる	つくって表現
9 曲想を生かした表現の工夫をしよう「星空はいつも」	徳島県 新納政美	6 曲想を生かした表現の工夫をしよう	曲想表現の工夫	歌唱
10 すてきな音を工夫して演奏しよう「たんぷりんのわ」	大阪府 堤範子	1 すてきな音を工夫して演奏しよう	すてきな音の工夫	器楽
10 (ドレミ体操・指の三線譜・終始感)	群馬県 宮前恭子	2 基礎学習:ドレミで遊ぼう(2)	同前	同前
10 (リコーダーの定着期の授業)	東京都 清水卓	3 児童が進んで取り組む授業を目指して(2)リコーダー定着期の授業	同前	同前
10 (うごきか形をつくる)	岩手県 小原一穂	4 おどるふし-実録:鼻歌の逆襲(その3)	フレーズを大切に	同前
10 (楽器としてのコンピュータ)	東京都 山岸敬子	5 コンピュータを使った授業の試み	コンピュータの活用	つくって表現
10 楽曲の気持ちを感じとって歌おう「空がこんなに青いとは」	徳島県 新納政美	6 楽曲の気持ちを感じ取って歌おう	楽曲の気持ち	同前
11 (宇宙人とテレビシーで話そう)	大阪府 堤範子	1 「きらきらぼし」を楽しく表現しよう	楽しく	つくって表現
11 (創造性を生かすカリキュラムの工夫)	群馬県 宮前恭子	2 課題学習:教材を創造的に生かそう(1)	創造的	つくって表現
11 (リコーダーの基礎指導)	東京都 清水卓	3 児童が進んで取り組む授業を目指して(3)リコーダーの基礎練習について	同前	同前
11 (音楽の、<波>を表現する「サカハワ・グワ」)	岩手県 小原一穂	4 音楽に感じる「波」と「体温」-実録:鼻歌の逆襲(4)	曲想表現	楽曲の分析
11 (映像選び・授業の進め方)	東京都 山岸敬子	5 映像を引き立てる音づくりの試み	同前	同前
11 授業の(空がこんなに青いとは)の実験を検討	徳島県 新納政美	6 教師の教材解釈力と教材提示力の向上	教材解釈・教材提示力	同前
12 (明るく表情豊かな子ども・創意工夫する子ども・粘りつよい子ども)	佐賀県 石田正紹	1 想いをのびのびと表現する子ども	のびのびと	全般
12 課題学習:教材を創造的に生かそう	群馬県 宮前恭子	2 課題学習:教材を創造的に生かそう	同前	同前
12 (新しい指導要領のめざすもの)	東京都 中山純子	3 音楽観を広げる授業を目指して	創造的	つくって表現
12 (つくって表現する活動と題材との関連)	大阪府 片岡潤子	4 自己表現活動の楽しさより豊かな表現のために-	豊か(つくって表現)	つくって表現
12 (つくって表現する活動)	東京都 斉藤明子	5 音楽好きって言ってほしいな	つくって表現	つくって表現
12 (音楽に対する内面的な能力)	群馬県 柴田佳亮	6 豊かな感性を育てる音楽学習	感性	全般
1994/1 (ソルフェージュあそびを取り入れた指導の実験)	佐賀県 石田正紹	1 ドレミで遊ぼう	基礎	ソルフェージュ
1 手作り楽器を作ろう	群馬県 宮前恭子	2 自由学習:創造的に発展させる学習1	同前	同前
1 サンバの音楽づくりを楽しもう「星空カーニバル」	東京都 中山純子	3 サンバの音楽づくりを楽しもう	同前	同前
1 イメージを広げて表現しよう「接近!ブラックホール」1	大阪府 片岡潤子	4 イメージを広げて表現しよう「接近!ブラックホール」1	同前(つくって表現)	同前
1 リズムにのって	東京都 斉藤明子	5 リズム・カードを使ってアンサンブルしよう	同前	同前
1 和太鼓によるアンサンブルづくり	群馬県 柴田佳亮	6 和太鼓によるアンサンブルづくり	つくって表現	つくって表現
2 (作詞者・作曲者の想いを読みとろう)	佐賀県 石田正紹	1 ぼくはわたしはコンダクター	曲想表現の工夫	目的にあった学習形態
2 ようすを思いつかべて	群馬県 宮前恭子	2 自由学習:創造的に発展させる学習2	同前	同前
2 同前(第2次)	東京都 中山純子	3 サンバの音楽づくりを楽しもう	同前	同前
2 (ストーリー作り・より豊かな表現へ)	大阪府 片岡潤子	4 イメージを広げて表現しよう「接近!ブラックホール」1	同前	同前
2 (グループでアンサンブル)	東京都 斉藤明子	5 楽しいふしづくり	同前	同前
2 和太鼓によるアンサンブル作り	群馬県 柴田佳亮	6 和太鼓によるアンサンブルづくり2	同前	同前
2 (一人ひとりの個性を生かした学習形態の工夫)	佐賀県 石田正紹	1 グループコンサートで表現を高めよう	学習形態	歌唱
3 (創造的音楽活動する子どもとともに)	群馬県 宮前恭子	2 これからの音楽教育	同前	同前
3 同前(第3次)	東京都 中山純子	3 サンバの音楽づくりを楽しもう	同前	同前
3 (聴覚にハンディのある子ども達と一緒に)	大阪府 片岡潤子	4 手話を交えて歌おう	手話で歌おう	歌唱
3 「踊れない悪魔」	東京都 斉藤明子	5 まとまりのある創作曲に挑戦!	同前	同前
3 バランスを考えて三部合唱を仕上げる	群馬県 柴田佳亮	6 ア・カペラを歌おう	主体性・基礎	歌唱

「同前」は「前月の同学年と同じ」を意味する。

(資料5) 「教育音楽」より

昭和47年度～昭和51年度研究テーマ
(Dグループ)

分類カテゴリ：1.心情 2.態度 3.音楽能力 4.感得させたい力 5.感性 6.授業論

年度	大会名	日時	テーマ	分類	1	2	3	4	5	6
昭和47 1972	第14回全道音楽教育研究会	札幌大会	S47/9/21,22	基礎的能力の伸長をはかり、創造性の育成をめざす音楽教育	3,4			*	*	
	第20回東北音楽教育研究会	多賀城大会	10/6,7	豊かな人間性を育てるための心にせまる音楽指導	4				*	
	第14回近畿音楽教育研究会	奈良大会	11/2	児童・生徒の創造的な表現・鑑賞をとおした豊かな音楽性を育てる指導	3			*		
	S47年度全日音楽教育研究会 第14回関東音楽教育研究会	千葉大会	11/9,10	音楽性をつちかい情操を高める指導はどのようにしたらよいかー豊かな音楽性と基礎能力を伸ばすため、各領域活動をどのように進めたらよいか	3			*		
	大分大学教育学部附属小			ひとり一人の子どもの音楽性を高める指導	3			*		
	第3回中国四国音楽教育研究会	松山大会	11/24,25	豊かな人間性を育てる音楽教育	4				*	
	第13回九州音楽教育研究会	熊本大会	11/24,25	音楽性を高め豊かな人間形成をめざす音楽教育	3,4			*	*	
	文部省小学校教育過程研究発表大会	東京大会	S48/2/6 8	音楽による創造的表現の能力を育てるために特に歌唱と器楽においてはどのような配慮が必要かわかる授業の追求ー自らの気持ちを音楽的に表現したくなる授業をめざして	3			*		
昭和48	滋賀大学教育学部附属小				1,3,6	*		*		*
1973	第15回北海道音楽教育研究会	釧路大会	9/28,29	基礎的能力の定着化をはかり豊かな創造性の育成をめざした音楽教育	3,4			*	*	
	第15回近畿音楽教育研究会	京都大会	10/12	聞きあい、気づき、創り出す過程をたいせつにする音楽学習	4,6				*	*
	第21回東北音楽教育研究会	弘前大会	10/19,20	みんなが音楽を						
	浜松市立芳川小(文部省指定)			音楽の美しさを感じとり、豊かに表現する能力を育てる指導ー少人数によるアンサンブルを通して	3,5,6			*		*
	静岡大学教育学部附属小			ひとりひとりの最大成長をめざす学習指導ー個の高まりを求める学習の手だてと教材の精選	6					*
	S48年度全日本音楽教育研究会	名古屋大会	11/8,9	ひとりひとりを生かす音楽学習をめざして	6					*
	第15回関東音楽教育研究会	栃木大会	11/16	音楽性を育て、人間性を豊かにする指導はどうしたらよいかー基礎の指導を中心にしてー	3,4			*	*	
	第4回中国四国音楽教育研究会	岡山大会	11/16,17	音楽の楽しさを求め、ひとりだちできる力を育てるために	1,3	*		*		
	第14回九州音楽教育研究会	佐世保大会	11/16,17	音楽性を育てるための基礎能力の充実をはかる指導はどうあればよいか	3			*		
昭和49	第22回東北音楽教育研究会	金ヶ崎大会	10/15,16	みんなで心にせまる音楽を	1	*				
1974	第16回近畿音楽教育研究会	滋賀大会	10/25	子どもの感受性やイメージを触発し、表現の喜びや高まりを体感させる授業の構成	1,5	*			*	
	第5回中国四国音楽教育研究会	香川大会	10/25,26	よるこびのある音楽学習を求めて	1	*				
	第15回九州音楽教育研究会	佐賀大会	10/25,26	音楽する力を高め、豊かな音楽性を培うには	3			*		
	東京都・豊島小		S50/2/28	創造性を育てる音楽教育ー音楽するよるこびを求めてー	1,4	*			*	
昭和50	S49・50年度日本教育音楽協会研究協力指定校			創造性を伸ばすための楽しい音楽学習ー旋律創作を中心としてー	1,4,6	*			*	*
1975	第17回全道音楽教育研究会	旭川大会	9/25,26	豊かな感受性を育て、音楽性を高める指導はどのようにしたらよいかー日本の音楽を中心として	3,5			*	*	
	S50年度全日本音楽教育研究会	宮城大会	10/30,31	みんなが進んで学習にとりくみ、豊かな音楽的感覚が身につく指導	2,5		*		*	
	第17回関東音楽教育研究会	群馬大会	11/7	豊かな表現活動をするよるこびを味わわせるにはどのようにしたらよいか。ー合唱と合奏の表現活動をとおしてー	1	*				
	第16回九州音楽教育研究会	北九州大会	11/14,15	子どもの身につく音楽教育はどうあるべきかー小学校の実践を通して	3,6			*		*
	第17回近畿音楽教育研究会	大阪大会	11/18	ひとりひとりを生かした楽しい音楽学習	1,6	*				*
昭和51	宮城教育大学附属小			鋭敏な直感力や感受力を培い、豊かな表現力と鑑賞力をもった子どもの育成	3,5			*	*	
1976	第18回全道音楽教育研究会	函館大会	9/21,22	主体的に表現する力をのばし、創造性をつちかう	2,3,4		*	*	*	
	第24回東北音楽教育研究会	新庄大会	10/14,15	音楽を自ら求め、楽しむ心を育てるーこれからの音楽教育のあり方を求めてー	1,2	*	*			
	第7回中国四国音楽教育研究会	徳島大会	10/15,16	よるこびのある活動の中で音楽的能力を高めるために	1,3	*		*		
	第19回関東音楽教育研究会	山梨大会	10/22	音楽的感覚を育てるための鑑賞・表現の指導はどのようにしたらよいか	5				*	
	S51年度全日本音楽教育研究会	和歌山大会	10/28,29	ひとりひとりがよるこびで取り組む音楽学習ー生きた音楽的能力を育てながらー	1,3	*		*		
	S51年度全日本音楽教育研究会 第17回九州音楽教育研究会	宮崎大会	11/8,9	創造性の開発をめざす音楽教育ー豊かな感性を育てる音楽指導はどのようにしたらよいかー	4,5			*	*	
	計60				12	3	19	11	7	8

昭和59年度 - 昭和63年度研究テーマ
(Eグループ)

分類カテゴリ：1.心情 2.態度 3.音楽能力 4.感得させたい力 5.感性 6.授業論

年度	大会名	日時	テーマ	分類	1	2	3	4	5	6
昭和59	秋田大学教育学部附属小		感動を高め、一人ひとりが意欲的に取りくむ表現活動	1,2	*	*				
1984	岩手大学教育学部附属小	6/28,29	より豊かで創造的な音楽を求め、意欲的に取り組む子どもの育成	2		*				
	26回全道音楽研究大会	函館大会 9/20,21	生き生きと表現する喜びをもとう	1	*					
	59年度全日本音楽教育研究会	八戸大会 10/12,13	豊かな音楽活動を求めて	6						*
	第15回中国四国音楽研究会	鳴門大会 10/19,20	音楽を愛好する豊かな心情の育成-音楽の美しさを求めて楽しく学習する子ども-	1	*					
	第26回関東音楽教育研究会	茨城大会 11/9	進んで音楽の美しさを求める子どもに育てよう	2		*				
	第25回九州音楽教育研究会	宮崎大会	音楽を愛好する心情の育成	1	*					
	東京都小学校音楽教育研究大会	練馬区立小竹小 S60/2/15	心にひびく音楽を求め、自らを高める子どもに育てよう	1,2	*	*				
昭和60	大分大学教育学部附属小		目を輝かせて表現する音楽学習の組織化	1,6	*					*
1985	茨城大学教育学部附属小	6/19	ひとりひとりが自分なりの取り組み方で学習の見通しを持って力を伸ばしていこうとする学習	2		*				
	二重大学教育学部附属小	6/20,21	子どもが表現を深めていく授業-子どもが曲のおもしろさをとらえる-	2,3		*	*			
	第27全道音楽教育研究会	旭川大会 10/8,9	ひとりひとりの心を揺さぶる音楽学習	1	*					
	第33回東北音楽教育研究会	仙台大会 10/15,16	どの子どもも楽しい音楽学習の姿を求めて	1	*					
	第27回近畿音楽教育研究会	京都大会 10/16	音を大切に、音楽するよろこびを創り出す授業を求めて	1	*					
	第16回中国四国音楽教育研究会	徳山大会 10/24,25	音楽性を高め豊かな心情を育てる音楽教育	1,3	*		*			
	第26回九州音楽教育研究会	鹿児島大会 11/1,2	生き生きと活動する音楽学習をめざして	2		*				
	第27回関東音楽教育研究会	埼玉大会 11/8	音楽の美しさ楽しさを心から味わえる子どもを育てよう	1	*					
	東京都・九段小	11/21,22	心にひびく音楽を求めて、自らを高める子どもを育てよう	1,2	*	*				
昭和61	第28全道音楽教育研究会	北見大会 9/19	生き生きと活動し、喜びを深め合う音楽学習を求めて	1,2	*	*				
1986	第28回近畿音楽教育研究会	滋賀大会 10/14	音楽の美しさ、楽しさを求めて取り組む活動と評価	1,6	*					*
	第28回関東音楽教育研究会	栃木大会 11/7	音楽の美しさ楽しさを求めて進んで活動する子どもを育てよう	1,2	*	*				
	S61年度全日本音楽教育研究会	熊本大会 11/14,15	音楽の喜びを求めつづける子どもを育てよう	1,2	*	*				
	第27回九州音楽教育研究会	横浜・青木小 11/28	音楽の美しさを求め、ひとりひとりが豊かに表現する音楽学習	3			*			
	第17回中国四国音楽教育研究会	高知大会 12/4	みんなが音楽の喜びを追求する学習指導をめざして	1,2	*	*				
	S61年度 日本教育音楽協会研究協力校	千葉・大森小 S62/2/3	音楽科学習指導における楽器の効果的な活用をめざして	6						*
昭和62	第29回全道音楽教育研究会	苫小牧大会 10/8,9	感動と高まりのある音楽教育へ	1	*					
1987	第29回近畿音楽教育研究会	大阪大会 10/10	音楽の楽しさを求め、共に高めあう学習をめざして	1,2	*	*				
	第29回関東音楽教育研究会	千葉大会 11/6	魅力ある音楽活動を通して意欲的に学習する子どもを育てよう	2		*				
	第28九州音楽教育研究会	佐世保大会 11/6	生き生きとした音楽活動を通して豊かな心を育てよう	1	*					
	第10回全日本音楽教育研究会	愛媛大会 11/20,21	ひとりひとりが生きる楽しい音楽学習をめざして	1,6	*					*
	第18回中国四国音楽教育研究会	12/3	心にひびく音楽を求め自らを高める子どもを育てよう	1,2	*	*				
	東京都小学校教育研究員発表会	S63/2/12	一人一人を生かし、音楽活動を通して、意欲的に表現できる児童を育てる指導法の研究	2,6		*				*
昭和63	第30回関東音楽教育研究会	神奈川大会 11/11	音楽のよろこびを知り、意欲的に音楽を求めつづける子どもを育てよう	2		*				
1988	第29回九州音楽教育研究会	佐世保大会 11/11,12	豊かな心情を育てる音楽教育をめざして	1	*					
	第19回中国四国音楽教育研究会	広島大会 11/17,18	より深い喜びと美しさを求めて取り組む音楽学習	1,2	*	*				
	池田市立池田小 (文部省指定)	11/25	豊かな感性を培う表現活動と指導-歌唱表現を中心として	5					*	
	第30回近畿音楽教育研究会	和歌山大会 H1/18	一人一人を生かす楽しい音楽学習をめざして	1,6	*					*
				計54	25	18	3	0	1	7

平成元年度～平成5年度研究テーマ
(Fグループ)

分類カテゴリー：1.心情 2.態度 3.音楽能力 4.感得させたい力 5.感性 6.授業論

年度	大会名	日時	テーマ	分類	1	2	3	4	5	6
平成元年	H元年度全日本音楽教育研究会 旭川大会	8/25,26	一人ひとりの心をゆさぶる音楽活動を求めて	1	*					
1989	第31回関東音楽教育研究会 群馬大会	11/10	音楽の美しさ・楽しさを求め、意欲的に取り組む子どもを育てよう	1,2	*	*				
	第30回九州音楽教育研究会 福岡大会	11/17,18	感性・個性・創造性	4,5,6				*	*	個*
平成2年	大阪教育大学附属平野小	11/29	自己を發揮し自ら変容する子ども-子どもが創り出す学習	2		*				
	鹿児島大学教育学部附属小		創造的自己表現をつくり出す音楽科授業の創造	6						*
1990	第38回東北音楽教育研究会 仙台	10/18,19	音楽の美しさ感動し、喜んで学習に取り組む子ども	1,2	*	*				
	岩国市立通津小(文部省指定)	10/23	ひとりひとりが生き生きと取り組み、できる喜びを味わう学習	1,2,3	*	*	*			
	第21回中国四国音楽教育研究会 香川県高松大	10/26,27	感動ある表現活動を通して豊かな心を育てよう- 感じ、表し、高め合う音楽活動-	1,2	*	*				
	第32回近畿音楽教育研究会 奈良大会	11/9	豊かな感性を育てる楽しい音楽学習をめざして	1,5	*				*	
	第31回九州音楽教育研究会 大分大会	11/9,10	心にひびく音楽をもとめ、ともに高め合う子どもを育てよう	1,2	*	*				
	第32回関東音楽教育研究会 山梨大会	11/16	豊かな感性を育てる音楽科学習指導のありかた	5						*
平成3年	文部省研究校 広島県南観音	H3/2/15	個性的・創造的な学習活動の充実を図るための指導法の研究	6						個*
	愛媛大学教育学部附属小		自分らしさを生かし合う創造的音楽学習をめざして	6						個*
1991	琉球大学教育学部附属小		豊かに感じとり「想い」の伝わる表現を工夫する音楽学習のあり方(自己評価を取り入れた創造的音楽学習を通して)	6						*
	第33回全道音楽教育研究会 札幌大会	9/20,21	共感をよびおこす音楽活動とおし、豊かな感性を育てる	1,5	*				*	
	第39回東北音楽教育研究会 青森県弘前	10/17,18	音楽の美しさ感動し、喜んで活動する子どもを育てよう	1,2	*	*				
	第33回近畿音楽教育研究会 京都大会	10/18	自ら音楽を求める活動をめざして	2		*				
	第22回中国四国音楽教育研究会 島根大会	11/7,8	心にひびく音楽活動を通して、音楽の楽しさ美しさを感じとる子どもを育てよう	1,5	*				*	
	第33回関東音楽教育研究会 茨城水戸	11/15	進んで音楽のよさを求めつづける子どもに育てよう	2		*				
	第12回全日本音楽教育研究会 鹿児島大会	11/21,22	音と遊び 自分のおもいを豊かに表現する楽しさをもとめて	1	*					
	東京都小学校音楽教育研究会	12/12	心にひびく音楽を求め、自らを高める子どもを育てよう	1,2	*	*				
平成4年	第34回全道音楽教育研究会 釧路大会	9/25,26	共感をよびおこす音楽活動とおし、豊かな感性を育てる	1,5	*				*	
	1992 第34回近畿音楽教育研究会 滋賀大会	10/15	創造的体験のある音楽学習を求めて	4				*		
	第23回中国四国音楽教育研究会 徳島大会	11/6,7	楽しい音楽活動を通して、豊かな感性を培う学習指導をめざして	1,5	*				*	
	大阪教育大学附属平野小	11/11	自己を發揮し自ら変容する子ども-学習の個性化における教師の役目	2,6		*				個*
	東京学芸大学附属大泉小	11/12,13	意欲的に学び方を高めていく子どもの育成	2		*				
	第33回九州音楽教育研究大会 宮崎大会	11/12,13	感じる喜び心おどる感動を求めて	1	*					
	第2回東海・北陸音楽教育研究会 豊橋大会	11/13	つなぎあい たかめあう音楽のわ-心をふるわせひびきを感じながら表現する子-	1,2	*	*				
	第34回関東音楽教育研究会 埼玉大会	11/13	音楽性を培い、豊かな感性を育てる学習活動をめざして	3,5			*		*	
平成5年	三重大学教育学部附属小	6/17,18	子どもが自分の感じ方・考え方をもとに表現する授業	6						個*
1993	第35回全道音楽教育研究会 函館大会	9/9,10	みとめあい いきいきと表現する音楽活動をめざして	2		*				
	H5年度全日本音楽教育研究会 新潟大会	10/7,8	磨き合い高め合う子供をめざして	2	*	*				
	第35回近畿音楽教育研究会 大阪大会	10/15	自ら求め、ともに音楽をつくる楽しさをめざして	1,2	*	*				
	第39回東北音楽教育研究会 秋田大会	10/14,15	音楽の美しさを感じて生き生きと活動する子ども	2,5		*			*	
	第22回中国四国音楽教育研究会 岡山大会	10/28,29	すすんで音楽に働きかけ、楽しく表現する子ども	2		*				
	第35回関東音楽教育研究会 栃木大会	11/12	豊かな感性を培い、進んで音楽活動をする子どもを育てよう	2,5		*			*	
	第34回九州音楽教育研究大会 熊本大会	11/17,18	音楽のよさこびを求めつづける子どもを育てよう	1,2	*	*				
	東京都小学校音楽教育研究会	H6/2/18	心にひびく音楽を求め自らを高める子どもを育てよう-私の音楽! みんなの音楽!	1,2	*	*				
	熊本大学教育学部附属小	H6/2/19	自己を表現するよさこびを求める音楽の学習	1,6	*					個*
				計63	20	21	2	2	10	8

(「個」は「個性」に関するものを意味する。)